

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

**平成26年度～平成30年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要**

- 1 学校法人名 学校法人東京理科大学 2 大学名 東京理科大学
- 3 研究組織名 トランスレーショナルリサーチセンター
- 4 プロジェクト所在地 千葉県野田市山崎 2641
- 5 研究プロジェクト名 医薬資源の実用化を目指した橋渡し研究拠点の形成
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
樋上 賀一	薬学部生命創薬科学科	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数
- 19
- 名

- 9 該当審査区分
- 理工・情報
- 生物・医歯
- 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
小茂田 昌代	薬学部・教授	疥癬治療薬イベルメクチン新規投与法の臨床研究	臨床試験プロトコール作成の支援と臨床試験の実施
鳥越 秀峰	理学部・教授	新規化学修飾核酸を用いたアンチセンス核酸医薬の開発	アンチセンス核酸の設計とアンチセンス核酸投与による標的遺伝子の発現抑制効果解析
西山 千春	基礎工学部・教授	化合物ライブラリーを用いた抗アレルギー剤探索及び転写因子機能解析	アレルギーや自己免疫疾患に関わる細胞機能を調節する物質の評価
花輪 剛久	薬学部・教授	電子線架橋による新規ハイドロゲル調製と評価	新規素材の製剤化とその物性解析、動物実験による薬効評価
東 達也	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングによる抗うつ・抗不安薬の開発	LC-MS を用いた内因性低分子のレベル変動解析に基づく薬効評価
樋上 賀一	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングによる肥満症治療薬・代謝改善薬の開発	病理学的手法による薬効評価
和田 猛	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングにおけるリード化合物の構造改変・最適化	構造活性相関に基づくドラッグデザインと合成
秋本 和憲	薬学部・教授	ドラッグリポジショニングによる抗がん剤の開発	分子生物学的手法による創薬標的の探索
大塚 英典	理学部・教授	3次元培養法の開発と細胞の高機能化、創薬・診断への適用	3次元培養による薬効機能評価

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

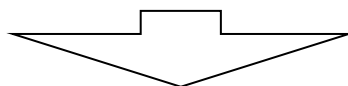
佐藤 圭子	理工学部・准教授	TP53 遺伝子の符号構造によるがん患者の予後評価系の構築	公共データベースを用いたバイオインフォマティクス解析と研究基礎データの臨床的意義付け
(共同研究機関等) 島野 仁	筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授	糖尿病・メタボリックシンドロームの分子機構の解明	本研究プロジェクトの研究成果の代謝性疾患医療への応用とニーズの提案
松村 明	筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授	脳腫瘍に対する治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果の脳神経外科領域疾患医療への応用とニーズの提案
上園 保仁	国立がんセンター中央研究所・分野長	漢方薬のがん医療への応用、がん悪液質、癌性疼痛に対する治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果のがん医療への応用とニーズの提案
武藤 倫弘	国立がんセンター中央研究所・ユニット長	腫瘍性疾患の分子機構の解明と診断法、治療法の開発	本研究プロジェクトの研究成果のがん医療への応用とニーズの提案
重本 和宏	東京都健康長寿医療センター研究所・研究部長	重症筋無力症・サルコペニアの分子機構の解明	本研究プロジェクトの研究成果の運動器疾患医療への応用とニーズの提案
松永 卓也	勇気会医療法人北央病院・院長	血液系疾患の分子機構の解明と治療法、診断法の開発	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案
江口 晋	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・教授	移植医療および人工肝臓の開発	本研究プロジェクトの研究成果の移植医療への応用とニーズの提案
下川 功	長崎大学大学院医歯薬学総合研究科・教授	カロリー制限による抗老化・寿命延伸作用の解明	本研究プロジェクトの研究成果の老化関連疾患医療への応用とニーズの提案

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
血液系疾患の分子機構の解明と治療法、診断法の開発	香川大学医学部内科学講座・教授	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
香川大学医学部内科学講座・教授	北海道保健指導福祉部・医療指導参事	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療へ

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

			の応用とニーズの提案
--	--	--	------------

辞退

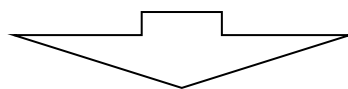
プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
疥癬治療薬イベルメクチン新規投与法の臨床研究	薬学部・教授	廣田 孝司	被験者組織やモデル動物を用いた解析

(変更の時期:平成 27 年 3 月 31 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
血液系疾患の分子機構の解明と治療法、診断法の開発	北海道保健指導福祉部・医療指導参事	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

(変更の時期:平成 29 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
北海道保健指導福祉部・医療指導参事	勇気会医療法人北央病院・院長	松永 卓也	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

辞退

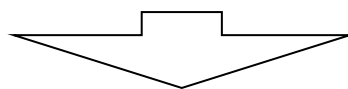
プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
医薬研究におけるデザインと統計解析に関する研究	工学部・教授	浜田 知久馬	本研究プロジェクトの研究成果の血液系医療への応用とニーズの提案

(変更の時期:平成 29 年 12 月 22 日)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
ドラッグリポジショニングによる抗がん剤の開発	薬学部・准教授	秋本 和憲	分子生物学的手法による創薬標的の探索

(変更の時期:平成 30 年 4 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
薬学部・准教授	薬学部・教授	秋本 和憲	分子生物学的手法による創薬標的の探索

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

本学は 8 学部 33 学科で構成される本邦でも有数の理工系総合大学であり、長年の多岐にわたる優れた基礎研究により未来の医療に貢献しうる多くの貴重な創薬シーズが集積している。しかし、医学部や附属病院がないために、基礎研究の成果を臨床現場に十分に還元できていない。本学の持つ膨大な基礎研究の成果を社会に還元し、また橋渡し研究(TR)に関わる人材の育成のためにも、医療機関と連携した TR を強力に推進する研究拠点の形成は、極めて重要である。本プロジェクトでは、筑波大学や長崎大学、国立がん研究センター研究所さらにハワイ大学がんセンターなど国内外の医療機関と連携・協力して、本学が保有するシーズ、医療機関が望むニーズ、ドラッグリポジショニング(既存のある疾患に有効な治療薬から、別の疾患に有効な薬効を見つけ出すこと)候補薬物(併せて以下、医薬資源)に対する TR、さらに、これら医薬資源に関する臨床試験の実施を支援し、加えて、将来 TR やレギュラトリーサイエンスを担う若手研究者、学生の育成および国際化を目的とする。以上により、医療機関を持たない薬系・理工系大学における基礎研究に立脚した新しい TR 拠点形成のモデルケースとなることを目指す。

具体的な研究および活動内容は以下の1)~4)となる。

- 1) 新規治療ターゲット分子の探索と核酸やペプチドを用いた新規創薬を加速する。
- 2) ドラッグリポジショニングによる既存薬の適応拡大を図る。
- 3) これら医薬資源に関する臨床試験の実施を支援する TR プラットホームを構築する。
- 4) 上記1)~3)の国際化を図る。

(2) 研究組織

研究プロジェクトでは、センター長(樋上賀一)を中心に、新規治療・予防薬や診断薬などの標的分子を探索する『探索グループ(西山、深井、佐藤(圭)、秋本ら)、医薬品の創製などを研究する『創薬グループ(和田、花輪、大塚、鳥越ら)』、細胞および実験動物レベルで治療薬や診断薬の評価、薬物動態を解析する『薬効・機能評価グループ(岡、東、吉澤、樋上、磯濱ら)』、知的財産権の調査、確保の支援、臨床試験業務の支援を行なう『臨床試験グループ(小茂田、佐藤(嗣)、浜田ら)』からなる『コア部門』を組織した。さらに、学外の医療系機関に所属する客員研究員のニーズに対応するニーズ対応研究者を流動共同研究者として学内公募し、2名を採用した。また、将来の TR を担う若手研究者育成のため5年間で3名の RA を採用した。加えて、平成 28 年 8 月に実施されたアドバイザー委員会において指摘された『研究の集約化』を目指し、国際性の高い研究テーマ、実用化に近づいている研究テーマ、シナジー効果の高い研究テーマという観点から、①ハワイ大学との国際共同 TR、②創傷治癒促進薬の開発、③漢方薬の有効利用に繋がる TR、④難治性乳がん制圧に関する TR、⑤自己免疫・アレルギー疾患の発症機序解析と治療法開発、⑥オートファジー/細胞老化を標的とした新規治療薬の開発の6テーマを選定し、平成 28 年度後半からは前述したグループとは別のプロジェクトチームでの活動も、並行して実施した。

(3) 研究施設・設備等

研究施設:

- ① 野田校舎 10 号館 3F TR センター実験室(使用総面積・110 m²)
- ② 野田校舎薬学部 15 号館の一部(使用総面積・2,037 m²)
- ③ 野田校舎理工学部 6 号館 3F、4F 佐藤研究室(使用総面積・72 m²)
- ④ 葛飾校舎研究棟基礎工学部 11F 西山研究室(使用総面積・133 m²)
- ⑤ 葛飾校舎管理棟工学部 4F 浜田研究室(使用総面積・157.73 m²)
- ⑥ 神楽坂校舎理学部 5 号館3F、大塚および鳥越研究室(使用総面積・221 m²)

研究設備:

- ① 蛍光・発光 in vivo イメージングシステム(整備年度・平成 26 年度):年間約 80 時間使用
- ② 生体-マテリアル相互作用解析システム(整備年度・平成 27 年度):年間約 200 時間使用

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

<優れた成果が上がった点>

『探索グループ(西山、深井、佐藤(圭)、秋本ら)

◎「FNIII14 による神経芽腫および神経膠芽腫治療法の開発」

代表的な小児がんの一つである神経芽腫の治療に資する創薬研究に取り組んだ。その結果、先に見いだした代表的な細胞外基質タンパク質であるフィブロネクチンから遊離するペプチド因子である FNIII14 が、細胞接着分子インテグリンの不活性化を介して、治癒率の低い高リスク神経芽腫における最も重要な

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

予後不良因子であるがん原遺伝子産物 N-Myc タンパク質の分解を誘導し、その結果として神経芽腫細胞の神経細胞分化の著しい亢進と悪性形質の低下を明らかにした(*論文 29, 30)。更にヒト神経芽腫細胞を移植した xenograft モデルを用いた *in vivo* 実験においても、FNIII14 による治療効果を示した(*論文 29, 30)。MYC タンパク質は酵素活性をもたない転写因子であるため、標的化は困難と考えられていた。しかし本研究により、MYC タンパク質の生理的分解系を活性化することで、その細胞内レベルを著しく低下させることに成功した(*特許 2)。また、神経膠芽腫細胞の悪性形質獲得にインテグリン活性化作用を介して TNIII A2 が関与している可能性を示した。更にインテグリン不活性化ペプチド FNIII14 により、上記の TNIII A2 による悪性形質獲得を完全に阻害し、第一選択薬であるテモゾロミドの抗腫瘍効果を増強し、神経膠芽腫を皮下に移植した xenograft モデルを用いた *in vivo* 実験においても、FNIII14 の治療効果も確認した(*論文 29, 30, 特許 3)。

神経芽細胞腫および神経膠芽腫に対するインテグリン不活性化ペプチド FNIII14 を用いた新規治療法を開発した

◎「患者ゲノムデータベースを用いた癌の予後予測マーカーの同定と癌幹細胞における分子機能の解明」

現在、患者のゲノム、臨床・生活習慣等の情報のビックデータを AI で分析し、患者を層別化したうえで精密な医療を提供する精密医療(ゲノム医療)の実現に向けた大きな流れがある。これは新たなトランスレーショナルリサーチのひとつの形として、とらえることもできる。しかしながら、集った患者ゲノムデータや臨床情報等の提供方法や解析方法の開発は、未だ試行錯誤の段階にある。難治性乳癌の早期発見、そして分子標的治療の開発に向けての基盤を形成するために、情報論的手法を用いて乳癌患者 1904 名の臨床情報を含むゲノムデータベース解析を行い、以下の結果を得た。

エストロゲン受容体陽性型乳癌の予後予測マーカーとして、SLC20A1 と KMT2C の 2 分子を同定した(*論文 41, 51, 学会 177, 231, 233, 234, 235, 241-243)。乳癌サブタイプのうち Basal-like 型において、c-Met 発現と癌幹細胞マーカーである ALDH1A3 発現とが相関すること、また、c-Met と ALDH1A3 を共に高発現している乳癌患者は予後不良であること、さらに ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に c-Met が重要な役割を果たすことを明らかとした(*論文 40, 学会 176, 185, 231, 234, 235, 240)。癌特異的に発現が亢進している解糖系代謝分子 GLO1 が ALDH1 陽性乳癌の生存に関わること、この GLO1 が aPKC と複合体を形成し、協調して働き ALDH1 陽性癌幹細胞の生存に深く関わることを明らかとし、GLO1-aPKC 複合体が ALDH1 陽性癌幹細胞の創薬標的分子となりうる可能性を示した(*学会 173, 187, 192, 202)。ALDH1 陽性癌幹細胞の生存に関わる aPKC-解糖系分子 X axis の存在を明らかとし、乳癌患者 1904 名のゲノムデータベース解析を行い、この aPKC-X axis の臨床的意義付けを行った。その結果、Basal-like 型乳癌で aPKC と X の遺伝子発現が相関した。さらに、aPKC、X、ALDH1A3 遺伝子発現が共に高い患者が予後不良であることが分かった。以上から、分子 X は aPKC 依存的な ALDH1 陽性癌幹細胞の生存に関わるとともに、有望な創薬標的分子候補であることが示唆された(*学会 172, 174, 182, 190, 191, 192, 198, 200, 203, 217, 218, 220, 228, 230-239)。

乳癌患者の臨床情報を含むゲノムデータベース解析の一手法を開発した。また、ウェットな実験を組み合わせて、その有用性を実証し、新規予後予測マーカー分子や治療標的分子を同定した

◎「樹状細胞やマスト細胞の機能維持や遺伝子発現に重要な転写因子発現修飾によるアレルギー疾患や自己免疫疾患治療法の開発」

アレルギー疾患や自己免疫疾患の発症機序の解明を目指し、特に、免疫担当細胞の機能に重要な遺伝子群の発現制御機構を解析し、疾患の改善や予防に有効な標的分子の特定を進めた。その結果、樹状細胞やマスト細胞の機能維持や遺伝子発現に重要な転写因子を複数同定し、これらを siRNA や免疫調節薬で制御することにより、細胞や個体レベルで免疫応答が制御され得ることを示した(*論文 9-12, 14-16, 20, 23)。加えて、低分子化合物ライブラリーや食品成分、微生物代謝産物、植物二次代謝産物などから、アレルギーのエフェクター細胞であるマスト細胞の活性化反応、単球系細胞による炎症反応、樹状細胞による T 細胞活性化など、複数の免疫反応系において、細胞機能を調節する物質探索を進め、短鎖脂肪酸や siRNA をはじめとして細胞レベルにとどまらず、個体でも有意に病態緩和をもたらす候補物質を複数得ることができた。さらに、天然物の一部については受容体を同定することによりアレルギーや自己免疫疾患治療の新たな標的を見出すに至った。

アレルギーや自己免疫疾患の改善に繋がる標的分子を発見し、その免疫調節作用を有する新規候補化合物や食品成分を見出した。

◎「カロリー制限の分子メカニズム解明を基盤としたカロリー制限模倣薬の開発」

長期の適度な摂取カロリーの制限(CR)は老化に伴う生理学的・病理学的変化を抑制し、寿命を延伸する。それゆえ、CR の分子メカニズムの解明を基盤にした健康長寿を志向する CR 模倣薬の開発が進

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

められている。CRは、成長ホルモン/インスリン様成長因子1シグナル抑制依存性および非依存性に制御されている。非依存性のメカニズムを探索した結果、白色脂肪組織において特に sterol regulatory element binding protein-1 (Srebp-1) に転写制御される脂肪酸合成関連遺伝子発現の上昇が重要である可能性を見出した。そこで、Srebp-1c 欠損マウスを用いて、CR のメカニズムを解析した。その結果、以下の点を明らかにした(*論文 194、196、198、学会 879、880、882、883、886-888)。1) CR は Srebp-1c 依存的に寿命を延伸する。2) CR は Srebp-1c 依存的に脂肪酸合成およびミトコンドリア関連タンパク質発現を亢進する。3) CR は Srebp-1c によりミトコンドリア生合成関連転写補助因子 Pgc-1 α の転写を直接亢進する。4) CR は Srebp-1c 依存的に酸化ストレスを抑制する。5) CR による2)~4)の変化はおおよそ白色脂肪組織選択的に観察される。さらに、CR による白色脂肪組織の変化を後腹膜、精巣周囲および皮下の3種類の白色脂肪組織で比較したところ、CR に対する脂質分解への影響は3つの脂肪組織で異なるものの、脂肪酸合成関連因子やミトコンドリア関連因子の発現に CR が及ぼす影響は同様であった(*論文 192)。加えて、脂肪酸合成関連遺伝子発現の増強はレプチンシグナルの抑制によって支配される可能性が示唆された(*論文 202)。

次に、CR によるミトコンドリア活性化の制御機構に着目した。酵母における CR の主要因子として発見された silence information regulator 2 (Sir2) の哺乳類におけるミトコンドリアオーソログの1つである Sirt3 は、ミトコンドリア局在代謝酵素や抗酸化因子の活性化、さらに活性酸素種によって生ずる傷害タンパク質の分解などミトコンドリアの機能維持や品質管理に重要な脱アセチル化酵素である。多くのミトコンドリアタンパク質は mitochondrial signal peptidase (MtSPase) によって切断されることで活性型になることが知られている。CR により白色脂肪組織選択的に前駆型 Sirt3 タンパク質から成熟型へのプロセッシングが亢進しており、そのプロセッシングに mitochondrial intermediate peptidase (Mipep) が関連すること、さらに、Mipep は Sirt3 の成熟化や活性化のみならずミトコンドリア活性も制御していた(*論文 195)。加えて、Pgc-1 α と Mipep 両因子を同時に過剰発現することにより、脂肪細胞のトリグリセリド蓄積を有意に抑制する可能性が明らかとなった。すなわち、両因子の共発現によるミトコンドリアの量と質を向上することにより、CR を模倣することが可能であることが示唆された(学会 878、*特許 16)。

CR による代謝リモデリング機構の解析から健康長寿を指向する脂肪組織を標的とした CR 模倣薬の開発の可能性を示した。

『創薬グループ(和田、花輪、大塚、鳥越、西川ら)』

◎「新規な構造を有する核酸医薬およびキャリア分子の創製」

RNA 二重鎖からなる siRNA の主溝に選択的に結合し、肝臓へのデリバリー機能を有するビタミン E 修飾ネオマイシン誘導体を合成した。このキャリア分子と siRNA の複合体はマウス肝がん細胞に取り込まれ、標的とする ApoB 遺伝子の発現を効率的に抑制した(*論文 72)。また、新規核酸医薬として有望なリン原子の立体化学が厳密に制御されたボラノホスフェート型核酸の合成法を開発した(*特許 6)。リン原子の立体化学が制御されたボラノホスフェート型 2'-OMe-RNA オリゴマーは、Sp 型ボラノホスフェート型 2'-OMe-RNA が相補 RNA 鎖に対して極めて高い二重鎖形成能を有し、従来のホスホロチオエート型核酸よりも優れた標的親和性を有することを明らかにした(*論文 74)。核酸医薬として優れた性質を有することがわかった。また、核酸医薬として有用な、5 位修飾ピリミジン塩基およびホスフェート結合と立体が制御されたホスホロチオエート結合を適切な場所に配置した PO/PS キメラ型核酸の立体選択的合成法を確立し、その性質を明らかにした(*論文 69)。また、siRNA の主溝に選択的に結合し、siRNA を安定化するオリゴ糖、オリゴジアミノマンノース4量体(ODAMan4)の合成に成功した(*論文 71)。さらに、ODAMan4 よりも siRNA の安定化効果の高いオリゴジアミノガラクトース4量体(ODAGal4)を合成した。ODAGal4 を siRNA に対し3 当量添加し、RNA 分解酵素である RNase A に対する耐性を評価したところ、ODAGal4 非存在下では大半の siRNA が分解するような条件であっても、ODAGal4 存在下では siRNA はほとんど分解しないことが明らかとなった(*論文 66)。一方、核酸医薬に用いる新規核酸誘導体として、2'-O-ハロエトキシメチル RNA 誘導体を合成し、その性質を評価した。合成した種々のオリゴマーの中で、2'-O-クロロエトキシメチル RNA 誘導体が相補的な塩基配列を有する RNA と最も高い親和性を有することがわかり、核酸医薬として有用な性質を有することがわかった(*論文 62、*特許 5)。また、核酸医薬として有用な DNA/RNA ヘテロ二本鎖核酸(HDO)に結合し、HDO を安定化するオリゴジグアニジンガラクトース(ODGGal)の合成に成功した。ODGGal は、RNase A による RNA 鎖の分解を抑制する一方、RNase H の活性にはほとんど影響を及ぼさないことを明らかにした(*論文 60)。

ボラノホスフェート型核酸など、次世代の核酸医薬として有望な分子と、核酸医薬を安定化する機能を有するオリゴジアミノ糖の合成と性質を明らかにして、核酸医薬の実用化の可能性を示した。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

◎「電子線架橋によるハイドロゲル製剤の開発」

セルロース誘導体などを電子線架橋によりハイドロゲルを調製し、その物性と機能評価を行い、新規経皮吸収型製剤素材としての有効性を示した。また電子線架橋する際、照射量の調整により、薬物放出量の制御が可能であることを明らかにした(*学会 476-478)。さらに、生体-マテリアル相互作用解析システムにより高分子-生体成分間の相互作用について検討した。加えて、大腸癌切除術後の吻合部補強のため新規粘着性製剤を調製し、その物性と機能評価から新規吻合部補強剤への応用の可能性を示した。また、高い生体適合性を持ち、耐酸性・耐塩基性・耐薬品性に優れる合成高分子であるポリビニルアルコール(PVA)のハイドロゲルに着目し、2種類の PVA(Poval[®], Exceval[®])を用いて、種々の調製方法により PVA ハイドロゲルを調製し、腓胝を予防する新規ハイドロゲル製剤の開発を試みた。凍結融解法で調製したハイドロゲルの物性評価の結果から、濃度および凍結融解回数の増加に伴い、ハイドロゲル内の架橋部分の構造が密となり、膨潤度が低下する一方で、高い強度を有するハイドロゲルを形成することが明らかとなった。実際に薬物を含有させることを想定し、TAR 含有 10% Exceval[®]凍結融解ハイドロゲルからの TAR の放出挙動は、凍結融解回数により異なる挙動を示し、放出に伴うハイドロゲル中の薬物の拡散様式が異なることが明らかとなった。腓胝瘻モデルラットでも、ハイドロゲルの有効性が確かめられた。一方、生体内におけるヒアルロン酸(HA)は皮膚・眼球・軟骨に多く存在し、創傷の治癒過程や関節疾患の進行過程において分解により分子量が低下することが報告されている。しかし分子量の違いが生理活性に及ぼす影響については不明な点が多い。そこで、創傷の治癒過程を早める製剤の開発を行うために、HA の分子量やその濃度が創傷の治癒過程に及ぼす影響について、表皮細胞の細胞増殖と移動に着目し、基礎的な検討を行った(*学会 485-488, 521)。その結果、分子量が大きく濃度が高い HA 含有培地ほど HaCaT 細胞の増殖と移動を促進したことから、HA の分子量および濃度が生体内の表皮細胞周囲に近い環境であるほど、細胞の増殖能と移動能が高いと考えられた。さらに動物試験においても、分子量の増加に伴う創傷治癒促進が認められた。以上から、創傷の治癒過程に HA の分子量及び濃度が関与することが示唆された。

電子線照射により架橋剤を用いることなくハイドロゲルを調製することができ、ヒアルロン酸などの創傷治癒に有効な成分を担持できるデバイスとして有効であることが明らかになった。

◎「細胞機能を自由に操作するバイオマテリアルの開発」

肝細胞機能安定化を目的として、ハイドロゲル内部にガラクトース構造を導入した糖鎖含有ゲルを調製し、スフェロイド形成に基づく細胞機能化促進効果を確認した(*論文 109, 111)。また、効率的な組織再生を実現するために、インシュリン様成長因子(IGF)を担持させたインジェクタブル型相互侵入高分子網目ゲル(CH/PEG/RADA16)を調製し、軟骨細胞応答について検討し、長期にわたって IGF 活性を損なうことなく、軟骨細胞の固定化が維持されることを明らかにした(*論文 106)。また、金属錯体を連鎖状に配した高分子型遷移金属錯体が低分子遷移金属錯体に比べ、より効率的に DNA の開裂反応を誘導することを見出し、金ナノ粒子を用いた DDS 手法により効率的な高分子錯体の細胞内導入を達成し、また抗癌活性相関を明らかとした。さらに、単分子遷移金属錯体を高分子化する事でマルチバレントな相互作用に基づく DNA との強い相互作用により単分子錯体に比べて優れた薬効を示す新規機能性材料の創製とその癌活性機序の解明を目指し、細胞取り込み能を有する機能性高分子型遷移金属錯体(PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy)の開発を行った。PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy と DNA の相互作用評価および DNA の構造変化評価を行ったところ、EtBr 排除試験より、PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy はマルチバレント効果に基づく DNA との強い相互作用が確認され、単分子 Cu 錯体 DPA[Cu] に比べて Cu 錯体部位の DNA に対する見かけの結合定数が約 12 倍向上した。円二色性(CD) スペクトル測定、pDNA を用いた電気泳動により PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy による DNA の構造変化を確認した。PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy は単分子 DPA[Cu] より低濃度で DNA の構造変化を誘導しており、マルチバレントな相互作用に基づく効率的な DNA の構造変異が確認された。また、アガロース電気泳動評価において、PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy は pDNA を Linear 状態まで構造変化させる事が分かった。これは、DNA 鎖が高分子により切断された事を示しており、優れた抗癌活性を有する事が示唆された。続いて、薬剤としての応用を目指し、HepG2 細胞に対する PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy 修飾金ナノ粒子の抗癌活性と細胞内挙動を評価した(*論文 105, 107, 108)。PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy は単分子 DPA[Cu] と比べてはるかに低い暴露 Cu 濃度で優れた抗がん活性を示した。この時の細胞内動態を評価すると、PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy の HepG2 細胞への毒性は核内へ Cu 錯体の移行率が向上するにつれ増加することが分かった。この結果より、PLD-b-PPDA[Cu]-b-PPy が核へ移行し、DNA と相互作用することで細胞毒性を発現すると結論した。

合目的に重合した合成高分子のナノ構造を制御することによって、再生医療に有効な生分解性

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

scaffold や新規な毒性メカニズムに基づく抗がん剤の開発に成功した。

◎「ホスホロチオエート型アンチセンス核酸を用いた薬剤の開発」

皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンス核酸の開発を行い、従来のホスホジエステル型のみならずホスホロチオエート型アンチセンス核酸が標的タンパク質の発現抑制効果を有することを明らかにした。次に、2型糖尿病における皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンス核酸の開発を行い、ホスホジエステル骨格からホスホロチオエート骨格に変換したアンチセンス核酸が、標的タンパク質 (Foxo1) の有意な発現抑制効果を有すること、さらに、同アンチセンス核酸を2型糖尿病モデルマウスの損傷部位に塗布したところ、損傷面積を2週間後に約 40%にまで減少させることを明らかにした (*学会 463)。また、膀胱癌のバイオマーカー遺伝子の発現を抑制するアンチセンス核酸の開発をおこなった。ホスホロチオエート骨格と BNA 修飾を有する、膀胱癌関連遺伝子に特異的なアンチセンス核酸を膀胱癌関連細胞に投与すると、膀胱癌関連遺伝子の発現が顕著に減少した。他の遺伝子発現を抑制するために必要なアンチセンス核酸に比べて数桁少ない量のアンチセンス核酸で、効果的な遺伝子発現抑制効果が見られたのは特筆すべき点である (*学会 463)。

アンチセンス核酸に化学修飾を施すことにより、極少量のアンチセンス核酸による非常に高い遺伝子発現抑制効果を達成できた。

◎「核酸ドラッグデリバリーシステムの開発」

部分的に相補的な配列の短い DNA 鎖を複数設計することで多足型構造核酸 (polypodna) を基本骨格とする新規核酸構造体を作製し、標的部位への効率的デリバリーを可能にする核酸 DDS の開発を試みた。細胞による DNA および polypodna の取り込み機構を解明するために、各種細胞での評価を行うとともに、HEK-Blue hTLR9 細胞を選択し、種々の膜タンパク質を発現させた細胞株を用いて CpG DNA の細胞取り込みおよび TLR9 の反応性を評価した。その結果、マクロファージスカベンジャーレセプター1 (MSR1) を発現させることで、polypodna の細胞取り込みおよび TLR9 の反応性が有意に上昇した。このことから、MSR1 が polypodna の細胞取り込みに関与する可能性を明らかにした (*論文 128、129)。また、polypodna について、マウスに投与後の体内動態および免疫活性について評価し、培養細胞での評価をもとに in vivo 活性が予測可能であることを明らかにした (*論文 126)。DNA を基盤とするハイドロゲルに関する検討では、DNA にコレステロール修飾を施すことで内包抗原の徐放化ならびに効果増強に成功した (*論文 92)。また、金ナノ粒子を含む複合型 DNA ハイドロゲルを新たに開発し、レーザー照射との組み合わせにより高い抗腫瘍効果が得られることを示した (*論文 130)。

DNA で構築した多足型構造核酸が、免疫細胞への効率的なデリバリーシステムになることを見出し、金ナノ粒子を含む複合型 DNA ハイドロゲルによるがん免疫治療に成功した。

『薬効・機能評価グループ(岡、東、吉澤、樋上、磯濱ら)』

◎「中枢神経系に作用する新規神経ペプチド薬の開発」

生理活性ペプチド GLP-2 を既存薬と異なる作用機序をもつ新規抗うつ薬として臨床適用するための橋渡し研究 (TR) として、まず末梢投与で分解されずに効率良く中枢移行させるために、GLP-2 に可溶化剤等を添加した 3 剤混合溶液、及び経鼻投与に適した構造をもつ経鼻投与用 GLP-2 誘導体を作製し、中枢移行性と抗うつ様作用について検討した。いずれも経鼻投与後脳内に分布して抗うつ様作用を示した (*論文 135、136、学会 699、700、720、733、747、756、758、760、761)。このうち 3 剤混合溶液は細胞毒性が無視できないため、経鼻投与用 GLP-2 誘導体を用いた研究を進め、治療抵抗性モデルでも抗うつ様作用を示すことを見出し、国内外の特許を出願した (*特許 14、15)。同様の誘導体化法を、すでに認知障害改善作用を報告した他のペプチド (GLP-1、Neuromedin U、及び Oxytocin) にも適用した結果、経鼻投与で中枢移行と認知障害改善作用を確認した (*論文 134、学会 692、707、715)。また、臨床での効果を予測するためにヒト大うつ病でバイオマーカーと考えられる物質が、本研究で用いている動物モデルでも類似の変化を示すことを初めて見出した (*学会 693)。

臨床で使用可能な経鼻投与によるペプチド薬の中枢移行法を発明し、新規作用機序をもつ精神神経疾患治療薬開発への普遍的応用性を示した。

◎「GABA 作動性ニューロステロイドのレベル変動計測に基づくドラッグリポジショニング研究」

脳内アロプレグナロン (AP) のレベルを上昇させる化合物 (SBSS) は抗不安薬候補となり得る。そこで、ICD-LC/ESI-MS/MS アッセイ法を独自に開発 (*論文 154、161) するとともに、これを用いて既存の向精神薬 11 種について SBSS として機能するか否かを検討した。その結果、デュロキセチン (DUX) が SBSS であること、フルボキサミン、ミルタザピン、ミアンセリンもその可能性が高いことを明らかとした。DUX をはじめとする上記の薬物の抗不安/抗うつ作用の少なくとも一部が脳内 AP レベルの上昇を

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

介して発現している可能性を見出した(*学会発表 787、798)。DUX は既に SBSS であることが明らかとされているフルオキシセチンと同じくアリアルオキシプロパンアミン構造を有しており、構造活性相関の情報も得られた。

AP という新規標的分子のレベル変動解析に基づく、ドラッグリポジショニングによる抗不安薬開発を
目指し、独自のアッセイ系を開発し、候補化合物を見出した。

◎「ドラッグリポジショニングによる脳内神経活性ステロイドの生合成に関連した新規抗不安薬の探索」

脳内神経活性ステロイドの役割について、行動薬理的な手法を用いて検討した。拘束ストレスのみでは不安様行動を示さなかった条件で、神経活性ステロイドであるアロプレグナロン(ALLO)の生合成に関与する 5α -還元酵素を阻害するフィナステリドを前処置したところ、不安様行動が惹起された。このことから、ストレスに対する自己防衛反応として脳内では ALLO の生合成が亢進することが明らかとなった。また、ALLO と類似構造を持つアルファキサロンを用いて、ストレス誘発不安モデルマウスに対するアルファキサロンの影響を検討したところ、抗不安作用を示した(*論文 172、学会発表 813、814)。現在、アルファキサロンは犬猫用麻酔薬として使用されており、今後ヒトへの適応拡大を期待したい。次に、ALLO の生合成を亢進させる候補薬物としてベンゾチアゼピン骨格を有する降圧薬ジルチアゼムに着目して検討を行ったところ、ジルチアゼムの投与により抗不安作用が認められ、この抗不安作用はフィナステリドの前処置により抑制された。このことから、ジルチアゼムは ALLO 生合成亢進を介した抗不安薬として有用である可能性が示唆された。不安・うつを併発する循環器病患者は、心血管イベントのリスクが高いことが知られており、ジルチアゼムは循環器病治療薬の主作用と ALLO 生合成促進による抗不安作用を併せ持つことで、心血管イベントの発症リスク軽減に寄与する可能性がある。

抗ストレス物質であるアロプレグナロンを標的とした抗不安薬の可能性を示した。

◎「肥満症脂肪組織におけるオートファジー機能不全のメカニズムの解析と治療法の開発」

肥満症脂肪組織では、オートファゴソーム形成は亢進しているものの、リソソームの機能異常によりオートファゴソーム内容物の分解が適切に行えていないことが明らかになった。また、このリソソーム機能異常にカテプシン L の成熟障害による活性低下と、リソソーム生合成およびオートファジー関連転写因子 TFEB の代償的な増加を介したカテプシン B 発現の増加と活性化が関与している可能性、さらにこれらカテプシン異常が細胞老化やインフラマソームの活性化、ペリリピン分解による脂肪滴形成不全にともなう脂肪細胞死とマクロファージの浸潤に関連する可能性を示した(*論文 199、図書 47、学会 885、889)。次に、オートファジー機構活性化を基盤とした肥満症治療法開発のため、トレハロースやタウリンが有効であることを示した。トレハロースはオートファジー促進作用に加え、酸化ストレス防御機構 KEAP1/NRF2 活性化を介して、抗酸化関連遺伝子群発現を誘導して、酸化ストレスに対して抵抗性を示すことを明らかとした(*論文 193、学会 881)。また、タウリンは ERK の脱リン酸化を介して、TFEB の核内移行を誘導することで、オートファジーを促進する可能性を示した(*論文 191)。

肥満症の初期病態でのオートファゴソーム蓄積の原因を明らかにしたことで、オートファジー機構の改善による肥満症治療の可能性を示した。

◎「現代科学的による漢方薬薬理作用の解明による古典的な東洋医学の概念によらない合理的な漢方薬利用法を確立」

五苓散の慢性硬膜下血腫再発抑制作用は知られているが、その作用メカニズムは不明であった。慢性硬膜下血腫の外膜には脆弱な血管の新生が生じているとの先行研究の報告を受け、血管内皮細胞の遊走に対する五苓散の作用を調べ、本方剤が *in vitro* および *in vivo* の両実験系で内皮細胞の遊走を著明に抑制することを見出した、本作用には少なくとも2つの機序が関わっていることを明らかにした。五苓散は血管栄養因子(VEGF)受容体下流のシグナルである ERK のリン酸化を抑制し、本作用は主に構成生薬の桂皮が関わりと考えられた。また、五苓散は血管内皮細胞に存在する水チャネルであるアクアポリン 1(AQP1)の発現を低下させることで、本細胞の足上突起の形成を抑制すると考えられ、本作用には構成生薬中、猪苓が関わりと推定された(*論文 212)。これらの発見によって、慢性硬膜下血腫の術後に五苓散を処方する症例が大幅に増加し、脳外科医の処方行動に大きな影響を与えた。

補剤が腫瘍免疫を高める作用があることは既に知られていたが、その機序は不明であり、十全大補湯、人参養栄湯および補中益気湯などの補剤の明確な使用目標や使い分けについては明らかでなかった。我々は、担がん状態で増加し、近年、腫瘍の悪性化因子として注目されている MDSC に焦点を絞り、骨髄細胞から MDSC の分化に対する補剤の作用を調べたが、十全大補湯および人参養栄湯がこの分化を著明に抑制することを見出した。一方、補中益気湯には同様の作用はなく、これらの方剤間で免疫活性化の機序が異なることがわかった。十全大補湯および人参養栄湯による MDSC の分化抑制作用はそのマーカータンパク質の発現減少のみならず、T 細胞の増殖抑制作用などの低下など機能的にも

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

検証され、本作用がこれらの方剤の腫瘍免疫賦活作用の機序として少なくとも一部関わることが強く示唆された。また、本作用は構成生薬のうち少なくとも茯苓が重要であることも明らかにした。

五苓散の慢性硬膜下血腫再発抑制メカニズム、十全大補湯や人参養栄湯の抗腫瘍メカニズムを解明することで、漢方薬におけるリバーストランスレーショナルリサーチの重要性を示した。

『臨床試験グループ(小茂田、佐藤(嗣)、真野、浜田ら)』

◎「疥癬、アタマジラミ症の薬物治療問題解決に向けた臨床研究」

疥癬患者を対象としたイベルメクチン全身浴法の安全性と有効性を検討する臨床試験を実施した。その結果、イベルメクチン全身浴法は全症例に有効かつ有害事象の報告もなく、安全性、有効性とも確認された(*学会 995)。また、既存のアタマジラミ症に対する薬剤に対して 100% 近く薬剤耐性率を示す沖縄地区に引き続き、本州地区として筑波大学附属病院の協力を得て、イベルメクチンローションと疥癬治療薬フェントリンローションの有効性、安全性に対する臨床研究を実施した。ピレスロイド系薬剤抵抗性アタマジラミ症に対して、フェントリンローションは約 40%、一方、イベルメクチンローションは約 90% で有効であった。以上より、イベルメクチンローションは薬剤抵抗性アタマジラミ症に対しても有効であることが明らかとなった(*学会 992)。

疥癬のみならず薬剤抵抗性アタマジラミ症に対してもイベルメクチンの有効性を示した。

◎「大規模医療情報データベース(レセプトデータベース)を利用した後ろ向きコホート研究」

脂質異常症治療の第一選択薬として繁用されているスタチン系薬剤が、in vitro の実験から、がん予防効果を有する可能性が示唆されている。本研究では大規模なレセプトデータを使用して、40 歳以上で脂質異常症と診断された患者のうち、スタチンが処方された患者を「スタチン群」、スタチン以外の脂質異常症薬が処方された患者を「非スタチン群」、脂質異常症かつがんと診断されていない患者を「コントロール群」として、患者背景因子を調整後、3 群間で比較検討した。その結果、スタチン群はコントロール群に比べてがん発症リスクの有意な減少が認められたが、非スタチン群では有意な差は認められなかった。以上から、スタチン系薬剤によるがん予防効果の可能性が示唆された(*学会 1062)。

大規模医療情報データベース(レセプトデータベース)を利用したビッグデータ解析を行うことで、既存薬のドラッグリポジショニングによるがん予防薬としての可能性を示した。

◎「生活習慣病患者における薬物治療の開始・継続と各種疾患発生の関係に関する薬剤疫学研究:レセプトデータベースを用いた"healthy user bias"の検討」

日本でのスタチン使用を曝露とする薬剤疫学研究において healthy adherer bias が生じ得るかを検討するため、日本医療データセンターのレセプトデータベースを利用し、スタチン治療のアドヒアランスと予防的検査受診との関連、およびスタチン治療のアドヒアランスと外傷発生との関連を検討するコホート研究を行った。その結果、日本では、スタチン治療については調整困難な healthy adherer bias は存在しないことが示唆された(*学会 1041)。

日本の医療環境で healthy adherer bias が生じ得るかを検討した初めての研究である。

◎「病院情報システムを用いた入院患者を対象とする薬剤疫学研究の実施可能性」

病院の医療情報データベースの利点を活かした入院患者を対象とする薬剤疫学研究の実施可能性と手法を明らかにすることを目的に、腎障害をアウトカムとする検証的コホート研究の対象となりうる薬剤を探索的に検討した。その結果、入院患者を対象とする薬剤疫学研究の実施の可能性が示された(*学会 1022)。

ビッグデータを用いた医薬品の安全性評価において入院患者を対象とする先駆的研究である。

<課題となった点>

『探索グループ(西山、深井、佐藤(圭)、秋本ら)』

◎「FNIII14 による神経芽腫予後不良因子 N-Myc タンパク質分解誘導機構の解明と治療法の開発」

FNIII14 投与による神経芽腫治療をヒト症例に応用することを考慮し、FNIII14 投与の最適条件の確立、ならびに FNIII14 の副作用の有無について、今後詳細な検討が必要である。

◎「患者ゲノムデータベースを用いた癌の予後予測に関わるマーカー分子の同定と癌幹細胞における分子機能の解明」

本研究から得られた将来の精密医療(ゲノム医療)の担い手の育成ノウハウを今後いかにして制度化・発展させ、より多くの人材を確保することとそれら新たな人材の雇用の創出が課題となった。また、多くの患者の臨床情報、および、2 万種類を超える大量の遺伝子の発現データや変異データの提供方法、解析方法など様々な情報論的手法を確立する必要があるがある。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

◎「樹状細胞やマスト細胞の機能維持や遺伝子発現に重要な転写因子発現修飾によるアレルギー疾患や自己免疫疾患治療法の開発」

核酸医薬について、生体内において標的細胞に特異的かつ効果的に届けるための DDS 開発が必要である。また、細胞レベルで有効性が認められた物質の一部について、生体内で効果を発揮するための投与方法の検討、製剤開発が必要である。

◎「抗老化・寿命延伸効果のあるカロリー制限の分子メカニズムの解明と健康長寿を志向するカロリー制限模倣薬の開発」

脂肪組織への選択的な化合物の送達技術、分化した脂肪細胞への有効な遺伝子導入技術の開発が必要である。

『創薬グループ(和田、花輪、大塚、鳥越、西川ら)』

◎「新規な構造を有する核酸医薬およびキャリア分子の創製」

開発した人工オリゴジアミノ糖はそれ自身では核酸の細胞膜透過性を向上させないことが明らかとなり、細胞膜透過性の有るペプチドや種々のリガンドを共有結合させた新規分子キャリアの開発をすでに行なっている。

◎「電子線架橋によるハイドロゲル製剤の開発」

In vitro における検討は概ね目標に到達したが、マウスなどによる in vivo による検証が今後の課題となっている。

◎「細胞機能を自由に操作するバイオマテリアルの開発」

再生医療用 scaffold ゲルでは、再生メカニズムに合わせた生分解時間の制御を検討する必要がある。また、高分子型錯体抗癌剤では、体内動態や対象腫瘍臓器へのターゲティング化が必要である。

◎「ホスホロチオエート型アンチセンス核酸を用いた薬剤の開発」

皮膚創傷治癒の改善を目指すアンチセンス核酸についても、膀胱癌治療を目指すアンチセンス核酸についても、有効性が確認できているが、動物実験によるさらなる見当が必要である。

◎「核酸ドラッグデリバリーシステムの開発」

ナノ構造化により核酸を効率良く免疫細胞にデリバリーすることに成功したが、この技術をアンチセンスなどの核酸医薬に応用するには細胞膜・エンドソーム膜を透過する技術の開発が必要である。

『薬効・機能評価グループ(岡、東、吉澤、樋上、磯濱ら)』

◎「中枢神経系に作用する新規神経ペプチド薬の開発」

ペプチド誘導体の新規精神神経疾患治療薬としての開発は、製薬企業等からの問い合わせや共同研究はあるものの、未だ基礎研究の段階に留まっており、臨床試験を念頭に入れた製薬企業との連携が必要である。

◎「GABA 作動性ニューロステロイドのレベル変動計測に基づくドラッグリポジショニング研究」

検討できた薬物が 11 種と多くないこと、動物の個体差が大きく、これを補正する手法が必要なことが今後の課題として残った。

◎「ドラッグリポジショニングによる脳内神経活性ステロイドの生合成に関連した新規抗不安薬の探索」

ジルチアゼムは、不整脈、狭心症、高血圧に適応を持つ薬剤であり、血圧低下や徐脈といった作用が主作用である。しかし抗不安薬として使用する場合は、副作用となりうるため、注意を要する。また、この基礎研究成果を臨床へ還元する足がかりを作るためには、ジルチアゼム服用患者を対象とした抗不安作用に関する後方視的調査をする必要がある。

◎「肥満症脂肪組織におけるオートファジー機能不全のメカニズムの解析と治療法の開発」

細胞レベルでのオートファジーの評価系はある程度確立しているが、動物レベルでのオートファジーに関する評価系が確立されておらず、さらに細胞選択的な評価ができていない。

◎「現代科学的による漢方薬薬理作用の解明による古典的な東洋医学の概念によらない合理的な漢方薬利用法を確立」

五苓散による血管内非細胞の遊走抑制作用および十全大補湯、人参養栄湯による MDSC 分化抑制作用のいずれも、未だ具体的な活性成分の同定には至っていない。漢方薬には多くの薬理活性成分が含まれており、今後、本研究で解明した漢方薬の新たな作用機序を基にした新規利用を考える場合、その品質の保証および実効性の確保のためには、活性成分の同定が不可避である。

『臨床試験グループ(小茂田、佐藤(嗣)、真野、浜田ら)』

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- ◎「疥癬、アタマジラミ症の薬物治療問題解決に向けた臨床研究」
疥癬治療薬フェトリンローションのアタマジラミ症への適応拡大には日本人患者の治療に対するエビデンスが無いと未承認薬検討会議に要望することができないのが現状である。
- ◎「大規模医療情報データベース(レセプトデータベース)を利用した後ろ向きコホート研究」
レセプト上のがん傷病名の妥当性に関して、実際の患者のがん診断とレセプトでの特定に関するバリデーションスタディを行う必要がある。
- ◎「生活習慣病患者における薬物治療の開始・継続と各種疾患発生の関係に関する薬剤疫学研究:レセプトデータベースを用いた”healthy user bias”の検討」
アドヒアランスの定義を検討し、また層に分けた解析が必要である。
- ◎「病院情報システムを用いた入院患者を対象とする薬剤疫学研究の実施可能性」
薬剤性腎障害に関する個別の因果性を評価する必要がある。

<自己評価の実施結果と対応状況>

年 2 回のペースで TR センターシンポジウムおよび研究成果報告会を開催し、研究の進捗状況を発表するとともに、学外の TR センターメンバーを含めた形での様々な共同研究の芽を抽出した。そして、シンポジウムおよび研究成果報告会での議論や下記第三者評価の結果を踏まえて、国際性の高い研究テーマ、実用化に近づいている研究テーマ、シナジー効果の高い研究テーマという観点から、以下 6 つの研究プロジェクトに集約することとした。進捗状況は以下の通りである。

- ①ハワイ大学との国際共同 TR(樋上(プロジェクトリーダー(PL))、鳥越、大塚、ハワイ大学)
ハワイ大学がんセンターと共同研究や資料提供などに関する種々の契約を締結し、ハワイ大学と本学において毎年交代でシンポジウムを開催し、PAI1 に対する RNase 抵抗性アンチセンス核酸を用いた膀胱癌の治療薬の創生および MDM2 阻害による p53 活性化作用、さらに PARP1 阻害作用を有する Nutlin3a の適応癌腫の拡大を目的とした 2 つの共同研究を推進している。また、博士課程大学院生を対象としたハワイ大学がんセンターでの 2~3 ヶ月間の研修も実施する予定である。
- ②創傷治癒促進薬の開発(花輪(PL)、鳥越、長崎大学)
より有効性の高い創傷治癒を目的とする医薬品を開発するために、様々な製剤基剤と RNase 抵抗性のアンチセンスオリゴを組み合わせて、生化学的または製剤学的な見地から検証する。
現在までに、製剤基剤として、グレードの異なるプルロニックやヒアルロン酸ナトリウム含有製剤を、また異なる分子を標的としたアンチセンスオリゴを作製して、細胞・動物レベルでの検証を行い、有効性に加え、創傷治癒メカニズムに及ぼす影響を検討している。
- ③漢方薬の有効利用に繋がる TR(磯濱(PL)、樋上、吉澤、国立がん研究センター)
がん悪液質モデルマウス作製し、六君子湯ががん悪液質病態の改善に有効であること、そのメカニズムの一端として脂肪組織における脂肪酸合成系転写因子 Srebp1c を介した de novo 脂肪酸合成が関連することを明らかにした。また、がん関連疲労モデルマウスを作製して、補剤(十全大補湯等)の影響について検討している。さらに六君子湯と十全大補湯に共通する構成生薬である茯苓に、MDSC の分化抑制作用を見出し、両方剤の作用に一部、腫瘍免疫賦活作用が関わる可能性を示唆した。また、化学療法剤やオピオイド性鎮痛薬の副作用として生じる嘔吐の軽減を目的とする漢方薬の有用性を評価するために、5-HT3 受容体拮抗作用に注目した評価系の構築を行っており、本評価系により漢方薬の制吐作用の機序の解明を目指し検討中である。さらに、種々の天然物のオピオイド様作用についての評価も併せて行い、新たなオピオイド様物質として蜂産品を見出している。
- ④難治性乳がん制圧に関する TR(秋本(PL)、樋上、鳥越、和田、佐藤(圭)、国立佐賀病院)
乳癌患者ゲノムデータベース解析による予後予測や創薬標的候補分子の抽出から、実際の実験による因果関係の証明を経て難治性乳がんの予後予測分子や創薬標的分子を複数同定することができた。一連の研究を通じて、患者ゲノムデータと臨床情報解析のノウハウとその解析に通じた若い大学院生を育成でき、今後の新たな精密医療(ゲノム医療)を担う人材の育成と確保に貢献できた。現在は、乳がん以外の難治性がんのゲノムデータベース解析を進めるとともに、新規に発見したシグナル経路の詳細な解析を進め、将来の精密医療のための理論的基盤の確立を進めている。
- ⑤自己免疫・アレルギー疾患の発症機序解析と治療法開発(西山(PL)、和田、鳥越、大塚)
アレルギーのエフェクター細胞であるマスト細胞と、獲得免疫の方向性を制御する樹状細胞に焦点を当て、これら細胞の機能や遺伝子発現の調節機構を解明し、有効な標的分子を特定することを目指す。さらに、この知見を基に、標的分子の機能抑制を核酸医薬開発と物質探索という 2通りのアプローチで、細胞機能の調節法開発を行う。現在までに標的分子として転写因子 PU.1 を見出しており、siRNA や免

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

疫調節薬を用いて、触性皮膚炎やアナフィラキシーに対する有効性を認めており、アレルギー性喘息での効果も近くまとめる予定である。探索系のアプローチから、PU.1 や GATA2 の機能抑制作用を有する物質を複数得ており、作用機構や受容体の解明と病態モデルでの検証を同時に進めており、新たな治療標的として G タンパク質共役型受容体などの特定に至っている。

⑥オートファジー/細胞老化を標的とした新規治療薬の開発(深井(PL)、樋上(30年度のみ PL)、秋本、大塚、筑波大学、長崎大学)

リソソーム障害がオートファジー障害とともに細胞老化を誘導する可能性を見出した。また、 β インテグリンの活性化を介して細胞老化が誘導されることも明らかとなった。細胞老化におけるリソソーム障害の本体を明らかにすべく、共同研究を開始し、酸性であるべきリソソーム内中性化およびカテプシン L の成熟障害がリソソーム障害において重要である可能性を示した。また、主要な細胞外基質タンパク質であるフィブロネクチンから遊離するペプチド FNIII14 が β インテグリン不活化作用を介して細胞老化を抑制することを示した。また現在、リソソームの酸性化を誘導する薬剤を開発しつつ、カテプシン L 成熟障害の本体の解明を目指している。

<外部(第三者)評価の実施結果と対応状況>

平成26年9月20日に第1回目のアドバイザリー委員会(委員長:樋上賀一、学外委員:重藤和弘(医薬品医療機器総合機構・理事)、関谷剛男((公財)佐々木研究所・所長)、若林敬二(元国立がん研究センター・所長、現静岡県立大学・教授)、学内委員:安部良(生命医科学研究所・教授)、田沼靖一(薬学部・教授)、オブザーバー:福山秀敏(副学長、総合研究院院長))が開催された。その際、『理科大らしさ』、『革新性、創造性』、『研究者・学生の育成』を考えて、運営して欲しいとの意見をいただいた。これに対して、十分な回答を出すことはできなかったが、学内外の異分野の研究者との様々な共同研究を推進することから、『理科大らしさ』、『革新性、創造性』が生まれるのではないかと考え、活動した。

平成28年8月27日に第2回目のアドバイザリー委員会(委員長:樋上賀一、学外委員:重藤和弘、関谷剛男、若林敬二、学内委員:北村大介(生命医科学研究所・教授)、菊池明彦(基礎工学部・教授)、オブザーバー:浅島 誠(副学長、総合研究院院長)、本間芳和(総合研究院副院長))では、雑駁な研究課題を集約すべき時期であろうとの指摘を受け、上記のようなプロジェクト研究をスタートした。

<研究期間終了後の展望>

5年間の TR センターの活動により多数の共同研究のシーズが誕生した。その中には、核酸をキーワードとした研究のシーズが多く含まれている。また、ドラッグリポジショニングにより臨床試験まで進み、加えて臨床現場での薬物作用の疑問点を解明したりバーストランスレーショナルリサーチも成功し、研究の成果を社会に還元できたものもある。さらに、つくば臨床医学研究開発機構(TCReDO)の支援を受けて研究が進展しているシーズもある。今後、本学の TR を発展させるために、本学 URA とともに、多くのシーズが TCReDO のみならず全国で選定された橋渡し研究事業 10 拠点での研究支援を受けることができるような応募支援体制、すなわち本学における TR プラットホームの構築を考える必要がある。加えて、これらシーズをさらに発展・展開するためには、TR センターメンバーを中心として大型研究費の獲得を目指す必要がある。そのための方向性として、以下 3 点を考えている。1) 新規医薬品の開発は核酸をキーワードとする。2) ドラッグリポジショニング研究を推進する。3) リバーストランスレーショナルリサーチを推進する。

<研究成果の副次的効果>

- 1) 本プロジェクトを通して、ハワイ大学がんセンターとの共同研究体制が構築されて、最終年である 2018 年度には学内予算である若手研究者養成のための国際研究交流支援事業の支援を受けて、TR センターで RA を努める薬学科博士課程および後期博士課程の学生の中期(2~3ヶ月間)のハワイ大学がんセンターへの派遣が決定した。
- 2) 創薬グループに関連する核酸医薬の開発研究が著しく進展した結果、薬学部内に企業(Wave Life Sciences 社)の寄付講座である「核酸創薬化学講座」が 2018 年 1 月に設置された。
- 3) TR センターメンバーが中心となり、独立行政法人医薬品医療機器総合機構(PMDA)との包括的連携協定を締結しようとの試みから、薬学部医療薬学教育研究支援センターの臨床薬学教育研究支援部門に PMDA から教員を迎えることができた。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 核酸医薬 (2) ペプチド医薬 (3) ドラッグリポジショニング
 (4) 漢方薬 (5) TRプラットフォーム (6) 国際化
 (7) _____ (8) _____

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

【探索グループ】

西山千春

1. *Yashiro, T., Sakata, F., Sekimoto, T., Shirai, T., Hasebe, F., Matsuda, K., Kurosawa, S., Suzuki, S., Nagata, K., Kasakura, K., Nishiyama, M., Nishiyama, C.* Biosci. Biotechnol. Immunosuppressive effect of a non-proteinogenic amino acid from Streptomyces through inhibiting allogeneic T cell proliferation. Biosci. Biotechnol. Biochem. 83(6):1111-1116, 2019. (査読有)
2. *Umazume, A., Kezuka, T.*, Matsuda, R., Usui, Y., Takahashi, H., Yamanaka, N., Yashiro, T., Nishiyama, C., Goto, H. Role of PU.1 expression as an inflammatory marker in experimental autoimmune uveoretinitis. Ocul. Immunol. Inflamm. 26:951-963, 2018 (査読有)
3. Ito, T., Egusa, C., Maeda, T., Numata, T., Nakano, N., Nishiyama, C., Tsuboi, R. Stem cell factor suppressed IL-33-induced MHC class II expression in murine bone marrow-derived mast cells. Allergol. Int. in press. (査読有)
4. *Yashiro, T., Yamaguchi, M., Watanuki, Y., Kasakura, K., Nishiyama, C. The transcription factors PU.1 and IRF4 determine dendritic cell-specific expression of RALDH2. J. Immunol. 201:3677-3682, 2018(査読有)
5. *Yashiro, T., Nakano, S., Nomura, K., Uchida, Y., Kasakura, K., Nishiyama, C. A transcription factor PU.1 is critical for Ccl22 gene expression in dendritic cells and macrophages. Sci. Rep. 9:1161. 2019. (査読有)
6. Oda, A., Tezuka, T., Ueno, Y., Hosoda, S., Amemiya, Y., Notsu, C., Kasahara, T., Nishiyama, C., and Goitsuka, R. Niche-induced extramedullary hematopoiesis in the spleen is regulated by the transcription factor Tlx1. Sci. Rep. 8:8308 (2018). 査読有
7. Piao, X., Miura, R., Miyake, S., Komazawa-Sakon, S., Koike, M., Shindo, R., Takeda, J., Hasegawa, A., Abe, R., Nishiyama, C., Mikami, R., Yagita, H., Uchida, Y., and Nakano, H. Blockade of TNFR1-dependent and -independent cell death is crucial for normal epidermal differentiation. J. Allergy Clin. Immunol. in press. 査読有
8. Uemura, T., Yashiro, T., Oda, R., Shioya, N., Nakajima, T., Hachisu, M., Kobayashi, S., Nishiyama, C., and Arimura, G. Intestinal anti-inflammatory activity of Perillaldehyde. J. Agric. Food Chem. 66:3443-3448. (2018). 査読有
9. *Oda, Y., Kasakura, K., Fujigaki, I., Kageyama, A., Okumura, K., Ogawa, H., Yashiro, T., and Nishiyama, C. The effect of PU.1 knockdown on gene expression and function of mast cells. Sci. Rep. 8:2005. (2018). 査読有
10. *Nagaoka, M., Yashiro, T., Uchida, Y., Ando, T., Hara, M., Arai, H., Ogawa, H., Okumura, K., Kasakura, K., and Nishiyama, C. The orphan nuclear receptor NR4A3 is involved in the function of dendritic cells. J. Immunol. 199:2958-2967. 2017. 査読有
11. *Umazume, A., Kezuka, T., Matsuda, R., Usui, Y., Takahashi, H., Yamanaka, N., Yashiro, T., Nishiyama, C., and Goto, H. Role of PU.1 expression as an inflammatory marker in experimental autoimmune uveoretinitis. Ocul. Immunol. Inflamm. in press. 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

12. * Yashiro, T., Kasakura, K., Oda, Y., Kitamura, N., Inoue, A., Nakamura, S., Yokoyama, H., Fukuyama, K., Hara, M., Ogawa, H., Okumura, K., Nishiyama, M., and Nishiyama, C. The hematopoietic cell-specific transcription factor PU.1 is critical for expression of CD11c. *Int. Immunol.* 29:87–94. 2017. [査読有](#)
 13. Honjo, A., Nakano, N., Yamazaki, S., Hara, M., Uchida, K., Kitaura, J., Nishiyama, C., Yagita, H., Ohtsuka, Y., Ogawa, H., Okumura, K., and Shimizu, T. Pharmacological inhibition of Notch signaling suppresses food antigen-induced mucosal mast cell hyperplasia. *J. Allergy Clin. Immunol.* 139:987–996.e10. (2017). [査読有](#)
 14. * Yashiro, T., Hara, M., Ogawa, H., Okumura, K., and Nishiyama, C. Critical role of transcription factor PU.1 in the function of the OX40L/TNFSF4 promoter in dendritic cells. *Sci. Rep.* 6:34825. (2016). [査読有](#)
 15. * Miura, R., Kasakura, K., Nakano, N., Hara, M., Maeda, K., Okumura, K., Ogawa, H., Yashiro, T. and Nishiyama, C. Role of PU.1 in MHC class II expression via CIITA transcription in plasmacytoid dendritic cells. *PLoS One* 11:e0154094. (2016). [査読有](#)
 16. * Yashiro, T., Kubo, M., Ogawa, H., Okumura, K., and Nishiyama, C. PU.1 suppresses Th2 cytokine expression via silencing of GATA3 transcription in dendritic cells. *PLoS One* 10:e0137699. (2015). [査読有](#)
 17. Yamazaki, S., Nakano, N.*, Honjo, A., Hara, M., Maeda, K., Nishiyama, C., Kitaura, J., Ohtsuka, Y., Okumura, K., Ogawa, H., and Shimizu, T. The transcription factor Ehf is involved in TGF-beta-induced suppression of FcepsilonRI and c-Kit expression and FcepsilonRI-mediated activation in mast cells. *J. Immunol.* 195:3427–3435. (2015). [査読有](#)
 18. Ito, T., Egusa, C., Maeda, T., Numata, T., Nakano, N., Nishiyama, C., and Tsuboi, R. IL-33 promotes MHC class II expression in murine mast cells. *Immun. Inflamm. Dis.* 3:196–208. (2015). [査読有](#)
 19. Nakano, N., Nishiyama, C., Yagita, H., Hara, M., Motomura, Y., Kubo, M., Okumura, K., and Ogawa, H. Notch signaling enhances FcepsilonRI-mediated cytokine production by mast cells through direct and indirect mechanisms. *J. Immunol.* 194:4535–4544. (2015). [査読有](#)
 20. * Ishiyama, K., Yashiro, T., Nakano, N., Kasakura, K., Miura, R., Hara, M., Kawai, F., Maeda, K., Tamura, N., Okumura, K., Ogawa, H., Takasaki, Y., and Nishiyama, C. Involvement of PU.1 in NFATc1 promoter function in osteoclast development. *Allergol. Int.* 64:241–247. (2015). [査読有](#)
 21. Yoshida, A., Tomita, T., Fujimura, T., Nishiyama, C., Kuzuyama, T., and Nishiyama, M. Structural insight into amino group-carrier protein-mediated lysine biosynthesis: crystal structure of the LysZ-LysW complex from *Thermus thermophilus*. *J. Biol. Chem.* 290:435–447. (2015). [査読有](#)
 22. Kasakura, K., Takahashi, K.*, Ito, T., Hosono, A., Nunomura, S., Ra, C., Momose, Y., Ito, K., Nishiyama, C., and Kaminogawa, S. C/EBPalpha controls functions of mast cells. *FEBS Lett.* 588:4645–4653. (2014). [査読有](#)
 23. * Inage, E., Kasakura, K., Yashiro, T., Suzuki, R., Baba, Y., Nakano, N., Hara, M., Tanabe, A., Oboki, K., Matsumoto, K., Saito, H., Niyonsaba, F., Ohtsuka, Y., Ogawa, H., Okumura, K., Shimizu, T., and Nishiyama, C. Critical roles for PU.1, GATA1 and GATA2 in the expression of human FcepsilonRI on mast cells: PU.1 and GATA1 transactivate FCER1A, and GATA2 transactivates FCER1A and MS4A2. *J. Immunol.* 192:3936–3946. (2014). [査読有](#)
 24. Nakamura, Y., Nakano, N., Ishimaru, K., Hara, M., Ikegami, T., Tahara, Y., Katoh, R., Ogawa, H., Okumura, K., Shibata, S., Nishiyama, C., and Nakao, A. Circadian regulation of allergic reaction by the mast cell clock. *J. Allergy Clin. Immunol.* 133:568–575. (2014). [査読有](#)
 25. Schendzielorz, G., Dippong, M., Grünberger, A., Kohlheyer, D., Yoshida, A., Binder, S., Nishiyama, C., Nishiyama, M., Bott, M., Eggeling, L. Taking control over control: Use of product sensing in single cells to remove flux control at key enzymes in biosynthesis pathways. *ACS Synth. Biol.* 3:21–29. (2014). [査読有](#)
- 深井文雄
26. * Otsuka K, Sasada M, Iyoda T, Nohara Y, Sakai S, Asayama T, Suenaga Y, Yokoi S, Higami Y, Kodama H, Fukai F, [Combining peptide TNIIIA2 with all-trans retinoic acid accelerates N-Myc protein degradation and neuronal differentiation in MYCN-amplified neuroblastoma cells. *Am J Cancer Res.* 9, pp 434–448, 2019\(査読有\)](#)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

27. Suzuki H, Sasada M, Kamiya S, Ito Y, Watanabe H, Okada Y, Ishibashi K, Iyoda T, Yanaka A, & Fukui F, The Promoting Effect of the Extracellular Matrix Peptide TNIII A2 Derived from Tenascin-C in Colon Cancer Cell Infiltration., *Int J Mol Sci.* 18(1). Pii:E181 (2017). 査読有
28. Okita N, Higami Y, Fukui F, Kobayashi M, Mitarai M, Sekiya T, Sasaki T, Modified Western blotting for insulin and other diabetes-associated peptide hormones *Sci.Rep.* 7(1):6949-6960 (2017). 査読有
29. * Fukui F, New Type of Antitumor Agent targeting the Cell Adhesion Molecule, Integrins. *YAKUGAKU ZASSHI* 137(2), 137-139 (2017). 査読有
30. * Iyoda T, Nagamine Y, Nakane Y, Tokita Y, Akari S, Otsuka K, Fujita M, Itagaki K, Takizawa Y, Orita H, Owaki T, Taira J, Hayashi R, Kodama H, & Fukui F., Coadministration of the FNIII14 Peptide Synergistically Augments the Anti-Cancer Activity of Chemotherapeutic Drugs by Activating Pro-Apoptotic Bim. *PLoS One* 11(9), eO 162525 (2016). 査読有
31. * Mizunuma, T., Iyoda, T., Fukui, F., Cell adhesion-mediated drug resistance (CAM-DR) in acute myelogenous leukemia cells and its abrogation by the antiadhesive peptide FNIII14. *Peptide Science* 2014, 261-261, (2015). 査読有
32. * Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., Fukui, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIII A2 in the formation of atherosclerotic form cell. *Peptide Science* 2014, 61-64 (2015). 査読有
33. * Tanaka, R., Seki, Y., Saito, Y., Kamiya, S., Fujita, M., Okutsu, H., Iyoda, T., Takai, T., Owaki, T., Yajima, H., Taira, J., Hayashi, R., Kodama, H., Matsunaga, T., and Fukui, F., Tenascin-C-derived peptide TNIII A2 highly enhances cell survival and platelet-derived growth factor (PDGF)-dependent cell proliferation through potentiated and sustained activation of integrin α 5 β 1. *J. Biol. Chem.* 289(25), 17699-17708 (2014). 査読有
34. * Iyoda, T., Takada, M., Fukatsu, K., Kumokoshi, S., Fujisawa, T., Shimada, T., Shimokawa, N., Matsunaga, T., Makino, K., Doi, N., Terada, H., and Fukui, F., A novel mechanism underlying the basic defensive response of macrophages against Mycobacterium infection. *J. Immunol.* 192(9), 4254-4262 (2014). 査読有

秋本和憲

35. * Shoma Tamori, Yuka Nozaki, Hitomi Motomura, Hiromi Nakane, Reika Katayama, Chotaro Onaga, Eriko Kikuchi, Nami Shimada, Yuhei Suzuki, Mei Noike, Yasushi Hara, Keiko Sato, Tsugumichi Sato, Kouji Yamamoto, Takehisa Hanawa, Misa Imai, Ryo Abe, Atsushi Yoshimori, Ryoko Takasawa, Sei-Ichi Tanuma, Kazunori Akimoto*, Glyoxalase 1 gene is highly expressed in basal-like human breast cancers and contributes to survival of ALDH1-positive breast cancer stem cells, *Oncotarget* 9, 36515-36529, 2018(査読有)
36. Junichi Baba, Mitomu Kioi, Kazunori Akimoto, Yoji Nagashima, Masataka Taguri, Yoshiaki Inayama, Ichiro Aoki, Shigeo Ohno, Kenji Mitsudo and Iwai Tohnai, Atypical Protein Kinase C λ Expression is Associated with Malignancy of Oral Squamous Cell Carcinoma, *Anticancer Research* 38, 6291-6297, 2018(査読有)
37. Babita Shashni, Hidehiko Matsuura, Riku Saito, Takuma Hirata, Shinya Ariyasu, Kenta Nomura, Hiroshi Takemura, Kazunori Akimoto, Naoyuki Aikawa, Atsuo Yasumori and Shin Aoki, Simple and Convenient Method for the Isolation, Culture, and Re-collection of Cancer Cells from Blood by Using Glass-Bead Filters, *ACS Biomaterials Science & Engineering*, 5, 438-452, 2019(査読有)
38. Aya Tokinaga-Uchiyama, Taichi Mizushima, Kazunori Akimoto, Yoji Nagashima, Kazunori Sasaki, Masa-aki Nakaya, Kenichi Ohashi, Kazumi Kubota, Yasuyo Maruyama, Hisamori Kato, Fumiki Hirahara, Etsuko Miyagi, Shigeo Ohno, Mikiko Asai-Sato, Aberrant nuclear localization of aPKC λ is associated with poorer prognosis in uterine cervical cancer, *Int. J. Gynecol. Pathol.* in press(査読有)
39. Babita Shashni, Shinya Ariyasu, Reisa Takeda, Toshihiro Suzuki, Shota Shiina, Kazunori Akimoto, Takuto Maeda, Naoyuki Aikawa, Ryo Abe, Tomorhiro Osaki, Norihiko Itoh, and Shin Aoki Size-based Differentiation of Cancer and Normal Cells by a Particle Size Analyzer Assisted by a Cell-recognition PC Software, *Biological and Pharmaceutical Bulletin* 41,487-503, (2018). 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

40. * Yuka Nozaki, Shoma Tamori, Masahiro Inada, Reika Katayama, Hiromi Nakane, Osamu Minamishima, Yuka Onodera, Makoto Abe, Shota Shiina, Kei Tamura, Daichi Kodama, Keiko Sato, Yasushi Hara, Ryo Abe, Ryoko Takasawa, Atsushi Yoshimori, Nariyoshi Shinomiya, Sei-ichi Tanuma and Kazunori Akimoto, Correlation between c-Met and ALDH1 contributes to the survival and tumor-sphere formation of ALDH1 positive breast cancer stem cells and predicts poor clinical outcome in breast cancer, *Genes Cancer*, 8, 626-639, (2017). 査読有
41. * Sato, K. and Akimoto, K. Expression Levels of KMT2C and SLC20A1 identified by information-theoretical analysis are powerful prognostic biomarkers in ER-positive breast cancer *Clinical Breast Cancer* 17, e135-e142, (2017). 査読有
42. Mizushima, T., Asai-Sato, M., Akimoto, K., Nagashima, Y., Taguri, M., Sasaki, K., Nakaya, M., Asano, R., Tokinaga, A., Kiyono, T., Hirahara, F., Ohno, S., and Miyagi, E., Aberrant Expression of the Cell Polarity Regulator aPKC λ is Associated with Disease Progression in Cervical Intraepithelial Neoplasia (CIN): a Possible Marker for Predicting CIN Prognosis. *Int. J. Gynecological Pathology* 35, 106-117, (2016). 査読有
43. Metz, P.J., Lopez, J., Kim, S.H., Akimoto, K., Ohno, S., and Chang, J.T., Regulation of Asymmetric Division by Atypical Protein Kinase C Influences Early Specification of CD8(+) T Lymphocyte Fates. *Sci. Rep.*, 6:19182, (2016). 査読有
44. Metz, P. J., Arsenio, J., Kakaradov, B., Kim, S. H., Remedios, K. A., Oakley, K., Akimoto, K., Ohno, S., Yeo, G. W., Chang, J. T., Regulation of Asymmetric Division and CD8+ T Lymphocyte Fate Specification by PKC ξ and PKC λ . *J. Immunol.* 194, 2249-2259, (2015). 査読有
45. Osada, S.-I., Minematsu, N., Oda, F., Akimoto, K., Kawana, S., and Ohno, S., Atypical Protein Kinase C Isoform, aPKC λ is Essential for Maintaining Hair Follicle Stem Cell Quiescence. *J. Investigative Dermatology* 135, 2584-2592, (2015). 査読有
46. Sasaki, K., Kakuwa, T., Akimoto, K., Koga, H., and Ohno, S., Regulation of Epithelial Cell Polarity by PAR-3 Depends on Girdin Transcription and Girdin-G α 3 Signaling. *J. Cell Sci.* 128, 2244-22589, (2015). 査読有
47. Okayama, A., Miyagi, Y., Oshita, F., Nishi, M., Nakamura, Y., Nagashima, Y., Akimoto, K., Ryo, A., Hirano, H. Proteomic analysis of proteins related to prognosis of lung adenocarcinoma. *JOURNAL OF PROTEOME RESEARCH*, 13, 4686-4694, (2014). 査読有
48. Ichikawa, Y., Nagashima, Y., Morioka, K., Akimoto, K., Kojima, Y., Ishikawa, T., Goto, A., Kobayashi, N., Watanabe, K., Ota, M., Fujii, S., Kawamata, M., Takagawa, R., Kunizaki, C., Takahashi, H., Nakajima, A., Maeda, S., Shimada, H., Inayama, Y., Ohno, S., Endo, I., Colorectal laterally spreading tumors show characteristic expression of cell polarity factors, including atypical protein kinase C λ μ E-cadherin, β -catenin and basement membrane component. *Oncology Letter* 8, 977-984, (2014) 査読有.

佐藤圭子

49. Nishimaki T and Sato K, An Extension of the Kimura Two-Parameter Model to the Natural Evolutionary Process, *J Mol Evol*, 87(1):60-67, 2019(査読有)
50. * Tamori S, Nozaki Y, Motomura H, Nakane H, Katayama R, Onaga C, Kikuchi E, Shimada N, Suzuki Y, Noike M, Hara Y, Sato K, Sato T, Yamamoto K, Hanawa T, Imai M, Abe R, Yoshimori A, Takasawa R, Tanuma SI, Akimoto K., Glyoxalase 1 gene is highly expressed in basal-like human breast cancers and contributes to survival of ALDH1-positive breast cancer stem cells, *Oncotarget*, 23:9(92):36515-36529, 2018(査読有)
51. * Sato, K. and Akimoto, K. Expression levels of KMT2C and SLC20A1 identified by information-theoretical analysis are powerful prognostic biomarkers in ER-positive breast cancer. *Clinical Breast Cancer* 17, e135-e142, (2017). 査読有
52. Sato K, Hara T, Ohya M, A Coding Theoretical Approach to Predict Sequence Changes in H5N1 Influenza A Virus Hemagglutinin, *Proceedings of the 9th International Joint Conference on Biomedical Engineering Systems and Technologies (BIOSTEC 2016) - Volume 3: BIOINFORMATICS (ISBN:978-989-758-170-0)*, pp1509-167. 査読有

【創薬グループ】

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

和田 猛

53. * Yusuke Maeda, Rintaro Iwata Hara, Kazutaka Nishina, Kie Yoshida-Tanaka, Taiichi Sakamoto, Takanori Yokota, Takeshi Wada, Artificial cationic peptides that increase nuclease resistance of siRNA without disturbing RNAi activity, *Nucleosides Nucleotides & Nucleic Acids*, 38 (5), 338 – 348, 2019.(査読有)
54. * 和田猛, リン原子の立体化学を厳密に制御したリン原子修飾核酸医薬の開発, *医薬ジャーナル*, 55 (2), 75 – 81, 2019.(査読無)
55. * 和田猛, リン原子の立体化学を制御した核酸医薬の開発, *Medical Science Digest*, 45 (2), 67 – 71, 2019.(査読無)
56. * Rintaro Iwata Hara, Aya Yaoita, Katsuya Takeda, Hiroaki Ueki, Ayumu Ishii, Hideyuki Imoto, Satoshi Kobayashi, Michi Sano, Mihoko Noro, Kazuki Sato, Takeshi Wada, Solid-Phase Synthesis of Fluorinated Analogues of Glycosyl 1-Phosphate Repeating Structures from Leishmania using the Phosphoramidite Method, *Chemistry Open*, 7, 439 – 446, 2018.(査読有)
57. * Rintaro Iwata Hara, Yusuke Maeda, Haruna Fujimaki Takeshi Wada, Enhancement in RNase H activity of a DNA/RNA hybrid duplex using artificial cationic oligopeptides, *Chemical Communications*, 54, 5826 – 5829, 2018.(査読有)
58. * Yohei Nukaga, Takeshi Wada, Chemical Synthesis of Boranophosphate Deoxy-ribonucleotides, Synthesis of Therapeutic Oligonucleotides, 271 – 284, 2018.(査読有)
59. * Hara, R. I., Maeda, M., Fujimaki, H., Wada, T., Enhancement in RNase H activity of a DNA/RNA hybrid duplex using artificial cationic oligopeptides, *Chem. Commun.*, 54, (2018). 査読有
60. * Hara, R. I., Hisada, Y., Maeda, Y., Yokota, T., Wada, T., Artificial cationic oligosaccharides for heteroduplex oligonucleotide-type drugs, *Scientific Reports*, 8, 4323, (2018). 査読有
61. * Hara, R. I., Mitsuhashi, Y., Saito, K., Maeda, Y., Wada, T., Solid-Phase Synthesis of Oligopeptides Containing Sterically Hindered Amino Acids on Nonswellable Resin Using 3-Nitro-1,2,4-triazol-1-yl-tris(pyrrolidin-1-yl)phosphonium Hexafluorophosphate (PyNTP) as the Condensing Reagent, *ACS Combinatorial Science*, 20, 132-136, (2018). 査読有
62. * Hara, R. I., Kageyama, M., Arai, K., Uchiyama, N., Wada, T., Synthesis of 2'-O-monohaloethoxymethyl-modified RNAs and their duplex formation ability, *RSC Advances*, 7, 41297-41303, (2017). 査読有
63. Hara, R. I., Kobayashi, S., Noro, M., Sato, K., Wada, T., Synthesis and properties of 2-deoxy-2-fluoromannosyl phosphate derivatives, *Tetrahedron*, 73, 4560-4565, (2017). 査読有
64. 和田猛, 薬として働く人工生体分子の合成, *理大 科学フォーラム*, 6, 26-27, (2017). 査読無
65. Hara, R. I., Ogawa, Y., Noro, M., Wada, T., Stereocontrolled Synthesis of P-Modified N-Acetylmannosamine- α -1-phosphate Analogs, *Chem. Lett.*, 46, 1051-1053, (2017). 査読有
66. * Hara, R. I., Maeda, Y., Sakamoto, T., Wada, T., Double-stranded RNA-binding artificial cationic oligosaccharides stabilizing siRNAs with a low N/P ratio *Org. Biomol. Chem.* 15, 1710-1717, (2017). 査読有
67. 岡夏央, 和田猛, リン原子修飾オリゴ核酸の立体選択的合成, *有機合成化学協会誌*, 74, 31-44, (2016). 査読有
68. 和田猛, 核酸医薬への化学的アプローチ, *Medchem. News.* 26, 18-21, (2016). 査読有
69. * Nukaga, Y., Oka, N., Wada, T., Stereocontrolled Solid-phase Synthesis of Phosphate/Phosphorothioate (PO/PS) Chimeric Oligodeoxyribonucleotides on an Automated Synthesizer Using an Oxazaphospholidine-phosphoramidite Method. *J. Org. Chem.* 81, 2753-2762, (2016). 査読有
70. Sato, K., Wada, T., One-pot conversion reactions of glycosyl boranophosphates into glycosyl phosphate derivatives via acyl phosphite intermediates. *Org. Biomol. Chem.* 14, 11092-11095, (2016). 査読有
71. * Iwata, R., Doi, A., Maeda, Y., Wada, T. Synthesis of oligodiaminomannoses and analysis of their RNA duplex binding properties and their potential application as siRNA-based drugs. *Org. Biomol. Chem.* 13, 9504-9515 (2015). 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

72. * Iwata, R., Nakayama, F., Hirochi, S., Sato, K., Piao, W., Nishina, K., Yokota, T., Wada, T., Synthesis and properties of vitamin E analog-conjugated neomycin for delivery of RNAi drugs to liver cells. *Bioorg. Med. Chem. Lett.* 25, 815-819 (2015). 査読有
73. Nishina, T., Numata, J., Nishina, K., Yoshida-Tanaka, K., Nitta, K., Piao, W., Iwata, R., Ito, S., Kuwahara, H., Wada, T., Mizusawa, H., Yokota, T., Chimeric Antisense Oligonucleotide Conjugated to α -Tocopherol. *Mol. Ther. Nucleic Acids.* 4, e220 (2015). 査読有
74. * Nukaga, Y., Takemura, T., Iwamoto, N., Okad, N., and Wada, T., Enhancement of affinity of 2'-O-Me-oligonucleotides for complementary RNA by incorporating a stereoregulated boranophosphate backbone. *RSC Adv.* 5, 2392-2395 (2015). 査読有
75. 和田猛、核酸医薬におけるものづくりの力、*Antisense.* 19, 6 (2015). 査読有
76. Iwata, R., Nishina, K., Yokota, T., Wada, T. Synthesis and properties of double-stranded RNA-bindable oligodiaminogalactose derivatives conjugated with vitamin E *Bioorg. Med. Chem.* 22, 1394-1403 (2014). 査読有
77. Saito, K., Wada, T. 3-Nitro-1,2,4-triazol-1-yl-tris(pyrrolidin-1-yl)phosphonium hexa-fluorophosphate (PyNTP) as a condensing reagent for solid-phase peptide synthesis *Tetrahedron Lett.* 55, 1991-1993 (2014). (査読有)
78. Uehara, S., Hiura, S., Higashida, R., Oka, N., Wada, T. Solid-phase Synthesis of P-Boronated Oligonucleotides by the H-Boranophosphonate Method *J. Org. Chem.* 79, 3465-3472 (2014). 査読有
- 鳥越秀峰
79. * Maiko de Kerckhove, Katsuya Tanaka, Takahiro Umehara, Momoko Okamoto, Sotaro Kanematsu, Hiroko Hayashi, Hiroki Yano, Soushi Nishiura, Shiho Tooyama, Yutaka Matsubayashi, Toshimitsu Komatsu, Seongjoon Park, Yuka Okada, Rina Takahashi, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Keisuke Iwasaki, Tadashige Nozaki, Hidetaka Torigoe, Kazuya Ikematsu, Yutaka Suzuki, Katsumi Tanaka, Paul Martin, Isao Shimokawa, Ryoichi Mori, Targeting miR-223 in neutrophils enhances the clearance of Staphylococcus aureus in infected wounds, *EMBO Mol. Med.*, 10 巻 e9024, 2018 (査読有)
80. Nomura, Y., Yamazaki, K., Amano, R., Takada, K., Nagata, T., Kobayashi, N., Tanaka, Y., Fukunaga, J., Katahira, M., Kozu, T., Nakamura, Y., Haishima, Y., Torigoe, H., Sakamoto, T. "Conjugation of two RNA aptamers improves binding affinity to AML1 Runt domain" *J. Biochem.* 162(6), 431-436 (2017). 査読有
81. *Kondo, J., Nomura, Y., Kitahara, Y., Obika, S., and Torigoe, H., The Crystal structure of a 2',4'-BNANC[N-Me]-modified antisense gapmer in complex with the target RNA. *Chem. Commun.*, 52, 2354-2357 (2016). 査読有
82. Kuriyama, M., Haruta, K., Dairaku, T., Kawamura, T., Kikkawa, S., Inamoto, K., Tsukamoto, H., Kondo, Y., Torigoe, H., Okamoto, I., Ono, A., Morita, E. H., Tanaka, Y., Hg²⁺-Trapping Beads: Hg²⁺-Specific Recognition through Thymine-Hg(II)-Thymine Base Pairing. *Chem. Pharm. Bull.*, 62(7), 709-712 (2014). 査読有
- 花輪剛久
83. Ophelie Torres, Ayuri Yamada, Neil M. Rigby, Takehisa Hanawa, Yayoi Kawano, Anwesha Sarkar, Gellan gum: A new member in the dysphagia thickener family, *Biotribology*, 17, 8-18, (2019) (査読有)
84. がん化学療法における副作用に対する「患者に優しい製剤」の開発, 花輪剛久 河野弥生 佐藤光利: *YAKUGAKU ZASSHI*, 138(2), 169-176(2018)(査読有)
85. 院内製剤の流れ-上流(医療ニーズ)~下流(臨床応用)-に大学はどう係われるのか?, 花輪剛久, 百賢二, 河野弥生, 米持悦生, 山内仁史: *YAKUGAKU ZASSHI*, 138(6), 751-752(2018).(査読有)
86. * Maiko de Kerckhove, Katsuya Tanaka, Takahiro Umehara, Momoko Okamoto, Sotaro Kanematsu, Hiroko Hayashi, Hiroki Yano, Soushi Nishiura, Shiho Tooyama, Yutaka Matsubayashi, Toshimitsu Komatsu, Seongjoon Park, Yuka Okada, Rina Takahashi, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Keisuke

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Iwasaki, Tadashige Nozaki, Hidetaka Torigoe, Kazuya Ikematsu, Yutaka Suzuki, Katsumi Tanaka, Paul Martin, Isao Shimokawa, Ryoichi Mori, Targeting miR-223 in neutrophils enhances the clearance of Staphylococcus aureus in infected wounds, EMBO Mol. Med., 10 巻 e9024, 2018 (査読有)

87. * Shoma Tamori, Yuka Nozaki, Hitomi Motomura, Hiromi Nakane, Reika Katayama, Chotaro Onaga, Eriko Kikuchi, Nami Shimada, Yuhei Suzuki, Mei Noike, Yasushi Hara, Keiko Sato, Tsugumichi Sato, Kouji Yamamoto, Takehisa Hanawa, Misa Imai, Ryo Abe, Atsushi Yoshimori, Ryoko Takasawa, Sei-Ichi Tanuma and Kazunori Akimoto, Glyoxalase 1 gene is highly expressed in basal-like human breast cancers and contributes to survival of ALDH1-positive breast cancer stem cells, Oncotarget, 9(92), 36515-36529(2018). (査読有)

88. *Kawano, Y, Ishii, N, Shimizu, Y., and Hanawa, T., Development and characterization of a suspension containing nanoparticulated rebamipide for a mouth wash for stomatitis, J. Pharm. Sci. Tech. Jpn., 77(2), 104-115 (2017). 査読有

89. * Miyajima, A., Hirota, T., Tashiro, M., Noguchi, W., Kawano, Y., Hanawa, T., Kigure, A., Anata, T., Yamamoto, Y., Yuasa, N., Koshino, M., Shiraiishi, Y., Yuzawa, K., Akagi, K., Yoshimasu, T., Makigami, K., and Komoda, M. Pharmacokinetics of ivermectin applied topically by whole-body bathing method in healthy volunteers, J. Dermatol. in press (2016). 査読有

90. Kawano, Y., Imamura, A., Nakamura, T., Akaishi, M., Satoh, M., and Hanawa, T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate, Chem. Pharm. Bull., 64(12), 1659-1665 (2016). 査読有

91. Satoh, M., Kamada, A., Saito, M, Akaishi, M., Imamura, A., Kawano Y., and Hanawa, T., Healing effects of irsogladine maleate on acetic acid-induced oral stomatitis in 5-fluorouracil-treated and -untreated syrian golden hamsters, Research & Reviews in Pharmacy and Pharmaceutical Sciences, 5(4), 18-22 (2016). 査読有

92. Ishii, N., Kawano, Y., Suzuki, M., Komoda, M., Makino, K., and Hanawa, T., Effects of a camostat mesilate gargle on stomatitis caused by molecular target therapy: A case report, 日本緩和医療薬学雑誌, 9(3), 87-91 (2016). 査読有

93. 河野弥生、佐藤光利、花輪剛久、大学から発信する Evidence-based hospital formulation (EBHF), 医療薬学, 42, 492-498 (2016). 査読有

94. 河野弥生、花輪剛久、医療現場のニーズを考慮した院内製剤の研究開発, 薬剤学, 76(4), 217-223, (2016). 査読有

95. Kawano, Y., Sasatsu, M., Mizutani, A., Hirose, K., Hanawa, T. (Corresponding Author), and Onishi, H., Preparation and evaluation of stomatitis film using xyloglucan containing loperamide, Chem. Pharm. Bull., 64(6), 1-6, (2016). 査読有

96. Goto K., Shinozaki I., Ishihara T., Kaiho F., Hanawa T., Evaluation of community pharmacist training on patients' non-verbal communication. Jpn. J. Pharm. Health Care Sci., 41, 66-79(2015). 査読有

97. 花輪剛久、小口敏夫、薬物治療を支援する院内製剤-現状と課題-, Yakugaku Zasshi. 135, 929-930 (2015). 査読有

98. 佐古有紀、桐林東一郎、河野弥生、花輪剛久、宮川信明、骨粗鬆症患者における経口ビスホスホネート製剤服薬実態調査、医療薬学、41, 750-756 (2015). 査読有

99. 花輪剛久、河野弥生、医療現場のニーズに応える製剤設計、Pharm. Tech. Japan. 31, 149-155 (2015). (査読無)

100. 花輪剛久、これからの院内製剤に対する大学のかかわり、日本病院薬剤師会雑誌、50(6)、725-728 (2014). 査読有

大塚英典

101. * Kazutoshi Iijima, Shohei Ishikawa, Kohei Sasaki, Mineo Hashizume, Masaaki Kawabe, and Hidenori Otsuka. Osteogenic Differentiation of Bone Marrow-Derived Mesenchymal Stem Cells in Three-Dimensional Silica Nonwoven Fabrics. ACS Omega., (2018). in press. 査読有

102. * Shohei Ishikawa, Kazutoshi Iijima, Kohei Sasaki, Masaaki Kawabe, and Hidenori Otsuka. Improvement of Hepatic Functions by Spheroids Coculture with Fibroblasts in 3D Silica Nonwoven

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Fabrics. J. Nanosci. Nanotechnol., (2018). in press. 査読有

103. * Daisuke Matsukuma, Taketomo Sambai, Hidenori Otsuka. UCST-type phase transition driven by protein-derived polypeptide employing gelatin and chitosan. Polymer. Adv. Technol. Volume28, Issue12, 1636-1641 (2017). 査読有

104. Iijima, M., Ulkoski, D., Sakuma, S., Matsukuma, D., Nishiyama, N., Otsuka, H. and Scholz, C. Synthesis of PEGylated poly(amino acid) pentablock copolymers and their self-assembly. Polym. Int., 65: 1132-1141. (2016) 査読有

105. * Otsuka, H., Muramatsu, Y., and Matsukuma, D., Gold nanorod functionalized with self-assembled glycopolymers for ultrasensitive detection of proteins. Chem. Lett., 44(2), 132-134 (2015). 査読有

106. * Matsukuma, D., and Otsuka, H., Thermo-responsive reversible phase-transition of alginate based semi-IPN gel through self-assembly of interpenetrated elastin-like polypeptide. Chem. Lett., 44(1), 26-28 (2015). 査読有

107. * Otsuka, H., Matsukuma, D., Sanbai, T., and Ikenaga, Y., Self-Assembly of Poly(ethylene glycol)-block-polypyridine copolymer into micelles and at silica surface: Effect of molecular architecture on silica dispersion. Colloid Polym. Sci., 292, 291-300 (2014). 査読有

108. * Matsukuma, D., Maejima, Y., Ikenaga, Y., Sanbai, T., Ueno, K., and Otsuka, H., Amphiphilic copolymer of poly(ethylene glycol)-block-polypyridine; Synthesis, physicochemical characterization, and adsorption onto silica nanoparticle. J. Nanosci. Nanotechnol., 14(9), 6774-6780 (2014). 査読有

109. * Kutsuzawa, K., Suzuki, T., Kishimoto, H., Murakami, A., Azuma, T., Abe, R., and Otsuka, H., Highly robust protein production by coculture of CHO spheroids layered on feeder cells in serum-free medium. Colloid Polym. Sci., 292, 839-848 (2014). 査読有

110. Otsuka, H., Sasaki, K., Okimura, S., Nagamura, M., Watanabe, R., and Kawabe, M., Contribution of fibroblasts cultured on 3D silica nonwoven fabrics to the co-cultured hepatocytes function. Chem. Lett., 43, 343-345 (2014). 査読有

111. * Otsuka, H., Hagiwara, T., and Yamamoto, S., Carbohydrate-based amphiphilic diblock copolymers with pyridine for the sensitive detection of protein binding. J. Nanosci. Nanotechnol., 14(9), 6764-6773 (2014). 査読有

西川元也

112. * Yuya Mizukami, Yuki Takahashi, Kazunori Shimizu, Satoshi Konishi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Regulation of the distribution of cells in mixed multicellular spheroids by altering their migration direction. Tissue Engineering Part A, 25 巻, pp 390-398, 2019 (査読有).

113. Yuta Arima, Wen Liu, Yuki Takahashi, Makiya Nishikawa, Yoshinobu Takakura, Effects of localization of antigen proteins in antigen-loaded exosomes on efficiency of antigen presentation. Molecular Pharmaceutics, in press, 2019 (査読有).

114. * Yukiya Takayama, Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Click chemistry as a tool for cell engineering and drug delivery. Molecules, 24 巻, e172, 2019 (査読有).

115. * 西川元也, 草森 浩輔. がん治療における核酸免疫アジュバントの高機能化および標的指向化, Drug Delivery System, 34 巻, pp 46-51, 2019 (査読無).

116. Yuki Takahashi, Masaki Morishita, Makiya Nishikawa, Yoshinobu Takakura, Role of extracellular vesicle surface proteins in the pharmacokinetics of extracellular vesicles. Chonlada Charoenviriyakul, Molecular Pharmaceutics, 15 巻, pp 1073-1080, 2018 (査読有).

117. Mari Tsujimura, Kosuke Kusamori, Chihiro Oda, Airi Miyazaki, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Makiya Nishikawa, Akira Yamamoto, Regulation of proliferation and functioning of transplanted cells by using herpes simplex virus thymidine kinase gene in mice. Journal of Controlled Release, 275 巻, pp 78-84, 2018 (査読有).

118. * Yuki Araie, Yosuke Takahashi, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Enhanced activity of immunosuppressive oligodeoxynucleotides by incorporating them into hexapod-like

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- nanostructured DNA. Biological and Pharmaceutical Bulletin, 41 巻, pp 564–569, 2018 (査読有).
119. * Yosuke Takahashi, Yuki Araie, Daiki Nomura, Yuki Takahashi, Kohei Sano, Hideo Saji, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Construction of nanostructured DNA harbouring phosphorodiamidate morpholino oligonucleotide for controlled tissue distribution in mice. Journal of Drug Targeting, 26 巻, pp 373–381, 2018 (査読有).
120. * Daiki Nomura, Masaaki Saito, Yosuke Takahashi, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Development of orally-deliverable DNA hydrogel by microemulsification and chitosan coating. International Journal of Pharmaceutics, 547 巻, pp 556–562, 2018 (査読有).
121. Yuki Takahashi, Makiya Nishikawa, Yoshinobu Takakura, Preservation of exosomes at room temperature using lyophilization. Chonlada Charoenviriyakul, International Journal of Pharmaceutics, 553 巻, pp 1–7, 2018 (査読有).
122. * Yuka Umeki, Masaaki Saito, Kosuke Kusamori, Mari Tsujimura, Moeka Nishimura, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Combined encapsulation of a tumor antigen and immune cells using a self-assembling immunostimulatory DNA hydrogel to enhance antigen-specific tumor immunity. Journal of Controlled Release, 288 巻, pp 189–198, 2018 (査読有).
123. * Kosuke Kusamori, Yukiya Takayama, Makiya Nishikawa, Stable surface modification of mesenchymal stem cells using the avidin-biotin complex technique. Current Protocols in Stem Cell Biology, 47 巻, e66, 2018 (査読有).
124. 麓伸太郎, 西川元也, 日本薬剤学会における微粒子製剤の物性測定標準化に向けた取り組み. 日本核酸医薬学会誌, 22, pp 32–40, 2018 (査読有).
125. Yutaro Tanaka, Makiya Nishikawa, Yuya Mizukami, Kosuke Kusamori, Yuka Ogino, Shunsuke Nishimura, Kazunori Shimizu, Satoshi Konishi, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura. Control of polarization and tumoricidal activity of macrophages by multicellular spheroid formation. Journal of Controlled Release, 27, 177–183,(2018). 査読有
126. * Yosuke Takahashi, Tatsuoki Maezawa, Yuki Araie, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, In vitro and in vivo stimulation of Toll-like receptor 9 by CpG oligodeoxynucleotides incorporated into polypod-like DNA nanostructures. Journal of Pharmaceutical Sciences, 106, 2457–2462 (2017). 査読有
127. * Yuka Umeki, Masaaki Saito, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa. Retardation of antigen release from DNA hydrogel using cholesterol-modified DNA for increased antigen-specific immune response. Advanced Healthcare Materials, 6,(2017). 査読有
128. * Shozo Ohtsuki, Yuki Takahashi, Takao Inoue, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa. Reconstruction of Toll-like receptor 9-mediated responses in HEK-Blue hTLR9 cells by transfection of human macrophage scavenger receptor 1 gene. Scientific Reports, 7, 13661,(2017). 査読有
129. * Kohta Mohri, Kengo Nagata, Shozo Ohtsuki, Shiori Toyama, Mao Nonomura, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Shinji Sakuma. Elucidation of the mechanism of increased activity of immunostimulatory DNA by the formation of polypod-like structure. Pharmaceutical Research, 34, 2362–2370,(2017). 査読有
130. * Tomoya Yata, Yuki Takahashi, Mengmeng Tan, Hirotaka Nakatsuji, Shozo Ohtsuki, Tatsuya Murakami, Hiroshi Imahori, Yuka Umeki, Tomoki Shiomi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa. DNA nanotechnology-based composite-type gold nanoparticle-immunostimulatory DNA hydrogel for tumor photothermal immunotherapy. Biomaterials, 146, 136–145,(2017). 査読有
131. Yukiya Takayama, Kosuke Kusamori, Mika Hayashi, Noriko Tanabe, Satoru Matsuura, Mari Tsujimura, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Makiya Nishikawa, Akira Yamamoto. Long-term drug modification to the surface of mesenchymal stem cells by the avidin-biotin complex method. Scientific Reports, 7, 16953,(2017). 査読有
132. Tomoko Nishikawa, Yutaro Tanaka, Kosuke Kusamori, Narumi Mizuno, Yuya Mizukami, Yuka Ogino,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Kazunori Shimizu, Satoshi Konishi, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa. Using size-controlled multicellular spheroids of murine adenocarcinoma cells to efficiently establish pulmonary tumors in mice. *Biotechnology Journal*, 12, (2017). 査読有

【薬効・機能評価グループ】

岡 淳一郎

133. * Sasaki-Hamada S, Narusawa K, Nakamura R, Ishibashi H, Oka J-I, Effects of centrally administered glucagon-like peptide-2 on blood pressure and barosensitive neurons in spontaneously hypertensive rats, *Neuropeptides* 69, 66-75 (2018). 査読有
134. * Sasaki-Hamada S, Funane T, Nakao Y, Sasaki R, Nagai M, Ueta Y, Yoshizawa K, Horiguchi M, Yamashita C, Oka J-I, Intranasal administration of neuromedin U derivatives containing cell-penetrating peptides and a penetration-accelerating sequence induced memory improvements in mice, *Peptides* 99, 241-246 (2018). 査読有
135. * Sasaki-Hamada S, Nakamura R, Nakao Y, Akimoto T, Sanai E, Nagai M, Horiguchi M, Yamashita C, Oka J-I, Antidepressant-like effects exerted by the intranasal administration of a glucagon-like peptide-2 derivative containing cell-penetrating peptides and a penetration-accelerating sequence in mice, *Peptides* 87, 64-70, (2017). 査読有
136. * Nakao Y, Horiguchi M, Nakamura R, Sasaki-Hamada S, Ozawa C, Funane T, Ozawa R, Oka J-I, Yamashita C. LARETH-25 and β -CD improve central transitivity and central pharmacological effect of the GLP-2 peptide, *Int J Pharmaceutics* 515, 37-45, (2016). 査読有
137. * Iwai T, Jin K, Ohnuki T, Sasaki-Hamada S, Nakamura M, Saitoh A, Sugiyama A, Ikeda M, Tanabe M, Oka J-I. Glucagon-like peptide-2-induced memory improvement and anxiolytic effects in mice, *Neuropeptides*, 49, 7-14, (2015). 査読有
138. * Sasaki-Hamada S, Yuri Y, Hoshi M, Oka J-I, Immunohistochemical determination of the site of antidepressant-like effects of glucagon-like peptide-2 in ACTH-treated mice, *Neurosci*, 294, 156-165, (2015). 査読有
139. Yamada, M., Tsukagoshi, M., Hashimoto, T., Oka, J-I., Saitoh, A., Yamada, M. Lysophosphatidic acid induces anxiety-like behavior via its receptors in mice. *J. Neural Transm.* 122:487-494, (2015). 査読有
140. * Iwai, T., Jin, K., Ohnuki, T., Sasaki-Hamada, S., Nakamura, M., Saitoh, A., Sugiyama, A., Ikeda, M., Tanabe, M., Oka, J-I. Glucagon-like peptide-2-induced memory improvement and anxiolytic effects in mice. *Neuropeptides* 49:7-14, (2015). 査読有
141. Ohashi, M., Saitoh, A., Yamada, M., Oka, J-I., and Yamada, M. Riluzole in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuated veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice. *Psychopharmacol.* 232:391-398, (2015). 査読有
142. Niu, Y., Li, F., Inada, C., Tanaka, K., Watanabe, S., Fujiwara, H., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., Matsumoto, K. Chemical profiling with HPLC-FTMS of exogenous and endogenous chemicals susceptible to the administration of chotosan in an animal model of type 2 diabetes-induced dementia. *J. Pharmaceut. Biomed. Anal.* 104:21-30, (2015). 査読有
143. Saitoh, A., Ohashi, M., Suzuki, S., Tsukagoshi, M., Sugiyama, A., Yamada, M., Oka, J-I., Inagaki, M., Yamada, M. Activation of the prelimbic medial prefrontal cortex induces anxiety-like behaviors via N-methyl-D-aspartate receptor-mediated glutamatergic neurotransmission in mice. *J. Neurosci. Res.* 92:1044-1053, (2014). 査読有
144. Sacai, H., Sasaki-Hamada, S., Sugiyama, A., Saitoh, A., Mori, K., Yamada, M., Oka, J-I. The impairment in spatial learning and hippocampal LTD through the PKA pathway in juvenile-onset diabetes rats are rescued by modulating NMDA receptor function. *Neurosci. Res.* 81-82:55-63, (2014). 査読有
145. Sugiyama, A., Nagase, H., Oka, J-I., Yamada, M., Saitoh, A. DOR₂-selective but not DOR₁-selective antagonist abolishes anxiolytic-like effects of the δ opioid receptor agonist KNT-127. *Neuropharmacol.* 79:314-320, (2014). 査読有
146. Sasaki-Hamada, S., Tamaki, K., Otsuka, H., Ueno, T., Sacai, H., Niu, Y., Matsumoto, K., Oka, J-I. Chotosan, a Kampo formula, ameliorates hippocampal LTD and cognitive deficits in juvenile-onset

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- diabetes rats. *J. Pharmacol. Sci.* 124:192–200, (2014). 査読有
147. *Iwai, T., Sawabe, T., Tanimitsu, K., Suzuki, M., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I. Glucagon-like peptide-1 protects synaptic and learning functions from neuroinflammation in rodents. *J. Neurosci. Res.* 92:446–454 (2014). 査読有
- 東 達也
148. *T. Higashi, M. Akaishi, M. Yokota, T. Suzuki, S. Ogawa, Y. Sugiura, T. Nishikawa, K. Nishimoto, M. Suematsu: A method for determination of aldosterone in adrenal tributary venous serum by derivatization using Girard P reagent isotopologues followed by LC/ESI-MS/MS, *J. Chromatogr. B.* 1092, 106–113 (2018). 査読有
149. *T. Matsumoto, W. Yamazaki, A. Jo, S. Ogawa, K. Mitamura, S. Ikegawa, T. Higashi: A method for quantification of tetrahydroglucocorticoid glucuronides in human urine by LC/MS/MS with isotope-coded derivatization, *Anal. Sci.*, 34 (9), 1003–1009 (2018). 査読有
150. Y. Sugiura, E. Takeo, S. Shimma, M. Yokota, T. Higashi, T. Seki, Y. Mizuno, M. Oya, T. Kosaka, M. Omura, T. Nishikawa, M. Suematsu, K. Nishimoto: Aldosterone and 18-oxocortisol co-accumulation in aldosterone-producing lesions, *Hypertension*, 72 (6), 1345–1354 (2018). 査読有
151. *Higashi, T., Watanabe, S., Tomaru, K., Yamazaki, W., Yoshizawa, K., Ogawa, S., Nagao, H., Minato, K., Maekawa, M., Mano N., Unconjugated bile acids in rat brain: Analytical method based on LC/ESI-MS/MS with chemical derivatization and estimation of their origin by comparison to serum levels., *Steroids*, 125 巻, pp107–113, (2017). 査読有
152. Itoh, N., Kimoto, A., Yamamoto, E., Higashi, T., Sanata, T., Funatsu, T., and Kato, M., High Performance Liquid Chromatography Analysis of 100-nm Liposomal Nanoparticles Using Polymer-coated, Silica Monolithic Columns with Aqueous Mobile Phase. *J. Chromatogr. A* 1484, 34–40 (2017). 査読有
153. Ogawa, S., Kittaka, H., Nakata, A., Sato, M., Nomura, F., and Higashi, T., Enhancing Analysis Throughput, Sensitivity and Specificity in LC/ESI-MS/MS Assay of Plasma 25-Hydroxyvitamin D₃ by Derivatization with Triplex DAPTAD Isotopologues. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 136, 126–133 (2017). 査読有
154. *Higashi, T., Aiba, N., Tanaka, T., Yoshizawa, K., and Ogawa, S., Methods for differential and quantitative analyses of brain neurosteroid levels by LC/MS/MS with ESI-enhancing and isotope-coded derivatization. *Journal of Pharmaceutical and Biomedical Analysis*, 117 巻, pp155–162, 2016. 査読有
155. *Ogawa, S., Tomaru, K., Watanabe, S., and Higashi, T., LC/ESI-MS/MS Method for Determination of Salivary Eicosapentaenoic Acid Concentration-to-Arachidonic Acid Concentration Ratio. *Biomed. Chromatogr.* 30, 29–34 (2016). 査読有
156. *Higashi, T., Yamagata, K., Kato, Y., Ogawa, Y., Takano, K., Nakaaze, Y., Iriyama, T., Min, J. Z., and Ogawa, S., Methods for Determination of Fingernail Steroids by LC/MS/MS and Differences in Their Contents between Right and Left Hands. *Steroids* 109, 60–65 (2016). 査読有
157. *Ogawa, S., Kittaka, H., Shinoda, K., Ooki, S., Nakata, A., and Higashi, T., Comparative Evaluation of New Cookson-type Reagents for LC/ESI-MS/MS Assay of 25-Hydroxyvitamin D₃ in Neonatal Blood Samples. *Biomed. Chromatogr.* 30, 938–945 (2016). 査読有
158. *Higashi, T., Yokota, M., Goto, A., Ogawa, S., Komatsu, K., Sugiura, T., Sato, M., and Nomura, F., A Method for Simultaneous Determination of 25-Hydroxyvitamin D₃ and Its 3-Sulfate in Newborn Plasma by LC/ESI-MS/MS after Derivatization with Proton-affinitive Cookson-type Reagent. *Mass Spectrom. (Tokyo)* 5, S0051 (2016). 査読有
159. Satoh, M., Ishige, T., Ogawa, S., Nishimura, M., Matsushita, K., Higashi, T., and Nomura, F., Development and Validation of the Simultaneous Measurement of Four Vitamin D Metabolites in Serum by LC/MS/MS for Clinical Laboratory Applications. *Anal. Bioanal. Chem.* 408, 7617–7627 (2016). 査読有
160. *Higashi, T., and Ogawa, S., Chemical Derivatization for Enhancing Sensitivity during LC/ESI-MS/MS Quantification of Steroids in Biological Samples: A Review, *J. Steroid Biochem. Mol. Biol.* 162, 57–69 (2016). 査読有
161. *Higashi, T., and Ogawa, S., Isotope-coded ESI-enhancing Derivatization Reagents for Differential Analysis, Quantification and Profiling of Metabolites in Biological Samples by LC/MS: A Review. *J.*

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Pharm. Biomed. Anal. 130, 181–193 (2016). 査読有

162. Kato, M., Sasaki, M., Ueyama, Y., Koga, A., Sano, A., Higashi, T., Santa, T., Comparison of the Migration Behavior of the Polyethylene Glycol- and the Silica-Based Nanoparticles Using Micellar Electrokinetic Chromatography. *J. Sep. Sci.* 38, 468–474 (2015). 査読有

163. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、東 達也、野村文夫、LC-MS/MSによるビタミンDの代謝動態の評価、臨床病理、63, 457–464 (2015). 査読有

164. *Ogawa, S., Tadokoro, H., Sato, M., and Higashi, T., Enantioselective Determination of Ibuprofen in Saliva by Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry with Chiral Electrospray Ionization-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 98, 387–392 (2014). 査読有

165. Higashi, T., Goto, A., Morohashi, M., Ogawa, S., Komatsu, K., Sugiura, T., Fukuoka, T., and Mitamura, K., Development and Validation of a Method for Determination of Plasma 25-Hydroxyvitamin D₃ 3-Sulfate Using Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry. *J. Chromatogr. B* 969, 230–234 (2014). 査読有

166. *Ogawa, S., Ooki, S., Shinoda, K., Higashi, T., Analysis of Urinary Vitamin D₃ Metabolites by Liquid Chromatography/Tandem Mass Spectrometry with ESI-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. *Anal. Bioanal. Chem.* 406, 6647–6654 (2014). 査読有

吉澤一巳

167. *Sasaki-Hamada S, Funane T, Nakao Y, Sasaki R, Nagai M, Ueta Y, Yoshizawa K, Horiguchi M, Yamashita C, and Oka JI, “Intranasal administration of neuromedin U derivatives containing cell-penetrating peptides and a penetration-accelerating sequence induced memory improvements in mice” *Peptides*, 2018, 99, 241–246. 査読有

168. *Yoshizawa K, Arai N, Suzuki Y, Nakamura T, Takeuchi K, Sakamoto R, and Masuda R, “Evaluation of the antinociceptive activities of several sodium channel blockers using veratrine test in mice” *Synapse*, 2018, 72, e22056. 査読有

169. *Yoshizawa K, Yamada Y, Hidai M, Arai N, Nakashima K, Suzuki Y, Sakamoto R, and Masuda R, “Effects of anticonvulsants on neuropathic pain-like state and pain-induced anxiety in mice” *Japanese Journal of Pharmaceutical Palliative Care and Sciences*, 2018, 11, 87–93. 査読有

170. *Yoshizawa K, Yaname A, Nasu H, and Suzuki H, “Glucose prevents cisplatin-induced fatigue-like behavior in mice” *PharmaNutrition*, 2018, 6, 107–112. 査読有

171. 吉澤一巳, “医療用麻薬と依存 ～臨床における依存の発現状況に関する知見も含めて～”*ファルマシア*, 2018, 54, 530–534. 査読無

172. *Yoshizawa K, Okumura A, Nakashima K, Sato T, and Higashi T. Role of allopregnanolone biosynthesis in acute stress-induced anxiety-like behaviors in mice. *Synapse*. 71: e21978. (2017) 査読有

173. *Higashi T, Aiba N, Tanaka T, Yoshizawa, K, and Ogawa, S., Methods for Differential and Quantitative Analyses of Brain Neurosteroid Levels by LC/MS/MS with ESI-enhancing and Isotope-coded Derivatization. *J. Pharm. Biomed. Anal.* 117: 155–162. (2016) 査読有

174. Mori, T., Itoh, T., Yoshizawa, K., Ise, Y., Mizuo, K., Saeki, T., Komiya, S., Masukawa, D., Shibasaki, M., and Suzuki, T., Involvement of μ - and δ -opioid receptor function in the rewarding effect of (±)-pentazocine. *Addict Biol.* 20, 724–732 (2015). 査読有

175. Mori, T., Ohya, J., Masumoto, A., Harumiya, M., Fukase, M., Yoshizawa, K., Hayashi, T., and Suzuki, T., Possible involvement of the Sigma-1 receptor chaperone in chemotherapeutic-induced neuropathic pain. *Synapse*. 69, 526–532 (2015). 査読有

176. 吉澤一巳, 田代真弓, 益田律子, 带状疱疹に対する抗ウイルス薬の薬物相互作用. *ペインクリニック*. 35, S337–S344 (2014). 査読無

177. Mori, T., Rahmadi, M., Yoshizawa, K., Itoh, T., Shibasaki, M., and Suzuki, T., Inhibitory effects of SA4503 on the rewarding effects of abused drugs. *Addict Biol.* 19, 362–369 (2014). 査読有

178. Mori, T., Uzawa, N., Kazawa, H., Watanabe, H., Mochizuki, A., Shibasaki, M., Yoshizawa, K., Higashiyama, K., and Suzuki, T., Differential substitution for the discriminative stimulus effects of 3,4-methylenedioxymethamphetamine and methylphenidate in rats. *J. Pharmacol. Exp. Ther.*, 350,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 403-411 (2014). 査読有
179. 天津怜, 齋藤隼, 大登剛, 吉澤一巳, 杉山奈津子, 齋藤光江, 小茂田昌代, 外来臨床薬剤師支援システムの開発 -乳がん治療における薬学的管理の質の向上を目指して-. 医薬品情報学. 16, 119-124 (2014). 査読有
- 樋上賀一
180. * Otsuka K, Sasada M, Iyoda T, Nohara Y, Sakai S, Asayama T, Suenaga Y, Yokoi S, Higami Y, Kodama H, Fukai F, Combining peptide TNIII A2 with all-trans retinoic acid accelerates N-Myc protein degradation and neuronal differentiation in MYCN-amplified neuroblastoma cells. *Am J Cancer Res.* 9, pp 434-448, 2019(査読有)
181. * Fujii N, Uta S, Kobayashi M, Sato T, Okita N, Higami Y. Impact of aging and caloric restriction on fibroblast growth factor 21 signaling in rat white adipose tissue. *Exp Gerontol.* 118, 55-64, 2019(査読有)
182. * Kobayashi M, Hoshino S, Abe T, Okita N, Tagawa R, Nagai W, Konno R, Suzuki Y, Furuya K, Ishikawa N, Okado H, Oku M, Iwamoto M, Miura Y, Sudo Y, Higami Y. Identification of WWP1 as an obesity-associated E3 ubiquitin ligase with a protective role against oxidative stress in adipocytes. Kobayashi M, Hoshino S, Abe T, Okita N, Tagawa R, Nagai W, Konno R, Suzuki Y, Furuya K, Ishikawa N, Okado H, Oku M, Iwamoto M, Miura Y, Sudo Y, Higami Y. *Biochem Biophys Res Commun.* 508, pp 117-122, 2019(査読有)
183. * Sudo Y, Otsuka H, Miyakawa R, Goto A, Kashiwase Y, Terawaki K, Miyano K, Hirao Y, Taki K, Tagawa R, Kobayashi M, Okita N, Uezono Y, Higami Y. Differential Metabolic Responses to Adipose Atrophy Associated with Cancer Cachexia and Caloric Restriction in Rats and the Effect of Rikkunshito in Cancer Cachexia. Sudo Y, Otsuka H, Miyakawa R, Goto A, Kashiwase Y, Terawaki K, Miyano K, Hirao Y, Taki K, Tagawa R, Kobayashi M, Okita N, Uezono Y, Higami Y. *Int J Mol Sci.* 19(12), 3852, 2018(査読有)
184. Terawaki K, Kashiwase Y, Uzu M, Nonaka M, Sawada Y, Miyano K, Higami Y, Yanagihara K, Yamamoto M, Uezono Y. Leukemia inhibitory factor via the Toll-like receptor 5 signaling pathway involves aggravation of cachexia induced by human gastric cancer-derived 85As2 cells in rats. *Oncotarget.* 9, pp 34748-34764, 2018 (査読有)
185. * Kobayashi M, Fujii N, Narita T, Higami Y. SREBP-1c-Dependent Metabolic Remodeling of White Adipose Tissue by Caloric Restriction. *Int J Mol Sci.* 19(11),3335, 2018(査読有)
186. * 小林正樹、樋上賀一、白色脂肪組織における新規ミトコンドリア活性化メカニズム、内分泌・糖尿病・代謝内科 47 巻, pp 365-368, 2018(査読無)
187. * Hoshino S, Kobayashi M, Higami Y. Mechanisms of the anti-aging and longevity effects of caloric restriction: evidence from studies of genetically modified animals. *Aging (Albany NY).* 10, pp 2243-2251,2018(査読有)
188. Ohno H, Matsuzaka T, Tang N, Sharma R, Motomura K, Shimura T, Satoh A, Han SI, Takeuchi Y, Aita Y, Iwasaki H, Yatoh S, Suzuki H, Sekiya M, Nakagawa Y, Sone H, Yahagi N, Yamada N, Higami Y, Shimano H. Transgenic Mice Overexpressing SREBP-1a in Male ob/ob Mice Exhibit Lipodystrophy and Exacerbate Insulin Resistance. *Endocrinology,* 159, pp 2308-2323, 2018(査読有)
189. Matsushita J, Okamura K, Nakabayashi K, Suzuki T, Horibe Y, Kawai T, Sakurai T, Yamashita S, Higami Y, Ichihara G, Hata K, Nohara K. The DNA methylation profile of liver tumors in C3H mice and identification of differentially methylated regions involved in the regulation of tumorigenic genes. *BMC Cancer.* 18(1):317, (2018). 査読有
190. Takebe T, Sakamoto K, Higami Y, Harada Y. A novel mouse model for tracking the fate of CXCR5-expressing T cells. *Biochem Biophys Res Commun.* 495(2):1642-1647, (2018). 査読有
191. * Kaneko H, Kobayashi M, Mizunoe Y, Yoshida M, Yasukawa H, Hoshino S, Itagawa R, Furuichi T, Okita N, Sudo Y, Imae M, Higami Y. Taurine is an amino acid with the ability to activate autophagy in adipocytes. *Amino Acids.* 50(5):527-535. (2018). 査読有
192. * Narita T, Kobayashi M, Itakura K, Itagawa R, Kabaya R, Sudo Y, Okita N, Higami Y. Differential response to caloric restriction of retroperitoneal, epididymal, and subcutaneous adipose tissue depots in rats. *Exp Gerontol.* 104:127-137. (2018). 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

193. * Mizunoe Y, Kobayashi M, Sudo Y, Watanabe S, Yasukawa H, Natori D, Hoshino A, Negishi A, Okita N, Komatsu M, Higami Y. Trehalose protects against oxidative stress by regulating the Keap1-Nrf2 and autophagy pathways. Redox Biol. 15:115-124. (2018). 査読有
194. * 小林正樹、星野駿介、樋上賀一、カロリー制限による抗老化寿命延伸作用のメカニズム ～遺伝し改変動物を用いた研究からの考察～、オレオサイエンス、18(2):61-166, (2018). 査読無
195. * Kobayashi M, Takeda K, Narita T, Nagai K, Okita N, Sudo Y, Miura Y, Tsumoto H, Nakagawa Y, Shimano H, Higami Y. Mitochondrial intermediate peptidase is a novel regulator of sirtuin-3 activation by caloric restriction. FEBS Lett. 591(24):4067-4073, (2017). 査読有
196. * Kobayashi M, Higami Y. A novel caloric restriction mediator. Aging (Albany NY). 9(10):2012-2013, (2017). 査読有
197. Okita N, Higami Y, Fukai F, Kobayashi M, Mitarai M, Sekiya T, Sasaki T. Modified Western blotting for insulin and other diabetes-associated peptide hormones. Sci. Rep. 7(1):6949, (2017). 査読有
198. * Fujii N, Narita T, Okita N, Kobayashi M, Furuta Y, Chujo Y, Sakai M, Yamada A, Takeda K, Konishi T, Sudo Y, Shimokawa I, Higami Y. Sterol regulatory element-binding protein-1c orchestrates metabolic remodeling of white adipose tissue by caloric restriction. Aging Cell. 16(3):508-517, (2017). 査読有
199. * Mizunoe Y, Sudo Y, Okita N, Hiraoka H, Mikami K, Narahara T, Negishi A, Yoshida M, Higashibata R, Watanabe S, Kaneko H, Natori D, Furuichi T, Yasukawa H, Kobayashi M, Higami Y. Involvement of lysosomal dysfunction in autophagosome accumulation and early pathologies in adipose tissue of obese mice. Autophagy. 13(4):642-653, (2017). 査読有
200. Terawaki K, Kashiwase Y, Sawada Y, Hashimoto H, Yoshimura M, Ohbuchi K, Sudo Y, Suzuki M, Miyano K, Shiraishi S, Higami Y, Yanagihara K, Hattori T, Kase Y, Ueta Y, Uezono Y. Development of ghrelin resistance in a cancer cachexia rat model using human gastric cancer-derived 85As2 cells and the palliative effects of the Kampo medicine rikkunshito on the model. PLoS One. 12(3):e0173113, (2017). 査読有
201. 小林正樹、樋上賀一、発がんメカニズムにおけるメタボリック症候群の関与、泌尿器外科、30(2), 117-121, (2017). 査読無
202. * Okita N, Tsuchiya T, Fukushima M, Itakura K, Yuguchi K, Narita T, Hashizume Y, Sudo Y, Chiba T, Shimokawa I, Higami Y. Chronological analysis of caloric restriction-induced alteration of fatty acid biosynthesis in white adipose tissue of rats. Exp Gerontol. 63:59-66, (2015). 査読有
203. Miyano K, Sudo Y, Yokoyama A, Hisaoka-Nakashima K, Morioka N, Takebayashi M, Nakata Y, Higami Y, Uezono Y. History of the G protein-coupled receptor (GPCR) assays from traditional to a state-of-the-art biosensor assay. J Pharmacol Sci. 126(4):302-9, (2014). 査読有
204. Hatachi G, Tsuchiya T, Miyazaki T, Matsumoto K, Yamasaki N, Okita N, Nanashima A, Higami Y, Nagayasu T. The poly (adenosine diphosphate-ribose) polymerase inhibitor PJ34 reduces pulmonary ischemia-reperfusion injury in rats. Transplantation. 98(6):618-24, (2014). 査読有
205. Okita N, Ishikawa N, Mizunoe Y, Oku M, Nagai W, Suzuki Y, Matsushima S, Mikami K, Okado H, Sasaki T, Higami Y. Inhibitory effect of p53 on mitochondrial content and function during adipogenesis. Biochem Biophys Res Commun. 446(1):91-7, (2014). 査読有
- 磯濱洋一郎
206. * 前田 剛, 矢数芳英, 磯濱洋一郎, 神山洋一郎, 透析導入後, 不均衡症候群により増悪した遷延性術後慢性疼痛に対して五苓散が著効した 1 症例, ペインクリニック, 39, pp1069-1073, 2018.(査読有)
207. * 磯濱洋一郎, 堀江一郎, 五苓散による慢性硬膜下血腫治療の薬理学的合理性, ファルマシア, 54, 139-143, (2018). 査読有
208. Ohyama M, Horie I, Isohama Y, Azuma K, Adachi S, Minejima C, Takenaka N. Effects of nitrous acid exposure on baseline pulmonary resistance and Muc5ac in rats. Inhal Toxicol. Jun 4, 1-10, (2018). 査読有
209. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的分子, 小児疾患の身近な漢方処方, 14, 6-28, (2015) 査読有
210. * 磯濱洋一郎, 抗浮腫作用をもつ五苓散の薬理作用とアクアポリン, 整形外科漢方処方マニュアル, 28, 9-14, (2015). 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

211. Fujitsuka N, Tamai M, Tsuchiya K, Iizuka S, Tsuchiya N, Makino B, Hattori T, Kase Y, Isohama Y., Boiogito, a Kampo medicine, improves hydrarthrosis in a rat model of knee osteoarthritis. BMC Complement Altern Med.5,451-458, (2015). 査読有
212. * Isohama Y. Increase in aquaporin 3 expression in keratinocytes by Schizonepeta tenuifolia. Nihon Yakurigaku Zasshi. 143, 115-119, (2014). 査読有
213. * Sakamoto Y, Hisatsune A, Katsuki H, Horie I, Isohama Y, Aquaporin 5 increases keratinocyte-derived chemokine expression and NF- κ B activity through ERK activation. Biochem Biophys Res Commun. 448, 355-60, (2014). 査読有

【臨床試験グループ】

小茂田昌代

214. * 尾関 理恵, 湯浅 奈絵, 赤木 圭太, 真野 泰成, 根岸 健一, 小茂田 昌代:簡易懸濁法に用いる懸濁器具の比較とストロメクトール®錠の投与量に及ぼす影響. 医療薬学 45(2): 88-96, 2019.2
215. * 阿久津駿太, 赤木圭太, 山田瑞稀, 矢田目麻衣, 倉科亮太, 丸山莉穂, 福沢正男, 関根万里, 尾関理恵, 小茂田昌代:イベルメクチンの高脂肪食後投与の影響に関する研究のサブ解析—肝機能障害発症症例のリスク因子解析—. 日本医薬品安全性学会 日本医薬品安全性学会会誌 4: 29-41, 2018.7
216. 石井 則久, 浅井 俊弥, 朝比奈 昭彦, 石河 晃, 今村 英一, 大江 麻里子, 金澤 伸雄, 久保田由美子, 小茂田 昌代, 関根 万里, 田中 勝, 谷口 裕子, 常深 祐一郎, 頓宮 美樹, 夏秋 優, 牧上 久仁子, 松田 知子, 宮嶋 篤志, 吉住 順子, 四津 里英, 和田 康夫:疥癬診療ガイドライン(第3版 追補). 日本皮膚科学会雑誌 128(13):2791-2801, 2018
217. Ishii N, Kawano Y, Sakai H, Hayashi S, Akizuki N, Komoda M, Hanawa T. Effects of a Rebamipide Mouthwash on Stomatitis Caused by Cancer Chemotherapy—Evaluation of the Efficacy by Patients Themselves , Yakugaku Zasshi 137:1027-1034, (2017). 査読有
218. 荒井里実, 池谷有紀子, 中谷友美, 坂田将貴, 高橋あずさ, 齋藤舞, 小茂田昌代, エラーは起きると想定した取り間違い発見ツールの試行—在庫照合の有用性と課題—, 日本薬剤師会雑誌 69: 25-31, (2017). 査読有
219. * Miyajima A, Hirota T, Tashiro M, Noguchi W, Kawano Y, Hanawa T, Kigure A, Anata T, Yamamoto Y, Yuasa N, Koshino M, Shiraishi Y, Yuzawa K, Akagi K, Yoshimasu T, Makigami K, Komoda M. Pharmacokinetics of ivermectin applied topically by whole-body bathing method in healthy volunteers. J Dermatol 44, 406-413, (2017). 査読有
220. 大野逸子, 鈴木信世, 河原栞, 鹿村恵明, 真野泰成, 佐藤嗣道, 嶋田修治, 赤木圭太, 重野芳, 齋藤光江, 杉平直子, 小茂田昌代, 薬剤師の処方提案を支援する診療ガイドライン活用システムの開発:乳癌の薬物治療に着目して, 医薬品情報学, 19, 50-58, (2017). 査読有
221. * 赤木圭太, 大沼亜紀, 杉岡晃仁, 金永進, 田代真理, 湯澤薫, 野口航, 湯浅奈絵, 小茂田昌代, ストロメクトール®錠の投与量に影響を及ぼす簡易懸濁法の器具および経管投与手技の実態調査. 千葉県薬誌 63, 9-13,(2017). 査読有
222. 鹿村恵明, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 佐藤嗣道, 宮崎智, 薬局薬剤師の疑義照会による医療費削減効果および医薬分業率との関連性 —全国薬局疑義照会調査—, 薬学雑誌, 136, 1263-1273, (2016). 査読有
223. 鹿村恵明, 針谷峻平, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 上村直樹, 石川鎮清, 薬局薬剤師が行う薬学的疑義照会に関する医師への意識調査—薬局薬剤師への意識調査結果との比較—, 医療の質・安全学会誌, 11, 296-303, (2016). 査読有
224. Naoko I, Yayoi K, Masahito S, Masayo K, Kimiko M, Effects of camostat mesilate gargle on stomatitis caused by molecular target therapy: a case report. Jpn, J. Pharm. Palliat. Care Sci 9,pp 87-91, (2016). 査読有
225. * Atsushi Miyajima, Takashi Hirota, Akihito Sugioka, Masao Fukuzawa, Mari Sekine, Yosuke Yamamoto, Takashi Yoshimasu, Akira Kigure, Taichi Anata, Wataru Noguchi, Keita Akagi, Masayo Komoda, Effect of high fat meal intake on the pharmacokinetic profile of ivermectin in Japanese

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

patients with scabies, *J Dermatol*, 42(1), 87-9, (2016). 査読有

226. * Miyajima, A, Komoda, M, Akagi, K, Yuzawa, K, Yoshimasu, T, Yamamoto, Y, Hirota, T, *Experimental study of pharmacokinetics of external, whole body bathing application of ivermectin*, *J. Dermatol.* 42, 87-89, (2015) 査読有

227. 篠原紘子, 深田祐羽妃, 鈴木信世, 杉山奈津子, 内呂拓実, 齊藤光江, 小茂田 昌代. 東京理科大学とヒューストン大学の薬学部授業時間比較, *千葉県薬剤師雑誌*. 60(10) 3-11, (2014) 査読有

228. Yoshiaki Shikamura, Yuki Kikuchi, Junichi Takahashi, Kenichi Negishi, Masayo Komoda, Masataka Mochizuki, Hiroshi Terada. *Medical Economic Research on Pharmaceutical Inquiries Made by Hospital Pharmacists about Prescriptions for Inpatients*, *医薬品情報学*. 16(2). 41-52, (2014) 査読有

229. 森田 茜, 栗田 知沙, 池谷 有紀子, 中谷友美, 黄 栄吉, 中村達也, 大澄朋香, 小茂田 昌代. 取間違い発見ツール普及活動報告ー患者の健康被害発生前に気付くためにー医療の質・安全学会誌. 9(3). 216-224, (2014) 査読有

230. 天津 怜, 齋藤 隼, 大登 剛, 吉澤 一巳, 杉山 奈津子, 齋藤 光江, 小茂田 昌代. 外来臨床薬剤師支援システムの開発ー乳がん治療における薬学的管理の質の向上を目指してー, *医薬品情報学*. 16(3). 17-22, (2014). 査読有

231. Mitsue Saito, Natsuko Sugiyama, Masayo Komoda. *Faculty Development of Oncology Experts*, *Juntendo Medical Journal*. 60(3). 220-223, (2014) 査読有

佐藤嗣道

232. * Shoma Tamori, Yuka Nozaki, Hitomi Motomura, Hiromi Nakane, Reika Katayama, Chotaro Onaga, Eriko Kikuchi, Nami Shimada, Yuhei Suzuki, Mei Noike, Yasushi Hara, Keiko Sato, Tsugumichi Sato, Kouji Yamamoto, Takehisa Hanawa, Misa Imai, Ryo Abe, Atsushi Yoshimori, Ryoko Takasawa, Sei-Ichi Tanuma and Kazunori Akimoto, "Glyoxalase 1 gene is highly expressed in basal-like human breast cancers and contributes to survival of ALDH1-positive breast cancer stem cells", *Oncotarget*, 2018, 9 (92) 36515-36529, (2018) 査読有

233. Michiko Yamamoto, Hirohisa Doi, Ken Yamamoto, Kazuhiro Watanabe, Tsugumichi Sato, Machi Suka, Takeo Nakayama, Hiroki Sugimori. *Adaptation of the European Commission-recommended user testing method to patient medication information leaflets in Japan*. *Drug, Adaptation of the European Commission-recommended user testing method to patient medication information leaflets in Japan*. *Drug, Healthcare and Patient Safety* 9, 39-63, (2017) 査読有

234. Nobuhiro Ooba, Soko Setoguchi, Tsugumichi Sato, Kiyoshi Kubota. *Lipid-lowering drugs and risk of new-onset diabetes: a cohort study using Japanese healthcare data linked to clinical data for health screening*, *BMJ Open* 7, e015935, (2017) 査読有

235. 大野逸子, 鈴木信世, 河原栞, 鹿村恵明, 真野泰成, 佐藤嗣道, 嶋田修治, 赤木圭太, 重野芳, 齊藤光江, 杉平直子, 小茂田昌代, 薬剤師の処方提案を支援する診療ガイドライン活用システムの開発: 乳癌の薬物治療に着目して, *医薬品情報学*, 19, 50-58, (2017) 査読有

236. 佐藤嗣道, サリドマイド等のリスク最小化策改訂の評価ポイント, *薬剤疫学* 22, 9-18, (2017) 査読有

237. 佐藤嗣道, 序論: 医療情報データベースの現状と利活用に向けた展望, *医薬ジャーナル* 52, 1851-1854, (2016) 査読無

238. Roughead E.E., Chan E.W., Choi N.K., Griffiths J., Jin X.M., Lee J., Kimura M., Kimura T., Kubota K., Lai E.C.C., Man K.K.C., Nguyen T.A., Ooba N., Park B.-J, Sato T., Shin J.Y., Wang T.T., Wong I.C.K., Yang Y.H.K., and Pratt N.L, *Proton pump inhibitors and risk of Clostridium difficile infection: a multi-country study using sequence symmetry analysis*, 1), *Expert Opinion on Drug Safety* 15, 1589-1595, (2016) 査読無

239. 鹿村恵明, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 佐藤嗣道, 宮崎智, 薬局薬剤師の疑義照会による医療費削減効果および医薬分業率との関連性ー全国薬局疑義照会調査ー, *薬学雑誌*, 136, 1263-1273, (2016) 査読有

240. 高木達也, Carla van Bennekom, Steffen Amann, 服部千鶴子, 白國優子, 佐藤嗣道, 那須正夫, 催奇形性のある医薬品のリスクマネジメントー欧州, 米国の現状と日本の目指す道ー, *YAKUGAKU ZASSHI* 135, 1161-1168, (2015) 査読有

241. 佐藤嗣道, 患者のニーズに合った医薬品ガイドとは?, *YAKUGAKU ZASSHI* 135, 297-306, (2015) 査読無

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

242. Nicole Pratt, Esther W. Chan, Nam-Kyong Choi, Michio Kimura, Tomomi Kimura, Kiyoshi Kubota, Edward Chia-Cheng Lai, Kenneth K. C. Man, Nobuhiro Ooba, Byung-Joo Park, Tsugumichi Sato, Ju-Young Shin, Ian C. K. Wong, Yea-Huei Kao Yang, Elizabeth E. Roughead. Pharmacoepidemiol, Drug Saf. 24, 858-864, (2015) 査読無
243. Elizabeth E. Roughead, Esther W. Chan, Nam-Kyong Choi, Michio Kimura, Tomomi Kimura, Kiyoshi Kubota, Edward Chia-Cheng Lai, Kenneth K. C. Man, Tuan Anh Nguyen, Nobuhiro Ooba, Byung-Joo Park, Tsugumichi Sato, Ju-Young Shin, TongTong Wang, Jenna Griffiths, Ian C. K. Wong, Yea-Huei Kao Yang, Nicole L. Pratt, Variation in Association Between Thiazolidinediones and Heart Failure Across Ethnic Groups: Retrospective analysis of Large Healthcare Claims, Databases in Six Countries. Drug Safety 38, 823-831, (2015) 査読有
244. Hitoshi Shimomura, Airi Ono, Keiko Imanaka, Toru Majima, Hidenori Masuyama, Tsugumichi Sato, Takao Aoyama, Retrospective investigation of combination therapy with clarithromycin and levofloxacin for pulmonary Mycobacterium avium complex disease, Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences 1, 24, (2015) 査読有
245. Kiyoshi Kubota, Yukari Kamijima, Tsugumichi Sato, Nobuhiro Ooba, Daisuke Koide, Hajime Iizuka, Hidemi Nakagawa, Epidemiology of psoriasis and palmoplantar pustulosis: a nationwide study using the Japanese national claims database, BMJ Open 5, e006450, (2015) 査読有
246. 久保田潔, 青木事成, 漆原尚巳, 鍵村達夫, 景山茂, 小出大介, 古閑晃, 佐藤嗣道, 中村敏明, 中島研, 畑中直也, 平河武, 宮川功, 望月眞弓, 「日本における適正な安全性監視計画作成のためのタスクフォース」報告書 よりよい医薬品安全性監視計画作成とチェックリスト, 薬剤疫学 19, 57-74, (2014) 査読有
247. Nobuhiro Ooba, Tsugumichi Sato, Akira Wakana, Takao Orii, Masaki Kitamura, Akira Kokan, Hideaki Kurata, Yoshihiro Shimodozono, Kenichi Matsui, Hiroshi Yoshida, Takuhiro Yamaguchi, Shigeru Kageyama, Kiyoshi Kubota, A Prospective Stratified Case-Cohort Study on Statins and Multiple Adverse Events in Japan, PLoS One 9, e96919, (2014) 査読無

真野泰成

248. *尾関理恵, 湯浅奈絵, 赤木圭太, 真野泰成, 根岸健一, 小茂田昌代, 簡易懸濁法に用いる懸濁器具の比較とストロメクトール®錠の投与量に及ぼす影響, 医療薬学, 45 巻, pp 88-96, 2019 (査読有)
249. 中金澤幸江, 真野泰成, 金澤大介, 水上勝義, 学校におけるくすり教育の実施実態と学校薬剤師に求められる役割について, 社会薬学, 37 巻, pp 74-80, 2018 (査読有)
250. 大野逸子, 鈴木信世, 河原菜, 鹿村恵明, 真野泰成, 佐藤嗣道, 嶋田修治, 赤木圭太, 重野芳, 齊藤光江, 杉平直子, 小茂田昌代, 薬剤師の処方提案を支援する診療ガイドライン活用システムの開発: 乳癌の薬物治療に着目して, 医薬品情報学, 19, 50-58, (2017) 査読有
251. Sugamata, Ma., Ihara, T., Sugamata, Mi., Mano, Y., Takeda, K., Mast Cell Infiltration and Leukotriene Receptor Expression in Colorectal Adenoma: Preventive Application of Malignant Transformation Based on Common Pathological Findings, Cancer Therapy & Oncology International Journal, 7, 555718, (2017) 査読有
252. 鹿村恵明, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 佐藤嗣道, 宮崎智, 薬局薬剤師の疑義照会による医療費削減効果および医薬分業率との関連性 -全国薬局疑義照会調査-, 薬学雑誌, 136, 1263-1273, (2016) 査読有
253. 鹿村恵明, 針谷峻平, 真野泰成, 小茂田昌代, 根岸健一, 上村直樹, 石川鎮清, 薬局薬剤師が行う薬学的疑義照会に関する医師への意識調査-薬局薬剤師への意識調査結果との比較-, 医療の質・安全学会誌, 11, 296-303, (2016) 査読有
254. 真野泰成, 人見理沙, 田村怜美, 加藤芳徳, 大内かおり, 廣澤伊織, 田島正教, 松本准, 前澤佳代子, 山田治美, 百瀬泰行, 旭満里子緩和医療教育における薬学生の認識度および習熟度の変化とその評価, 医薬品情報学, 17, 100-105, (2015) 査読有
255. Mano, Y., Fukushima, S., Kuroda, H., Ohshima, H., Kato, Y., Ohuchi, K., Maezawa, K., Momose, Y., Ikeda, S., and Asahi, M., Adherence to Changing from Brand-name to Generic Atorvastatin in Newly Treated Patients: a Retrospective Cohort Study Using Health Insurance Claims, J. Pharm. Health Care and Sciences. 1, 12 (2015) 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

浜田知久馬

256. Uozumi, R., and Hamada, C. Interim decision-making strategies in adaptive designs for population selection using time-to-event endpoints. *J. Biopharm. Stat.* 27(1):84-100. (2017). 査読有
257. Nagasawa, H., Hamada, C., Wakabayashi, M., Nakagawa, Y., Nomura, S., and Kohno, Y. Time to spontaneous ductus arteriosus closure in full-term neonates. *Open Heart.* 3(1):e000413 (2016). 査読有
258. Hamada, C., Yamada, Y., Azuma, M., Nishikawa, K., Gotoh, M., Bando, H., Sugimoto, N., Nishina, T., Amagai, K., Chin, K., Niwa, Y., Tsuji, A., Imamura, H., Tsuda, M., Yasui, H., Fujii, H., Yamaguchi, K., Yasui, H., Hironaka, S., Shimada, K., Miwa, H., and Hyodo, I. Meta-analysis supporting noninferiority of oxaliplatin plus S-1 to cisplatin plus S-1 in first-line treatment of advanced gastric cancer (G-SOX study): indirect comparison with S-1 alone. *Int J Clin Oncol.* 21(4):668-75 (2016) 査読有
259. Bando, H., Yamada, Y., Tanabe, S., Nishikawa, K., Gotoh, M., Sugimoto, N., Nishina, T., Amagai, K., Chin, K., Niwa, Y., Tsuji, A., Imamura, H., Tsuda, M., Yasui, H., Fujii, H., Yamaguchi, K., Yasui, H., Hironaka, S., Shimada, K., Miwa, H., Hamada, C., Hyodo, I. Efficacy and safety of S-1 and oxaliplatin combination therapy in elderly patients with advanced gastric cancer. *Gastric Cancer.* 19(3):919-26 (2016). 査読有
260. Kimura, K., Nakao, K., Shibata, Y., Sone, T., Takayama, T., Fukuzawa, S., Nakama, Y., Hirayama, H., Matsumoto, N., Kosuge, M., Hiro, T., Sakuma, H., Ishihara, M., Asakura, M., Hamada, C., Kaneko, A., Yokoi, T., Hirayama, A.; AMITY study group. Randomized controlled trial of TY-51924, a novel hydrophilic NHE inhibitor, in acute myocardial infarction. *J. Cardiol.* 67(4):307-13 (2016). 査読有
261. Sato, H., Hirakawa, A., and Hamada, C. An adaptive dose-finding method using a change-point model for molecularly targeted agents in phase I trials. *Stat. Med.* 35(23):4093-109 (2016). 査読有
262. Kakurai, Y., Hirakawa, A., and Hamada, C., A Dose-Finding Method Based on Multiple Dosing in Two-Agent Combination Phase I Trials. *J. Biopharm. Stat.* 25, 1065-1076 (2015). 査読有
263. Kaneko, S., Hirakawa, A., and Hamada, C., Enhancing the Lasso Approach for Developing a Survival Prediction Model Based on Gene Expression Data. *Comput. Math. Methods. Med.* 259474 (2015) 査読有
264. Abe, K., Itoyama, Y., Sobue, G., Tsuji, S., Aoki, M., Doyu, M., Hamada, C., Kondo, K., Yoneoka, T., Akimoto, M., and Yoshino, H., Edaravone ALS Study Group. Confirmatory double-blind, parallel-group, placebo-controlled study of efficacy and safety of edaravone (MCI-186) in amyotrophic lateral sclerosis patients. *Amyotroph Lateral SclerFrontotemporal Degener.* 15(7-8), 610-7 (2014). 査読有
265. Asano, J., Hirakawa, A., and Hamada, C., Assessing the prediction accuracy of cure in the Cox proportional hazards cure model: an application to breast cancer data. *Pharm. Stat.* 13(6), 357-63 (2014). 査読有
266. Uchiyama, S., Shinohara, Y., Katayama, Y., Yamaguchi, T., Handa, S., Matsuoka, K., Ohashi, Y., Tanahashi, N., Yamamoto, H., Genka, C., Kitagawa, Y., Kusuoka, H., Nishimaru, K., Tsushima, M., Koretsune, Y., Sawada, T., and Hamada, C., Benefit of cilostazol in patients with high risk of bleeding: subanalysis of cilostazol stroke prevention study 2. *Cerebrovasc Dis.* 37(4), 296-303 (2014).
267. Tsuchiya, T., Sadahiro, S., Sasaki, K., Kondo, K., Katsumata, K., Nishimura, G., Kakeji, Y., Baba, H., Morita, T., Koda, K., Sato, S., Matsuoka, J., Yamaguchi, Y., Usuki, H., Hamada, C., Kodaira, S., and Saji, S., Safety analysis of two different regimens of uracil-tegafur plus leucovorin as adjuvant chemotherapy for high-risk stage II and III colon cancer in a phase III trial comparing 6 with 18 months of treatment: JFMC33-0502 trial. *Cancer Chemother Pharmacol.* 73(6), 1253-61 (2014).
268. Asakawa, T., Hirakawa, A., and Hamada, C., Bayesian model averaging continual reassessment method for bivariate binary efficacy and toxicity outcomes in phase I oncology trials. *J. Biopharm. Stat.* 24(2), 310-25 (2014). 査読有
269. Nakamura, M., Nanto, S., Hirayama, A., Takayama, T., Nishikawa, M., Kimura, K., Morita, S., Aizawa, T., Asano, R., Matsumaru, Y., Hamada, C., and Isshiki, T, OPERA Steering Committee and Investigators. Optimal duration of dual antiplatelet therapy following treatment with the endeavor zotarolimus-eluting stent in real-world Japanese patients with coronary artery disease (OPERA): study design and rationale. *Catheter Cardiovasc Interv.* 84(3), 368-74 (2014). 査読有

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

270. Ishihara, M., Asakura, M., Kimura, K., Nakao, K., Hamada, C., and Hirayama, A., Trial design and rationale of TY-51924 as a novel Na⁺/H⁺ exchanger inhibitor in patients with ST-elevation acute myocardial infarction undergoing percutaneous coronary intervention. *J. Cardiol.* 63(1), 82-7 (2014). 査読有
271. 矢田真城、浜田知久馬、有効性と毒性を指標とした CRM の中止基準に関する研究. *臨床薬理.* 45-1, 3-10 (2014). 査読有
272. 矢田真城、浜田知久馬、代替性評価指標を利用した CRM の性能評価に関する研究. *臨床薬理.* 45-5, 179-186 (2014) 査読有

<図書>

【探索グループ】

西山千春

1. 吉開泰信、吉住秀之、笹月健彦、三宅健介、谷村奈津子、竹田潔、田中芳彦、西村泰治、入江厚、横須賀忠、高濱洋介、大東いずみ、近藤健太、中山俊憲、小野寺淳、黒崎知博、錦見昭彦、福井宣規、清野宏、倉島洋介、籠谷領二、石井直人、中島裕史、坂口志文、堀昌平、中島啓、宇高恵子、西山千春、八代拓也、免疫生物学、南江堂、884 頁、2019 年 3 月
2. 中尾篤人、浅島弘光、安部沙織、井上修、内田浩一郎、小川陽一、柏木麻里子、河合利尚、河上裕、河野洋平、川原敦雄、川村龍吉、木村元子、近藤裕也、住田孝之、高橋広行、竹田潔、坪井洋人、出澤真理、中嶋正太郎、中野信浩、中村勇規、中山俊憲、中山勝文、西山千春、長谷耕二、細井純一、穂積勝人、三木春香、村上正晃、八木良二、八代拓也、横須賀忠、善本知広、分子細胞免疫学 (Cellular and Molecular Immunology 原著第 9 版)、エルゼビア・ジャパン、(2018)

深井文雄

3. Iyoda, T., and Fukai F., Deregulation of platelet-derived growth factor (PDGF)-dependent cell proliferation through potentiated and sustained activation of β 1-integrin, induced by tenascin-C-derived peptide TNIII A2, Platelet-Derived Growth Factors (PDGFs): Types, Functions and Research. Nova publishers, in press
4. Fumio Fukai, New Type of Antitumor Agent targeting the Cell Adhesion Molecule, Integrins. *YALUGAKU ZASSHI* 137(2), 137-139, (2017)
5. Iyoda, T., Matsunaga, T., and Fukai F., "Integrin-dependent Cell Regulation and its Clinical Application" in "Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science" edited by Ohshima, H., Chapter 24, pp. 313-323, John Wiley and Sons (2016)
6. Matsunaga, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Cell regulation through adhesion to the extracellular matrix via adhesion molecule, integrins -Therapeutic application of integrin activation-modulating peptides-. Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development. Eds. Ohshima, H. and Makino, K., Elsevier, pp. 412-418 (2014).

秋本和憲

7. 鍛冶利幸、花輪剛久、嶋田修治、東達也、真野泰成、羽田紀康、高澤涼子、磯濱洋一郎、根岸健一、伊集院一成、後藤了、横山英志、西川元也、月本光俊、稲見圭子、秋本和憲、原田陽介、早川洋一、市原学、吉澤一巳、佐藤嗣道、山下親正、鈴木立紀、河野弥生、上村直樹、鹿村恵明 丸善出版 理工系の基礎 薬学 312 頁(総頁数)(2018)
8. 秋本和憲 ゲノム創薬科学 裳華房第3章 3.3 節 p63-p72(2017).
9. 池北雅彦、武村政春、鳥越秀峰、田村浩二、水田龍信、橋本茂樹、太田尚孝、鞆 達也、和田直之、松永幸大、吉澤一巳、鈴木智順、秋本和憲、理工系の基礎 生命科学入門 丸善出版17章 219-227 教科書 2016 年 4 月

佐藤圭子

10. Mitome Y., Iriyama S., Sato K., Efficient Energy Transfer in Network Model of Photosynthesis. In: Khrennikov A., Toni B. (eds) Quantum Foundations, Probability and Information. STEAM-H: Science, Technology, Engineering, Agriculture, Mathematics & Health book series. Volovich I.V.,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Springer, Cham, pp 59–69, 2018.

【創薬グループ】

和田猛

11. Takeshi Wada, Synthesis of Therapeutic Oligonucleotides, Yohei Nukaga, Springer, pp271–284, 2018.
12. 和田猛、額賀陽平、リン原子修飾核酸医薬の立体制御、中分子創薬に資するペプチド・核酸・糖鎖の合成技術、シーエムシー出版、pp139–148,(2018).
13. 和田猛、額賀陽平、立体化学的に純粋なリン原子修飾核酸医薬の創製、核酸医薬の創製と応用展開、和田猛監修、シーエムシー出版、pp60–69,(2016).
14. 和田猛、原倫太郎、前田雄介、カチオン性人工分子を用いる核酸医薬の安定化とデリバリー、核酸医薬の創製と応用展開、和田猛監修、シーエムシー出版、pp218–228 (2016).
15. 和田猛、6章、アルケンおよびアルキンの反応、ブルース有機化学概説 第3版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp212–249 (2016).
16. 和田猛、7章、非局在化電子が安定性、pKa および反応生成物に及ぼす効果・芳香族性およびベンゼンの反応、ブルース有機化学概説 第3版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp250–306, (2016).
17. 和田猛、14章、ラジカル、ブルース有機化学概説 第3版、西郷和彦他監訳、化学同人、pp562–577, (2016).
18. 岡夏央、松村史子、和田猛、糖-1-リン酸誘導体の化学合成、複合糖質の化学と最新応用技術《普及版》、稲津敏行他監修、シーエムシー出版、pp28–36 (2015).
19. 和田猛、活性エステル、有機合成実験法ハンドブック第2版、丸善出版、pp371–374 (2015).
20. 和田猛、リン原子修飾核酸の化学的創製、核酸医薬の最前線《普及版》、和田猛監修、シーエムシー出版、pp67–75 (2014).
21. 和田猛、7章、アルキンの反応(多段階合成の基礎)、ブルース有機化学 第7版(上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp340–376 (2014).
22. 和田猛、8章、非局在化電子が安定性、pKa、および反応生成物に及ぼす効果、ブルース有機化学 第7版(上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp377–457 (2014).
23. 和田猛、13章、ラジカル・アルカンの反応、ブルース有機化学 第7版(上)、西郷和彦他監訳、化学同人、pp632–672 (2014).

鳥越秀峰

24. Tanaka, Y., Kondo, J., Sychrovský, V., Šebera, J., Dairaku, T., Saneyoshi, H., Urata, H., Torigoe, H., and Ono, A., Structures, Physicochemical Properties, and Applications of T-Hg(II)-T, C-Ag(I)-C, and Other Metallo-Base-Pairs. Chem. Commun. 51, pp17343–17360 (2015).

花輪剛久

25. 鹿村恵明、上村直樹、伊集院一成、下平秀夫、花島邦彦、奥山清、川上美好、小高賢一、杉浦宗敏、根岸健一、花輪剛久、吉澤一巳、若林進、寺澤雅治、山本晃之 “謎解きで学ぶ 薬学生・新人薬剤師のための処方解析入門[改訂版]” 株式会社薬ゼミ情報教育センター p2-14, (総頁数 159), 2018.
26. 鹿村恵明、上村直樹、伊集院一成、下平秀夫、花島邦彦、奥山清、川上美好、小高賢一、近藤剛弘、杉浦宗敏、根岸健一、花輪剛久、吉澤一巳、若林進 “謎ときで学ぶ 薬学生・新人薬剤師のための処方解析入門[改訂版]” 薬ゼミファーマブック pp54–54, 66–69, 95–100, 2018.
27. 鍛冶利幸、花輪剛久、嶋田修治、東達也、真野泰成、羽田紀康、高澤涼子、磯濱洋一郎、根岸健一、伊集院一成、後藤了、横山英志、西川元也、月本光俊、稲見圭子、秋本和憲、原田陽介、早川洋一、市原学、吉澤一巳、佐藤嗣道、山下親正、鈴木立紀、河野弥生、上村直樹、鹿村恵明、“理工系の基礎 薬学” 丸善出版 3.1.1~3.1.3 項、pp23–26, 101–104, 130–135, 157–160, 312, 2018.
28. 花輪剛久、院内製剤学、京都廣川書店(2014).

大塚英典

29. Shohei Ishikawa, Kazutoshi Iijima, and Hidenori Otsuka, (Ed. Alexandru Mihai Grumezescu), Micro- and Nanotechnologies in Biomedical Engineering (multi volume SET 1–14), VOLUME 11: Biomedical Engineering Techniques, Elsevier, (2018)
30. Shigehito Osawa and Hidenori Otsuka, (Ed. Alexandru Mihai Grumezescu), Micro- and Nanotechnologies in Biomedical Engineering (multi volume SET 1–14), VOLUME 10. Biomedicine,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Elsevier、(2018)

31. Shigehito Osawa and Hidenori Otsuka, PEGylation: Advances in Research and Applications, Nova Science Publishers, USA (2018)
32. 飯島一智、石川昇平、大塚英典、色材協会誌、講座「新しい機能をもった先端材料」再生医療における繊維材料、(2018)、印刷中。
33. Chapter 3“Fabrication of Stimuli-Triggered Polypeptide-Based Hybrid Biomaterials for Biomedical Application” in “Advances in Chemistry Research, Volume 45” Shohei Ishikawa, Kazutoshi Iijima, Yuta Yahagi and Hidenori Otsuka (Ed. James C. Taylor), Nova Science Publishers, USA (2018), ISBN: 978-1-53613-838-2.
34. 石川昇平、大塚英典、Colloid & Interface Communication (依頼原稿)、「ペプチド繊維と糖鎖から形成される相互侵入高分子網目構造(IPN) ゲルへの生分解性付与と組織再生足場への応用」、(2018年5月発行予定)
35. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “Biocompatible Interface Responsive to an Environment Change in the Living Body” in “Stimuli-Responsive Interfaces: Fabrication and Application”, Springer Nature Singapore Pte Ltd. (2017). ISBN 978-981-10-2461-0, DOI 10.1007/978-981-10-2463-4
36. Shohei Ishikawa, Kazutoshi Iijima, Hidenori Otsuka, Chapter 15 “Nanofabrication technologies to control cell and tissue function for biomedical applications” in “Nanobiomaterials Nanostructured Materials for Biomedical Applications” (Ed. Roger Narayan) pp. 385-410. Elsevier (2017).
37. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “Strategies of Metal Nanoparticles for Nanobiology”, in “Encyclopedia of Biocolloid and Biointerface Science”, John Wiley & Sons, Inc., Hoboken, NJ, USA, Published Online: 24 SEP (2016), DOI: 10.1002/9781119075691.ch66.
38. 大塚英典、医療用ナノ粒子に必要な表面修飾、機能化と分散安定化、ナノ粒子表面修飾・分析評価技術～各種表面修飾の方法と修飾状態の分析・評価技術～、(株)情報機構、第5章第1節(2016)。
39. Otsuka, H., “Micropatterning of cell aggregate in three dimension for in vivo mimicking cell culture”, in “Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development”, Elsevier, ISBN: 978-0-444-62614-1, Chapter 11, pp223-241 (2014)
40. Matsukuma, D., and Otsuka, H., “PEGylation for biocompatible surface”, in “Colloid and Interface Science in Pharmaceutical Research and Development”, Elsevier, ISBN: 978-0-444-62614-1, Chapter 13, pp261-283 (2014).
41. 石川昇平、大塚英典、Colloid & Interface Communication (依頼原稿)、「ペプチド繊維と糖鎖から形成される相互侵入高分子網目構造(IPN) ゲルへの生分解性付与と組織再生足場への応用」、(2018年5月発行予定)

西川元也

42. 西川元也、他、先端治療技術の実用化と開発戦略、技術情報協会(2017)
43. 西川元也、他、核酸のナノ構造化を基盤とする核酸医薬の高機能化と DDS、シーエムシー出版(2016)

【薬効・機能評価グループ】

岡淳一郎

44. 岡淳一郎、松本欣三、濱田幸恵、釣藤散の脳機能障害改善作用、日本薬理学雑誌 147:157-160,(2016).(査読無)
45. 岡淳一郎、薬物作用の分類、薬物作用のメカニズム、薬物の用量と作用、MRテキストI 医薬品情報 2012,2015 改訂,大谷壽一・岡淳一郎・折井孝男(編)、公認財団法人MR研修センター、pp130-141 (2015).

東達也

46. 東達也、池川繁男、クロマトグラフ法 (クロマトグラフィー)、薬学生のための臨床化学 改訂第4版、藤田芳一、眞野成康 (編)、南江堂、pp32-39 (2015).
47. 東達也、馬渡一浩、本間啓子、ホルモン、薬学生のための臨床化学 改訂第4版、藤田芳一、眞野成康 (編)、南江堂、pp.154-168 (2015).

樋上賀一

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

48. Mizunoe Y, Sudo Y, Okita N, Higami Y, Autophagy in adipose tissue, Autophagy vol.10 edt by MA Hayat, pp147-156, ELSEVIER (2016)

磯濱洋一郎

49. 磯濱洋一郎, Common Disease の病態生理と薬物治療, 磯濱洋一郎ほか編, オーム社, pp48-69, 236-254, 343-366, 2019
50. 磯濱洋一郎, パートナー薬理学第 3 版, 南江堂, pp293-306, 2019
51. 磯濱洋一郎, パートナー機能形態学ヒトの成り立ち 第 3 版, 南江堂, pp197-216, 2018
52. 磯濱洋一郎, コメディカルのための薬理学, 朝倉書店, pp141-148, 2018
53. 赤池昭紀, 磯濱洋一郎 ほか, スタンダード薬学シリーズ II6 医療薬学 III, 薬理・病態・薬物治療(3), 東京化学同人, 2018.
54. 渡邊泰秀, 磯濱洋一郎 ほか, コメディカルのための薬理学第 3 版, 朝倉書店, 2018
55. 磯濱洋一郎, 岩崎克典ほか, 新しい疾患薬理学, 南江堂, (2018)

【臨床試験グループ】

小茂田昌代

56. 小茂田 昌代、尾関 理恵、赤木 圭太, WHAT'S NEW in 臨床皮膚科学【感染症】イベルメクチンのお風呂—新しい治療法となるか?—, WHAT'S NEW in 皮膚科学 2018-2019, メディカルレビュー社, 東京, 2018.4.16
57. 小茂田昌代, 簡易懸濁法マニュアル, 倉田なおみ, 石田志郎(編), じほう, p93,(2017)
58. 小茂田昌代, 簡易懸濁法マニュアル, 倉田なおみ, 石田志郎(編), じほう, p121-122.(2017)
59. 小茂田昌代, 簡易懸濁法マニュアル, 倉田なおみ, 石田志郎(編), じほう, p178-182 (2017)
60. 小茂田昌代, 研修ノートシリーズ 皮膚科研修ノート, 永井良三(総監), 佐藤伸一, 藤本学(編)、診断と治療社, p646-648, (2016).
61. 小茂田 昌代: 病棟アワー、「薬物有害事象マネジメント」,ラジオ日経, (2016).
62. *石井則久、小茂田昌代、他、EBM 皮膚疾患の治療 up-to-date、中外医学社、309-312 (2015).

佐藤嗣道

63. 佐藤嗣道, “医薬品安全性監視入門第 2 版: ファーマコビジランスの基本原則”, Patrick Waller (著), 久保田潔(監訳), 株式会社じほう, 2018, pp208. (2018 年 7 月 25 日), ISBN: 978-4-8407-5106-3.
64. 佐藤嗣道、9-1. 臨床研究の目的とデザイン、9-2. 観察研究、山崎幹夫(監修)、望月眞弓、武立啓子、堀里子(編)、医薬品情報学 [第 4 版]、東京大学出版会、pp.125-131, pp.132-139 (2016).

浜田知久馬

65. 矢田真城、浜田知久馬、抗がん剤の第 I 相試験における MTD 推定に有用な CRM の歴史的発展と将来の展望. 臨床薬理. 46-1, 8-16 (2015)
66. Nakanishi, N., Hashimoto, T., and Hamada, C., Validity and effectiveness of the Williams multiple comparison test in pharmacological studies. (薬理薬効試験におけるこれからの標準的検定手法薬理薬効試験における Williams 多重比較検定の妥当性と有用性). Nihon Yakurigaku Zasshi. 144(4), 185-191 (2014).

真野泰成

67. 真野泰成、今日の OTC 薬 解説と便覧(改訂第 4 版)、「眠気防止薬」を分担執筆, 南江堂, pp 468-485, 2018
68. 真野泰成, 理工系の基礎 薬学, 「実務薬学計算」, 「処方箋に基づく調剤」を分担執筆, 丸善出版, pp 29-31, pp280-291, 2018
69. 真野泰成、3-1: 実務薬学計算、6-2: 処方箋に基づく調剤、薬学 編集委員会(編)、理工系の基礎薬学、丸善出版、pp29-31、pp280-291(2018).
70. 真野泰成、第 24 章: 眠気防止薬、中島恵美、伊東明彦(編)、今日の OTC 薬 解説と便覧(改訂第 4 版)、南江堂、pp468-485(2018).
71. 真野泰成、大井一弥、今日から使える! 高齢者の薬の使い方: 経口ステロイド薬、副作用リスク軽減のためのモニタリングと予防、調剤と情報、じほう、23(4), 419-421, (2017).
72. 真野泰成、第 6 章: 生物統計学、第 7 章: 臨床研究デザインと解析、上村直樹、下平秀夫(編)、医薬品情報学(第 2 版)、化学同人、pp.97-130, pp.131-161(2017).
73. 真野泰成、10 章: EBM の実践と医薬品情報、山崎幹夫(監修)、望月眞弓、武立啓子、堀里子(編)、

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

医薬品情報学(第4版)、東京大学出版会、pp.151-165 (2016).

<学会発表>

【探索グループ】

西山千春

国内学会

1. 稲葉啓人、渡辺良介、八代拓也、西山千春、樹状細胞における免疫チェックポイント分子 PD-L2 の遺伝子発現制御機構の解明、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
2. 長田和樹、三浦亮介、長瀬博、八代拓也、西山千春、神経性疼痛物質オピオイドの腸管免疫における炎症抑制作用、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
3. 八代拓也、綿貫優実、山口昌樹、西山千春、レチノイン酸合成酵素 RALDH2 を介したフラボノールによる腸管免疫応答の恒常性維持、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
4. 三浦亮介、藤垣泉、飯塚雄輝、蔭山あづさ、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、短鎖脂肪酸はマスト細胞のアレルギー性応答を抑制する、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
5. 長田和樹、三浦亮介、長瀬博、八代拓也、西山千春、神経性疼痛物質オピオイドの腸管免疫における炎症抑制作用、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
6. 西山千春、短鎖脂肪酸によるアレルギー抑制効果、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
7. 三浦亮介、藤垣泉、飯塚雄輝、蔭山あづさ、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、短鎖脂肪酸はマスト細胞のアレルギー性応答を抑制する、日本農芸化学会 2019 年度(平成 31 年度)大会, 3 月 24 日- 27 日 (2019).
8. Ryosuke Miura, Xuehua Piao, Sanae Miyake, Sachiko Komazawa-Sakon, Chiharu Nishiyama, Hiroyasu Nakano, Blockade of TNFR1-dependent and -independent apoptosis is crucial for normal epidermal differentiation. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
9. Akihisa Oda, Keiko Fujisaki, Yuta Ueno, Chiharu Nishiyama, and Ryo Goitsuka, The spleen serves as a specific microenvironment that support development of B-1a cells and LAG-3+ CD138+ natural regulatory plasma cells. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
10. Yusuke Amemiya, Chiharu Nishiyama, Akihisa Oda, Takuro Nakamura and Ryo Goitsuka, Abnormality in the splenic microenvironment is involved in the malignant transformation of acute myeloid leukemia. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
11. Shoko Hosoda, Keiko Fujisaki, Yuta Ueno, Chiharu Nishiyama, Kei Haniuda, Akihisa Oda, Daisuke Kitamura, and Ryo Goitsuka, Transcription factor Tlx1 regulates a niche for innate-like B cells in the spleen. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
12. Yuta Ueno, Chiharu Nishiyama, Akihisa Oda, and Ryo Goitsuka, Transcription factor Tlx1 is involved in the postnatal splenic architectural maintenance in a non-cell autonomous manner. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
13. Kazuki Saida, Takuya Yashiro, Kazumi Kasakura, Mutsuko Hara, Chiharu Nishiyama, Ko Okumura, Nobuhiro Nakano, Cross-talk between Notch signaling and TGF-beta signaling regulates mucosal mast cell differentiation. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
14. Takuya Yashiro, Chiharu Nishiyama, PU.1 is a transcriptional activator of Ccl17 and Ccl22 and is a potential therapeutic target for allergic diseases. The 47th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, December, 10 -12(2018).
15. 長田和樹、長瀬博、八代拓也、西山千春、オピオイド受容体を介した免疫炎症抑制効果、第 41 回分

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

子生物学会年会、11月28日-30日(2018).

16. 竹田若水、仁科隆史、出口裕、西山千春、中野裕康、家族性大腸腺腫症モデルマウスにおけるインターロイキン-11 産生細胞の解析、第 41 回分子生物学会年会、11月28日-30日(2018).
17. 坂田文弥、八代拓也、平野弘之、長田裕之、西山千春、樹状細胞を標的とした免疫調整剤の探索と病態モデルや細胞応答解析による効果検証、第 41 回分子生物学会年会、11月28日-30日(2018).
18. 飯田真由、八代拓也、竹内裕美、西山千春、マスト細胞の Th2 サイトカイン産生に対する転写因子 GATA3 の機能、第 41 回分子生物学会年会、11月28日-30日(2018).
19. 綿貫優実、山口昌樹、八代拓也、西山千春、フラボノールによる RALDH2/Aldh1a2 発現誘導メカニズム、第 41 回分子生物学会年会、11月28日-30日(2018).
20. 岩崎めぐみ、笠倉和巳、八代拓也、濱田琢人、由良志織、西山千春、マスト細胞依存性アレルギーに対するポリフェノールの相乗効果、第 41 回分子生物学会年会、11月28日-30日(2018).
21. 中野詩織、八代拓也、西山千春、皮膚の適応免疫応答における核内受容体型転写因子 NR4A3 の寄与、日本農芸化学会 関東支部 2018 年度 支部大会、10月13日(2018).
22. 長田和樹、三浦亮介、長瀬博、八代拓也、西山千春、オピオイド受容体 δ アゴニストによる腸炎病態改善効果、日本農芸化学会 関東支部 2018 年度 支部大会、10月13日(2018).
23. 藤垣泉、笠倉和巳、久保允人、八代拓也、西山千春、吉草酸-GPR109a 経路はエイコサノイド産生を介してマスト細胞依存性アレルギー炎症を抑制する、日本農芸化学会 関東支部 2018 年度 支部例会、9月8日(2018)
24. Ryosuke Miura, Xuehua Piao, Sanae Miyake, Sachiko Komazawa-Sakon, Chiharu Nishiyama, Hiroyasu Nakano, Blockade of TNFR1-dependent and -independent cell death is crucial for normal epidermal differentiation. Gordon Research Conference on Cell Death, August, 5-10 (2018).
25. 上野湧太、小田朗永、西山千春、後飯塚僚、三次元培養法を用いた脾臓 Lymphoid tissue organizer-like 細胞の解析、第 83 回 日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会、7月26日-27日(2018).
26. 飯塚雄輝、藤垣泉、三浦亮介、蔭山あづさ、笠倉和巳、長田和樹、久保允人、八代拓也、西山千春、短鎖脂肪酸-GPR109A 経路によるマスト細胞依存性アレルギー反応抑制における IL-10 と PGE2 の寄与、第 83 回 日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会、7月26日-27日(2018)
27. 奥住あゆみ、坂田文弥、中野詩織、長瀬博、西山千春：脳内ホルモンによる免疫応答調節、ジュニア農芸化学会 2018, 名城大学, 3月17日(2018).
28. 藤垣泉、笠倉和巳、久保允人、八代拓也、西山千春：吉草酸-GPR109a 経路はエイコサノイドの産生を介してマスト細胞依存性アレルギー炎症を抑制する、日本農芸化学会 2018 年度大会, 名城大学, 3月15-18日(2018).
29. 八代拓也、由良志織、笠倉和巳、西山千春：レスベラトロール類縁化合物の免疫抑制作用、日本農芸化学会 2018 年度大会, 名城大学, 3月15-18日(2018).
30. 綿貫優実、八代拓也、山口昌樹、笠倉和巳、西山千春：Kaempferol による RALDH2 発現誘導メカニズム、日本農芸化学会 2018 年度大会, 名城大学, 3月15-18日(2018).
31. 山本愛日、八代拓也、笠倉和巳、岸野重信、小川順、西山千春：不飽和脂肪酸乳酸菌代謝産物の免疫調節機能の解析、日本農芸化学会 2018 年度大会, 名城大学, 3月15-18日(2018).
32. 中野信浩、本庄明日香、西山千春、奥村康、小川秀興：Notch シグナルの腸管マスト細胞分化への寄与とその阻害による食物アレルギー症状の緩和、日本農芸化学会 2018 年度大会, 名城大学, 3月15-18日(2018).
33. Kasakura, K., Yashiro, T., Nishiyama, C. The effect of commensal bacteria on anaphylactic reaction. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12-14(2017).
34. Iwasaki, M., Nakano, N., Hara, M. Kasakura, K. Yashiro, T., Nishiyama, C. Generation of mutant mouse Fc ϵ RI α which can be expresses as $\alpha\beta\gamma$ trimer and can bind to mouse IgE with high affinity. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12-14(2017).
35. Ueno, Y., Hosoda, S., Nishiyama, C., Oda, A., Goitsuka, R. Two mesenchymal progenitor cell populations in the spleen defined by a novel three-dimensional culture system. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12-14(2017).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

36. Uchida, Y., Yashiro, T., Ando, T., Hara, M., Kasakura, K., Nishiyama, C. The role of NR4A3 in the gene expression and function of dendritic cells. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
37. Arai, T., Kasakura, K., Yashiro, T., Nishiyama, C. Transcriptional regulation of basophil-specific proteases. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
38. Kageyama, A., Kasakura, K., Kubo, M., Yashiro, T., Nishiyama, C. Physiological significance of IL-10 produced by mucosal type mast cells. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
39. Saida, K., Kasakura, K., Yashiro, T., Hara, M., Okumura, K., Nishiyama, C., Nakano, N. Mucosal mast cell differentiation is regulated by cross-talk between Notch signaling and TGF-beta signaling. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
40. Nakano, S., Yashiro, T., Uchida, Y., Kasakura, K., Yoshimura, A., Nishiyama, C. NR4A3 is involved in function of migratory DCs and activation of T cells in FITC-induced contact hypersensitivity. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
41. Fujigaki, I., Kasakura, K., Kubo, M., Yashiro, T., Nishiyama, C. Suppression of mast cell-mediated allergic responses by valerate, butyrate, and niacin via GPR109a. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
42. Uchida, M., Hara, M., Kasakura, K., Yashiro, T., Okumura, K., Nishiyama, C., Nakano, N. Functional analysis of transcription factor Ehf. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
43. Yashiro, T., Nakano, S., Uchida, Y., Kasakura, K., Yoshimura, A., Nishiyama, C. Defect of NR4A3 leads to impaired ability of migration in intestinal dendritic cells. The 46th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sendai (Miyagi), December 12–14(2017).
44. 秋元彩佳、八代拓也、笠倉和巳、西山千春 :ゲノム編集を利用した MHC class I の発現抑制、生命科学系学会合同年次大会、神戸、12月6–9日(2017)。
45. 小田朗永、雨宮祐輔、細田祥子、西山千春、後飯塚僚：脾臓は骨髄増殖性腫瘍の悪化を促進する潜在的な白血病ニッチである、生命科学系学会合同年次大会、神戸、12月6–9日(2017)。
46. 上野湧太、細田祥子、西山千春、小田朗永、後飯塚僚：脾臓間葉系幹細胞を維持する新規三次元培養法の開発、生命科学系学会合同年次大会、神戸、12月6–9日(2017)。
47. 内田万紀子、中野信浩、原むつ子、笠倉和巳、八代拓也、奥村康、西山千春 : 転写因子 Ehf の機能解析、生命科学系学会合同年次大会、神戸、12月6–9日(2017)。
48. 坂田文弥、八代拓也、笠倉和巳、平野弘之、長田裕之、西山千春 : 樹状細胞の機能を調節する免疫調整剤の探索、生命科学系学会合同年次大会、神戸、12月6–9日(2017)。
49. 藤垣泉、笠倉和巳、八代拓也、西山千春 : 吉草酸、酪酸、ナイアシンは GPR109a を介してマスト細胞依存性アレルギー炎症を抑制する、日本食品免疫学会 2017 年度大会、東京、11月9–10日(2017)。
50. 由良志織、八代拓也、笠倉和巳、西山千春 : Pterostilbene による免疫調節機構の解析、日本食品免疫学会 2017 年度大会、東京、11月9–10日(2017)。
51. 小田祥人、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、転写因子 PU.1 のアレルギー疾患治療標的としての有効性、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。
52. 白井智文、笠倉和巳、長谷部文人、松田研一、八代拓也、西山真、西山千春、新規アミノ酸 DADH によるマスト細胞活性抑制、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。
53. 関本崇宏、八代拓也、長谷部文人、松田研一、笠倉和巳、西山真、西山千春、新規非タンパク性アミノ酸 DADH による免疫抑制作用、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。
54. 藤垣泉、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、マスト細胞活性化反応に対する短鎖脂肪酸の抑制効果、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。
55. 中野信浩、西山千春、奥村康、小川秀興、Notch シグナルによってマスト細胞が獲得する抗原提示様の形質、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。
56. 笠倉和巳、中谷光、新井貴大、八代拓也、西山千春、GATA2 によるマスト細胞プロテアーゼの発現制御機構、日本農芸化学会 2017 年度大会、京都、3月17–20日(2017)。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

57. Yashiro, T., Kasakura, K., Nishiyama, C. The nuclear orphan receptor NR4a3/NOR1 is involved in the function of dendritic cells. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
58. Kasakura, K., Yashiro, T., Hara, M., Okumura, K., Nishiyama, C. GATA2 is involved in the expression of the decoy receptor for IL-33 by binding to the proximal promoter with chromosomal loop formation. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
59. Tezuka, T., Kasahara, T., Ueno, Y., Nishiyama, C., Oda, A., Goitsuka, R. Transcription factor Tlx1 regulates the ability of spleen mechenchymal stromal cells to support the survival of hematopoietic progenitor cells in vitro. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
60. Oda, A., Tezuka, T., Kasahara, T., Ueno, Y., Nishiyama, C., Goitsuka, R. Interdependent roles of Tlx1-expressing mesenchymal cells and macrophages in extra medullary hematopoiesis in the spleen. The 45th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Ginowan (Okinawa), December 5-7(2016).
61. 山本満智子、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、インフラマソーム構成分子 NLRP3 遺伝子の単球系細胞特異的発現制御機構の解明、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016)。
62. 渡辺良介、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における PD-L2 の遺伝子発現制御機構の解析、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016)。
63. 内田万紀子、中野信浩、原むつ子、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、マスト細胞における転写因子 Ehf の機能解析、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016)。
64. 内田佑奈、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、NR4a3 によるマクロファージにおける MDC/CCL22 発現調節、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016)。
65. 小田祥人、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、PU.1 を標的としたマスト細胞依存性アレルギー反応の制御、第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日-12 月 2 日 (2016)。
66. 由良志織、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞の免疫調節機能に対する Pterostilbene の作用、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016)。
67. 藤垣泉、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、短鎖脂肪酸によるマスト細胞の機能制御、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016)。
68. 濱田琢人、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、Tannic acid によるアレルギー抑制効果とメカニズム解析、日本食品免疫学会 2016 年度大会、東京、11 月 9-10 日 (2016)。
69. 八代拓也、長岡雅典、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞の活性化反応における核内受容体型転写因子 NR4a3 の機能解析、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日(2016)。
70. 山本真也、中野信浩、八代拓也、笠倉和巳、奥村康、西山真、西山千春、マウス IgE 抗体への結合活性が上昇したヒト Fc ϵ RI α サブユニット改変体の作製、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日(2016)。
71. 中野信浩、本庄明日香、西山千春、大塚宣一、清水俊明、奥村康、小川秀興、Notch シグナル阻害による食物アレルギーの症状の軽減、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日(2016)。
72. 笠倉和巳、八代拓也、原むつ子、奥村康、西山千春、マスト細胞における C/EBP α 遺伝子の発現抑制の調節、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日(2016)。
73. 山口昌樹、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞において RALDH2 発現を亢進する食品成分の探索、日本農芸化学会 2016 年度大会、札幌、3 月 27-30 日(2016)。
74. 中村秀輔、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、マウスランゲルハンス細胞において Cd207 遺伝子は転写調節因子 PU.1 によって転写制御される、BMB2015(第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日(2015)。
75. 竹内裕美、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、T 細胞における CCR7 発現制御機構の解析、BMB2015(第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日(2015)。
76. 山口昌樹、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における RALDH2 の発現制御機構、BMB2015(第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日(2015)。
77. 太田彩花、笠倉和巳、八代拓也、西山千春、マスト細胞における IL-10 発現制御機構の解明、

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- BMB2015(第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会)、神戸、12 月 1-4 日(2015).
78. Oda, Y., Kasakura, K., Yashiro, T., Okumura, K., Nishiyama, C., PU.1 Regulates Expression of the Syk Gene in Mast Cells. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20(2015).
 79. Nakano, N., Nishiyama, C., Hara, M., Yagita, H., Okumura, K., Ogawa, H., Notch Signaling Enhances Mast Cell Cytokine Production through Direct and Indirect Mechanisms. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20(2015).
 80. Yashiro, T., Okumura, K., Nishiyama, C., PU.1 Is Involved in Migration of Dendritic Cells via Regulating Expression of CCR7. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20(2015).
 81. Miura, R., Kasakura, K., Nakano, N., Yashiro, T., Nishiyama, C., PU.1 Regulates MHC Class II Expression by Transactivation of CIITA in Plasmacytoid Dendritic Cells. The 44th Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology, Sapporo, November 18-20(2015).
 82. 八代拓也、奥村康、西山千春、マスト細胞において GATA3 は Th2 型サイトカインの発現を制御する、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015).
 83. 森貞志穂、岩永直樹、富田武郎、西山千春、葛山智久、西山真、高度高熱菌 *Thermus thermophilus* における ArgR を介した新規アルギニン生合成転写調節機構、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015).
 84. 三浦亮介、笠倉和巳、中野信浩、前田隆浩、八代拓也、西山千春、形質細胞様樹状細胞における MHC class II 発現制御因子 CIITA の転写調節に対する PU.1 の役割、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015).
 85. 笠倉和巳、原むつ子、奥村康、西山千春、菌体成分によるマスト細胞の Fc ϵ RI 発現抑制、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015).
 86. 中野信浩、山崎晋、西山千春、大塚宣一、清水俊明、奥村康、小川秀興、TGF- β によるマスト細胞機能の抑制を仲介する転写因子 Ehf の機能解析、日本農芸化学会 2015 年度大会、岡山大学、3 月 28 日(2015).
 87. Kasakura, K., Yashiro, T., Okumura, K., and Nishiyama, C., Regulation of soluble ST2 expression in mast cells. The 43rd Annual Meeting of The Japanese Society for Immunology. Kyoto, December 11 (2014).
 88. 堀谷透志、笠倉和巳、斎藤臣雄、長田裕之、八代拓也、西山千春、ベタメタゾン はマスト細胞の Fc ϵ RI 発現を抑制する、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014).
 89. 長岡雅典、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における転写制御因子 NR4a3 の機能解析、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014).
 90. 野村くるみ、八代拓也、笠倉和巳、西山千春、樹状細胞における CCL22/MDC の発現制御機構の解析、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014).
 91. 三浦亮介、笠倉和巳、中野信浩、前田隆浩、八代拓也、西山千春、PU.1 は形質細胞様樹状細胞において、CIITA 第 3 プロモーター制御を介して MHC class II 発現に寄与する、第 37 回日本分子生物学会年会、みなとみらい横浜、11 月 27 日(2014).
- 深井文雄
国内学会
92. 酒井俊輔、平野悠、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、末永雄介、横井左奈、深井文雄、N-Myc のプロテアソーム分解を介した進行性神経芽腫の悪性形質の低下ならびにその治療への応用に関する基礎的検討、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 27 日(2017).
 93. 工藤睦子、俵博希、長井怜雄、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来インテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展およびそれに基づく新規治療法の提案、日本薬学会第 137 年会、仙台、3 月 26 日(2017).
 94. 板垣圭祐、笹田学、深井文雄、インテグリン機能制御に基づく抗がん剤の創製、日本薬学会第 137 年会 シンポジウム、仙台、3 月 25 日(2017).
 95. 平野悠、笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づくビタミン A によるがんの分化誘導療法の効率化の試み、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日(2016).
 96. 浅山龍文、笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づくレチノイン酸による神経芽腫分化誘導の促進、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日(2016).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

97. 菊池優希、渡辺ひかる、伊豫田拓也、鈴木英雄、深井文雄、大腸発がんおよびその悪性化進展におけるテネイシン C の関与、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日(2016).
98. 俵博希、長井怜雄、堀越ひかる、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫細胞の悪性化進展、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日(2016).
99. 大澤琢郎、萩原裕、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C に由来するペプチドは細胞老化誘導を介してがん化に関与する、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日(2016).
100. 猪股弘基、久我章、今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、膜型タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A を介したペプチド FNIII14 の反接着作用の発現とその生理的意義、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日(2016).
101. 長井怜雄、工藤睦子、俵博希、藤田元道、伊豫田拓也、深井文雄、Involvement of a peptide derived from tenascin-C in malignant progression of glioblastoma -New target for glioblastoma chemotherapy-. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日(2016).
102. 浅山龍文、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、A peptide derived from tenascin-C, TNIIIA2, enhances proteasomal degradation of N-Myc and neural differentiation of neuroblastoma cells induced by all-trans retinoic acid. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日 (2016).
103. 萩原裕、伊豫田拓也、深井文雄、Senescence induction in fibroblasts by the tenascin-C derived peptide TNIIIA2 is associated with malignant transformation of pre-malignant epithelial cells. 第 53 回ペプチド討論会、京都、10 月 26 日 (2016).
104. 工藤睦子、藤田元道、長井怜雄、俵博希、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来インテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展およびそれに基づく新規治療法の提案、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日(2016).
105. 笹田学、平野悠、酒井俊輔、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、N-Myc 分解を基盤とした悪性神経膠芽腫に対する新規分化誘導療法、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日(2016).
106. 奥脇陽介、猪股弘基、板垣圭祐、伊豫田拓也、深井文雄、反接着性リガンド FNIII14 と膜型 eEF1A の相互作用は腫瘍細胞の移動・浸潤・転移に関与する、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日(2016).
107. 酒井俊輔、平野悠、浅山龍文、笹田学、大塚一樹、伊豫田拓也、末永雄介、横井左奈、深井文雄、N-Myc のプロテアソーム分解に基づく神経膠芽腫の悪性形質低下、第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9 月 17 日(2016).
108. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域 TNIIIA2 によるマクロファージの機能調節と泡沫細胞化、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 4 日(2016).
109. 板垣圭祐、伊豫田拓也、深井文雄、反接着性リガンド FNIII14 と膜型 eEF1A の相互作用に基づく腫瘍細胞の移動・浸潤・転移の制御、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日(2016).
110. 大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、N-Myc タンパク質分解に基づく神経膠芽腫細胞の悪性形質低下とそれに基づく新規分化誘導療法、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日(2016).
111. 笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、がん原遺伝子産物 Myc family タンパク質の分解に基づく腫瘍細胞の悪性形質低下誘導、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日(2016).
112. 藤田元道、伊豫田拓也、深井文雄、神経膠芽腫の悪性化に伴うテネイシン C の関与およびそれに基づく新規治療法の提案、第 4 回 MatriCell Forum、東京、9 月 3 日(2016).
113. 辻優奈、飯島一智、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルムに対する細胞の接着および増殖性の評価と制御、日本化学会第 95 春季年会、船橋、3 月 28 日 (2015).
114. 萩原裕、奥山慎、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、細胞外マトリックスタンパク質に由来するペプチドは細胞老化の誘導を介して腫瘍形成と悪性化に関与する、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
115. 伊豫田拓也、風間美香、竹田康次郎、深井文雄、テネイシン C 分子内領域による動脈硬化病態調節、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
116. 笹田学、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づく新規分化誘導療法に関する基礎的検討、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日 (2015).
117. 長井怜雄、堀越ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展および それに基づく新規治療法の提案、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26-28 日

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

(2015).

118. Imaizumi, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Participation of Cell Membrane Expressed eEF1A in Migration, Invasion and Metastasis of Tumor Cells. 第 52 回ペプチド討論会、平塚、11 月 18 日(2015).
119. Kuga, A., Imaizumi, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane Expression of Eukaryotic Protein Elongation Factor(eEF)1A and its Physiological Role. 第 52 回ペプチド討論会、平塚、11 月 17 日(2015).
120. Iyoda, T., and Fukai, F., Promotion of Macrophage Foam Cell Formation by the Peptide Derived from Tenascin-C. 第 52 回ペプチド討論会、平塚、11 月 17 日 (2015).
121. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域によるマクロファージ機能調節、第 3 回 MatriCell Forum、津、9 月 13 日(2015).
122. 笹田学、平野悠、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づく Myc 分解による悪性形質低下、第 3 回 MatriCell Forum、津、9 月 12 日(2015).
123. 久我章、今泉貴大、猪俣弘基、伊豫田拓也、深井文雄、膜型タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A を介したペプチド FNIII14 の反接着作用の発現とその生理学的意義、第 3 回 MatriCell Forum、津、9 月 12 日(2015).
124. 今泉貴大、久我章、猪俣弘基、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の腫瘍細胞の移動・浸潤・転移への関与、第 3 回 MatriCell Forum、津、9 月 12 日(2015).
125. 生熊北斗、伊豫田拓也、深井文雄、悪性腫瘍細胞の浸潤および増殖におけるオートファジーの役割、第 59 回日本薬学会関東支部会、習志野、9 月 12 日(2015).
126. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 分子内領域によるマクロファージ泡沫化の亢進、第 59 回日本薬学会関東支部会、習志野、9 月 12 日(2015).
127. 長井怜雄、藤田元道、堀越ひかる、俵博希、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠芽腫の悪性化進展、第 59 回日本薬学会関東支部会、習志野、9 月 12 日(2015).
128. 萩原裕、山下里菜、大澤琢郎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチドは細胞老化誘導を介してがん化とその悪性化に関与する、第 59 回日本薬学会関東支部会、習志野、9 月 12 日(2015).
129. 笹田学、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化ペプチド TNIII A2 を用いた新規分化誘導療法の基礎的検討、第 19 回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6 月 11 日(2015).
130. 萩原裕、山下里菜、大澤琢郎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C に由来するペプチドは細胞老化誘導を介して腫瘍形成および悪性化に関与する、第 19 回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6 月 11 日(2015).
131. 長井怜雄、日向野篤、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のインテグリン活性化ペプチドによる神経膠腫細胞の悪性化進展、第 19 回日本がん分子標的治療学会学術集会、松山、6 月 11 日(2015).
132. 久我章、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現機構と膜 eEF1A の生理的役割、第 47 回日本結合組織学会学術大会、品川、5 月 16 日(2015).
133. 伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチド TNIII A2 によるマクロファージ泡沫細胞化の亢進、第 47 回日本結合組織学会学術大会、品川、5 月 16 日(2015).
134. 渡辺ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、大腸発がんにおけるテネイシン C の関与、第 47 回日本結合組織学会学術大会、品川、5 月 16 日(2015).
135. Iijima, K., Tsujii, Y., Kakimoto, A., Ninomiya, R., Iyoda, T., Fukai, F., and Hashizume, M., Behavior of Fibroblast and Tumor Cells on Chondroitin Sulfate C/Chitosan Composite Films. 第 24 回日本 MRS 年次大会、横浜、12 月 12 日 (2014).
136. 長井怜雄、日向野篤、堀越ひかる、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来のペプチドはインテグリンの活性化を介して神経膠芽腫細胞の悪性化進展を増強する、第 5 回東京理科大学総合研究機構戦略的物理製剤学研究基盤センターシンポジウム・第 12 回東京理科大学薬学 DDS 研究センターシンポジウム、東京、12 月 8 日 (2015).
137. 萩原裕、奥山慎、山下理菜、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチド TNIII A2 による細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化進展への関与、第 5 回東京理科大学総合研究機構戦略的物理製剤学研究基盤センターシンポジウム・第 12 回東京理科大学薬学 DDS 研究センターシンポジウム、東京、12 月 8 日 (2015).
138. Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., and Fukai, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIII A2 in the

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- formation of atherosclerotic foam cell. 第 51 回 ペプチド討論会、徳島、10 月 23 日 (2014).
139. Mizunuma, T., Iyoda, T., and Fukai, F., Cell adhesion-mediated drug resistance (CAM-DR) in acute myelogenous leukemia cells and its abrogation by the anti-adhesive peptide FNIII14. 第 51 回 ペプチド討論会、徳島、10 月 23 日 (2014).
140. 辻優奈、飯島一智、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、コンドロイチン硫酸／キトサンフィルムに対する NIH3T3 細胞の接着性および増殖性評価、第 4 回 CSJ 化学フェスタ、東京、10 月 15 日 (2014).
141. 今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の腫瘍細胞移動・浸潤・転移への関与、第 58 回 日本薬学会関東支部大会、東京、10 月 4 日 (2014).
142. 久我章、岡本和良、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現とその生理機構、第 58 回 日本薬学会関東支部大会、東京、10 月 4 日 (2014).
143. 飯島一智、辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、熱プレス法により作製したコンドロイチン硫酸／キトサン複合フィルム上での細胞培養、第 8 回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9 月 11 日 (2014).
144. 渡辺ひかる、石橋一馬、伊藤優香、岡田佑子、伊豫田拓也、鈴木英雄、深井文雄、大腸発がんおよび大腸がんの悪性化進展におけるテネイシン C の関与、第 2 回 MatriCell フォーラム、東京、9 月 7 日 (2014).
145. 山下理菜、奥山慎、萩原裕、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチド TNIII2 による細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化への関与、第 2 回 MatriCell フォーラム、東京、9 月 7 日 (2014).
146. 伊豫田拓也、風間美香、竹田康次郎、深井文雄、動脈硬化病態進展におけるテネイシン C 由来ペプチド、第 2 回 MatriCell フォーラム、東京、9 月 7 日 (2014).
147. 堀越ひかる、日向野篤、長井怜雄、藤田元道、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、神経膠芽腫の悪性化に伴うテネイシン C の関与およびそれに基づく新規治療法の提案、第 2 回 MatriCell フォーラム、東京、9 月 7 日 (2014).
148. 笹田学、野原佑介、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化に基づく新規分化誘導療法に関する基礎的検討、第 2 回 MatriCell フォーラム、東京、9 月 7 日 (2014).
149. 辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、飯島一智、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルムへの線維芽細胞の接着性評価と制御方法の検討、第 43 回医用高分子シンポジウム、つくば、7 月 28 日 (2014).
150. 飯島一智、辻優奈、柿本敦史、二ノ宮理恵、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、コンドロイチン硫酸／キトサン複合フィルム上での細胞接着・増殖挙動の解析、東京、7 月 24 日 (2014).
151. 伊豫田拓也、深井文雄、がん細胞の悪性形質発現におけるオートファジーの役割、第 18 回日本がん分子標的治療学会、仙台、6 月 25-27 日 (2014).
152. 奥山慎、伊豫田拓也、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチドによる細胞老化誘導およびその腫瘍形成・悪性化への関与、第 18 回日本がん分子標的治療学会、仙台、6 月 25-27 日 (2014).
153. 野原佑介、大塚一樹、伊豫田拓也、深井文雄、 β 1 インテグリン活性化ペプチド TNIII2 による神経膠芽腫細胞の分化促進、第 18 回日本がん分子標的治療学会、仙台、6 月 25-27 日 (2014).
154. 日向野篤、伊豫田拓也、山本哲哉、深井文雄、テネイシン C 由来ペプチドはインテグリン活性化に基づいて神経膠芽腫細胞の増殖、移動能を過剰に増強する、第 18 回日本がん分子標的治療学会、仙台、6 月 25-27 日 (2014).
155. 今泉貴大、伊豫田拓也、深井文雄、細胞膜上に発現したタンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の、腫瘍細胞の移動・浸潤・転移への関与、第 46 回日本結合組織学会学術大会/第 61 回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6 月 5-7 日 (2014).
156. 生熊北斗、伊豫田拓也、深井文雄、悪性腫瘍細胞の増殖および浸潤におけるオートファジーの役割、第 46 回日本結合組織学会学術大会/第 61 回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6 月 5-7 日 (2014).
157. 久我章、伊豫田拓也、深井文雄、タンパク質翻訳伸長因子 eEF1A の細胞膜発現機構と膜 eEF1A の生理的役割、第 46 回日本結合組織学会学術大会/第 61 回マトリックス研究会大会・合同学術集会、名古屋、6 月 5-7 日 (2014).
158. 辻優奈、二ノ宮理恵、飯島一智、伊豫田拓也、深井文雄、橋詰峰雄、多糖複合フィルム上における線

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

維芽細胞の接着・増殖挙動の解析、第 63 回高分子学会年次大会、名古屋、5 月 30 日 (2014).

国際会議

159. Asayama, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane Expression of Eukaryotic Protein Elongation Factor 1A and its Physiological Role. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016 (iPoPS 2016), Noda, Japan, February 27(2016).
160. Iijima, K., Tsuji, Y., Kakimoto, A., Ninomiya, R., Iyoda, T., Fukai, F., and Hashizume, M., Interaction of Fibroblast with Polysaccharide Composite Films Obtained by Hot-Press Technique. The 10th International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba-Japan, December 5 (2014).
161. Higano, A., Iyoda, T., Yamamoto, T., and Fukai, F., Integrin activation by the tenascin C-derived peptide TNIII A2 enhances proliferation and migration in glioblastoma cells. The Fifth Indo-Japan International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo-Japan, September 16-17 (2014).
162. Iyoda, T., Kazama, M., Takeda, K., and Fukai, F., Role of the tenascin-C-derived peptide TNIII A2 in the formation of atherosclerotic foam cell. The Fifth Indo-Japan International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo-Japan, September 16-17 (2014).

招待講演

163. 深井 文雄、細胞接着分子インテグリンを標的とした新しい抗腫瘍薬の開発の展望、日本薬学会第 136 年会シンポジウム「がん分子標的治療の発展に貢献する薬学基礎研究 ～より有効な分指標的治療戦略のために～、横浜、3 月 27 日 (2016).
164. Asayama, T., Kuga, A., Iyoda, T., and Fukai, F., Membrane expression of eukaryotic protein elongation factor 1A and its physiological role, The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016 (iPoPS 2016), Noda, Japan, February 27 (2016).
165. Iyoda, T., and Fukai, F., Role of the TNIII A2 site in tenascin-C in the progression of atherosclerosis, The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016 (iPoPS 2016), Noda, Japan, February 28 (2016).
166. 伊豫田 拓也、深井 文雄、細胞外マトリックス由来ペプチドによるマクロファージ機能と動脈硬化病態の調節、第 133 回日本薬理学会関東支部会、柏、10 月 10 日 (2015).

秋本和憲

国内学会

167. 本村 瞳, 多森 翔馬, 野崎 優香, 尾崎 綾葉, 和氣 由布子, 高澤 涼子, 田沼 靖一, 花輪 剛久, 真野 泰成, 長嶋 洋治, 宮城 洋平, 今井 美沙, 山本 紘司, 佐藤 圭子, 秋本 和憲, PKC λ と GLO 1 過剰発現乳癌患者は予後不良を示し、両分子の阻害剤の併用は乳癌細胞の生存・tumor sphere 形成を抑制した, 日本薬学会 139 年会, 3 月 22 日 (2019)
168. 多森 翔馬, 野崎 優香, 本村 瞳, 翁長 朝太郎, 佐藤 圭子, 原 泰志, 安部 良, 今井 美沙, 山本 紘司, 佐藤 嗣道, 花輪 剛久, 吉森 篤史, 高澤 涼子, 田沼 靖一, 秋本 和憲, 解糖系代謝酵素 Glyoxalase 1 は Basal-like 型乳癌において高発現し、ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に関与する, 日本薬学会 139 年会, 3 月 22 日 (2019)
169. 多森翔馬、野崎優香、本村瞳、中根裕美、嶋田奈実、佐藤圭子、原泰志、安部良、今井美沙、山本 紘司、佐藤嗣道、花輪剛久、吉森篤史、高澤涼子、田沼靖一、秋本和憲、解糖系代謝酵素 Glyoxalase I は Basal-like 型乳癌において高発現し、ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に関与する、第 62 回日本薬学会関東支部大会、9 月 15 日(2018)
170. 本村瞳、多森翔馬、野崎優香、片山鈴花、和氣由布子、高澤涼子、田沼靖一、真野泰成、花輪剛久、宮城洋平、長嶋洋治、今井美沙、山本紘司、佐藤圭子、秋本和憲、ステージⅢ、Ⅳ乳癌における PKC λ と GLO I 共発現患者は予後不良である、第 62 回日本薬学会関東支部大会、9 月 15 日(2018)
171. Hitoshi Ishiguro, Kazunori Akimoto, Masahiro Yao and Hiroji Uemura, aPKC λ associates with prostate cancer development by increasing cytokine expression, 第 77 回日本癌学会学術総会, 9 月 27 日 - 29 日(2018)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

172. *野崎優香, 片山鈴花, 多森翔馬, 南島治, 阿部真実, 石原侑佳, 中根裕美, 佐藤圭子, 原泰志, 安部良, 工藤泰, 牧野嶋秀樹, 土原一哉, 川上達雄, 内海文彰, 田沼靖一, 江角浩安, 大野茂男, 秋本和憲 PKC λ 依存的な解糖系を介した ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存機構の解析日本薬学会第 138 年会 金沢, 3 月(2018)
173. *多森翔馬, 野崎優香, 本村瞳, 中根裕美, 片山鈴花, 鈴木悠平, 野池芽衣, 菊池恵梨子, 嶋田奈実, 佐藤圭子, 今井美沙, 原泰志, 安部良, 吉森篤史, 高澤涼子, 田沼靖一, 秋本和憲 解糖系代謝酵素 Glyoxalase I はヒト乳癌において組織学的グレード3と相関し, ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に関与する 日本薬学会第 138 年会 金沢, 3 月 (2018)
174. *野崎優香, 多森翔馬, 片山鈴花, 中根裕美, 南島治, 阿部真実, 小野寺祐佳, 和氣由布子, 石原侑佳, 早川美菜子, 佐藤圭子, 原泰志, 安部良, 今井美沙, 川上隆雄, 田沼靖一, 大野茂男, 秋本和憲, aPKC 依存的な ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存機構の解析 生命科学系学会合同年次大会 神戸, 12 月 (2017)
175. 多森翔馬, 松村将史, 豊田裕衣, 大川美樹, 翁長朝太郎, 尾崎綾葉, 南島治, 中根裕美, 立花研, 今井美沙, 樋上賀一, 大野茂男, 秋本和憲 癌の予後不良因子 PKC λ タンパク質量の新規調節機構の解析 生命科学系学会合同年次大会 神戸, 12 月 (2017)
176. *野崎優香, 多森翔馬, 稲田将大, 片山鈴花, 中根裕美, 南島治, 小野寺祐佳, 阿部真実, 椎名將太, 田村溪, 小玉大地, 佐藤圭子, 原泰志, 安部良, 高澤涼子, 吉森篤史, 四ノ宮成祥, 田沼靖一, 秋本和憲, Correlation between c-Met and ALDH1 contributes to the survival and tumor-sphere formation of ALDH1 positive breast cancer stem cells and predicts poor clinical outcome in breast cancer 第 61 回日本薬学会関東支部大会 東京, 9 月 (2017)
177. *柳川拓哉, 藤田拓真, 椎名啓亮, 大川美樹, 早川美菜子, 尾崎綾葉, 樋上賀一, 今井美沙, 佐藤圭子, 秋本和憲 各乳癌サブタイプにおける SLC20A1 の予後予測マーカーとしての可能性 第 61 回日本薬学会関東支部大会 東京, 9 月 (2017)
178. 二俣沙央里, 野崎優香, 阿部真実, 多森翔馬, 稲田将大, 片山鈴花, 中根裕美, 原泰志, 安倍良, 田沼靖一, 樋上賀一, 秋本和憲 ヒト乳がんにおける Atypical protein kinase C(aPKC)とオートファジーの関連 第 61 回日本薬学会関東支部大会 東京, 9 月 (2017)
179. 椎名將太, 大川美樹, 本村瞳, Babita Shashni, 早瀬仁則, 青木伸, 秋本和憲 乳がんにおける細胞間接着分子 Tricellulin の機能解析 第 61 回日本薬学会関東支部大会 東京, 9 月 (2017)
180. 大川美樹, 椎名將太, Bunsinee throngnumchai, 本村瞳, Babita Shashni, 早瀬仁則, 青木伸, 秋本和憲, 悪性黒色腫における細胞間接着分子 Tricellulin の役割 第 61 回日本薬学会関東支部大会 東京, 9 月 (2017)
181. 青木伸, Babita Shashni, 松浦英彦, 平田拓諒, 野村健太, 竹村裕, 安盛敦雄, 秋本和憲, 伊藤典彦, 大崎智弘 血中循環がん細胞を検出・捕捉・培養を目的とする簡易デバイスの開発 第 11 回バイオ関連化学シンポジウム 東京, 9 月 (2017)
182. *南島治, 片山鈴花, 小野寺祐佳, 野崎優香, 柳川拓哉, 佐藤圭子, 神保美穂, 原泰志, 安部良, 今井美沙, 田沼靖一, 大野茂男, 川上隆雄, 秋本和憲, ALDH1 陽性乳癌幹細胞における PKC λ 依存的な糖代謝機構の解析日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月(2017)
183. 石黒齊, 秋本和憲, 長嶋洋治, 矢尾正祐, 上村博司 Aberrant expression of atypical protein kinase C λ associates with prostate cancer development 第 75 回日本癌学会学術総会, 横浜, 10 月 (2016)
184. 原(岩田)倫太郎, 前田雄介, 久田有希, 二俣沙央里, 秋本和憲, 和田猛, カチオン性人工オリゴ糖による二本鎖型核酸医薬の高機能化, 日本核酸医薬学会第 2 回年会 東京, 11 月 (2016)
185. *野崎優香, 本村瞳, 小野寺祐佳, 阿部真実, 柳川拓哉, 原泰志, 阿部良, 今井美沙, 田沼靖一, 大野茂男, 秋本和憲, Atypical protein kinase C(aPKC)は ALDH1 陽性乳癌幹細胞の生存に関与する 第 60 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 9 月 (2016)
186. 多森翔馬, 南島治, 松村将史, 中根裕美, 立花研, 樋上賀一, 大野茂男, 秋本和憲, がん細胞における PKC λ タンパク質過剰発現機構の解析, 第 60 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 9 月 (2016)
187. *本村瞳, 和氣由布子, 高澤涼子, 宮城洋平, 長嶋洋治, 今井美沙, 佐藤圭子, 田沼靖一, 大野茂男, 秋本和憲, ヒト乳癌における Atypical protein kinase C(aPKC)と糖代謝機構との関連 第 60 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 9 月 (2016)
188. Babita Shashni, Hidehiko Matsuura, Kenta Nomura, Takuto Maeda, Kazunori Akimoto, Masanori Hayase, Hiroshi Takemura, Atsuo Yasumori, Naoyuki Aikawa, Shin Aoki, Development of Convenient

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Methods in Detection and Separation of Circulating Tumor Cells (CTCs) and CTC Clusters 第 10 回
バイオ関連化学シンポジウム 金沢 9月 (2016)

189. Babita Shashni, Hidehiko Matsuura, Kenta Nomura, Takuto Maeda, Kazunori Akimoto, Masanori Hayase, Hiroshi Takemura, Atsuo Yasumori, Naoyuki Aikawa, Shin Aoki Development of Convenient Methods in Detection and Separation of Circulating Tumor Cells (CTCs) and CTC Clusters 第 60 回日本薬学会関東支部大会、東京、9月 (2016)
190. * 片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、今井美沙、田沼靖一、大野茂男、川上隆雄、秋本和憲、乳癌 ALDH1 陽性癌幹細胞における Atypical protein kinase C(aPKC)依存的な解糖系代謝制御機構の役割、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月(2016).
191. * 野崎優香、稲田将大、片山鈴花、中根裕美、二俣沙央里、松村将史、小野寺佑佳、原泰志、安部良、今井美沙、田沼靖一、秋本和憲、Atypical protein kinase C (aPKC)依存的な乳癌 ALDH1 陽性癌幹細胞の生存メカニズムの解析、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月(2016)
192. * 本村瞳、片山鈴花、多森翔馬、松村将史、柳川拓哉、和氣由布子、高澤涼子、田沼靖一、宮城洋平、長嶋洋治、秋本和憲、ヒト乳癌における Atypical protein kinase C (aPKC) と糖代謝機構との関連、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月(2016).
193. * 片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、田沼靖一、大野茂男、川上隆雄、秋本和憲、リン酸化プロテオミクスを用いた乳癌 ALDH1high 細胞における Atypical Protein Kinase C (aPKC)の機能解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会 合同大会、神戸、12 月(2015).
194. 中根裕美、片山鈴花、本村瞳、南島治、椎名将太、松村将史、稲田将大、菊池恵梨子、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼靖一、高澤涼子、秋本和憲、乳癌 ALDH1high 細胞における解糖系代謝酵素 Glyoxalase I (GLO I)の役割解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 (2015).
195. 菊地恵梨子、嶋田奈美、秋本和憲、田沼靖一、高澤涼子、がん特異的代謝における Glyoxalase I 阻害による代謝シフトの解析、BMB2015 第 38 回日本分子生物学会年会、第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月(2015).
196. 大原有樹、鈴木忠樹、中野哲郎、齊藤慎二、林健太郎、寺内芳彦、矢野遙香、相内章、秋本和憲、長谷川秀樹、経鼻不活化インフルエンザワクチンにおける合成二重鎖 RNA uPIC のアジュバント活性の検討、第 19 回日本ワクチン学会、犬山、11 月(2015).
197. 中根裕美、片山鈴花、南島治、椎名将太、松村将史、稲田将大、菊池恵梨子、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼靖一、高澤涼子、秋本和憲、乳癌細胞株から単離したALDH high細胞に対する新規 Glyoxalase I (GLO I)阻害剤 TLSC702 の増殖抑制効果、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月(2015).
198. * 片山鈴花、中根裕美、稲田将大、小野寺佑佳、神保美穂、原泰志、安部良、田沼靖一、川上隆雄、秋本和憲、リン酸化プロテオミクスを用いた乳癌 ALDH1high 細胞における Atypical Protein Kinase C(aPKC)の機能解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 (2015).
199. 高柳亜由美、佐々木和教、秋本和憲、大野茂男、スフィアアッセイを用いたマウス乳腺幹細胞の解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 (2015).
200. * 野崎優香、稲田将大、片山鈴花、中根裕美、二俣沙央里、小野寺佑佳、原泰志、安部良、田沼靖一、秋本和憲、Atypical protein kinase C(aPKC)依存的な乳癌 ALDHhigh 細胞の生存メカニズムの解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 (2015).
201. 稲田将大、片山鈴花、中根裕美、田村溪、高澤涼子、原泰志、安部良、吉森篤史、四ノ宮成祥、田沼靖一、秋本和憲、ヒト乳癌 ALDHhigh 細胞に対する MET 阻害剤の効果、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 (2015).
202. * 本村瞳、片山鈴花、多森翔馬、松村将史、柳川拓哉、和氣由布子、高澤涼子、田沼靖一、宮城洋平、長嶋洋治、秋本和憲、ヒト乳癌における Atypical protein kinase C (aPKC) と糖代謝機構との関連、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 (2015).
203. * 神保美穂、上田尚学、高畑良雄、片山鈴花、秋本和憲、川上隆雄、LC-MS/MS のデータ比較解析ソフトウェア i-RUBY の開発と腫瘍リン酸化プロテオミクスへの応用、日本プロテオーム学会 2015 年会(JHUPO 第 13 回大会)、熊本、7 月 (2015).
204. 高澤涼子、田中ひかり、高田兼市、松岡立己、菊地恵梨子、嶋田奈実、吉森篤史、秋本和憲、田沼

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

靖一、ステルベン骨格化合物による human Glyoxalase I 阻害の解析、日本薬学会第135回年会、神戸市、3月(2015)。

205. 大原 有樹、鈴木 忠樹、中野 哲郎、齊藤 慎二、相内 章、秋本 和憲、長谷川 秀樹、低毒性型合成二本鎖 RNA uPIC を用いた経鼻インフルエンザワクチンの開発、第 62 回日本ウイルス学会学術集会、横浜市、11月(2014)。
206. 中根裕美、菊池恵梨子、片山鈴花、稲田将大、鈴木悠平、野池 芽衣、小玉大地、嶋田奈実、原泰志、安部良、吉森篤史、田沼 靖一、高澤涼子、秋本和憲、Basal-like 型乳癌細胞株から単離した ALDHhigh 細胞に対する 新規 Glyoxalase I (GLO I)阻害剤 TLSC702 の増殖抑制効果、第58回日本薬学会関東支部大会、町田、10月(2014)。
207. 稲田将大、片山鈴花、中根裕美、田村 溪、高澤涼子、原泰志、安部良、吉森篤史、四ノ宮成祥、田沼靖一、秋本 和憲、ヒト乳癌 ALDHhigh 細胞 に対する MET 阻害剤の効果、第58回日本薬学会関東支部大会、町田、10月(2014)。
208. 岡山明子、宮城洋平、尾下文浩、西真由子、中村圭靖、長嶋洋治、秋本和憲、梁明秀、平野久、プロテオミクス解析による肺腺癌予後関連タンパク質の検出、日本プロテオーム学会2014年会(JHUPO 第 12 回大会)、つくば、7月(2014)。

国際会議

209. Kazunori Akimoto, The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cells, 6th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2018 (ipops2018), August.16 (2018)
210. Y. Nozaki, S. Tamori, K. Sato, Y. Hara, R. Abe, R. Takasawa, A. Yoshimori, N. Shinomiya, S. Tanuma, K. Akimoto, CORRELATION BETWEEN c-MET AND ALDH1 CONTRIBUTES TO THE SURVIVAL OF ALDH1 POSITIVE CSCs IN BREAST CANCER, 6th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2018 (ipops2018), August.16 (2018)
211. S. Tamori, Y. Nozaki, H. Motomura, K. Sato, T. Sato, Y. Hara, R. Abe, K. Yamamoto, M. Imai, A. Yoshimori, R. Takasawa, S. Tanuma, K. Akimoto, HIGH EXPRESSION OF GLO I GENE IN HUMAN BASAL-LIKE BREAST CANCER CONTRIBUTES TO THE SURVIVAL OF ALDH1 POSITIVE CSCs, 6th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2018 (ipops2018), August.16 (2018)
212. H. Motomura, S. Tamori, Y. Nozaki, R. Katayama, Y. Waki, R. Takasawa, S. Tanuma, Y. Mano, Y. Miyagi, Y. Nagashima, M. Imai, K. Yamamoto, K. Sato, K. Akimoto CO-EXPRESSION OF PKC λ AND GLO I CORRELATES WITH POOR CLINICAL OUTCOME IN BREAST CANCER, 6th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2018 (ipops2018), August.16 (2018)
213. Shoma TAMORI, Yuka NOZAKI, Hitomi MOTOMURA, Keiko SATO, Tsugumichi SATO, Kouji YAMAMOTO, Ryo ABE, Ryoko TAKASAWA, Sei-ichi TANUMA, Kazunori AKIMOTO, High expression of GLO I gene in human basal-like breast cancer contributes to the survival of ALDH1 positive CSCs, 第41回日本基礎老化学会大会 第9回東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンターシンポジウム, 6月2日(2018)
214. Hitomi MOTOMURA, Shoma TAMORI, Yuka NOZAKI, Ryoko TAKASAWA, Sei-ichi TANUMA, Yohei MIYAGI, Yoji NAGASHIMA, Koji YAMAMOTO, Keiko SATO, Kazunori AKIMOTO, Co-expression of PKC λ and GLO I correlates with poor clinical outcome in breast cancer, 第41回日本基礎老化学会大会 第9回東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンターシンポジウム, 6月2日(2018)
215. Yuka NOZAKI, Shoma TAMORI, Keiko SATO, Yasushi HARA, Ryo ABE, Ryoko TAKASAWA, Atsushi YOSHIMORI, Nariyoshi SHINOMIYA, Sei-ichi TANUMA and Kazunori AKIMOTO, Correlation between c-Met and ALDH1 contributes to the survival of ALDH1 positive CSCs in breast cancer, 第41回日

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

本基礎老化学会大会 第9回東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンターシンポジウム, 6月2日(2018)

216. Babita Shashni, Shinya Ariyasu, Reisa Takeda, Toshihiro Suzuki, Shota Shiina, Kazunori Akimoto, Takuto Maeda, Naoyuki Aikawa, Ryo Abe, Tomohiro Osaki, Norihiko Itoh, and Shin Aoki Application of a Particle Size Analyzer for Size-based Differentiation of Normal and Cancer Cells 5th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2017 (iPoPS2017), Puncak Alam, Malaysia, May (2017)
217. * Akimoto, K., The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cell International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center, Tokyo, Japan, June (2016)
218. * Akimoto, K., The Role of Atypical Protein Kinase C (aPKC) in Glycolysis of Breast Cancer Stem Cell. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March (2016).
219. Shiina, S., Motomura, M., Shashni, B., Hayase, M., Aoki, S, Akimoto, K., Characterization of Role of Atypical Protein Kinase C (aPKC) in In Vitro Model of CTC Cluster. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March (2016).
220. * Nozaki, Y., Inada, M., Katayama, R., Nakane, H., Tamori, S., Onodera, Y., Futamata, S., Mizunoe, Y., Hara, Y., Abe, R., Imai, M., Tanuma, S.-I., Higami, Y., Akimoto, K., Survival Dependency of ALDH1 Positive Breast Cancer Stem Cells (CSCs) on Atypical Protein Kinase C (aPKC). 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March(2016).
221. Tamori, S., Minamishima, O., Matsumura, M., Nozaki, Y., Nakane, H., Tachibana, K., Mizunoe, Y., Higami, Y., Akimoto, K., Regulation of the Expression of Atypical Protein Kinase C by Autophagy in Cancer Cells. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan. March (2016).
222. * Motomura, H., Katayama, R., Tamori, S., Matsumura, M., Yanagawa, T., Waki, Y., Takasawa, R., Tanuma, S.-I., Miyagi, Y., Nagashima, Y., Imai, M., Sato, K., Akimoto, K., Correlation between the Expression Levels of aPKC λ and GLO1 in Breast Cancer. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March (2016)
223. Ohara, Y., Suzuki, T., Nakano, N., Saito, S., Aina, A., Akimoto, K., Hasegawa, H., Inactivated Influenza Vaccine Combined with Low Toxicity dsRNAs Induces Mucosal and Systemic Immunity after Intranasal Immunization in Mice. 9th Vaccine & ISV Congress, Seoul, South Korea, October (2015).
- 招待講演
224. 秋本和憲、難治性乳がんの新規予後予測および創薬標的分子の探索と評価、トランスレーショナルリサーチセンター第11回シンポジウム 東京理科大学 富士見校舎 東京、(2019)。
225. Kazunori Akimoto, The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cells, 6th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2018 (iPoPS 2018), International Medical University, Kuala Lumpur (2018).
226. 秋本和憲、理科大でも公共の患者ゲノムデータを駆使して医学研究ができます！第4回東京理科大学医学研究シンポジウム 東京理科大学セミナーハウス 野田市 千葉、(2018)
227. Ohara, Y., Suzuki, T., Nakano, N., Saito, S., Aina, A., Akimoto, K., Hasegawa, H., Inactivated Influenza Vaccine Combined with Low Toxicity dsRNAs Induces Mucosal and Systemic Immunity after Intranasal Immunization in Mice. 9th Vaccine & ISV Congress, Seoul, South Korea, October (2015).
228. * 秋本和憲、乳癌における aPKC の役割 第1回東京理科大学—横浜市立大学合同シンポジウム、東京、9月 (2017)
229. Kazunori Akimoto, Basic Research of New Drug Development to Target Cancer Stem Cell: The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cells 創薬フロンティア 筑波、10月 (2017)
230. * 秋本和憲 乳がん幹細胞の解糖系代謝における atypical protein kinase C (aPKC)の役割第3回東京理科大・東京慈恵会医科大学 合同シンポジウム、東京、9月 (2017)
231. * 秋本和憲、野崎優香、多森翔馬、難治性乳がんの新規予後予測および創薬標的分子の探索と評

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

価「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」総合研究院トランスレーショナル(TR)センター第7回シンポジウム東京、9月(2017)

232. * Kazunori Akimoto The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cells The 3rd Annual UHCC-TUS Symposium, Honolulu, Hawaii, USA, May (2017)
233. * 秋本和憲、難治性乳がんの新規予後予測および創薬標的分子の探索と評価「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」総合研究院トランスレーショナル(TR)センター第6回シンポジウム東京、1月(2017)
234. * 秋本和憲、乳がん幹細胞の解糖系代謝における atypical protein kinase C (aPKC) の役割 がんブロ研究シンポジウム 東京、7月(2016)
235. * Akimoto, K., The role of atypical protein kinase C (aPKC) in glycolysis of breast cancer stem cell International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center, Tokyo, Japan, June (2016)
236. * 秋本和憲、がん幹細胞制御に関わる分子の探索研究、神奈川県立がんセンター研究会、横浜、1月(2016)
237. * Akimoto, K., The Role of Atypical Protein Kinase C (aPKC) in Glycolysis of Breast Cancer Stem Cell. 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences (iPoPS2016), Chiba, Japan, March (2016).
238. * 秋本和憲、乳癌幹細胞の解糖系代謝における atypical protein kinase C (aPKC)の役割、日本薬学会第136年会、横浜、3月(2016).
239. * 秋本和憲、「がん幹細胞の代謝制御機構の解明とそれを標的とした創薬への展開」～がん幹細胞を標的とした創薬研究～、横浜市立大学大学院セミナー、横浜、1月(2015).

佐藤圭子

国内会議

240. * 野崎優香, 多森翔馬, 稲田将大, 片山鈴花, 中根裕美, 南島治, 小野寺祐佳, 阿部真実, 椎名將太, 田村溪, 小玉大地, 佐藤圭子, 原泰志, 安部良, 高澤涼子, 吉森篤史, 四ノ宮成祥, 田沼靖一, 秋本和憲, Correlation between c-Met and ALDH1 contributes to the survival and tumor-sphere formation of ALDH1 positive breast cancer stem cells and predicts poor clinical outcome in breast cancer, 第61回日本薬学会関東支部大会, 慶應義塾大学(元共立大キャンパス), 2017
241. * 佐藤圭子, 秋本和憲、情報論的アプローチによるエストロゲンレセプター陽性乳がんにおける予後バイオマーカーの探索, トランスレーショナルリサーチセンター第7回シンポジウム/研究交流会, 東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎, 2017
242. * Keiko Sato and Kazunori Akimoto, An Information-theoretical Approach to Identify Biomarkers in Estrogen Receptor-positive Breast Cancer, BIT's 6th Annual International Symposium of Drug Delivery Systems-2017, Prague, Czech Republic, 2017
243. * Keiko Sato, Prognostic classification of breast cancer based on information measure, QBIC Workshop 2015, Noda campus of Tokyo University of Science, Japan, 2015.

【創薬グループ】

和田 猛

国内学会

244. 後藤景亮, 飯田智祥, 原倫太郎, 佐藤一樹, 和田猛、金属錯体によるリン原子修飾 RNA の切断反応、日本薬学会第139回年会(千葉)、千葉、3月23日(2019).
245. 浪岡優吉, 五十嵐愛弓, 原倫太郎, 佐藤一樹, 和田猛、ボラノホスフェート DNA を出発物質としたリン原子修飾 DNA の固相合成、日本薬学会第139回年会(千葉)、千葉、3月23日(2019).
246. Chiba A, Ogawa Y, Shiraishi T, Noro M, Hara R, Sato K, Wada T, Solid phase synthesis of N-Acetyl mannosamine α -1-phosphate repeating units from Neisseria meningitidis, 日本化学会第99春季年会(2019)、兵庫、3月17日(2019).
247. 萩尾友哉, 矢尾板絢, 佐野美知, 野呂美穂子, 原倫太郎, 佐藤一樹, 和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖 1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第99春季年会

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

(2019)、兵庫、3月17日(2019).

248. 半澤壯太、小暮智紀、齋藤竜也、額賀陽平、原倫太郎、佐藤一樹、和田猛、リン原子の立体化学が制御された PB/PS-キメラ DNA の合成、日本化学会第 99 春季年会(2019)、兵庫、3月16日(2019).
249. 末永拓、前田雄介、原倫太郎、佐藤一樹、和田猛、カチオン性ペプチドを用いた RNase H による切断位置の制御、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11月23日(2018).
250. 松田浩昌、伊藤弘暁、首藤智仁、植原渉、原倫太郎、和田猛、H-ボラノホスホネート法によるボラン修飾型 RNA の固相合成、日本核酸医薬学会第 4 回年会、福岡、7月9日(2018).
251. Hara, R., Wada T., Improvement of single mismatch discrimination in RNase H cleavage by artificial cationic oligosaccharides, 日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月23日(2018).
252. 飯田智祥、吉野怜次郎、原倫太郎、和田猛、A 型二本鎖核酸結合分子を利用した人工リボヌクレアーゼの合成と性質評価、日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月20日(2018).
253. 西根豊、新坂英矩、原倫太郎、和田猛、モルフォリノ核酸の立体選択的合成法の開発、日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月21日(2018).
254. Goto, K., Iida, T., Hara, R., Wada, T., Cleavage of P-modified RNA by metal ion complexes 日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月21日(2018).
255. 小暮智紀、齋藤竜也、濱村友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、原倫太郎、和田猛、オキサザホスホリジン法によるボラノホスフェート DNA の立体選択的合成と性質評価、
256. 日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月21日(2018).
257. Imai, H., Abe, T., Uchiyama, N., Saito, K., Hara, R., Wada, T., Stereoselective synthesis of boranophosphate DNA by the boranophosphotriester approach, 日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月21日(2018).
258. Namioka, Y., Igarashi, A., Sato, K., Uehara, S., Hara, R., Wada, T., Solid-phase synthesis of P-modified DNA from boranophosphate DNA, 日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月21日(2018).
259. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、日本化学会第 98 春季年会、船橋、3月20日(2018).
260. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、東日本糖質若手シンポジウム、桐生、11月19日(2017).
261. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、東北糖鎖研究会・東京糖鎖研究会合同シンポジウム(第 11 回東北糖鎖研究会・Glyco TKYO 2017)東京、11月18日(2017).
262. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、第 4 回 FCCA シンポジウム グライコサイエンス若手フォーラム 2017、東京、10月28日(2017).
263. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、原倫太郎、和田猛、2017 年度 糖質科学合同セミナー、草津、9月9日(2017).
264. 白石ともみ、原倫太郎、和田猛、 β -(1 \rightarrow 4)ガラクトシド繰り返し構造を有する新規環状オリゴ糖の合成、第 36 回日本糖質学会、旭川、7月21日(2017).
265. 矢尾板絢、武田勝也、植木啓陽、石井歩、井本英之、小林慧、佐野美知、野呂美穂子、佐藤一樹、原倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣した 2-フッ化糖 1-リン酸誘導体の固相合成、第 36 回日本糖質学会、旭川、7月21日(2017).
266. 小暮智紀、齋藤竜也、濱村友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、原倫太郎、和田猛、オキサザホスホリジン法によるボラノホスフェート DNA の立体選択的合成、日本核酸医薬学会第 3 回年会、札幌、7月12日(2017).
267. 原倫太郎、前田雄介、久田有希、横田隆徳、和田猛、人工カチオン性分子によるヘテロ二本鎖核酸の高機能化、日本核酸医薬学会第 3 回年会、札幌、7月12日(2017).
268. 石井歩、日下部幸祐、加藤範行、佐々木慎一、辻川健治、和田猛、5-PPDI のヒト尿中代謝物に関する研究、日本法中毒学会第 36 年会、東京、7月6日(2017).
269. 原倫太郎、前田雄介、和田猛、二本鎖核酸結合性カチオン性人工オリゴ糖の開発と核酸医薬への応用展開、トランスレーショナルリサーチセンター第 6 回シンポジウム、東京、1月21日(2017).
270. 庄司浩輔、前田雄介、原倫太郎、和田猛、リン原子修飾型核酸の立体選択的合成を可能とするキラル縮合剤の開発、トランスレーショナルリサーチセンター第 6 回シンポジウム、東京、1月21日(2017).
271. 額賀陽平、岡夏央、和田猛、キメラ型リン原子修飾核酸の立体選択的合成と性質、日本化学会第 97

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 春季年会、神奈川、3月19日(2017).
272. 齋藤竜也、石井友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、和田猛、オキサザホスホリジン法によるボラノホスフェート DNA の立体選択的合成、日本化学会第 97 春季年会 3 月 19 日 (2017).
273. 小川裕貴、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、リン原子修飾 N-アセチルマンノサミン- α 1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第 97 春季年会、神奈川、3 月 16 日 (2017).
274. 佐野美知、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖 1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第 97 春季年会、神奈川、3 月 16 日 (2017).
275. 矢尾板絢、武田勝也、植木啓陽、石井歩、井本英之、小林慧、佐野美知、野呂美穂子、佐藤一樹、原倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣した 2-フッ化糖 1-リン酸誘導体の固相合成、日本化学会第 97 春季年会、神奈川、3 月 16 日 (2017).
276. Iida, T., Yoshino, R., Hara, R., Wada, T., Development of artificial ribonucleases using A-type duplex-bindable oligodiaminogalactose derivatives. 日本化学会第 97 春季年会, March 17 (2017).
277. Shoji, K., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Development of chiral condensing reagents for the stereocontrolled synthesis of phosphorus-modified oligonucleotide analogs. 日本化学会第 97 春季年会, March 17 (2017).
278. 佐伯祐樹、伊藤弘暁、額賀陽平、植原渉、和田猛、H-ボラノホスホネート法によるボラノホスフェート型アンチセンス核酸の合成、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月16日(2016).
279. 前田雄介、岩田倫太郎、坂本泰一、和田猛、核酸医薬に結合する新規カチオン性人工ペプチドの合成と性質、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 25 日(2016).
280. 阿部拓真、齋藤敬太、内山直樹、和田猛、ケイ素原子を有する不斉補助基を利用したボラノホスホリエステル法によるボラノホスフェート DNA の立体選択的合成、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 27 日(2016).
281. 小川裕貴、野呂美穂子、岩田倫太郎、和田猛、リン原子修飾 N-アセチルマンノサミン- α 1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 24 日(2016).
282. 佐野美知、野呂美穂子、岩田倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖 1-リン酸アナログの立体選択的合成、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 24 日(2016).
283. 篠田貴昭、中田拓也、水嶋勇樹、伊藤弘暁、額賀陽平、和田猛、2'-デオキシヌクレオシド 5'-ホスファイトをモノマーとする無保護 DNA 合成法の開発、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 27 日(2016).
284. 吉野怜次郎、額賀陽平、岩田倫太郎、和田猛、5 位修飾ウラシルを含むホスホロチオエート DNA の立体選択的合成と性質評価、日本化学会第 96 春季年会、京都、3 月 27 日(2016).
285. 原(岩田)倫太郎、前田雄介、坂本泰一、和田猛、RNA 二重鎖特異的に結合するカチオン性オリゴ糖の開発と核酸医薬への応用展開、第 35 回日本糖質学会年会、高知、9 月 3 日(2016).
286. 佐野美知、野呂美穂子、原倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣したリン原子修飾糖 1-リン酸アナログの立体選択的合成、第 35 回日本糖質学会年会、高知、9 月 3 日(2016).
287. Mitsuhashi, Y., Saito, K., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Solid-phase synthesis of oligopeptides containing sterically hindered amino acids using PyNTP as a condensing reagent. The 53rd Japanese Peptide Symposium, Kyoto, Japan, October 27(2016).
288. 原倫太郎、前田雄介、久田有希、二俣沙央里、秋本和憲、和田猛、カチオン性人工オリゴ糖による二本鎖型核酸医薬の高機能化、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
289. 吉野怜次郎、額賀陽平、前田雄介、原倫太郎、和田猛、5 位修飾ピリミジンを含むホスホロチオエート DNA の立体選択的合成と性質、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
290. 齋藤竜也、濱村友香、額賀陽平、内山直樹、岩本直樹、和田猛、オキサザホスホリジン法によるボラノホスフェート DNA の立体選択的合成、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月15日(2016).
291. 篠田貴昭、中田拓也、水嶋勇樹、額賀陽平、和田猛、2'-デオキシヌクレオシド 5'-ホスファイトをモノマーとする核酸塩基無保護 DNA 合成法の開発、日本核酸医薬学会第2回年会、東京、11月16日(2016).
292. 岩田倫太郎、中山太、廣地咲恵、佐藤一樹、仁科一隆、横田隆徳、和田猛、RNA 二重鎖を認識する新規カチオン性人工ペプチドの合成鎖結合性分子とビタミン E を組み合わせた siRNA キャリア分子の開発、第 26 回ビタミン E 研究会、東京、1 月 10 日(2015).
293. 前田雄介、額賀陽平、岩田倫太郎、和田猛、立体制御したホスホロチオエート型核酸とカチオン性人工ペプチドとの相互作用解析、日本化学会第 95 春季年会、千葉、3 月 26 日 (2015).
294. 久田有希、岩田倫太郎、前田雄介、和田猛、グアニジル基を有するオリゴジアミノガラクトース誘導体

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- の合成および核酸二重鎖との相互作用、日本化学会第 95 春季年会、千葉、3 月 26 日 (2015)。
295. 武田勝也、野呂美穂子、小林慧、岩田倫太郎、和田猛、Leishmania 由来糖鎖構造を模倣した 2-フッ化糖 1-リン酸誘導体の合成、日本化学会第 95 春季年会、千葉、3 月 29 日 (2015)。
296. 額賀陽平、岡夏央、和田猛、PO/PS および PO/PB キメラ RNA オリゴマーの立体選択的合成と性質、日本核酸医薬学会第 1 回年会、京都、11 月 30 日 (2015)。
297. 前田雄介、岩田倫太郎、坂本泰一、和田猛、核酸医薬を高活性化する新規カチオン性人工ペプチドの合成、日本核酸医薬学会第 1 回年会、京都、11 月 30 日 (2015)。
298. 額賀陽平、岡夏央、前田雄介、和田猛、リン原子の立体を制御した PO/PS キメラ DNA オリゴマーの自動固相合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム 2014、東京、9 月 9 日 (2014)。
299. 前田雄介、岩田倫太郎、和田猛、核酸医薬の高活性化を目指した新規カチオン性人工ペプチドの合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム 2014、東京、9 月 8 日 (2014)。
300. 伊藤弘暁、首藤智仁、植原渉、和田猛、2'-O-CEM 保護 H-ボラノホスホネート法によるボラン修飾型 RNA 類縁体の固相合成、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム 2014、東京、9 月 9 日 (2014)。
301. 岩田倫太郎、前田雄介、土井明子、和田猛、二重鎖型核酸医薬への応用を指向した人工オリゴジアミノ糖の開発、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム 2014、東京、9 月 9 日 (2014)。
302. 仁科智子、沼田純奈、仁科一隆、田中規恵、新田佳子、朴文英、岩田倫太郎、桑原宏哉、和田猛、横田隆徳、トコフェロール結合アンチセンスオリゴヌクレオチドの開発、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム 2014、東京、9 月 8 日 (2014)。
303. 前田雄介、岩田倫太郎、和田猛、Properties of nucleic acid duplex binding peptides which control the nuclease activity. 第 51 回ペプチド討論会、徳島、10 月 23 日 (2014)。
- 国際会議
304. Suenaga, T., Mitsuhashi, Y., Maeda Y., Hara, R., Sato, K., Wada, T., Control of cleavage sites by RNase H using cationic oligopeptides, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018 (ISNAC2018) / The 2nd Annual Meeting of Japan Society of Nucleic Acids Chemistry (日本核酸化学会第 2 回年会), Kyoto, Japan, November 8 (2018)。
305. Imai, H., Shuto, T., Hara, R., Sato, K., Wada, T., Solid-phase synthesis of phosphate/boranophosphate (PO/PB) chimeric oligodeoxyribonucleotides by the H-boranophosphonate-H-phosphonate method, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018 (ISNAC2018) / The 2nd Annual Meeting of Japan Society of Nucleic Acids Chemistry (日本核酸化学会第 2 回年会), Kyoto, Japan, November 8 (2018)。
306. Shoji, K., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Development of Chiral Condensing Reagents for the Stereocontrolled Synthesis of Phosphorus-modified Oligonucleotide Analogs, The 44th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, September 14 (2017)。
307. Kogure, T., Saito, T., Hamamura, Y., Nukaga, Y., Uchiyama, N., Iwamoto, N., Hara, R., Wada, T., Stereocontrolled synthesis of boranophosphate DNA by an oxazaphospholidine approach and evaluation of their properties, The 44th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, September 14 (2017)。
308. Namioka, Y., Igarashi, A., Sato, K., Uehara, S., Hara, R., Wada, T., Synthesis of P-modified DNA from boranophosphate DNA, The 44th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, September 14 (2017)。
309. Iida, T., Yoshino, R., Hara, R., Wada, T., Synthesis and properties of oligodiaminogalactose derivatives bearing RNA-cleaving agents, The 44th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, September 14 (2017)。
310. Suenaga, T., Maeda, Y., Hara, R., Wada, T., Synthesis and properties of L-2,4-diaminobutyric acid 8mer (Dab8)-conjugated antisense oligonucleotides, The 44th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, September 14 (2017)。
311. Nukaga, Y., Oka, N., and Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PB Chimeric Oligoribonucleotides. ISNAC2016. The 43th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 29 (2016)。
312. Shinoda, T., Nakada, T., Mizushima, Y., Ito, H., Nukaga, Y., and Wada, T., Solid-phase synthesis of DNA using base-unprotect 2'-deoxyribonucleoside 5'-phosphites as monomer units. ISNAC2016. The 43th

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 27 (2016).
313. Yoshino, R., Nukaga, Y., Hara, R., and Wada, T., Stereocontrolled synthesis and properties of phosphorothioate DNA containing C5-modified pyrimidine derivatives. ISNAC2016. The 43th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 27 (2016).
314. Iwamoto, N., Meena, Butler, D., Svrzikapa, N., Zlatev, I., Wada, T., Verdine, G., Optimization of Therapeutic Phosphorothioate Oligonucleotides by P-Chirality Control. International Symposium for Medicinal Sciences, Kobe, Japan, March 27 (2015).
315. Iwata, R., Maeda, Y., Sakamoto, T., Wada, T., Artificial Cationic Oligosaccharides as Carriers for Nucleic Acid Drugs. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 23 (2015).
316. Nukaga, Y., Oka, N., Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PS-chimeric Oligoribonucleotides. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 24 (2015).
317. Ito, H., Shuto, T., Uehara, S., Wada, T., Solid-phase Synthesis of Boron-containing RNA Analogs by the 2'-O-CEM-protected H-boranophosphonate. ISNAC 2015 The 42th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Hyogo, Japan, September 24 (2015).
318. Wada, T., Stereocontrolled Synthesis of Boron-containing Oligonucleotides as Therapeutic Agents. Pacifichem 2015, Hawaii, USA, December 15(2015).
319. Iwata, R., Nakayama, F., Hirochi, S., Maeda, Y., Piao, W., Nishina, K., Yokota, Wada, T., RNA Duplex Binding Molecules as Carriers for siRNAs. Pacifichem 2015, Hawaii, USA, December 16 (2015).
320. Nukaga, Y., Oka, N., Wada, T., Synthesis and Properties of P-stereodefined PO/PS-chimeric Oligoribonucleotides. Pacifichem 2015, Hawaii, USA, December 17 (2015).
321. Wada, T., Uehara, S., Synthesis of LNA-modified Branophosphonate DNA by the H-Boranophosphonate Method. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
322. Iwata, R., Maeda, Y., Wada, T., RNA Duplex-Selective Binding of Oligodiaminogalactose Derivatives. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
323. Maeda, Y., Iwata, R., Wada, T., Properties of Cationic Peptides with Shorter Side Chain Lengths which Bind to A-Type Nucleic Acid Duplexes. XXI ROUND TABLE ON NUCLEOSIDES, NUCLEOTIDES AND NUCLEIC ACIDS, Poznan, Poland, August 24-28 (2014).
324. Wada, T., New Synthetic Approaches to Oligonucleotide Therapeutics. OTS annual meeting 2014, California, U.S.A., October 12-15 (2014).
325. Iwata, R., Maeda, Y., Wada, T., Double-stranded RNA binding properties of oligodiaminogalactose derivatives. 第 41 回国際核酸化学シンポジウム(ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
326. Maeda, Y., Iwata, R., Wada, T., Properties of Nucleic Acid Duplex Binding Peptides which Affect the Nuclease Activity. 第 41 回国際核酸化学シンポジウム(ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
327. Nukaga, Y., Oka, N., Maeda, Y., Wada, T., Stereocontrolled Synthesis of PO/PS Chimeric Oligodeoxyribonucleotides by the Oxazaphospholidine Approach. 第 41 回国際核酸化学シンポジウム (ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
328. Hisada, Y., Iwata, R., Wada, T., Synthesis and Properties of Guanidyl Group-containing Oligodiaminosaccharide Derivatives Binding to Nucleic Acid Duplexes. 第 41 回国際核酸化学シンポジウム(ISNAC 2014 The 41th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014), Fukuoka, Japan, November 5 (2014).
- 招待講演
329. 和田猛, 核酸医薬の化学合成的アプローチ, 味の素株式会社内研究所員向けの講演会, 神奈川, 2018.
330. Wada, T., Artificial cationic oligopeptides that stabilize and activate nucleic acid therapeutics. International symposium for the drug-discovery of the pyrrole-imidazole polyamides as novel

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- biomedicines, Tokyo, Japan, February 24 (2017).
331. Wada, T., Stereocontrolled synthesis and properties of boranophosphate DNA, FISNA2017,兵庫,(2017).
332. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化に向けた分子技術の開発, 第1回東京理科大学薬学部・獨協医科大学越谷病院 学術講演会,埼玉,(2017).
333. 和田猛,リン原子修飾核酸の立体選択的合成と医薬への応用, 第3回日本筋学会学術集会,東京,(2017).
334. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化に向けた新しい分子技術の開発, 第17回 CBSM 2017,静岡,(2017).
335. 和田猛,核酸医薬への有機化学的アプローチ, 第2回 LiHub フォーラム-アカデミア創薬イノベーション,東京,(2017).
336. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化へ向けた分子技術の開発, BioJapan2017,神奈川,(2017).
337. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化を実現する分子技術, 第36回日本認知症学会学術集会,石川,(2017).
338. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化へ向けた分子技術の開発, 大塚有機合成シンポジウム2017,徳島,(2017).
339. 和田猛,厳密な立体構造認識に基づく核酸医薬の機能制御, 国立精神・神経医療研究センター 平成29年度 研究班会議プログラム,東京,(2017).
340. 和田猛,RNAi 医薬の安定化と活性化に向けた新分子技術の開発, 2017年度 生命科学系学会合同年次大会 ConBio2017(第40回分子生物学会年会、第90回日本生化学会大会),兵庫,(2017).
341. Wada, T., Artificial cationic oligopeptides that stabilize and activate nucleic acid therapeutics. International symposium for the drug-discovery of the pyrrole-imidazole polyamides as novel biomedicines, Tokyo, Japan, February 24 (2017).
342. 和田猛,核酸医薬創製への挑戦、ライフサイエンス交流会 in 柏の葉、千葉、5月27日(2016).
343. Wada, T., Development of new molecular technologies for oligonucleotide therapeutics.
344. FISNA2016, Hyogo, Japan, July 8 (2016).
345. 和田猛,RNA 医薬の安定化と活性化に向けた新分子技術の開発、第8回日本 RNAi 研究会、第3回細胞外小胞学会、広島、9月1日 (2016).
346. Wada, T., New molecular technologies for stabilization and activation of oligonucleotide therapeutics. A3RONA&CPRH Fukuoka2016, Fukuoka, Japan, September 23 (2016).
347. 和田猛,核酸医薬の実用化に向けた新しい分子技術の開発、第2回東京理科大学・東京慈恵会医科大学合同シンポジウム、東京、10月1日(2016).
348. 和田猛,核酸医薬の安定化と高活性化に向けた新規分子技術の開発、BioJapan2016、神奈川、10月12日(2016).
349. 和田猛,核酸医薬の安定化と薬理活性の向上を実現する分子技術、技術情報協会セミナー(No.611119)、東京、11月25日(2016).
350. 和田猛,リンのキラリティー制御によるホスホロチオエートアンチセンス DNA の最適化、第7回 Asia TIDES 2015、大阪、3月3日(2015).
351. 和田猛,RNA 制御を基盤とした創薬研究の潮流、日本薬学会第135回年会、兵庫、3月26日(2015).
352. 和田猛,核酸医薬への有機化学的アプローチ、FIBER 未来大学核酸化学最前線フォーラム、兵庫、7月9日(2015).
353. 和田猛,核酸医薬への有機合成化学的アプローチ、第52回薬剤学懇談会研究討論会、石川、7月16日(2015).
354. Wada, T., New Synthetic Approaches to Oligonucleotide Therapeutics. Asian 3 Roundtable on Nucleic Acids 2015, Suwon, Korea, September 19 (2015).
355. 和田猛,リン原子の立体制御によるホスホロチオエートアンチセンス DNA の高活性化、アンチセンス・遺伝子・デリバリーシンポジウム2014、東京、9月9日(2014).
356. 和田猛,核酸医薬への合成化学的アプローチ、大阪大学、大阪、10月7日(2014).
357. 和田猛, Artificial cationic oligopeptides as carriers for nucleic acid therapeutics, Asian 3 Roundtable on Nucleic Acids 2014、中国・アモイ大学、10月18日(2014).

鳥越秀峰
国内学会

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

358. 安達咲希、荒川章裕、小野晶、鳥越秀峰 “5-フルオロウラシル塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合”、日本化学会第 99 春期年会、神戸、3 月 16 日(2019).
359. 寺村拓真、鳥越秀峰 “リン酸化酵素 Nek6 によるリン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日(2018).
360. 安藤千尋、柴田篤志、鳥越秀峰 “リン酸化酵素 Cdk1 によるリン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日(2018).
361. 新村真依子、杉山航太、木内一樹、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 29 日(2018).
362. 新村真依子、杉山航太、木内一樹、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3 本鎖核酸と 3 本鎖核酸結合蛋白質による遺伝子発現制御”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 29 日(2018).
363. 松野悠介、熱海悠子、藤森遥、清水敦弘、大澤智之、鳥越秀峰、白川仁、吉岡研一 “レスベラトロール関連化合物はゲノム安定性維持に貢献する”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 28 日(2018).
364. 大澄昌輝、佐藤加奈、久保江理郁、田中美穂、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”、第 41 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 28 日(2018).
365. 寺村拓真、鳥越秀峰 “リン酸化酵素 Nek6 によるリン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11 月 23 日(2018).
366. 新村真依子、杉山航太、木内一樹、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3 本鎖核酸と 3 本鎖核酸結合蛋白質による遺伝子発現制御”、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11 月 23 日(2018).
367. 大澄昌輝、佐藤加奈、久保江理郁、田中美穂、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11 月 23 日(2018).
368. 安藤千尋、柴田篤志、鳥越秀峰 “リン酸化酵素 Cdk1 によるリン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11 月 23 日(2018).
369. 松野悠介、熱海悠子、藤森遥、清水敦弘、大澤智之、鳥越秀峰、白川仁、吉岡研一 “レスベラトロール関連化合物はゲノム安定性維持に貢献する”、第 2 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、横浜、11 月 23 日(2018).
370. Yaguchi, A., Ono, A., Kondo, J., Torigoe, H. “Thermodynamic Properties of the Specific Binding of 4-Thiothymine to Each of Thymine and Cytosine in Mismatched Duplex DNA by Different Metal Ions”, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018, Kyoto, Japan, November 9 (2018).
371. Adachi, S., Arakawa, F., Ono, A., Torigoe, H. “Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pair Involving 5-Carboxycytosines”, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018, Kyoto, Japan, November 8 (2018).
372. Arakawa, F., Yaguchi, A., Ono, A., Kondo, J., Torigoe, H. “Thermodynamic Properties of the Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pairs Involving 5-Hydroxyuracil or 5-Hydroxycytosines”, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018, Kyoto, Japan, November 7 (2018).
373. Shimmura, M., Sugiyama, K., Kiuchi, K., Sato, N., Katayama, T., Torigoe, H. “Regulation of Gene Expression by Triplex Nucleic Acid and Triplex Nucleic Acid-Binding Proteins”, The 45th International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2018, Kyoto, Japan, November 7 (2018).
374. 矢口礼望、小野 晶、鳥越秀峰 “核酸と金属イオンの新規特異的結合の熱力学的特性”、第 54 回熱測定討論会、横浜、11 月 1 日(2018).
375. 新村真依子、木内一樹、鳥越秀峰 “3 本鎖 DNA 結合タンパク質と 3 本鎖 DNA の特異的結合の熱力学的特性”、第 54 回熱測定討論会、横浜、10 月 31 日(2018).
376. 安藤千尋、柴田篤志、鳥越秀峰 “リン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”、第 91 回日本生化学会大会、京都、9 月 26 日(2018).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

377. 安藤千尋、増田翔、柴田篤志、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰 “翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発”、第 91 回日本生化学会大会、京都、9 月 26 日(2018).
378. 新村真依子、杉山航太、木内一樹、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構と転写活性への影響の解析”、第 18 回日本蛋白質科学会年会、新潟、6 月 28 日(2018).
379. 西田泰貴、大澄昌輝、鳥越秀峰 “細胞内光架橋法による出芽酵母内蛋白質間相互作用の解析”、第 18 回日本蛋白質科学会年会、新潟、6 月 27 日(2018).
380. Akiba, R., Torigoe, H. “Target Gene Detection by the Peroxidase Activity of the Complex between Hemin and Split G-triplex DNA in the Presence of Metal Ion”, 第 27 回金属の関与する生体関連反応シンポジウム、東京、6 月 17 日(2017).
381. Yaguchi, A., Ono, A., Torigoe, H. “Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pair Involving 4-Thiothymine”, 第 27 回金属の関与する生体関連反応シンポジウム、東京、6 月 16 日(2017).
382. Arakawa, F., Yaguchi, A., Ono, A., Torigoe, H. “Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pair Involving 5-Hydroxyuracil”, 第 27 回金属の関与する生体関連反応シンポジウム、東京、6 月 16 日(2017).
383. Akiba, R., Torigoe, H. “Target Gene Detection by the Peroxidase Activity of the Complex between Hemin and Split Quadruplex DNA in the Presence of Lead Ion”, 第 27 回金属の関与する生体関連反応シンポジウム、東京、6 月 16 日(2017).
384. 田村理紗、森雅正、立澤桜子、鳥越秀峰 “シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法の効率化”第 17 回日本蛋白質科学会年会、仙台、6 月 22 日(2017).
385. 増田翔、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰 “SUMO 化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”第 17 回日本蛋白質科学会年会、仙台、6 月 22 日(2017).
386. 柴田篤志、鳥越秀峰 “リン酸化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”第 17 回日本蛋白質科学会年会、仙台、6 月 22 日(2017).
387. 佐藤加奈、久保江理郁、田中美穂、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”第 1 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、東京、9 月 16 日(2017).
388. 田村理紗、森雅正、立澤桜子、鳥越秀峰 “シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法の開発”第 1 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、東京、9 月 16 日(2017).
389. 増田翔、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰 “SUMO 化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発”第 1 回東京理科大学-横浜市立大学合同シンポジウム、東京、9 月 16 日(2017).
390. Arakawa, F., Yaguchi, A., Ono, A., Torigoe, H. “Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pair Involving 5-Position Modified Cytosines”, The 44rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, November 15(2017).
391. Akiba, R., Torigoe, H. “Split G-triplex DNA-Hemin Complex Exhibits Peroxidase Activity to Detect Target Gene”, The 44rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, November 15(2017).
392. Yaguchi, A., Deguchi, K., Torigoe, H. “Quadruplex DNA Structures of A Series of Tandemly Repeated Thrombin Binding Aptamer Sequences and Their Application to Remove Lead(II)”, The 44rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, November 15(2017).
393. Akiba, R., Torigoe, H. “Lead(II)-Specific Peroxidase Activity of Split Quadruplex DNA-Hemin Complex to Detect Target Gene”, The 44rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2017, Tokyo, Japan, November 16(2017).
394. 佐藤加奈、久保江理郁、田中美穂、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節”第 40 回日本分子生物学会・第 90 回日本生化学会大会合同年会、神戸、12 月 6 日(2017).
395. 田村理紗、森雅正、立澤桜子、鳥越秀峰 “シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法の開発”第 40 回日本分子生物学会・第 90 回日本生化学会大会合同年会、神戸、12 月 6 日(2017).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

396. 増田翔、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰 “SUMO 化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現精製する方法の開発” 第 40 回日本分子生物学会・第 90 回日本生化学会大会合同年会、神戸、12 月 6 日(2017).
397. 増田翔、小島駿、星野秀和、柴田篤志、鳥越秀峰 “翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発” 第 40 回日本分子生物学会・第 90 回日本生化学会大会合同年会、神戸、12 月 9 日(2017).
398. 秋葉涼、鳥越秀峰 “鉛イオン存在下で形成されるスプリット 4 本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出” 日本化学会第 97 春期年会、横浜、3 月 19 日(2017).
399. 荒川章裕、矢口礼望、小野晶、鳥越秀峰 “5-ヒドロキシウラシル塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合” 日本化学会第 97 春期年会、横浜、3 月 19 日(2017).
400. 立澤 桜子、森 雅正、鳥越 秀峰、シャペロン介在性オートファジーを利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法開発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第 3 回シンポジウム/研究交流会、葛飾、1 月 23 日(2016).
401. 秋葉涼、矢口礼望、橋詰佑紀子、鳥越秀峰、複数の DNA 断片が集合して形成する 4 本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出、日本化学会第 96 春期年会、京都、3 月 24 日(2016).
402. 矢口礼望、秋葉涼、出口加奈子、小野晶、鳥越秀峰、4-チオチミン塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合、日本化学会第 96 春期年会、京都、3 月 25 日(2016).
403. 杉山航太、木内一樹、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 形成および 3 本鎖 DNA 結合蛋白質が T7 RNA ポリメラーゼの転写活性に及ぼす影響、日本化学会第 96 春期年会、京都、3 月 25 日(2016).
404. 柴田篤志、小島駿、星野秀和、鳥越秀峰 “翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発” 第 16 回日本蛋白質科学会年会、博多、6 月(2016).
405. 田中美穂、久保江理郁、佐藤加奈、前角直人、竹原 喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節” 第 89 回日本生化学会大会、仙台、9 月 25 日(2016).
406. 小林百合香、佐々木遥、荘司健太、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰 “マウステロメア結合蛋白質 Pot1a/b と DNA ポリメラーゼ α プライマーゼの相互作用解析” 第 89 回日本生化学会大会、仙台、9 月 25 日(2016).
407. 柴田篤志、鳥越秀峰 “リン酸化修飾を受けた組換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発” 第 89 回日本生化学会大会、仙台、9 月 27 日(2016).
408. 小島駿、西田泰貴、増田翔、星野秀和、鳥越秀峰 “SUMO 化修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発” 第 89 回日本生化学会大会、仙台、9 月 27 日(2016).
409. 鳥越秀峰、小野 晶、小笹哲夫 “DNA の複数のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合に見られる正の協同効果” 第 52 回熱測定討論会、徳島、9 月 30 日(2016).
410. 矢口礼望、出口加奈子、小野晶、近藤次郎、鳥越秀峰 “4-チオチミン塩基を含むミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合” 第 6 回日本化学会化学フェスタ 2016、船堀、11 月 16 日(2016).
411. Kiuchi, K., Sugiyama, K., Kishi, R., Unzai, S., Torigoe, H. “Molecular Mechanism of the Triplex DNA-binding Protein to Recognize Triplex DNA” 第 54 回日本生物物理学会年会、つくば、11 月 26 日(2016).
412. 木内一樹、杉山航太、岸遼太郎、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構と遺伝子発現制御機構” 第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 30 日 (2016).
413. 久保江理郁、田中美穂、佐藤加奈、前角直人、竹原喬、鳥越秀峰 “分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節” 第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、12 月 1 日 (2016).
414. 西田泰貴、柴田篤志、小島駿、増田翔、星野秀和、鳥越秀峰 “出芽酵母テロメア結合蛋白質間相互作用に関する解析” 第 39 回日本分子生物学会年会、横浜、12 月 1 日 (2016).
415. 森亮一、鳥越秀峰、皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンスオリゴ核酸の開発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第 1 回公開セミナー、野田、1 月 10 日(2015).
416. 小島駿、柴田篤志、星野秀和、鳥越秀峰、翻訳後修飾を受けた組み換え蛋白質を大腸菌内で発現する方法の開発、日本化学会第 95 春期年会、船橋、3 月 27 日(2015).
417. 橋詰佑紀子、真嶋司、片平正人、鳥越秀峰、ヘミン-4 本鎖 RNA 複合体のペルオキシダーゼ活性によるプリオン検出、日本化学会第 95 春期年会、船橋、3 月 27 日(2015).
418. 森亮一、鳥越秀峰、2 型糖尿病における皮膚創傷治癒改善を指向したアンチセンスオリゴ核酸の開

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 発、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第 2 回シンポジウム/研究交流会、葛飾、8 月 29 日 (2015).
419. Torigoe, H., Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., and Katayama, T., Molecular Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA. 第 53 回日本生物物理学会年会、金沢、9 月 13 日 (2015).
420. 鳥越秀峰、小比賀聡、佐々木澄美、3 本鎖核酸形成用単鎖核酸の化学修飾が 3 本鎖核酸形成に及ぼす効果、第 51 回熱測定討論会、鳩山、埼玉、10 月 9 日(2015).
421. 出口加奈子、小野晶、鳥越秀峰、2 本鎖 DNA における Pyrrolo dC 塩基を含むミスマッチ塩基対と銀イオンの特異的相互作用および一塩基多型の効率的検出への利用、第 5 回日本化学会化学フェスタ 2015、船堀、10 月 15 日(2015).
422. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構、第 5 回日本化学会化学フェスタ 2015、船堀、10 月 15 日(2015).
423. 近藤次郎、野村祐介、北原佑季子、小比賀聡、鳥越秀峰、2',4'-BNANC[N-Me]修飾をもつアンチセンスギャップマーの X 線結晶解析、日本核酸医薬学会第 1 回年会、京都、11 月 30 日(2015).
424. 木内一樹、佐々木澄美、杉山航太、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、人工的遺伝子発現制御法であるアンチジーン法の実用化を指向した 3 本鎖 DNA 結合蛋白質 STM1 による 3 本鎖 DNA 形成促進、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 2 日 (2015).
425. 出口加奈子、矢口礼望、秋葉涼、小野晶、鳥越秀峰、金属イオンとミスマッチ塩基対の特異的結合による一塩基多型の効率的検出法の開発、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 2 日(2015).
426. 小林百合香、荘司健太、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タンパク質 Tpp1,Tin2 に依存した Pot1a/b の核局在と複合体形成解析、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日(2015).
427. 荘司健太、小林百合香、水野武、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タンパク質シエルタリンの複合体形成機構の解明-Tin2 の機能ドメイン解析を通じて-、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日(2015).
428. 田中美穂、前角直人、久保江理郁、大村勇樹、阿部貴春、竹原 喬、鳥越秀峰、分裂酵母テロメア結合蛋白質間相互作用によるテロメア長調節、第 38 回日本分子生物学会年会・第 88 回日本生化学会大会合同大会、神戸、12 月 3 日(2015).
429. 立澤桜子、森雅正、鳥越秀峰、シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に分解する新規手法の開発、第 14 回日本蛋白質科学会年会、横浜、6 月 26 日(2014).
430. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構、第 14 回日本蛋白質科学会年会、横浜、6 月 26 日(2014).
431. 木内 一樹、間瀬 貴久江、鳥越 秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構、第 8 回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9 月 12 日(2014).
432. 出口 加奈子、鳥越 秀峰、4 本鎖 DNA 構造形成を利用した鉛イオンの新規濃度測定法と除去法の開発、第 8 回バイオ関連化学シンポジウム、岡山、9 月 12 日(2014).
433. 田中好幸、大樂武範、古板恭子、吉川晶子、根東義則、鳥越秀峰、小野晶、岡本到、Vladimir Sychrovsky、近藤次郎、児嶋長次郎、水銀を介したチミン-チミン塩基対の構造化学研究:金属錯体の NMR 分光パラメータ測定用プラットフォームとしての DNA 分子、錯体化学会第 64 回討論会、東京、9 月 18 日-20 日(2014).
434. 鳥越秀峰、小野晶、小笹哲夫、DNA のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合の熱力学的特性、第 50 回記念熱測定討論会、大阪、9 月 29 日(2014).
435. 木内一樹、間瀬貴久江、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰、3 本鎖 DNA 結合蛋白質の 3 本鎖 DNA 認識機構の解析、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 16 日(2014).
436. 田中美穂、阿部貴春、前角直人、鳥越秀峰、テロメア長調節機構の解明を目指した分裂酵母テロメア結合蛋白質間の相互作用解析、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 16 日(2014).
437. 森雅正、立澤桜子、鳥越秀峰、シャペロン介在性オートファジー機構を利用した標的蛋白質を人工的に直接分解する新規手法の開発、第 87 回日本生化学会大会、京都、10 月 17 日(2014).
438. 小林百合香、荘司健太、水野武、伊藤岳、花岡文雄、今本尚子、鳥越秀峰、マウステロメア結合タン

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

パク質 Tpp1, Tin2 に依存した Pot1a/b の核局在と複合体形成解析、第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日(2014).

439. Tanaka, M., Maezumi, N., Ohmura, Y., Abe, T., Takehara, T., Torigoe, H., Molecular Mechanism of the Interactions among Fission Yeast Telomere Binding Proteins, 第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日 (2014).
440. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., Torigoe, H., Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA, 第 37 回日本分子生物学会年会、横浜、11 月 27 日 (2014).

国際会議

441. Yaguchi, A., Akiba, R., Ono, A., Torigoe, H. "Specific Binding between Metal Ion and Mismatched Base Pair Involving 4-Thiothymine", The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
442. Sugiyama, K., Kiuchi, K., Torigoe, H. "Effect of Triplex DNA Formation and Triplex DNA Binding Proteins on Transcriptional Activity of T7 RNA Polymerase", The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
443. Akiba, R., Yaguchi, A., Torigoe, H. "Target Gene Detection by Peroxidase Activity of Split G-quadruplex/Hemin Complex with Lead Ion", The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
444. Arakawa, F., Yaguchi, A., Ono, A., Torigoe, H. "Interaction between Metal Ion and Mismatched Duplex DNA with 5-Hydroxyuracil or 5-Hydroxycytosine", The 43rd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2016, Kumamoto, Japan, September 28 (2016).
445. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., Torigoe, H., Molecular Mechanism of Triplex DNA-binding Proteins to Recognize Triplex DNA. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 23 (2015).
446. Akiba, R., Yaguchi, A., Hashizume, Y., Torigoe, H., Colorimetric Detection of Target Genes by G-quadruplex Probes with Split Mode and Their Peroxidase-like Catalytic Activity in the Presence of Hemin. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 23 (2015).
447. Deguchi, K., Ono, A., Torigoe, H., Specific Interaction between Ag⁺ and Mismatched Pyrrolo-dC-modified Duplex DNA and Its Application to SNP Detection. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 24 (2015).
448. Yaguchi, A., Akiba, R., Ono, A., Torigoe, H., Interaction between Metal Ion and Mismatched Thiothymine-modified Duplex DNA. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 24 (2015).
449. Torigoe, H., Deguchi, K., Ono, A., Thermodynamic Properties of the Specific Interaction between Metal Ion and Mismatched Base Pair. The 42nd International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2015, Himeji, Japan, September 25 (2015).
450. Ono, A., Okamoto, I., Urata, H., Torigoe, H., Saneyoshi, H., Kondo, J., and Tanaka, Y., Syntheses of DNA Duplexes Containing Metal Ion Mediated Base Pairs, 12th European Biological Inorganic Chemistry Conference, Zurich, Switzerland, August 24-28 (2014).
451. Tanaka, Y., Okamoto, I., Furuita, K., Šebera, J., Kondo, J., Torigoe, H., Urata, H., Dairaku, T., Ono, A., Kojima, C., and Sychrovský, V., NMR Spectroscopic Studies on Metallo-base-pair in DNA Duplex, 12th European Biological Inorganic Chemistry Conference, Zurich, Switzerland, August 24-28 (2014).
452. Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., Katayama, T., and Torigoe, H., Promotion of Antiparallel Triplex DNA Formation by Budding Yeast Triplex DNA Binding Protein Stm1, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 5 (2014).
453. Deguchi, K., and Torigoe, H., Development of a Method to Remove the Lead Ion: Application of Quadruplex DNA Formation Involving the Lead Ion, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 6 (2014).
454. Hashizume, Y., Katahira, M., and Torigoe, H., Detection of the Prion by the Peroxidase Activity of Hemin-Quadruplex RNA Complex, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 5 (2014).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

455. Torigoe, H., Kiuchi, K., Mase, K., Sato, N., and Katayama, T., Molecular Mechanism of Triplex DNA-Binding Proteins to Recognize Triplex DNA, The 41st International Symposium on Nucleic Acids Chemistry 2014, Kitakyushu, Japan, November 6 (2014).
- 招待講演
456. Hidetaka Torigoe, Target gene detection by the peroxidase activity of the complex between hemin and split quadruplex DNA in the presence of lead ion, 43rd International Conference on Coordination Chemistry, Sendai, 2018
457. 鳥越秀峰, 遺伝子発現の人工的制御による医薬品開発, 第2回東京理科大学・横浜市立大学合同シンポジウム, 横浜, 2018
458. 新村 真依子, 杉山 航太, 木内一樹, 佐藤憲大, 片山拓馬, 鳥越秀峰, 3本鎖核酸と3本鎖核酸結合蛋白質による遺伝子発現制御, 第41回日本分子生物学会年会, 横浜
459. 鳥越秀峰 “非 B 型 DNA とこれに結合する蛋白質や金属イオンとの相互作用を基盤とする機能性材料の創製”, 物質・デバイス領域共同研究拠点共同研究 分野融合を目指した次世代メディカル・バイオ機能材料開発シンポジウム-拠点卓越学生研究員との協働も指向して-, 仙台、2月24日(2017).
460. 鳥越秀峰 “鉛イオン存在下で形成されるスプリット4本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出”, 分子連関相乗系研究部門平成 28 年度成果報告会、東京、3月31日(2017)
461. 鳥越秀峰、複数の DNA 断片が集合して形成する4本鎖 DNA 構造とヘミンの複合体のペルオキシダーゼ活性による標的遺伝子検出、分子連関相乗系研究部門平成 27 年度成果報告会、東京、3月16日(2016).
462. 鳥越秀峰、核酸・金属イオン複合体を基盤とする機能性材料開発のための性状解析、物質・デバイス領域共同研究拠点特定研究 次世代メディカル・バイオ機能材料への展開を指向した生体分子素子技術の開発 [B-2] ポストシンポジウム-生体分子素子技術を礎とするメディカル・バイオ研究の最先端シンポジウム-, 仙台、3月18日(2016).
463. *Hidetaka Torigoe “Development of Chemically Modified Antisense Oligo- nucleotides for the Treatment of Diseases”, International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center -Frontiers in Developmental Strategy for Cancer Therapeutics-, Tokyo, June 25 (2016).
464. 木内一樹、杉山航太、岸遼太郎、佐藤憲大、片山拓馬、鳥越秀峰 “3本鎖 DNA 結合蛋白質の3本鎖 DNA 認識機構と遺伝子発現制御機構”第39回日本分子生物学会年会シンポジウム「非 B 型 DNA: ゲノム配列に隠された非標準構造の未踏機能の解明に向けて」、横浜、12月2日 (2016).
465. 鳥越秀峰、食の安全安心を指向した DNA 塩基配列多様性の新規解析法の開発、平成 26 年度グリーン&セーフティ研究センター研究成果報告会、東京、1月31日(2015).
466. 鳥越秀峰、核酸・蛋白質・金属イオン複合体を基盤とする機能性材料の構築原理の解明、平成 26 年度物質・デバイス領域共同研究拠点特定研究 次世代メディカル・バイオ機能材料への展開を指向した生体分子素子技術の開発 [B-2] 拡大シンポジウム、仙台、2月6日(2015).
467. 鳥越秀峰、核酸医薬品開発を指向した化学修飾核酸による遺伝子発現制御、第1回東京慈恵会医科大学・東京理科大学合同シンポジウム、北柏、3月7日(2015).
468. 鳥越秀峰、ヘミン-4本鎖 RNA 複合体のペルオキシダーゼ活性に関する解析、分子連関相乗系研究部門平成 26 年度成果報告会、東京、3月11日(2015).
469. 鳥越秀峰、DNA のミスマッチ塩基対と金属イオンの特異的結合と機能性材料への展開、バイオオルガノメタリクス研究部門研究交流会、東京、3月16日(2015).
470. 鳥越秀峰、ヘミン-4本鎖 RNA 複合体の酸化還元酵素活性に基づくプリオン検出、分子連関相乗系研究部門平成 26 年度夏季特別勉強会、東伊豆、9月1日(2014).
471. 鳥越秀峰、ホタテ中腸腺のカドミウムに対抗する手段に関する考察、第3回長万部シンポジウム、ホタテを科学する、長万部、11月16日(2014).
472. 鳥越秀峰、環境保全を指向した重金属イオンの新規濃度定量法と除去法の開発、グリーン&セーフティ研究センターファイナルシンポジウム、東京、12月19日(2014).

花輪剛久
国内学会

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

473. 花輪剛久, 河野弥生, 影山 理芳子, ヒアルロン酸を含有する創傷治療用外用剤の開発、医療薬学フォーラム 2018, 第 26 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 東京 (2018)
474. 花輪剛久, 河野弥生, 茂野 奈穂子, 創傷管理製品のユーザビリティに関するニーズ探索, 医療薬学フォーラム 2018, 第 26 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 東京 (2018)
475. 河野弥生, 花輪剛久, 口腔粘膜炎用口腔内フィルムの調製と評価、トランスレーショナルリサーチセンター第 6 回シンポジウム/研究交流会、1 月 21 日 (2017)
476. * 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲルの調製と評価(2)-吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、TR センター第 3 回シンポジウム、東京、1 月 23 日 (2016).
477. * 芝野優希、河野弥生、山中沙織、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日 (2016).
478. * 儘田大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(エクセバール)のハイドロゲル製剤への応用、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日 (2016).
479. 河野 弥生、花輪剛久、キシログルカンを用いた口腔粘膜炎治療用口腔内フィルムの調製と評価、第 2 回再生医療と DDS の融合研究部門シンポジウム、12 月 26 日 (2016)
480. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、オレオナノサイエンス部会シンポジウム 2016、11 月 13 日 (2016)
481. 西須裕人、河野弥生、東頭二郎、植田圭佑、森部久仁一、花輪剛久、Application of the Drug-Colestimide Complex to Drug Delivery System、オレオナノサイエンス部会シンポジウム 2016、2016 年 11 月 13 日 (2016)
482. 儘田 大、河野 弥生、花輪 剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(Exceval®)のハイドロゲル製剤への応用(2)、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日
483. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
484. 西須裕人、河野弥生、東頭二郎、植田圭祐、森部久仁一、花輪剛久、Drug-Colestimide complex における胆汁酸との交換反応を利用した DDS の構築と評価、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
485. * 影山理芳子、河野弥生、森田麻、清野慧至、花輪剛久、ヒアルロン酸の創傷治療効果の検証、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
486. * 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲル製剤の調製と評価-吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、第 60 回日本薬学会関東支部大会、2016 年 9 月 17 日 (2016)
487. * 影山理芳子、河野弥生、花輪剛久、創傷治療を目的とした外用剤の開発、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター(TR)第 5 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 8 月 27 日 (2016)
488. * 儘田大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(Exceval®)のハイドロゲル製剤への応用、総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター(TR)第 5 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 8 月 27 日 (2016)
489. 河野弥生、花輪剛久、イルソグラジンマレイン酸の口内炎への応用、第 10 回緩和医療薬学会年会、2016 年 6 月 4 日 (2016)
490. 野口太佑、河野弥生、花輪剛久、ポリ塩化ビニルの薬物担体としての応用の検討、日本薬剤学会第 31 年会、2016 年 5 月 19 日 ~ 5 月 21 日 (2016)
491. 西須裕人、河野弥生、花輪剛久、Drug-Colestimide complex における胆汁酸との交換反応を利用した DDS の構築と評価、日本薬剤学会 第 31 年会、2016 年 5 月 19 日 ~ 5 月 21 日(2016)
492. 芝野優希、河野弥生、山中沙織、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、日本薬学会第 136 年会、2016 年 3 月 28 日(2016)
493. 儘田 大、河野弥生、花輪剛久、ポリビニルアルコール系樹脂(エクセバール)のハイドロゲル製剤への応用、日本薬学会第 136 年会、2016 年 3 月 27 日(2016)
494. 庄野隼人、河野弥生、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲルの調製と評価(2)-吸水性に及ぼすポリアクリル酸の添加効果-、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

3 回シンポジウム/研究交流会、2016 年 1 月 23 日(2016)

495. Shying Chen, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Adsorbing the Poorly Water Soluble Drug on Porous Calcium Silicate by Sealed Heating Method、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、2016 年 1 月 13 日(2016)
496. 河野弥生、清水雄一郎、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物のナノ粒子化、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、2016 年 1 月 13 日(2016)
497. 後藤万侑里、河野弥生、原口珠実、吉田都、内田享弘、花輪剛久、イソソルビドの苦味軽減を考慮したゼリー製剤の調製と評価、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日(2015).
498. 細谷香織、島田洋輔、後藤了、河野弥生、花輪剛久、インドメタシンとメロニダゾール共融混合物の物理化学的性質、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日(2015).
499. 清水雄一郎、河野弥生、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物の微粒子化、日本薬剤学会第 30 年会、長崎、5 月 21 日(2015).
500. 芝野優希、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討、TR センター第 2 回シンポジウム、東京、8 月 29 日(2015).
501. 河野弥生、花輪剛久、製剤情報としての物性評価、第 2 回アカデミック・ディテリング・データベース部門シンポジウム、東京、9 月 5 日(2015).
502. 安江毅、弓削澄夏、河野弥生、花輪剛久、アンレキサノクス—オイドラギット E100 の固体分散体の調製と評価、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日(2015).
503. 陳詩陽、河野弥生、花輪剛久、多孔性ケイ酸カルシウムの難水溶性薬物の吸着担体への応用、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日(2015).
504. 八巻康宏、桑島航、田中優太、島田洋輔、河野弥生、花輪剛久、後藤了、コンゴローレッド/キシログルカンのゲル構造形成における IR スペクトルの特異値分解法を応用した状態解析、第 59 回日本薬学会関東支部大会、船橋、9 月 12 日(2015).
505. 河野弥生、清水雄一郎、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物のナノ粒子化、再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム 第 13 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム、東京、1 月 13 日(2015).
506. 原島美樹、河野弥生、吉澤一巳、廣木章博、田口光正、花輪剛久、電子線架橋によるハイドロゲル製剤の調製と製剤素材としての可能性、日本薬剤学会第 29 年会、大宮、5 月 22 日(2014).
507. 河野弥生、平野愛、竹村裕、伊藤雅昭、青木伸、花輪剛久、大腸癌切除術後の縫合部補強用粘膜付着製剤の調製、日本薬剤学会第 29 年会、大宮、5 月 22 日(2014).
508. 大津早紀、河野弥生、荒俣章文、花輪剛久、フッ素コーティングガラスと医薬品の相互作用の検討(1)、医療薬学フォーラム 2014、東京、6 月 28 日(2014).
509. 佐古有紀、桐林東一郎、河野弥生、花輪剛久、BP 剤服用患者における服薬実態調査結果、第 24 回日本医療薬学会年会、名古屋、9 月 28 日(2014).
510. 齋藤裕香、笹津備尚、河野弥生、花輪剛久、大西啓、ロペラミドを用いた口内炎治療用口腔内フィルムの苦味マスキングとその調製、第 24 回日本医療薬学会年会、名古屋、9 月 28 日(2014).
511. 芝崎幸司、河野弥生、花輪剛久、簡易懸濁法において安定な分散系を得るための分散媒の検討、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10 月 4 日(2014).
512. 長野仁美、河野弥生、島田洋輔、後藤了、花輪剛久、リボフラビンの光分解による共存薬物への影響、第 58 回日本薬学会関東支部大会、町田、10 月 4 日(2014).
513. 清水雄一郎、河野弥生、花輪剛久、湿式ビーズ粉碎による難溶性薬物の微粒子化、第 20 回創剤フォーラム若手研究会、八王子、11 月 29 日(2014).
514. 廣田和貴、河野弥生、石井直子、花輪剛久、患者に優しい製剤の開発—口内炎治療を目的とした口腔内付着フィルム製剤の調製と評価—、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 26 日(2014).

国際会議

518. Yayoi Kawano, Rihoko Kageyama, Takuya Iyoda, Fumio Fukai, Takehisa Hanawa, Acceleration of wound healing induced by hyaluronic acid, European Congress on Biotechnology 2018, Geneva, Switzerland (2018)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

519. Hiroshi Mamada, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Application of the poly(vinyl alcohol) based resin (Excel) to hydrogel formulation. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
520. Rihoko Kageyama, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Understanding of the wound healing mechanisms by hyaluronic acid. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
521. * Shibano, Y., Kawano, S., Yamanaka, K., Yoshizawa, A., Hiroki, M., Taguchi, M., and Hanawa T. Evaluation of the release behavior of tramadol hydrochloride from hydrogel and its analgesic effect absorbed through mouse skin. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
522. Shying Chen, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Adsorbing the poorly water soluble drug on porous calcium silicate by sealed heating method. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
523. Yuichiro Shimizu, Yayoi Kawano, Takehisa Hanawa, Preparation and characterization of sub micron particles prepared by the ternary ground mixtures of cefditoren pivotal, water soluble polymers and non-ionic surfactants. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016)
524. Kawano Y., Imamura A., Sato M., Hanawa T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate. The 3rd INTERNATIONAL POSTGRADUATE CONFERENCE ON PHARMACEUTICAL SCIENCE, Kuala Lumpur, August 11 (2014).
525. Kawano Y., Imamura A., Sato M., Hanawa T., Development and characterization of oral spray for stomatitis containing irsogladine maleate. 5th Indo-Japanese International Joint Symposium on Overcoming Intractious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo, Japan, September 16 (2014).
- 招待講演
526. 医療ニーズに基づく新規臨床製剤の開発, 河野弥生、花輪剛久、日本薬学会第 138 年会、金沢、2018.
527. ヒアルロン酸を含有する創傷治療外用剤の開発医療薬学フォーラム 2018, 花輪剛久、影山理芳子、河野弥生、第 26 回クリニカルファーマシーシンポジウム、東京 2018
528. Hanawa, T., Shimizu, Y., and Kawano, Y., Preparation and Characterization of Submicron Particles Prepared by the Ternary Ground Mixtures of Cefditoren Pivotal, Water Soluble Polymers and Non-ionic Surfactants. The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016).
529. Kawano, Y., and Hanawa, T., The design of the Formulation Using a Quartz Crystal Microbalance with Dissipation (QCM-D). The 4th International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2016, February 27~28 (2016).
530. 河野弥生、花輪剛久、大学から発進する Evidence-Based Hospital Formulation、第 25 回日本医療薬学会、横浜、11 月 22 日(2015).
531. 花輪剛久、患者に優しい製剤—院内製剤研究への大学の関わり—、第 38 回星薬科大学大学院研究科助手会・大学院自治会 合同公開セミナー、東京、11 月 8 日(2014).
532. 河野弥生、花輪剛久 “患者に優しい製剤の開発”—大学から医療現場へ—、第 20 回創剤フォーラム若手研究会、八王子、11 月 29 日(2014).
533. 花輪剛久、医療現場における抗体医薬の現状と課題、日本薬学会関東支部第 39 回学術講演会、東京、12 月 13 日(2014).
- 大塚英典
国内学会
534. 石川昇平、飯島一智、大澤重仁、飯島道弘、大塚英典、キトサン/PEG/RADA16 で構造化した相互侵入高分子網目ゲルへの生分解性付与と軟骨組織再生足場への応用、第 67 回高分子討論会、北海道・北海道大学札幌キャンパス、9 月 12 日~9 月 14 日(2018)
535. 福田雪乃、大澤重仁、大塚英典、効率的な細胞内取り込みを指向したカチオン糖鎖高分子の組成制御とナノ粒子への表面修飾、第 67 回高分子討論会、北海道・北海道大学札幌キャンパス、9 月 12 日 ~ 9 月 14 日(2018)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

536. 山口紘、石川昇平、大澤重仁、飯島道弘、大塚英典、成長因子固定型インジェクタブル IPN ゲルの作製と固定化剤の長さ依存した軟骨細胞機能応答、第 67 回高分子討論会、北海道・北海道大学札幌キャンパス、9 月 12 日 ~ 9 月 14 日(2018)
537. 大澤重仁、長田健介、ディリサラアンジャンユル、大塚英典、片岡一則、温度応答性ポリオキサゾリン鎖からなる疎水性層を有する核酸内包高分子ミセル~疎水性層による核酸分解耐性の向上、第 67 回高分子討論会、北海道・北海道大学札幌キャンパス、9 月 12 日 ~ 9 月 14 日(2018)
538. 石川 昇平、飯島 一智、橋詰 峰雄、飯島 道弘、大塚 英典、生分解性 IPN ゲルのネットワーク構造に依存した軟骨組織再生挙動、第 67 回高分子学会年次大会、名古屋国際会議場、5 月 25 日(2018)
539. 岡野 泰幸、石川 昇平、飯島 一智、大塚 英典、橋詰 峰雄、ヒドロキシアパタイト-シリカファイバー不織布複合細胞培養担体の作製、日本化学会第 98 春季年会、日本大学理工学部船橋キャンパス、3 月 22 日(2018)
540. Shohei ISHIKAWA, Kazutoshi IJIMA, Daisuke MATSUKUMA, Mineo HASHIZUME, Michihiro IJIMA, Hidenori OTSUKA, Fabrication of Biodegradable and Injectable IPN Hydrogel Consisting of Self-assembling Peptide and Chitosan, 日本化学会第 98 春季年会、日本大学理工学部船橋キャンパス、2018 年 3 月 22 日
541. 飯島 一智、市川 聖子、大山 峻、石川 昇平、大塚 英典、橋詰 峰雄、マイクロ流体技術を用いた細胞担持多糖中空ファイバーの一段階作製、つくば医工連携フォーラム 2018、茨城県・産業技術総合研究所つくばセンター共用講堂、1 月 26 日(2018)
542. 市川 聖子、大山 峻、飯島 一智、石川 昇平、大塚 英典、橋詰 峰雄、マイクロ流体技術を用いて作製した多糖中空ファイバー中に担持された細胞の培養、第 27 回日本 MRS 年次大会、横浜市開港記念会館他、12 月 5 日(2017)
543. 飯島 一智、石川 昇平、橋詰 峰雄、大塚 英典、シリカ不織布における骨髄由来間葉系幹細胞の骨分化挙動の解析、日本動物実験代替法学会第 30 回大会、大田区産業プラザ(PiO)、11 月 24 日(2017)
544. 石川昇平、高橋雄樹、佐々木皓平、川部雅章、大塚英典、三次元シリカナノファイバーを用いた非実質細胞との共培養における肝細胞高機能化メカニズム解析、日本動物実験代替法学会第 30 回大会、大田区産業プラザ(PiO)、11 月 24 日(2017)
545. 市川 聖子、大山 峻、飯島 一智、石川 昇平、大塚 英典、橋詰 峰雄、マイクロ流体技術を用いて作製した多糖中空ファイバーの表面への細胞接着とゲル部への細胞担持、第 7 回 CSJ 化学フェスタ 2017、タワーホール船堀、10 月 17 日(2017)
546. 市川 聖子、大山 峻、飯島 一智、石川 昇平、松隈 大輔、大塚 英典、橋詰 峰雄、マイクロ流体技術を用いた一段階での細胞担持多糖中空ファイバーの作製、第 66 回高分子討論会、愛媛大学城北キャンパス、9 月 21 日(2017)
547. 石川昇平、飯島一智、松隈大輔、橋詰峰雄、飯島道弘、大塚英典、ペプチドと糖鎖からなる再生組織置換型生分解性インジェクタブルゲルの創製、第 66 回高分子討論会、愛媛大学城北キャンパス、2017 年 9 月 20 日~9 月 22 日
548. 矢作祐太、小津間大介、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、高分子型遷移金属錯体が示す抗癌活性とその合成高分子医薬品としての作用機構の検討、第 66 回高分子討論会、愛媛大学城北キャンパス、9 月 20 日~9 月 22 日、(2017)
549. 石川昇平、飯島一智、松隈大輔、橋詰峰雄、飯島道弘、大塚英典、ペプチド繊維と糖鎖から形成される相互侵入高分子網目(IPN)ゲルへの生分解性付与と組織再生足への応用、第 68 回コロイド・界面化学討論会、兵庫県・神戸大学鶴亀キャンパス、9 月 6 日 ~ 9 月 8 日(2017)
550. 飯島 一智、市川 聖子、大山 峻、石川 昇平、松隈 大輔、大塚 英典、橋詰 峰雄、同軸二層流を用いたポリイオンコンプレックス型多糖チューブの作製と細胞の担持、第 27 回バイオ・高分子シンポジウム、東京工業大学大岡山キャンパス、7 月 27 日(2017)
551. 石川昇平、飯島一智、松隈大輔、橋詰峰雄、飯島道弘、大塚英典、軟骨組織再生を促す持続的薬物除去型生分解性ハイブリッドインジェクタブルゲルの開発、第 46 回医用高分子シンポジウム、東京都・産業技術総合研究所臨海副都心センター、2017 年 7 月 24 日~7 月 25 日
552. 石川 昇平、飯島 一智、松隈 大輔、橋詰 峰雄、飯島 道弘、大塚 英典、相互侵入高分子網目構造を有する生分解性インジェクタブル型ハイドロゲルの作製と軟骨組織再生、第 66 回高分子学会年

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 次大会、幕張メッセ、5月30日(2017)
553. 市川 聖子, 大山 峻, 飯島 一智, 石川 昇平, 松隈 大輔, 大塚 英典, 橋詰 峰雄、マイクロ流体技術による細胞接着性を有する多糖中空ファイバーの作製、第 66 回高分子学会年次大会、幕張メッセ、5月29日(2017)
554. Shohei Ishikawa, Kazutoshi Iijima, Daisuke Matsukuma, Mineo Hashizume, Michihiro Iijima, Hidenori Otsuka、Fabrication of Biodegradable and Injectable IPN Hydrogel Consisting of Self-assembling Peptide and Chitosan、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
555. 石川 昇平, 飯島 一智, 松隈 大輔, 橋詰 峰雄, 飯島 道弘, 大塚 英典、生分解性インジェクタブル型 IPN ゲルを用いた関節軟骨再生足場の開発、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
556. 伊尻健音、小津間大介、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、高分子型遷移金属錯体が示す DNA 開裂挙動と抗癌活性の関係、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
557. 矢作祐太、小津間大介、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、抗癌活性を有する高分子型遷移金属錯体の細胞増殖抑制効果の検討、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
558. 伊東真衣子、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ポリエチレングリコールとピリジンからなるブロック共重合体のシリカナノ粒子表面への構造依存的吸着挙動、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
559. 眞下太郎、石川昇平、松隈大輔、大塚英典、細胞機能安定化を担うペプチド繊維が相互侵入高分子網目(IPN) ゲル内で果たす構造効果の検討、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
560. 佐藤光、高木あかね、松隈大輔、大塚英典、金属錯体形成部位を有する両親媒性高分子ミセルを鋳型とした金属ナノ粒子の創製、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、3月20日～3月23日(2017)
561. 川名裕輝、小津間大介、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、高分子化した遷移金属錯体による遺伝子開裂の反応機構検討、日本化学会第 97 春季年会(2017)、慶應義塾大学日吉キャンパス、2017年3月20日～3月23日
562. 石川 昇平, 飯島 一智, 松隈 大輔, 飯島 道弘, 橋詰 峰雄, 大塚 英典、相互侵入高分子網目構造を有する生分解性インジェクタブルゲルを用いた関節軟骨再生、つくば医工連携フォーラム2017、物質・材料研究機構千現地区、2017年1月20日
563. 小津間大介・嶋田紘尚、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、高分子型金属錯体の細胞内動態と特徴的な抗癌活性メカニズム検討、つくば医工連携フォーラム2017、物質・材料研究機構千現地区、1月20日(2017)
564. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、吸着界面安定性の構造依存性と細胞内環境応答性材料への適用、つくば医工連携フォーラム2017、物質・材料研究機構千現地区、1月20日(2017)
565. 石川昇平、飯島一智、飯島道弘、松隈大輔、大塚英典、効率的軟骨組織再生を導く生分解性インジェクタブル IPN ゲルの新規作製、日本化学会【第 6 回 CSJ 化学フェスタ 2016】、タワーホール船堀、11月14日～11月16日(2016)
566. 飯島 一智, 石川 昇平, 松隈 大輔, 橋詰 峰雄, 大塚 英典、糖鎖とペプチドからなる相互侵入高分子網目ゲル中における骨髄由来間葉系幹細胞の軟骨分化挙動の解析、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9月15日(2016)
567. 松隈大輔、川名裕輝、前島雪絵、大塚英典、両親媒性ブロック共重合体の一次構造依存的な酸化還元活性の発現、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9月15日(2016)
568. 石川昇平、飯島一智、飯島道弘、松隈大輔、大塚英典、軟骨細胞高機能化を目指したインジェクタブル型生分解性 IPN ゲルの作製、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9月15日(2016)
569. 小津間大介、嶋田紘尚、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、遷移金属錯体の高分子化効果に基づく優れた抗がん活性とその細胞内挙動観察、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9月15日(2016)
570. 川名裕輝、松隈大輔、大塚英典、両親媒性ブロック共重合体が発現する酸化還元活性の分子構造依存性、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、2016年9月15日

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

571. 佐藤光、高木あかね、松隈大輔、大塚英典、金属元素濃度を制御可能な両親媒性高分子ミセルをテンプレートとした白金ナノ粒子の創製と機能評価、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9 月 15 日 (2016)
572. 眞下太郎、石川昇平、松隈大輔、大塚英典、インジェクタブル型 IPN ゲル-Chitosan/PEG/RADA16 の荷電制御と軟骨再生に対する影響、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9 月 15 日 (2016)
573. 飯島一智、石川昇平、松隈大輔、橋詰峰雄、大塚英典、糖鎖とペプチドからなる相互侵入高分子網目ゲル中における骨髄由来間葉系幹細胞の軟骨分化挙動の解析、第 65 回高分子討論会、神奈川大学、9 月 15 日 (2016)
574. 小津間大介、嶋田紘尚、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、高分子型遷移金属錯体が示す抗ガン活性とその分子構造的特徴、バイオ・高分子研究会【第 26 回バイオ高分子シンポジウム】、東京工業大学大岡山キャンパス、2016 年 7 月 28 日～7 月 29 日
575. 飯島一智、石川昇平、松隈大輔、橋詰峰雄、大塚英典、キトサン/PEG/RADA16 相互侵入高分子網目ゲルを用いた間葉系幹細胞の軟骨分化誘導、第 45 回医用高分子シンポジウム、産業技術総合研究所臨海副都心センター、7 月 26 日 (2016)
576. 石川昇平、飯島道弘、松隈大輔、大塚英典、IPN 構造を有する生分解性インジェクタブルゲルの新規創製と軟骨細胞機能評価、第 45 回医用高分子シンポジウム、産業技術総合研究所臨海副都心センター、7 月 26 日 (2016)
577. 石川昇平、飯島一智、松隈大輔、橋詰峰雄、飯島道弘、大塚英典「ペプチド繊維と糖鎖から形成される相互侵入高分子網目(IPN) ゲルへの生分解性付与と組織再生足場への応用」第 68 回コロイド・界面化学討論会、神戸、9 月 (2017)
578. 松隈大輔、石川昇平、石川理恵子、高橋千尋、浅輪幸世、星和人、大塚英典、ネットワーク形成機構を駆使したインジェクタブル型 IPN ゲルの作製と組織再生足場としての機能、第 25 回インテリジェント材料/システムシンポジウム、新宿、1 月 8 日 (2016).
579. 飯島一智、石川昇平、松隈大輔、橋詰峰雄、大塚英典、キトサン/PEG/RADA16 で構造化した相互侵入高分子網目ゲル中における間葉系幹細胞から軟骨細胞への分化、第 25 回インテリジェント材料/システムシンポジウム、新宿、1 月 8 日 (2016).
580. 久森章史、松隈大輔、大塚英典、酸化還元活性を有する両親媒性高分子を用いた金属イオン還元挙動の観察、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
581. 松隈大輔、石川昇平、高橋千尋、浅輪幸世、星和人、大塚英典、細胞の高機能培養を実現するインジェクタブルゲルの構造設計、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
582. 小津間大介、嶋田紘尚、藤倉大史、松隈大輔、大塚英典、効果的な DNA の構造変異を導く遷移金属錯体の高分子化効果とその抗癌活性評価、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
583. 赤峯和敏、佐藤隆太郎、松隈大輔、大塚英典、オリゴエチレングリコール重合体表面の修飾密度に依存した特異的水和挙動とタンパク質吸着抑制能との相関、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
584. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造設計に基づく微粒子界面制御と医療応用、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
585. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、PEG-block-Poly(pyridine)の一次構造特異的な酸化還元活性の発現、日本化学会第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
586. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、IPN 構造を有する生分解性インジェクタブルゲルの新規創製と細胞機能評価、第 96 春季年会、京田辺、3 月 24-27 日 (2016).
587. 松隈大輔、池永祐介、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)の構造依存的な酸化還元活性、第 95 回日本化学会春季年会、日本大学理工学部船橋キャンパス薬学部、3 月 26 日-29 日 (2015).
588. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、一次構造に依存した PEG-b-Poly(pyridine)の特異な酸化還元活性の発現、日本大学理工学部船橋キャンパス薬学部、3 月 26 日-29 日 (2015).
589. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)の構造依存的な酸化還元活性、第 95 回日本化学会春季年会、船橋、3 月 26-29 日 (2015).
590. 松隈大輔、前島雪絵、大塚英典、一次構造に依存した PEG-b-Poly(pyridine)の特異な酸化還元活性の発現、第 64 回高分子学会年次大会、札幌、5 月 27-29 日 (2015).
591. 大塚英典、嶋田紘尚、高橋理一、松隈大輔、DNA にインターカレートする白金錯体の高分子化効果

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- および抗癌剤への応用、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10–12 日(2015).
592. 松隈大輔、高木あかね、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine)の構造特異的な酸化還元活性の発現と貴金属イオンの自動還元、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10–12 日(2015).
593. 松隈大輔、三益毅知、大塚英典、ポリイオンコンプレックスにより構成されるゼラチン/キトサン複合体の UCST 型温度相転移挙動、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10–12 日(2015).
594. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造依存的界面物性解析および細胞内環境応答性材料への適用、第 66 回コロイドおよび界面化学討論会、鹿児島、9 月 10–12 日(2015).
595. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、自己組織化ペプチドとキトサンから構成される生分解性 IPN 型インジェクタブルゲルの創製と細胞機能応答、第 64 回高分子討論会、仙台、2015 年 9 月 15–17 日(2015).
596. 松隈大輔、藤井香織、大塚英典、タンパク質デリバリーキャリアを指向したペプチドの自己組織ネットワークを有するキトサンナノゲルの作製、第 64 回高分子討論会、仙台、9 月 15–17 日(2015).
597. 松隈大輔、野口周人、前島雪絵、大塚英典、限定的一次構造において発現する PEG-b-Poly(pyridine)の特異な酸化還元活性、第 64 回高分子討論会、仙台、9 月 15–17 日(2015).
598. 大塚英典、佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、エチレングリコール共重合体表面の水和挙動、生体適合性に対する骨格構造の影響、第 64 回高分子討論会、仙台、2015 年 9 月 15–17 日(2015).
599. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、両親媒性高分子の構造に基づくピリジン環の配向性制御および吸着安定性との相関、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日(2015).
600. 赤峯和敏、佐藤隆太郎、松隈大輔、大塚英典、オリゴエチレングリコール重合体の表面密度依存的な水和挙動と生体適合性への影響、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日(2015).
601. 小津間大介、池永裕介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性ブロック共重合体の表面吸着メカニズムの解明と生体内材料への応用、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日(2015).
602. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、生分解性 IPN 型インジェクタブルゲルの新規創製と足場分解に伴う細胞機能変化の観察、第 5 回 CSJ 化学フェスタ 2015、船掘、10 月 13 日(2015).
603. 石川昇平、松隈大輔、飯島道弘、大塚英典、生分解性インジェクタブル型 IPN ゲルの新規作製と細胞機能変化、バイオテクノロジー&エレクトロニクス研究討論会、押上、12 月 11 日(2015).
604. 野口周人、小津間大介、松隈大輔、大塚英典、ピリジン含有両親媒性高分子の構造設計に基づく微粒子界面制御と医療応用、バイオテクノロジー&エレクトロニクス研究討論会、押上、12 月 11 日(2015).
605. 佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体を修飾した表面の生体適合性に対する骨格構造の影響、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日–30 日(2014).
606. 嶋田紘尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日–30 日(2014).
607. 高木あかね、松隈大輔、大塚英典、自動還元型配位子を有するブロック共重合体を用いた機能性金属ナノ粒子の新規創製法と触媒活性評価、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日–30 日(2014).
608. 藤井香織、松隈大輔、大塚英典、ペプチドの β -シート形成を駆動力とする生分解性ナノ会合体の創製およびキャリア機能、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日–30 日(2014).
609. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) からのラジカル生成に駆動される銀イオンの還元挙動、第 63 回高分子年次大会、愛知県名古屋市熱田区、名古屋国際会議場、5 月 28 日–30 日(2014).
610. 佐藤隆太郎、前島雪絵、松隈大輔、大塚英典、異なる末端基構造を有するポリエチレングリコール修飾表面の生体適合性、第 65 回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9 月 3 日–5 日(2014).
611. 佐藤隆太郎、前島雪絵、田中賢、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体修飾表面の骨格構造に依存した水和挙動とタンパク質吸着抑制能の相関、第 65 回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9 月 3 日–5 日(2014).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

612. 松隈大輔、石川理恵子、浅輪幸世、高橋千尋、星和人、大塚英典、組織再生足場への応用を指向した階層的ネットワークを有するインジェクタブルゲルの創製、第 65 回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9 月 3 日-5 日(2014).
613. 三益毅知、松隈大輔、大塚英典、ゼラチンとキトサンから構成される UCST 型刺激応答性積層薄膜の創製、第 65 回コロイドおよび界面化学討論会、東京都新宿区、東京理科大学神楽坂校舎、9 月 3 日-5 日(2014).
614. 大塚英典、前島雪絵、佐藤隆太郎、松本亮、片岡一則、宮原裕二、フェニルボロン酸を AFM プローブに用いた癌細胞表面シアル酸の高感度検出、第 63 回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9 月 24 日-26 日(2014).
615. 大塚英典、村松佑紀、松隈大輔、嶋田鉦尚、細胞膜特異性の高いコアシェルナノロッドの合成と効果的温熱治療、第 63 回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9 月 24 日-26 日(2014).
616. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) の分子配列依存的な酸化還元活性と貴金属イオンの自動還元、第 63 回高分子討論会、長崎県長崎市文教町、長崎大学文教キャンパス、9 月 24 日-26 日(2014).
617. 嶋田鉦尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、ビピリジン-白金を連鎖構造に有する共重合体の DNA との相互作用および抗癌剤への応用、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12 月 10 日-12 日(2014).
618. 高木あかね、松隈大輔、大塚英典、自動還元型配位子を有するブロック共重合体を用いた機能性金属ナノ粒子の新規創製法と触媒活性評価、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12 月 10 日-12 日(2014).
619. 松隈大輔、高木あかね、前島雪絵、大塚英典、PEG-b-Poly(pyridine) からのラジカル生成に駆動される銀イオンの還元挙動、24rd Annual Meeting of MRS-J、神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12 月 10 日-12 日(2014).
620. 嶋田鉦尚、高橋理一、松隈大輔、大塚英典、ビピリジン-白金を連鎖構造に有する共重合体の DNA との相互作用および抗癌剤への応用、第 36 回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11 月 17 日-18 日(2014).
621. 高橋雄樹、長村麻紗子、沖村沙耶、松隈大輔、大塚英典、糖鎖高分子を機能性ユニットとする新規ゲル足場の創製と肝細胞分化メカニズム解析、第 36 回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11 月 17 日-18 日(2014).
622. 佐藤隆太郎、前島雪絵、田中賢、松隈大輔、大塚英典、エチレングリコール重合体修飾表面の水和挙動に依存した表面特性と生体適合性、第 36 回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11 月 17 日-18 日(2014).
623. 松隈大輔、石川理恵子、浅輪幸世、高橋千尋、星和人、大塚英典、軟骨細胞高機能化を導くキトサン/ペプチド IPN インジェクタブルゲルの創製、第 36 回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11 月 17 日-18 日(2014).
624. 藤井香織、松隈大輔、大塚英典、自己組織化ペプチド修飾キトサンナノ会合体の合成とプロテインデリバリーへの応用、第 36 回バイオマテリアル学会、東京都江戸川区船堀、タワーホール船堀、11 月 17 日-18 日(2014).

国際会議

625. Otsuka, H., Nanofabrication of Nonfouling Surfaces for Biomedical Application. 25th Annual Meeting of MRS-J (2015), Nano-biotechnologies on Interfaces, Yokohama, Japan, December 8-10 (2015).
626. Fujii, K., Matsukuma, D., Otsuka, H., Synthesis of Chitosan-based Nanogels due to the Formation of Hydrophilic Peptide Fiber Network for Protein Delivery Carrier, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).
627. Fujikura, H., Takahashi, R., Matsukuma, D., Otsuka, H., DNA- Binding Properties of Polymeric Intercalators with Polymerized Metal-coordination Segment, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).
628. Matsukuma, D., Takagi, A., Maejima, Y., Otsuka, H., Structure-dependent Redox- activity of

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

PEG-b-Poly(pyridine) and Its Application to Auto-reduction of Noble Metal Ions, 10th SPSJ International Polymer Conference (IPC2014), Tsukuba International Congress Center, Tsukuba, Ibaraki, Japan, December 2-5 (2014).

招待講演

629. 大塚英典、高分子界面制御によるバイオマテリアルの機能化、高分子複合材料の界面と機能、高分子表面研究会、神楽坂、1月29日(2016).
630. 大塚英典、生体適合性材料の物性解析:一次構造の異なるエチレンオキッド重合体表面の生体適合性、ATP 招待講演(バイオ技術の新展開)、日本化学会第96春季年会、京田辺、3月24-27日(2016).
631. 大塚英典、生体適合性界面の構築と再生医療への展開、東京理科大学・日本医科大学第2回合同シンポジウム、葛飾、12月12日(2015).
632. Otsuka, H., Nanofabrication of Nonfouling Surfaces for Biomedical Application. 25th Annual Meeting of MRS-J (2015), Nano-biotechnologies on Interfaces, Yokohama, Japan, December 8-10(2015).
633. 大塚英典、ナノ粒子の表面修飾技術と分散性・機能性付与—生体材料への適用等—、情報機構セミナー「ナノ粒子・微粒子の表面修飾技術と分散性・機能性付与」、大井町、3月5日(2015).
634. Hidenori Otsuka, Micropatterned Co-culture of Spheroids Layerd on Feeder Cells for Functional Tissue Culture, 24rd Annual Meeting of MRS-J (2014),神奈川県横浜市中区、横浜開港記念会館、12月10日-12日(2014).
636. 大塚英典、微粒子、顔料の高分子処理とその分散性制御法、R&D セミナー、東京都江東区、タイム24ビル、5月22日(2014).

西川元也

国内学会

637. 栗林雅之, 桑原謙介, 草森浩輔, 西川元也, 冷蔵保存培地とカプセル化による簡便な細胞輸送法の開発.日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
638. 高山幸也, 草森浩輔, 西川元也, 静脈内投与した間葉系幹細胞の肺移行回避を目的とした細胞表面への PEG 修飾.日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
639. 辻村真里, 草森浩輔, 西川元也, 細胞増殖制御法を応用した機能調節可能な細胞介在型遺伝子治療法の開発.日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
640. 譚 萌萌, 高橋夏樹, 藤井翔太, 櫻井和郎, 草森浩輔, 高橋有己, 高倉喜信, 西川元也, SAXS を利用した同一配列を含む多足型 DNA 構造体の三次元構造解析. 日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
641. 廖 文卿, 赤平紗貴子, 草森浩輔, 原 倫太郎, 和田 猛, 高橋有己, 高倉喜信, 西川元也, マンノース修飾による CpG オリゴヌクレオチドデリバリーのための抗原提示細胞指向型ナノ構造化 DNA の開発.日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
642. 本村 瞳, 大川美樹, 椎名將太, Babita Shashni, 佐藤 聡, 木村悠実子, Bunsinee Throngnumchai, 大平千陽, 草森浩輔, 西川元也, 竹村 裕, 相川直幸, 早瀬仁則, 青木 伸, 秋本和憲, 細胞間接着分子 Tricellulin のがんにおける機能解析.総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第11回シンポジウム/研究交流会, 東京, 2019.
643. 大川美樹, 本村 瞳, 椎名將太, Babita Shashni, 佐藤 聡, Bunsinee Throngnumchai, 木村悠実, 大平千陽, 新井一樹, 竹村 裕, 相川直幸, 草森浩輔, 西川元也, 早瀬仁則, 青木 伸, 秋本和憲, 細胞間接着分子 Tricellulin のがん転移における役割. 総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第11回シンポジウム/研究交流会, 東京, 2019.
644. Wenqing Liao, Sakiko Akahira, Kosuke Kusamori, Rintaro Hara, Takeshi Wada, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Development of antigen presenting cell-targeted nanostructured DNA for CpG oligodeoxynucleotide delivery by mannose modification.. 第4回東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門シンポジウム/第16回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム, 東京, 2018.
645. Mengmeng Tan, Natsuki Takahashi, Shota Fujii, Kazuo Sakurai, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- Makiya Nishikawa, Determination of tertiary structural features of branched DNA nanostructures with identical sequence by small-angle X-ray scattering analysis. 第 4 回東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門シンポジウム／第 16 回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム, 東京, 2018.
646. Wenqing Liao, Sakiko Akahira, Kosuke Kusamori, Rintaro Hara, Takeshi Wada, Yuki Takahashi, Yoshinobu Takakura, Makiya Nishikawa, Development of an immune cell-targeted nanostructured DNA for CpG ODN delivery by mannose modification. ISNAC2018, Kyoto, 2018.
647. Yukiya Takayama, Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Functionalization of mesenchymal stem cells with an anticancer agent using the avidin-biotin complex method. International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (Tr) Center, Tokyo, 2018.
648. 廖 文卿, 赤平紗貴子, 草森浩輔, 原 倫太郎, 和田 猛, 高橋有己, 高倉喜信, 西川元也, マンノース修飾によるナノ構造化 DNA の免疫細胞への効率的デリバリー. 第 62 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 2018.
649. 鈴木凌太, 草森浩輔, 西川元也, 移植細胞機能制御のための自殺遺伝子導入細胞内包アルギン酸カプセルの開発. 第 62 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 2018.
650. 下村明日香, 草森浩輔, 西川元也, 皮内投与型マイクロデバイスを基盤とする効率的ワクチン投与システムの開発. 第 62 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 2018.
651. 島澤慶彦, 草森浩輔, 西川元也, 間葉系幹細胞スフェロイドを利用したアレルギー性喘息治療法の開発. 第 62 回日本薬学会関東支部大会, 東京, 2018.
652. Mari Tsujimura, Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Regulation of proliferation and functioning of transplanted cells by using suicide gene. Tissue Engineering and Regenerative Medicine International Society (TERMIS) World Congress 2018, Kyoto, 2018.
653. Yukiya Takayama, Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Development of mesenchymal stem cells modified with doxorubicin-loaded liposomes for cancer therapy. Tissue Engineering and Regenerative Medicine International Society (TERMIS) World Congress 2018, Kyoto, 2018.
654. Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Improving functioning of insulin-secreting cells by multicellular spheroid formation. Tissue Engineering and Regenerative Medicine International Society (TERMIS) World Congress 2018, Kyoto, 2018.
655. 高山幸也, 草森浩輔, 勝見英正, 坂根稔康, 山本 昌, 西川元也, ドキソルビシン封入りポソーム修飾間葉系幹細胞の抗腫瘍効果. 第 34 回日本 DDS 学会学術集会, 長崎, 2018.
656. Yukiya Takayama, Kosuke Kusamori, Hidemasa Katsumi, Toshiyasu Sakane, Akira Yamamoto, Makiya Nishikawa, Development of doxorubicin-loaded liposome-modified mesenchymal stem cells for cancer therapy. 第 41 回日本基礎老化学会大会・日韓老化学会合同シンポジウム／第 9 回東京理科大学総合研究院 TR シンポジウム, 東京, 2018.
657. 辻村真里, 草森浩輔, 勝見英正, 坂根稔康, 山本 昌, 西川元也, 安全な細胞移植治療の実現に向けた細胞増殖制御法の開発. 日本薬剤学会第 33 年会, 静岡, 2018.
658. 辻村真里, 草森浩輔, 宮崎愛梨, 勝見英正, 山本 昌, 西川元也, 安全ながん治療を目的とした自殺遺伝子によるインターフェロン分泌細胞の増殖制御, 第 17 回日本再生医療学会総会, 横浜, 3 月 21-23 日 (2018 年)
659. 高山幸也, 草森浩輔, 月森千尋, 勝見英正, 山本 昌, 西川元也, ドキソルビシン封入りポソーム修飾間葉系幹細胞のがん細胞増殖抑制効果, 第 17 回日本再生医療学会総会, 横浜, 3 月 21-23 日 (2018 年)
660. 高山幸也, 草森浩輔, 西川元也, アビジン-ビオチン複合体法を用いた間葉系幹細胞に対するドキソルビシン封入りポソーム修飾とがん治療への応用, 第 3 回東京理科大学総合研究院再生医療と D

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

DSの融合研究部門シンポジウム・第 15 回東京理科大学薬学部DDS研究センターシンポジウム、東京、12 月 18 日(2017 年)

661. 譚 萌萌、大槻昇三、高橋有己、高倉喜信、草森浩輔、西川元也、多足型 DNA 構造体中の CpG motif の位置依存的な生物活性の評価、第 3 回東京理科大学総合研究院再生医療とDDSの融合研究部門シンポジウム・第 15 回東京理科大学薬学部DDS研究センターシンポジウム、東京、12 月 18 日(2017 年)
662. 有馬悠太、高橋有己、松本明宏、西川元也、高倉喜信、搭載タンパク質のエキソソームにおける局在が細胞取込み後のタンパク質細胞内挙動に及ぼす影響の評価、第 11 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム、京都、10 月 21-22 日(2017 年)
663. 服部将太、高橋有己、山下拓真、西川元也、高倉喜信、培地体積の最適化による効率的なエキソソームの回収、第 11 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム、京都、10 月 21-22 日(2017 年)
664. 荒家由季、大槻昇三、朴 昭映、杉山 弘、高橋有己、高倉喜信、西川元也、塩基修飾核酸とナノ構造化の組み合わせによる機能性核酸の活性増強、第 67 回日本薬学会近畿支部総会・大会、神戸、10 月 14 日(2017 年)
665. 谷岡あかね、高橋有己、濱名温志、西川元也、高倉喜信、青色光受容体 VIVID を利用したインターフェロン β の活性制御、第 67 回日本薬学会近畿支部総会・大会、神戸、10 月 14 日(2017 年)
666. 守谷愛衣、水上優哉、高橋有己、高倉喜信、西川元也、移植時の操作性を決定する細胞スフェロイドの強度と fibronectin との関係、第 67 回日本薬学会近畿支部総会・大会、神戸、10 月 14 日(2017 年)
667. 高橋有己、Charoenviriyakul Chonlada、西川元也、高倉喜信、Gag タンパク質によるエクソソーム内部標識法の開発とエキソソーム体内動態の評価、第 9 回日本 RNAi 研究会/第 4 回日本細胞外小胞学会 JSEV、広島、8 月 30 日-9 月 1 日(2017 年)
668. 杉村佳那子、高橋有己、西川元也、刈屋 睦、大槻昇三、高倉喜信、CpG DNA の効率的デリバリーを目的とした疎水性相互作用により形成される DNA 超分子の開発、日本核酸医薬学会 第 3 回年会、札幌、7 月 12-14 日(2017 年)
669. 高橋洋介、前澤辰興、荒家由季、高橋有己、高倉喜信、西川元也、多足型 DNA ナノ構造体による CpG オリゴヌクレオチドの TLR9 刺激能増強に関する in vitro/in vivo 相関の解明、日本核酸医薬学会 第 3 回年会、札幌、7 月 12-14 日(2017 年)
670. Charoenviriyakul Chonlada、高橋有己、西川元也、高倉喜信、Gag タンパク質を利用した細胞外小胞の内部標識法の開発と体内動態評価への利用、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)
671. 齋藤昌朗、梅木佑夏、高橋有己、高倉喜信、西川元也、コレステロール修飾 DNA ハイドロゲルからの抗原徐放化による抗腫瘍免疫の増強、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)
672. 服部将太、高橋有己、山下拓真、西川元也、高倉喜信、エキソソームの回収効率に及ぼす培地体積の影響、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)
673. 濱名温志、高橋有己、内田宅郎、西川元也、今村道雄、茶山一彰、高倉喜信、インターフェロン持続発現プラスミドを利用した直接作用型抗ウイルス薬耐性 C 型肝炎ウイルス感染に対するインターフェロン遺伝子治療、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)
674. 有泉伶一、森下将輝、高橋有己、西川元也、高倉喜信、エンドソーム脱出型癌細胞由来 exosome の開発による癌抗原の MHC クラス I 提示の増強、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)
675. 大槻昇三、志波由佳子、高橋有己、高倉喜信、西川元也、DNA レセプター発現・導入細胞によるナノ構造化核酸の構造依存的細胞取り込みの評価、第 33 回日本 DDS 学会学術集会、京都、7 月 6-7 日(2017 年)

国際会議

676. Mari Tsujimura, Kosuke Kusamori, Makiya Nishikawa, Development of therapeutic cells with controllable functions for cell-based gene therapy. 2nd Workshop for Korea-Japan Young Scientists on Pharmaceuticals, Seoul, 2018.
677. Yamashita T, Takahashi Y, Nishikawa M, Takakura Y, Development of exosome-based nucleic acid delivery systems, The 10th Seoul-Kyoto-Osaka Joint Symposium on Pharmaceutical Sciences For Young Scientists, 大阪, 5 月 23-24 日(2017 年)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

678. Charoenviriyakul C, Takahashi Y, Morishita M, Matsumoto A, Nishikawa M, Takakura Y, Yield physicochemical properties and pharmacokinetics of exosomes derived from mouse cell lines, 6th Annual Meeting of the International Society for Extracellular Vesicles (ISEV), Canada, 5月18-21日(2017年)
679. Matsumoto A, Takahashi Y, Nishikawa M, Sano K, Morishita M, Charoenviriyakul C, Saji H, Takakura Y, Melanoma progression effects on biodistribution of B16BL6-derived exosomes from tumors and biological role of B16BL6-derived exosomes, 6th Annual Meeting of the International Society for Extracellular Vesicles (ISEV), Canada, 5月18-21日(2017年)
- 招待講演
680. 西川元也, ナノ構造化による核酸医薬の体内動態制御. 日本薬学会第139年会, 千葉, 2019.
681. Makiya Nishikawa., Nanostructured DNA for the in vivo Delivery of Biomolecules and Cells. 257th ACS National Meeting & Exposition: Polymer Based Gene and Drug Delivery, Orlando, FL, USA, 2019.
682. 西川元也, エクソソームを利用した DDS. 膵β細胞特異的 DDS ミニシンポジウム, 東京, 2018.
683. 西川元也, Design and Development of Nano and Cell Medicine for Cancer Therapy. TRセンター・ハワイ大学合同シンポジウム, 東京, 2018.
684. 西川元也, 核酸医薬の体内動態とその制御. 薬物動態談話会第41年会, 浜松, 2018.
685. 西川元也, 草森浩輔, ナノ構造化核酸を基盤とする疾患治療システムの開発. 第16回東京理科大学薬学部 DDS 研究センターシンポジウム, 東京, 2018.
686. 草森浩輔, 西川元也, オンデマンド機能制御可能な細胞介在型遺伝子治療システムの開発, 第7回超異分野学会本大会, 東京, 3月2-3日(2018年)
687. 西川元也, 核酸を基盤とする DDS 開発, 東京医科歯科大学 第52回大学院医科学総合研究科大学院セミナー, 東京, 12月11日(2017年)
688. 西川元也, ナノ構造化核酸を基盤とする DDS 開発, 日本薬学会関東支部 第42回学術講演会, 東京, 12月7日(2017年)
689. 西川元也, 核酸と細胞を利用した疾患治療システムの開発, 総合研究所トランスレーショナルリサーチ(TR)センター 第7回シンポジウム, 東京, 9月2日(2017年)
690. 西川元也, 核酸医薬を含む高分子の体内動態とその制御, 日本核酸医薬学会 第3回年会, 札幌, 7月12-14日(2017年)
691. 西川元也, 生理活性高分子の精密設計に基づく標的指向型 DDS の開発, 第33回日本 DDS 学会学術集会, 7月6-7日(2017年)

【薬効・機能評価グループ】

岡 淳一郎

国内学会

692. * 植田雄大, 濱田幸恵, 秋田智后, 山下親正, 岡淳一郎, 認知症モデルマウスにおける oxytocin の学習・記憶改善作用, 第137回日本薬理学会関東支部会, 東京, 2017.
693. * 小梶安椰, 濱田幸恵, 秋田智后, Douglas Osei-Hyiaman, 大橋由明, 山下親正, 岡淳一郎, モデル動物を用いたうつ病バイオマーカーの探索とGLP-2誘導体の作用について, 第1回下総薬理学研究会, 船橋, 2017
694. 濱田幸恵, 成澤孝二, 中村龍治, 石橋仁, 岡淳一郎, 中枢投与による Glucagon-like peptide-2 の降圧作用: 高血圧自然発症モデルラットと Wistar-Kyoto ラットでの比較, 第94回日本生理学会大会, 静岡, 3月28日(2017).
695. Saitoh, A., Suzuki, S., Ohashi, M., Soda, A., Yamada, M., Oka, J-I., Nagase, H., Yamada, M., The delta opioid receptor agonist KNT-127 in the prelimbic medial prefrontal cortex attenuates veratrine-induced anxiety-like behaviors in mice, 第90回日本薬理学会年会, 長崎, 3月16日(2017).
696. Mishima, R., Iwai, T., Nakamura, M., Jin, K., Sawara, I., Nagai, Y., Watanabe, S., Oka, J-I., Tanaba, M., Glucagon-like peptide-2 ameliorates LPS-induced memory impairment via hippocampal neuronal ERK1/2 activation in mice, 第90回日本薬理学会年会, 長崎, 3月15日(2017).
697. Yamada, M., Akagi, K., Saitoh, A., Yamada, M., Oka, J-I., Novel strategy to treat anxiety disorders by

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- manipulating extinction and reconsolidation of fear memory: Searching for an ideal drug for co-administration with exposure therapy, 第 90 回日本薬理学会年会、長崎,3 月 15 日 (2017).
698. 早田暁伸,齋藤顕宜,鈴木聡,山田美佐,岡淳一郎,長瀬博,山田光彦,マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイド δ 受容体はグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する,第 27 回 マイクロダイヤリシス研究会,東京,12 月 17 日 (2016).
699. * 岡淳一郎,濱田幸恵,堀口道子,山下親正,経鼻投与用 GLP-2 誘導体の開発と抗うつ様作用,第 3 回 日本医科大学・東京理科大学合同シンポジウム,東京,12 月 17 日 (2016).
700. * 岡淳一郎,濱田幸恵,堀口道子,山下親正,経鼻投与用ペプチド製剤を用いた新規うつ病治療薬,第 49 回精神神経系薬物治療研究報告会,大阪,12 月 2 日 (2016).
701. 赤木希衣,齋藤顕宜,岡淳一郎,山田光彦,D-cycloserine はラットの恐怖記憶再固定化を促進する,第 35 回 躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会,山口,11 月 4-5 日 (2016).
702. 早田暁伸,齋藤顕宜,後藤玲央,鈴木聡史,岡淳一郎,山田光彦,嗅球摘出ラットの内側前頭前野及び海馬におけるグルタミン酸及び GABA 含有量の変化について,第 135 回日本薬理学会関東部会,静岡,10 月 8 日 (2016).
703. 赤木希衣,山田美佐,齋藤顕宜,岡淳一郎,山田光彦, Riluzole はラットの恐怖記憶消去学習を促進するが再固定化は阻害する,第 135 回日本薬理学会関東部会,静岡,10 月 8 日 (2016).
704. 秋元俊希,濱田幸恵,伊豫田拓也,梅澤雅和,岡淳一郎,エキソソーム様小胞封入 GLP-2 の経鼻投与による抗うつ様作用,第 135 回日本薬理学会関東部会,静岡,10 月 8 日 (2016).
705. 佐内恵美,濱田幸恵,恒岡弥生,岡淳一郎,高グルコース条件下における神経細胞障害メカニズムの検討,第 60 回日本薬学会関東支部大会,東京,9 月 17 日 (2016).
706. 齋藤顕宜,鈴木聡史,早田暁伸,大橋正誠,山田美佐,長瀬博,岡淳一郎,山田光彦,オピオイド δ 受容体作動薬は内側前頭前野前辺縁皮質領域の亢進したグルタミン酸神経伝達を抑制することで不安様行動を改善する,第 3 回包括的緩和医療科学術研究会・第 4 回 Tokyo 疼痛緩和次世代研究会合同研究会,東京,8 月 28 日 (2016).
707. * 舟根太地,濱田幸恵,堀口道子,恒岡弥生,中尾優介,佐々木梨衣,山下親正,岡淳一郎,経鼻投与用 neuromedin U 誘導体の学習記憶改善作用,トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第 5 回シンポジウム(東京理科大学総合研究院),東京,8 月 27 日 (2016).
708. 木村英雄,木村由佳,豊福優希子,渋谷典広,小池伸,小笠原裕樹,永原則之,David Lefer,三上義礼,岡淳一郎,硫化水素(H_2S)とポリサルファイド(H_2S_n)の生理作用,第 39 回 日本神経科学大会(Neuroscience 2016),神奈川,7 月 20 日 (2016).
709. 西村翼,恒岡弥生,岡淳一郎,幼若期発症 1 型糖尿病モデルラットにおける脳血管透過性の評価,第 134 回日本薬理学会関東部会,大田原,7 月 9 日 (2016).
710. 岩井孝志,中村みなみ,佐原郁乃,神和司,松井彩佳,金子菜由,永井悠貴,濱田幸恵,渡辺俊,松尾由理,内藤康仁,岡淳一郎,田辺光男,気分障害の認知機能低下改善に向けた Glucagon-like peptide-2 の作用解明,第 46 回日本神経精神薬理学会年会,ソウル,7 月 2-3 日 (2016).
711. 齋藤顕宜,鈴木聡史,早田暁伸,大橋正誠,山田美佐,長瀬博,岡淳一郎,山田光彦,内側前頭前野前辺縁皮質領域のオピオイド δ 受容体は扁桃体へ投射しているグルタミン酸神経伝達を抑制し不安様行動を改善する,第 46 回日本神経精神薬理学会年会,ソウル,7 月 2-3 日 (2016).
712. 齋藤顕宜,鈴木聡史,早田暁伸,赤木希衣,山田美佐,岡淳一郎,山田光彦,マウスの不安様行動における内側前頭前野の役割を脳内微小透析法で探る,第 55 回 日本生体医工学会大会,富山,4 月 26-28 日 (2016).
713. 中村みなみ,岩井孝志,神和司,松井彩佳,永井悠貴,菊地昭徳,渡辺俊,松尾由理,内藤康仁,濱田幸恵,岡淳一郎,田辺光男,Glucagon-like peptide-2 は p44/p42 MAPK を介して認知機能障害を改善する,第 89 回日本薬理学会年会,横浜,3 月 11 日(2016).
714. 岡淳一郎,濱田幸恵,堀口道子,中村龍治,中尾優介,山下親正,経鼻投与用 GLP-2 誘導体のペプチド性抗うつ薬としての可能性,第 89 回日本薬理学会年会,横浜,3 月 11 日(2016).
715. * 舟根太地,濱田幸恵,堀口道子,中尾優介,佐々木梨衣,山下親正,岡淳一郎,ニューロメジン U 経鼻投与用誘導体の学習記憶改善作用,第 89 回日本薬理学会年会,横浜,3 月 11 日(2016).
716. 恒岡弥生,西村翼,増淵遼太郎,岡淳一郎,グルカゴン様ペプチド-2 の末梢血管に対する作用,第 89 回日本薬理学会年会,横浜,3 月 10 日(2016).
717. 濱田幸恵,星真帆,丹羽祐希,紙透伸治,倉持幸司,菅原二三男,岡淳一郎,Neoechinulin A の学習改善作

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

- 用および抗うつ様作用,第 89 回日本薬理学会年会,横浜,3 月 9 日(2016).
718. 鈴木聡史,斎藤顕宜,早田暁伸,大橋正誠,山田美佐,長瀬博,岡淳一郎,山田光彦,内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達に注目した新しい不安モデルの確立:デルタオピオイド受容体作動薬 KNT-127 を用いた検討,第 25 回神経行動薬理若手研究者の集い,埼玉,3 月 8 日(2016).
719. 斎藤顕宜,鈴木聡史,早田暁伸,山田美佐,岡淳一郎,山田光彦,マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経を介した不安様行動発現に対するオピオイド δ 受容体作動薬 KNT-127 の影響,第 26 回マイクロダイヤリシス研究会,東京,12 月 19 日(2015).
720. * Nakao, Y., Nakamura, R., Horiguchi, M., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., and Yamashita, C., Development of a Nasal Formulation for Delivering the New Derivative of Antidepressant-like Peptide GLP-2 to the Brain. 第 9 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム,千葉,11 月 7-8 日(2015).
721. 水本遼,濱田幸恵,恒岡弥生,岡淳一郎,Monosodium glutamate 誘発肥満モデルマウスにおける海馬シナプス可塑性障害のメカニズム解明,第 133 回日本薬理学会関東部会部会,柏,10 月 10 日(2015).
722. *濱田幸恵,堀口道子,中村龍治,中尾優介,山下親正,岡淳一郎,中枢作用性 glucagon-like peptide-2 点鼻剤の開発,第 133 回日本薬理学会関東部会部会,柏,10 月 10 日(2015).
723. Li, F., Niu, Y., Inada, C., Tanaka, K., Watanabe, S., Fujiwara, H., Sasaki-Hamada, S., Oka, J-I., Matsumoto, K., Chemical Profiling with HPLC-FTMS of Exogenous and Endogenous Chemicals Susceptible to the Administration of Chotosan in an Animal Model of Type 2 Diabetes-induced Dementia. 富山,9 月 29 日(2015).
724. 斎藤顕宜,塚越麻衣,山田美佐,後藤玲央,岡淳一郎,山田光彦,リゾホスファチジン酸受容体拮抗薬 BrP-LPA のマウス腹側海馬への局所投与は抗不安様作用を示す,第 45 回日本神経精神薬理学会 / 第 37 回日本生物学的精神医学会,東京,9 月 24 日(2015).
725. 中村友哉,濱田幸恵,恒岡弥生,岡淳一郎,Glucagon-like peptide-2 の抗うつ様作用への NO 産生抑制の関与,第 59 回日本薬学会関東支部大会,船橋,9 月 12 日(2015).
726. 早田暁伸,斎藤顕宜,鈴木聡,山田美佐,岡淳一郎,山田光彦,オピオイド δ 受容体はマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域において神経活動依存的にグルタミン酸神経系を調節する,生体機能と創薬シンポジウム 2015,船橋,8 月 27 日(2015).
727. 菊地昭徳,中村みなみ,松井彩佳,永井悠貴,岩井孝志,渡辺俊,松尾由理,内藤康仁,濱田幸恵,岡淳一郎,田辺光男,Glucagon-like peptide-2 の炎症性学習記憶障害に対する改善作用,第 9 回先端分子薬理研究会,千葉,8 月 8 日(2015).
728. 田代祥之,濱田幸恵,恒岡弥生,岡淳一郎,Monosodium glutamate 誘発肥満マウスの糖尿病発症過程におけるグルタミン酸受容体発現変化と脳領域の違い,第 9 回先端分子薬理研究会,千葉,8 月 8 日(2015).
729. Kimura, H., Kimura, Y., Shibuya, N., Toyofuku, Y., Oka, J-I., Ogasawara, Y., Koike, S., and Tsugane, M., Hydrogen Sulfide and Polysulfides as Signaling Molecules. 第 38 回日本神経科学大会,神戸,7 月 29 日(2015).
730. Gotoh, L., Saitoh, A., Yamada, M., Tsukagoshi, M., Oka, J-I., and Yamada, M., Intracerebroventricularly Injected LPA Induces Anxiety-like Behavior in Mice via its Receptors -Possible Roles of LPA in Depression and Anxiety Disorders -. 第 38 回日本神経科学大会,神戸,7 月 29 日(2015).
731. Kimura, Y., Mikami, Y., Osumi, K., Tsugane, M., Oka, J-I., and Kimura, H., Polysulfides Derived from H₂S, are Possible Signaling Molecules That Activate TRPA1 Channels in Rat Brain. 第 38 回日本神経科学大会,神戸,7 月 29 日(2015).
732. 池田将淳,濱田幸恵,恒岡弥生,岡淳一郎,Streptozotocin 誘発性認知症モデルマウスにおける glucagon-like peptide-2 の有用性の検討,第 132 回日本薬理学会関東部会,浦安,7 月 4 日(2015).
733. * 中尾優介,中村龍治,堀口道子,濱田幸恵,岡淳一郎,山下親正,中枢移行性の向上を目指した抗うつ様作用ペプチド GLP-2 点鼻剤の開発,日本薬剤学会第 30 年会,長崎,5 月 22 日(2015).
734. 鈴木聡史,斎藤顕宜,山田美佐,岡淳一郎,山田光彦,マウスの不安様行動における内側前頭前野前辺縁皮質領域の役割について,第 88 回日本薬理学会年会,愛知,平成 27 年 3 月 20 日(2015).
735. 木村由佳,三上義礼,大隅貴美子,津金麻美子,岡淳一郎,木村英雄,活性型の硫化水素であるポリサルファイドはラット脳で TRPA1 を活性化する,第 88 回日本薬理学会年会,愛知,3 月 19 日(2015).
736. 杉山梓,斎藤顕宜,岡淳一郎,長瀬博,山田光彦, δ オピオイド受容体作動薬 KNT-127 の新規曝露療法併用薬としての可能性,第 88 回日本薬理学会年会,愛知,3 月 18 日(2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

737. 塚越麻衣,山田美佐,後藤玲央,岡淳一郎,斎藤顕宜,山田光彦,リゾホスファチジン酸シグナル伝達系の情動行動に及ぼす検討,第 24 回神経行動薬理若手研究者の集い,愛知,3月17日(2015).
738. 杉山梓,斎藤顕宜,岡淳一郎,山田光彦,リルゾールの新規暴露療法併用薬としての可能性,精神保健研究所研究報告会,東京,3月8日(2015).
739. 斎藤顕宜,鈴木聡史,早田暁伸,岡淳一郎,山田光彦,マウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達系を介した不安様行動に対するオピオイド δ 受容体作動薬 KNT-127 の影響,第 25 回マイクロダイヤリシス研究会,東京,12月20日(2014).
740. 松本欣三,牛一民,稲田千香子,藤原博典,季峰,田中謙,渡辺志朗,濱田幸恵,岡淳一郎,釣藤散投与により脳内に出現する生薬由来成分と生体内分子:2型糖尿病モデルマウスでの *ex vivo* ケミカルプロファイリング解析,第 13 回日本臨床中医薬学会,大阪,12月6日(2014).
741. 飯島崇裕,恒岡弥生,濱田幸恵,岡淳一郎,海馬及び扁桃核神経シナプス伝達に対するリルゾールの作用比較,第 8 回先端分子薬理研究会,東京,11月29日(2014).
742. 杉山梓,斎藤顕宜,稲垣正俊,岡淳一郎,山田光彦,リルゾールは文脈的恐怖記憶の消去を促進する,第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会,愛知,11月22日(2014).
743. 鈴木聡史,斎藤顕宜,大橋正誠,山田美佐,稲垣正俊,岡淳一郎,山田光彦,ラモトリギンはマウス内側前頭前野前辺縁皮質領域のグルタミン酸神経伝達を抑制して抗不安様作用を示す,第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会,愛知,11月22日(2014).
744. 塚越麻衣,山田美佐,岡淳一郎,斎藤顕宜,山田光彦,脂質メディエーター リゾホスファチジン酸がマウスの情動行動に及ぼす影響,第 44 回日本神経精神薬理学会・第 24 回日本臨床精神神経薬理学会合同大会,愛知,11月21日(2014).
745. 後藤玲央,斎藤顕宜,塚越麻衣,山田美佐,岡淳一郎,山田光彦,気分障害における脂質メディエーター リゾホスファチジン酸の役割についての検討,第 32 回躁うつ病の薬理・生化学的研究懇話会,福岡,10月17-18日(2014).
746. 鈴木あずさ,濱田幸恵,恒岡弥生,松本欣三,岡淳一郎,強制水泳試験を用いた釣藤散の抗うつ様作用の検討,第 131 回日本薬理学会関東部会,神奈川,10月11日(2014).
747. * 中尾優介,中村龍治,堀口道子,濱田幸恵,岡淳一郎,山下親正,Glucagon-like peptide-2 の中枢移行性を旨とした点鼻製剤の開発,第 58 回日本薬学会関東支部大会,東京,10月4日(2014).
748. 田代祥之,北條裕己,恒岡弥生,濱田幸恵,岡淳一郎,Monosodium glutamate 誘発肥満マウスの糖尿病発症過程におけるグルタミン酸受容体発現変化,第 58 回日本薬学会関東支部大会,東京,10月4日(2014).
749. 金丸真理子,恒岡弥生,濱田幸恵,岡淳一郎,高グルコースが神経細胞の PKA に与える影響,第 58 回日本薬学会関東支部大会,東京,10月4日(2014).
750. 濱田幸恵,北條裕己,小山創,岡淳一郎, Changes in hippocampal synaptic functions and protein expression in monosodium glutamate-treated obese mice during development of glucose intolerance. 第 37 回日本神経科学大会 (Neuro2014),横浜,9月13日(2014).
751. 木村由佳,三上義礼,大隅貴美子,津金麻美子,岡淳一郎,木村英雄, H_2S -derived polysulfides are potential signaling molecules that activate TRPA1 channels in rat brain. 第 37 回日本神経科学大会 (Neuro2014),横浜,9月11日(2014).
752. Niu, Y., Li, F., Fujiwara, H., Tanaka, K., Watanabe, S., Sasaki-Hamada, S., Oka, J., Matsumoto, K., Chemical profiling of endogenous and exogenous markers with potential to contribute to the anti-dementia effects of chitosan in an animal model of type 2 diabetes. 第 31 回和漢医薬学会学術大会,千葉,8月30日-31日(2014).
753. 鈴木聡史,斎藤顕宜,大橋正誠,塚越麻衣,杉山梓,山田美佐,岡淳一郎,稲垣正俊,山田光彦,内側前頭前野前辺縁皮質領域の興奮はグルタミン酸 NMDA 受容体を介してマウスの不安様行動を惹起する,第 130 回日本薬理学会関東部会,東京,7月5日(2014).
754. 塚越麻衣,山田美佐,岡淳一郎,斎藤顕宜,山田光彦,脳室内投与されたリゾホスファチジン酸は受容体を介してマウスの不安様行動を誘発する,第 130 回日本薬理学会関東部会,東京,7月5日(2014).
755. 星真帆,恒岡弥生,濱田幸恵,岡淳一郎, GLP-2 の抗うつ作用メカニズムの解明,第 130 回日本薬理学会関東部会,東京,7月5日(2014).
756. * 中村龍治,中尾優介,恒岡弥生,堀口道子,濱田幸恵,山下親正,岡淳一郎, GLP-2 経鼻投与用製剤の中枢作用,第 130 回日本薬理学会関東部会,東京,7月5日(2014).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

国際会議

757. Sugiyama, A., Saitoh, A., Inagaki, M., Oka, J-I., Yamada, M., Riluzole as a novel candidate agent to treat anxiety disorders. NCNP & Max-Planck-Institut joint symposium, Kanagawa, Japan, November 7 (2014).
758. * Nakao, Y., Nakamura, R., Ozawa, C., Hamada, S., Horiguchi, M., Oka, J-I., Yamashita, C., Development of a nasal formulation for the GLP-2 delivery to the brain. 5th Indo-Japanese International Joint Symposium on Overcoming Intractable Infectious Diseases Prevalent in Asian Countries, Tokyo, Japan, September 16-17 (2014).
759. Saitoh, A., Sugiyama, A., Oka, J-I., Nagase, H., Yamada, M., The DOR₂ antagonist naltriben abolishes KNT-127-induced anxiolytic-like effects in rats. The International Narcotics Research Conference 2014 (INRC201), Montreal, Canada, July 13-18 (2014).

招待講演

760. * 岡淳一郎, 濱田幸恵, 堀口道子, 中村龍治, 中尾優介, 山下親正, 経鼻投与用 GLP-2 誘導体のペプチド性抗うつ薬としての可能性, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 3 月 10 日(2016).
761. * 濱田幸恵, 堀口道子, 中村龍治, 中尾優介, 山下親正, 岡淳一郎, 中枢作用性 glucagon-like peptide-2 点鼻剤の開発, 柏, 10 月 10 日(2015).
762. 恒岡弥生, 西村翼, 増淵遼太郎, 濱田幸恵, 岡淳一郎, Glucagon-like peptide-2 の新展開: 末梢への作用, 柏, 10 月 10 日(2015).
763. 岡淳一郎, 濱田幸恵, 鈴木あずさ, 上野達人, 玉城啓太, 松本欣三, 釣藤散の学習記憶障害改善作用及び抗うつ様作用の機序解明, 第 14 回日本臨床中医薬学会学術大会, 富山, 9 月 29 日(2015).
764. 濱田幸恵, 岡淳一郎, 糖尿病に起因する認知障害の病態解明と治療戦略の構築, 生体機能と創薬シンポジウム 2015, 船橋, 8 月 28 日(2015).
765. 岡淳一郎, 松本欣三, 濱田幸恵, 釣藤散の脳機能障害改善作用, 第 88 回日本薬理学会年会, 愛知, 3 月 18 日(2015).

東達也

国内学会

766. 中村将大, 森綱菜里奈, 湯田啓太, 堀江裕紀子, 小川祥二郎, 杉浦悠毅, 東 達也, MALDI/TOF-MS(/MS)によるステロイド定量法の開発, 第 31 回バイオメディカル分析科学シンポジウム(福岡), 8 月 28 日(2018)
767. 亀村美樹, 横田麻衣, 小川祥二郎, 東 達也, 4 種の Girard 試薬アナログを用いた誘導体化によるステロイドのハイスルーブット LC/ESI-MS/MS 定量法の開発, 第 43 回日本医用マススペクトル学会年会(札幌), 9 月 6 日(2018)
768. 赤石美帆, 横田麻衣, 小川祥二郎, 杉浦悠毅, 西川哲男, 西本紘嗣郎, 東 達也, Girard 試薬 P アイソトポログを用いた副腎静脈血清中アルドステロンの LC/ESI-MS/MS 定量法, 第 43 回日本医用マススペクトル学会年会(札幌) 2018 年 9 月 6 日
769. 城 彰宏, 大谷彩織, 小川祥二郎, 東 達也, DAPPZ アイソトポログを用いる血漿中胆汁酸の 3 検体一括 LC/ESI-MS/MS 定量法の開発, 第 29 回クロマトグラフィー科学会議(豊橋)11 月 9 日(2018)
770. 小川祥二郎, 渡部ひとみ, 茶谷 仁, 島田洋輔, 坪郷 哲, 後藤 了, 東 達也, 種々の Cookson 型試薬による 7-dehydrocholesterol 誘導体のプロトン親和力と ESI-MS 感度との関係, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 27 日(2017).
771. 河俣圭太, 前川正充, 三枝大輔, 小川祥二郎, 東 達也, 山口浩明, 眞野成康, 誘導体化 LC/ESI-MS/MS を用いるコレステロール代謝物の網羅的分析系の構築, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 27 日(2017).
772. 松本孝彬, 山崎 航, 小川祥二郎, 三田村邦子, 池川繁男, 東 達也, ICD-LC/ESI-MS/MS による尿中テトラヒドロコルチステロイドグルクロニドの定量法の開発, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 27 日(2017).
773. 木本新人, 山本栄一, 東 達也, 加藤 大, ポリマー修飾モノリスカラムを用いた DOXIL の迅速分析, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 25 日(2016).
774. 湯田啓太, 中村将大, 小川祥二郎, 杉浦悠毅, 新聞秀一, 東 達也, MALDI/TOF-MS(/MS)を用いた低分子バイオマーカーのハイスルーブット定量法の開発研究, 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3 月 25 日(2017).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

775. 木本新人、東 達也、加藤 大、ポリマー修飾モノリス型カラムを用いた DOXIL からの内包薬物の放出評価、新アミノ酸分析研究会第 6 回学術講演会、東京、11 月 4 日 (2016).
776. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ICD-LC/ESI-MS/MSによる玄米発酵食品 (FBRA) 中ケイ皮酸誘導体及び安息香酸誘導体の定量法の開発、日本分析化学会第 65 年会、札幌、9 月 15 日 (2016).
777. 小川祥二郎、渡部ひとみ、茶谷 仁、島田洋輔、恒岡弥生、後藤 了、東 達也、Cookson 型誘導体化試薬の ESI-MS/MS 分析における感度向上能と量子計算に基づくプロトン親和力との関係日本分析化学会第 65 年会、札幌、9 月 16 日 (2016).
778. 杉浦悠毅、新聞秀一、東 達也、西本紘嗣郎、On tissue 誘導体化/イメージング質量分析によるステロイドホルモンの可視化、第 41 回日本医用マスペクトル学会年会、名古屋、9 月 16 日 (2016).
779. 横田麻衣、後藤彩佳、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、LC/ESI-MS/MS を用いた新生児血漿中 25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体の同時定量、日本分析化学会第 65 年会、札幌、9 月 14 日 (2016).
780. 橋高宏貴、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、DAPTAD アイソトポログを用いた血漿中 25-hydroxyvitamin D₃の高感度・ハイスループット LC/ESI-MS/MS 分析法の開発、第 29 回バイオメディカル分析科学シンポジウム、京都、9 月 2 日 (2016).
781. 小川祥二郎、高野 香、中畔勇太郎、関 俊哲、東 達也、非侵襲ステロイド検査試料としての爪の有用性、第 29 回バイオメディカル分析科学シンポジウム、京都、9 月 2 日 (2016).
782. 森下宜彦、葦澤 崇、岩崎了教、工藤寿治、東 達也、新聞秀一、杉浦悠毅、イメージング質量分析によるステロイドホルモンの可視化、第 64 回質量分析総合討論会、大阪、5 月 19 日 (2016).
783. 安田優太郎、杉浦悠毅、東 達也、福崎英一郎、新聞秀一、マトリックス支援レーザー脱離イオン化イメージング質量分析を用いた生体内プロスタグランジン可視化のための試料前処理法の開発、第 64 回質量分析総合討論会、大阪、5 月 19 日 (2016).
784. 後藤彩佳、横田麻衣、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、乳児血漿中 25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体の LC/ESI-MS/MS 同時定量法の開発、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日 (2016).
785. 小川祥二郎、都丸晃輝、渡辺趣衣、眞野成康、東 達也、ESI 増強誘導体化試薬を用いるラット脳内胆汁酸の LC/MS/MS 定量、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 28 日 (2016).
786. 都丸晃輝、小川祥二郎、渡辺趣衣、眞野成康、東 達也、カルボン酸用 ESI 活性誘導体化試薬の開発と生体試料分析への応用、第 26 回クロマトグラフィー科学会議、福岡、11 月 11 日 (2015).
787. * 相葉尚人、田中智哉、大和 遼、吉澤一巳、小川祥二郎、東 達也、ESI 増加重水素試薬を用いる脳内神経活性ステロイドのレベル変動解析、第 26 回クロマトグラフィー科学会議、福岡、11 月 11 日 (2015).
788. 西村 基、佐藤 守、石毛崇之、東 達也、野村文夫、自動分析法による血清 25 ヒドロキシビタミン D 測定値の標準化: SRM 972a を校正に用いた測定、第 55 回日本臨床化学会年次学術集会、大阪、10 月 30 日 (2015).
789. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MS の臨床検査応用—ビタミン D 代謝物測定を基盤に—、日本臨床検査自動化学会 第 47 回大会、横浜、10 月 10 日 (2015).
790. 小川祥二郎、加藤由那、高野 香、中畔勇太郎、山形憲一郎、関 俊哲、東 達也、ステロイド検査試料としての爪の評価: 左右の手の爪中ステロイドの含量差、第 40 回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9 月 18 日 (2015).
791. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MS の臨床検査応用—ビタミン D 代謝物測定を基盤に—、第 40 回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9 月 18 日 (2015).
792. 後藤彩佳、横田麻衣、小川祥二郎、小松賢司、杉浦崇浩、東 達也、LC/ESI-MS/MS による血漿中 25-hydroxyvitamin D₃及びその硫酸抱合体の同時定量法の開発、第 40 回日本医用マスペクトル学会年会、浜松、9 月 17 日 (2015).
793. 橋高宏貴、篠田健太、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、高プロトン親和性 Cookson 型試薬の合成とビタミン D 代謝物の LC/ESI-MS/MS における評価、第 28 回バイオメディカル分析科学シンポジウム、長崎、8 月 22 日 (2015).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

794. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ESI 活性重水素標識試薬を用いた玄米発酵食品(FBRA)中ケイ皮酸誘導体の定量法の開発、第 28 回バイオメディカル分析科学シンポジウム、長崎、8 月 22 日 (2015).
795. 高藤季里子、津吹 澄、堀江裕紀子、池川繁男、小川祥二郎、東 達也、ICD-LC/ESI-MS/MS による玄米発酵食品 (FBRA) 中ケイ皮酸誘導体の定量法の開発、第 13 回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム、長崎、8 月 21 日 (2015).
796. 橘高宏貴、篠田健太、中田彬穂、小川祥二郎、東 達也、新規高プロトン親和性 Cookson 型試薬を用いた新生児血中 25-ヒドロキシビタミン D₃ の LC/ESI-MS/MS 分析、第 13 回次世代を担う若手のためのフィジカル・ファーマフォーラム、長崎、8 月 20 日 (2015).
797. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、LC/MS/MS の臨床検査応用—ビタミン D 代謝物測定を基盤に—、日本プロテオーム学会 2015 年会、熊本、7 月 23 日 (2015).
798. * 相葉尚人、田中智哉、小川祥二郎、東 達也、ESI 活性重水素標識試薬を用いるラット脳内神経活性ステロイド分析法の開発、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 27 日 (2015).
799. 都丸晃輝、渡辺趣衣、小川祥二郎、東 達也、誘導体化—LC/ESI-MS/MS による唾液中 EPA/AA 濃度比の測定、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 27 日 (2015).
800. 小川祥二郎、高藤季里子、堀江裕紀子、池川繁男、東 達也、カルボン酸用新規 ESI 増強重水素標識試薬の合成と LC における同位体効果の評価、日本薬学会第 135 年会、神戸、3 月 27 日 (2015).
801. 森下雄大、東 達也、菅野弘晃、杉浦崇浩、佐藤 恵、水谷真一郎、小松賢司、小松和幸、福岡哲哉、喘息児と健康児における唾液コルチゾール・コルチゾン値の比較検討～第 2 報～、第 51 回日本小児アレルギー学会、四日市、11 月 9 日 (2014).
802. 大木 智、篠田健太、小川祥二郎、東 達也、ESI 増強重水素標識試薬を用いた尿中ビタミン D₃ 代謝物の LC/MS/MS 分析法の開発、第 39 回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10 月 17 日 (2014).
803. 佐藤 守、石毛崇之、小川祥二郎、西村 基、松下一之、東 達也、野村文夫、DAPTAD 誘導体化を用いた LC-MS/MS による血清ビタミン D 代謝物の 4 項目同時定量、第 39 回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10 月 17 日 (2014).
804. 後藤彩佳、諸橋美里、小松賢司、杉浦崇浩、小川祥二郎、東 達也、血漿中 25-hydroxyvitamin D₃ 3-sulfate の LC/ESI-MS/MS 定量法の開発、第 39 回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10 月 16 日 (2014).
805. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、土田祥央、澤井 撰、松下一之、東 達也、野村文夫、イムノアフィニティー抽出 DAPTAD 誘導体化 LC-MS/MS による血清 25OH-ビタミン D および 1,25(OH)₂-ビタミン D の同時定量、第 39 回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10 月 16 日 (2014).
806. 田所弘晃、佐藤真帆、小川祥二郎、東 達也、ESI 活性重水素標識試薬を用いる唾液中イブプロフェンの対掌体弁別定量法の開発、第 39 回日本医用マススペクトル学会年会、千葉、10 月 16 日 (2014).
807. 石毛崇之、佐藤 守、小川祥二郎、西村 基、土田祥央、澤井 撰、松下一之、小寺義男、東 達也、野村文夫、DAPTAD 誘導体化 LC-MS/MS による血清 25OH-ビタミン D₃、-D₂ および 3-epi-25OH-ビタミン D₃ の同時分析、日本臨床検査自動化学会第 46 回大会、神戸、10 月 11 日 (2014).
808. * 山形憲一郎、小川 宥、入山 崇、加藤由那、関 俊哲、小川祥二郎、東 達也、爪中 glycochenodeoxycholic acid と dehydroepiandrosterone sulfate の LC/ESI-MS/MS 定量法の開発、第 27 回バイオメディカル分析科学シンポジウム、東京、8 月 20 日 (2014).

国際会議

809. Ogawa, S., Ooki, S., Shinoda, K., and Higashi, T., A Method for Determination of Urinary Vitamin D₃ Metabolites Based on LC/ESI-MS/MS with ESI-Enhancing and Stable Isotope-Coded Derivatization. APCE2014 (14th Asia-Pacific International Symposium on Microscale Separations and Analysis), Kyoto, Japan, December 9 (2014).

招待講演

810. 東 達也、誘導体化—LC/ESI-MS/MS による新生児ビタミン D 欠乏症の精密診断法の開発、第 64 回質量分析総合討論会、大阪、5 月 19 日 (2016).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

811. 東 達也、高感度化と構造微小差の弁別を指向した LC/ESI-MS/MS 用誘導体化法の開発、第 11 回千葉県分析化学交流会、東京、7 月 16 日 (2015).
812. 東 達也、低分子化合物の LC/ESI-MS/MS 用誘導体化: 検出感度の向上と構造微小差の弁別、第 39 回日本医用マスペクトル学会年会、千葉、10 月 16 日 (2014).
- 吉澤一巳
国内学会
813. * 奥村綾野, 中島梢, 東達也, 吉澤一巳. Role of allopregnanolone biosynthesis in acute stress-induced anxiety-like behaviors in mice. 第 11 回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム. 2017. 10. 21-22. 京都.
814. * 奥村綾野, 佐藤知世, 中島梢, 相葉尚人, 田中智哉, 東達也, 吉澤一巳. 神経活性ステロイドを標的とした新規抗不安薬の探索に関する検討. 第 46 回日本神経精神薬理学会年会. 2016. 7. 2-3. ソウル.
815. 吉澤一巳, 田代真弓, 手塚葉, 山田岳史, 高橋吾郎, 岩井琢磨, 藤田逸郎, 金沢義一, 柿沼大輔, 菅野仁史, 横山康行, 内田英二, EPA および BCAA は抗がん剤による骨格筋量減少を予防する, 第 31 回日本静脈経腸栄養学会, 福岡, 2 月 25 日 (2016)
816. 芝野優希, 山中沙織, 河野弥生, 吉澤一巳, 廣木章博, 田口光正, 花輪剛久, トラマドール塩酸塩含有ハイドロゲル製剤からの薬物放出挙動および鎮痛効果の検討, 日本薬学会 136 年会, 神奈川, 3 月 28 日 (2016).
817. 柳原千賀, 吉澤一巳, 魚森俊喬, 齊藤光江, 小茂田昌代, ラット唾液中アミラーゼ活性を指標とした抗がん剤誘発催吐作用の評価, 日本薬学会第 135 年会, 兵庫, 3 月 26 日 (2015).
818. 吉澤一巳, 田代真弓, 山田岳史, 高橋吾郎, 岩井琢磨, 菅隼人, 小泉岐博, 進士誠一, 山岸杏彌, 横山康行, 内田英二, 抗がん剤誘発体重および骨格筋量減少に対する栄養療法の有用性に関する基礎的検討, 第 40 回日本外科系連合学会, 東京, 6 月 18 日 (2015)
819. 高橋彩夏, 吉澤一巳, 佐藤知世, 弓長藤佳, 田代真弓, 青山隆夫, シスプラチンによる食欲不振に対する抗うつ薬ミルタザピンの有用性に関する基礎的検討, 第 1 回日本医薬品安全性学会, 広島, 7 月 4 日 (2015).
820. 手塚葉, 田代真弓, 吉澤一巳, 高橋吾郎, 山田岳史, 内田英二, CDDP 誘発食欲不振に対する EPA および BCAA の有用性に関する検討, 生体機能と創薬シンポジウム 2015, 千葉, 8 月 27 日 (2015).
821. 高橋彩夏, 工藤浩史, 赤木祐貴, 宮野早苗, 大橋養賢, 谷地豊, 鈴木義彦, 吉澤一巳, 下村斉, 青山隆夫, がん患者における神経障害性疼痛と精神症状に対するミルタザピンの有用性, 第 9 回日本緩和医療薬学会, 神奈川, 10 月 3 日 (2015).
822. 光信沙恵, 星野結衣, 森友久, 鈴木勉, 吉澤一巳, 精油成分がもたらすストレス障害モデルマウスへの睡眠増強および抗不安作用, 第 9 回日本緩和医療薬学会, 神奈川, 10 月 3 日 (2015).
823. 吉澤一巳, 鈴木勉, 本邦における医療用麻薬使用量の現状, 第 9 回日本緩和医療薬学会, 神奈川, 10 月 3 日 (2015).
824. 弓長藤佳, 干台美咲, 山田ゆりか, 益田律子, 吉澤一巳, 抗がん剤足蹠投与による末梢神経障害モデルマウスの作製に関する検討, 第 133 回日本薬理学会関東部会, 千葉, 10 月 10 日 (2015).
825. 田代真弓, 手塚葉, 山田岳史, 高橋吾郎, 内田英二, 吉澤一巳, 抗がん剤誘発体重減少における EPA 強化栄養剤の有用性に関する基礎的検討, 日本医科大学・東京理科大学第 2 回合同シンポジウム, 東京, 12 月 12 日 (2015)
826. 原島美樹, 河野弥生, 吉澤一巳, 廣木章博, 田口正光, 花輪剛久, 電子線架橋によるハイドロゲル製剤の調製と製剤素材としての可能性, 日本薬剤学会第 29 年会, 埼玉, 5 月 21 日 (2014).
827. 佐藤知世, 吉澤一巳, 弓長藤佳, 田代真弓, 高橋彩夏, 青山隆夫, 抗がん剤誘発副作用モデル動物に対する抗うつ薬 mirtazapine の影響, 第 130 回日本薬理学会関東部会, 東京, 7 月 5 日 (2014).
828. 田代真弓, 小藤あずさ, 山田岳史, 内田英二, 吉澤一巳, 抗がん剤誘発食欲不振マウスに対する EPA 強化栄養剤の影響, 第 8 回日本緩和医療薬学会年会, 愛媛, 10 月 4 日 (2014).
- 樋上賀一
国内学会
829. 内田理緒, 瀧加菜里, 小林正樹, 樋上賀一, カロリー制限による脂肪細胞におけるミトコンドリア機能亢進メカニズムの解析, 日本薬学会第 139 年会, 千葉市 3 月 20~23 日 (2019)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

830. 若澤広樹、星野駿介、古屋和寛、三浦久実、小林正樹、樋上賀一、肥満症脂肪組織における新規肥満応答因子Wwp1の機能解析、日本薬学会第139年会、千葉市3月20～23日(2019)
831. 水之江雄平、樋上賀一、小林正樹、星野駿介、中川 嘉、島野 仁、リソソーム機能異常が脂肪滴局在タンパク質ペリリピンに及ぼす影響の解析、第39回日本肥満学会、神戸、10月7日～8日(2018)
832. 吉田真帆、小林正樹、井前正人、樋上賀一、タウリンの生体内恒常性維持機構の解析、第39回日本肥満学会、神戸、10月7日～8日(2018)
833. 星野駿介、小林正樹、樋上賀一、肥満マウス脂肪組織における新規肥満応答因子 Wwp1 の機能解析、第39回日本肥満学会、神戸、10月7日～8日(2018)
834. Kazuhiro FURUYA, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Influence of WWP1 on antioxidant function in obese adipose tissue. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
835. Knari TAKI, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, A novel mitochondria activation mechanism in adipocytes by caloric restriction. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
836. Natsumi MIZUSHIMA, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, The mechanisms of lysosomal dysfunction in white adipose tissue of short-term high-fat diet model. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
837. Shunsuke HOSHINO, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Functional analysis of E3 ubiquitin ligase Wwp1 in mouse white adipose tissue. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
838. Misako SAKURAI, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, The effect of decreasing activity of cathepsin L on adipocytes. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
839. Seira UTA, Namiki FUJII, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Transcriptional regulation of Fgf21 and Pgc-1 α by caloric restriction. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
840. Masaki KOBAYASHI, Hiroki KANEKO, Yuhei MIZUNOE, Maho YOSHIDA, Masato IMAE, Yoshikazu HIGAMI, Tarurin is an amino acid with the ability to activate autophagy in adipocytes. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
841. Kumi MIURA, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Effects of aging and caloric restriction in Wwp1 expression in skeletal muscle. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
842. Yuki YOSHIDA, Kanako MIYANO, Yuji OMIYA, Yoshikazu HIGAMI, Yasuhito UEZONO, Analysis of pharmacological relationship between a Japanese Kanpo Kamikihito on oxytocin receptors. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
843. Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Novel mediators for caloric restriction-associated metabolic remodeling in white adipose tissue. 第41回日本基礎老化学会、東京都葛飾区、5月31日～6月2日(2018)
844. 古市拓真、水之江雄平、小林正樹、樋上賀一、短期高脂肪食摂取モデルの脂肪組織におけるリソソーム機能破綻メカニズムの解析、日本薬学会第138年会、金沢市、3月25日～28日(2018)
845. 尾脇美香、石崎由夏、柿山勇理、小林正樹、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、PARP1 タンパク質新規制御機構～がん治療への応用～、第40回日本分子生物学会年会、神戸、12月6日(2017)
846. Keita Nagai, Yoshikazu Higami, Masaki Kobayashi, The role of MIPEP in improvement of metabolism by CR, 第17回日本ミトコンドリア学会年会、京都、11月22日(2017)
847. Rei Itagawa, Yuhei Mizunoe, Masaki Kobayashi, Yoshikazu Higami, The Obese Pathology Affected by Lysosomal Dysfunction, 第17回日本ミトコンドリア学会年会、京都、11月22日(2017)
848. Shunsuke HOSHINO, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Function analysis of obesity-induced E3 ubiquitin ligase, Wwp1, in the obese adipose tissue, 第40回日本基礎老化学会大会、名古屋、6月14日(2017)
849. Keita NAGAI, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, The role mitochondrial intermediate peptidase (MIPEP) in improvement of mitochondrial metabolism by Caloric Restriction, 第40回日本基礎老化学会大会、名古屋、6月14日(2017)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

850. Rei ITAGAWA, Yuhei MIZUNOE, Masaki KOBAYASHI, Yoshikazu HIGAMI, Development of an Obesity Pathology affected by Lysosomal Dysfunction, 第 40 回日本基礎老化学会大会、名古屋、6 月 14 日 (2017)
851. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪組織におけるリソソーム・オートファジー機能障害、第 10 回オートファジー研究会・第 4 回新学術「オートファジー」班会議、新潟、11 月 14 日 (2016)
852. 安川博峰、樋上賀一、オートファジー誘導剤トレハロースの新規細胞防御メカニズムについて、第 10 回オートファジー研究会・第 4 回新学術「オートファジー」班会議、新潟、11 月 14 日 (2016)
853. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪細胞組織におけるリソソーム機能障害と脂肪細胞機能に与える影響、第 37 回日本肥満学会、東京、10 月 7 日 (2016)
854. 成田匠、樋上賀一、脂肪酸合成関連転写因子 Srebp-1c は長期低栄養状態に対する適応遺伝子である、第 37 回日本肥満学会、東京、10 月 7 日 (2016)
855. 名取大輝、水之江雄平、樋上賀一、天然由来二糖類トレハロースの新規細胞防御機構の解明と代謝性疾患への応用、第 37 回日本肥満学会、東京、10 月 7 日 (2016)
856. 樋上賀一、トレハロースの新規細胞防御システム、第 59 回日本糖尿病学会年次学術集会、京都、5 月 19 日 (2016)
857. 金子弘輝、水之江雄平、井前正人、須藤結香、樋上賀一、タウリンが脂肪細胞のオートファジーに与える影響、第 39 回日本基礎老化学会大会、神奈川、4 月 27 日 (2016)
858. 斉藤宏樹、板倉佳穂、蒲谷里穂、須藤結香、樋上賀一、カロリー制限が内臓および皮下白色脂肪組織リモデリングに及ぼす影響、第 39 回日本基礎老化学会大会、神奈川、4 月 27 日 (2016)
859. 板倉佳穂、蒲谷里穂、斉藤宏樹、須藤結香、樋上賀一、代謝臓器におけるカロリー制限が及ぼす影響の解析、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 27 日 (2016)
860. 水之江雄平、樋上賀一、肥満症脂肪組織におけるオートファジー・リソソーム障害、第 36 回日本肥満学会、名古屋、10 月 2 日 (2015)
861. 水之江雄平、須藤結香、平岡秀規、沖田直之、樋上賀一、肥満時の脂肪組織におけるリソソーム機能障害とオートファジーに与える影響、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13 日 (2015)
862. Mizunoe Y, Sudou Y, Hiraoka H, Okita N, Higami Y, Lysosomal dysfunction and autophagy alteration in adipose tissue, 第 38 回日本基礎老化学会大会、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13 日 (2015)
863. 渡邊秀行、水之江雄平、名取大輝、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、トレハロースによる新規細胞防御メカニズム、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13 日 (2015 年)
864. 今野竜太郎、田川亮真、星野駿介、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、脂肪細胞におけるWWP1の機能解明、第 38 回日本基礎老化学会大会、横浜、6 月 13 日 (2015)
865. 樋上賀一、肥満症脂肪組織におけるオートファジー障害、第 58 回日本糖尿病学会年次学術集会、山口、5 月 22 日 (2015 年)
866. 成田匠、藤井波木、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、カロリー制限による抗老化・寿命延長効果に Srebp-1 が及ぼす影響、第 14 回日本ミトコンドリア学会年会、福岡、12 月 3 日 (2014)
867. 水之江雄平、須藤結香、沖田直之、樋上賀一、肥大化した脂肪細胞のオートファジーにおけるリソソーム機能障害、第 8 回オートファジー研究会、札幌、11 月 9 日 (2014)
868. MIYAKAWA Ryota, SUDO Yuka, OTUKA Hiroki, GOTO Akihumi, KASHIWASE Yohei, UEZONO Yasuhito, HIGAMI Yoshikazu, Lipid metabolism in cancer cachexia and caloric restriction in adipose tissue, effects of Rikkunshito, 第 37 回基礎老化学会大会、愛知、6 月 21 日 (2014)
869. NEGISHI Arisa, MIZUNOE Yuhei, SUDO Yuka, HIGAMI Yoshikazu, Inhibition of autophagy by fatty acids in hepatocyte, 第 37 回基礎老化学会大会、愛知、6 月 21 日 (2014)
870. 樋上賀一、カロリー制限 (CR) による脂肪組織での代謝リモデリングと抗老化。寿命延伸効果に Srebp1 が重要な役割を果たす、第 57 回日本糖尿病学会年次学術集会、大阪、5 月 23 日 (2014)
871. 樋上賀一、Srebp1c を介したカロリー制限による脂肪組織での代謝リモデリングと抗老化・寿命延伸効果、日本病理学会・第 103 回日本病理学会総会、広島、4 月 25 日 (2014)
- 国際会議
872. Kanae Takeda, Takumi Narita, Masaki Kobayashi, Yoshikazu Higami, Novel mechanisms of SIRT3 activation by caloric restriction, 日本ミトコンドリア学会・The 13th Conference of Asian Society for Mitochondrial Research and Medicine and The 16th Conference of Japanese Society of Mitochondrial

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

Research、東京、10月30日(2016)

873. Takumi Narita, Namiki Fujii, Yurika Furuta, Naoyuki Okita, Yuka Sudo, Masaki Kobayashi, Yoshikazu Higami, Srebp-1c activates mitochondrial biogenesis in white adipose tissue via caloric restriction、日本ミトコンドリア学会・The 13th Conference of Asian Society for Mitochondrial Research and Medicine and The 16th Conference of Japanese Society of Mitochondrial Research、東京、10月30日(2016)

招待講演

874. * 樋上賀一、「一般シンポジウム S17. 老化研究の多面的アプローチ: そこから見えてくる未来」代謝の老化: カロリー制限による脂肪組織での代謝リモデリング、日本薬学会第 139 年会、千葉、3月21日(2019)

875. * 樋上賀一、カロリー制限による代謝改善・抗老化・寿命延伸メカニズム、第 172 回日本体力医学会関東地方会、東京、3月2日(2019)

876. * 樋上賀一、小林正樹、「シンポジウム1. 肥満脂肪組織病態学の最先端」抗老化・寿命延伸作用を示すカロリー制限による脂肪組織リモデリングにおける新規メディエーター、第 39 回日本肥満学会、神戸、10月7日(2018)

877. * Yoshikazu Higami, A novel mediator for pro-longevity and anti-aging actions of caloric restriction, Asian Society for Aging Research Symposium 2018, Jeju-si, South Korea, April 18-21, (2018)

878. * Masaki Kobayashi, Yoshikazu Higami, Novel mediators for caloric restriction-associated metabolic remodeling in white adipose tissue, Japan-Korea Joint Symposium, The 41th Annual Meeting of Japan Society for Biomedical Gerontology, Tokyo, May 31- June 2, (2018)

879. * Yoshikazu Higami, A novel mediator for pro-longevity and anti-aging actions of caloric restriction, 2018 Asian Society for Aging Research Symposium, Jeju, South Korea, April 18-21, (2018)

880. * Higami, A novel mediator for pro-longevity and anti-aging actions of caloric restriction, 3rd International BioMedical Interface Symposium, Naha, March 10-11, (2018)

881. * 樋上賀一、トレハロースの細胞防御機構、第 21 回トレハロースシンポジウム、東京、11月16日(2017)

882. * Yoshikazu Higami, Quality control of adipose tissue by caloric restriction. The 3rd Annual UHCC-TUS Symposium, Honolulu, Hawaii, USA, May 18 (2017)

883. * Yoshikazu Higami, Quality of adipose tissue on aging and metabolic diseases. International Symposium of the Center for Animal Disease Models 2016, Tokyo, July 16, (2016)

884. Yoshikazu Higami, Development of Poly (ADP ribose) Polymerase (PARP) Inhibitor by a Novel Molecular Mechanism, Translational Research (TR) Center -Frontiers in Developmental Strategy for Cancer Therapeutics-, Tokyo, June 25, (2016)

885. * Yoshikazu Higami, Lysosomal dysfunction in early pathologies in obese adipose tissue. 2016 Spring International Conferene of the Korean Society for Gerontology and the 15th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting, Daegu, South Korea, June 15-17, (2016)

886. * Yoshikazu Higami, Srebp-1c plays an important role for metabolic remodeling of white adipose tissue, and anti-aging and pro-longevity actions of caloric restriction、Asian Aging Core for Longevity “2006-2015, 10 years and Beyond”、3月10日(2015)

887. * 成田匠、沖田直之、須藤結香、樋上賀一、新たなカロリー制限の分子メカニズム ~脂肪代謝と脂肪組織のリモデリング~、老化促進モデルマウス(SAM)研究協議会)第 30 回研究発表会、岐阜、7月4日(2015)

888. * Yoshikazu Higami、Caloric restriction enhances mitochondrial biogenesis and suppresses oxidative stress via a master transcription factor of fatty acid biosynthesis, Srebp-1c, in mice white adipose, 2014 Spring Conferene of the Korean Society for Gerontology and the 13th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting, Jeju, South Korea, June 20, (2014 年)

889. * Yuhei Mizunoe, Yuka Sudo, Naoyuki Okita and Yoshikazu Higami、ROS-associated lysosomal dysfunction impairs autophagy flux and adipokine profile in adipocytes、2014 Spring Conferene of the Korean Society for Gerontology and the 13th Korea-Japan Gerontologist Joint Meeting、済州島、

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

6月20日(2014年)

890. 沖田直之、成田匠、藤井波木、須藤結香、樋上賀一、カロリー制限における Srebp1c を介した de novo 脂肪酸合成とミトコンドリアバイオジェネシス、酸化ストレスの関連、第 36 回日本基礎老化学会シンポジウム、東京、10月26日(2014)

磯濱洋一郎

国内学会

891. 小塚友理、倉金虎太郎、松山真吾、磯濱洋一郎、肺線維症の病態形成における骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の役割、日本薬学会第 139 年会、(千葉、幕張メッセ)、3月23日(2019)、優秀発表賞受賞

892. 小川 達郎、菊島 悠子、長田 佳介、松山 真吾、磯濱 洋一郎、水チャネル aquaporin-5 による Th2 サイトカイン応答性の抑制とその機序、日本薬学会第 139 年会、(千葉、幕張メッセ)、3月23日(2019)、優秀発表賞受賞

893. 海上聖羅、松山真吾、堀江一郎、磯濱洋一郎、気管支喘息モデルマウスでのステロイド薬の抗炎症作用における骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の役割、第 92 回日本薬理学会年会、(大阪、大阪国際会議場)、3月14日(2019)

894. 上野 輝、松山真吾、堀江一郎、岩倉洋一郎、磯濱洋一郎、IL-17A と IL-13 の相互作用により生じるステロイド抵抗性の気道粘液産生亢進、第 92 回日本薬理学会年会、(大阪、大阪国際会議場)、3月14日(2019)

895. 大堀晴香、松山真吾、堀江一郎、磯濱洋一郎、清肺湯の細胞膜水透過性亢進作用に関する研究、天然薬物研究方法論アカデミー第 21 回研究集会、(蒲郡、蒲郡ホテル明山荘)、9月3日(2018)、優秀発表賞受賞

896. 畑 美冴、松山真吾、堀江一郎、磯濱洋一郎、モルモット気道上皮細胞の初代培養系を用いた杯細胞および線毛細胞の分化に対する清肺湯の作用、天然薬物研究方法論アカデミー第 21 回研究集会、(蒲郡、蒲郡ホテル明山荘)、9月3日(2018)

897. 村上一仁、松山真吾、堀江一郎、磯濱洋一郎、血管内皮細胞の遊走と血管新生に対する五苓散の抑制作用～慢性硬膜下血腫再発防止効果の薬理学的合理性～、第 35 回和漢医薬学会学術大会、(岐阜、岐阜市長良川国際会議場)、9月1日(2018)

898. 小寺真央、堀江一郎、松山真吾、高橋隆二、磯濱洋一郎、人参養栄湯による骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の分化抑制作用とその特性、第 35 回和漢医薬学会学術大会、(岐阜、岐阜市長良川国際会議場)、9月1日(2018)

899. 関谷知樹、堀江一郎、松山真吾、大崎幸彦、荒井哲也、磯濱洋一郎、清肺湯および杏仁による気道線毛細胞の線毛運動亢進作用、第 35 回和漢医薬学会学術大会、(岐阜、岐阜市長良川国際会議場)、9月1日(2018)

900. 海上聖羅、松山真吾、磯濱洋一郎、ステロイド薬による骨髄由来免疫抑制細胞 (MDSC) の分化促進作用とその薬理学的意義、第 20 回応用薬理シンポジウム、(東京、大田区産業プラザ PIO)、8月4日(2018)

901. 黄 莉慧、堀江 一郎、松山 真吾、上杉 晴香、荒井 哲也、磯濱 洋一郎、アルコール摂取による脳内水分含量および AQP4 発現への影響と五苓散の作用、第 20 回応用薬理シンポジウム、(東京、大田区産業プラザ PIO)、8月4日(2018)

902. 小川達郎、小森駿、堀江一郎、松山真吾、磯濱洋一郎、Aquaporin-5 による Th2 サイトカイン応答性の抑制とそのメカニズム、第 17 回肺サーファクタント分子病態研究会、日(札幌、札幌医科大学祈念ホール)、7月14(2018)

903. 上野 輝、町田 渉、松山真吾、堀江一郎、磯濱洋一郎、気管支喘息モデルマウスのステロイド抵抗性粘液産生に対する IL-17A の役割、第 3 回下総薬理学研究会、(船橋、東邦大学薬学部)、6月16

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

日(2018)

904. 宮下 萌, 堀江一郎, 松山真吾, 羽田紀康, 鈴木英雄, 松井裕史, 磯濱洋一郎, 青黛(セイタイ)の抗炎症作用とその特性, 第 3 回下総薬理学研究会, (船橋, 東邦大学薬学部), 6 月 16 日(2018)
905. Hikaru UENO, Wataru MACHIDA, Ichiro HORIE, Yoichiro ISOHAMA, Interaction between IL-13 and IL-17A is involved in steroid-resistant mucus production in asthmatic model mice, 第 41 回日本基礎老化学会大会, (東京, 東京理科大学葛飾キャンパス), 5 月 31 日- 6 月 2 日(2018)
906. Seira UNAGAMI, Yuri KOZAKAI, Ichiro HORIE, Yoichiro ISOHAMA, Role of myeloid-derived suppressor cells in pathophysiology and effect of glucocorticoid in asthmatic mice, 第 41 回日本基礎老化学会大会, (東京, 東京理科大学葛飾キャンパス), 5 月 31 日- 6 月 2 日(2018)
907. Kazuhito MURAKAMI, Ichiro HORIE, Yoichiro ISOHAMA, Goreisan inhibits vascular endothelial cell migration and angiogenesis. 第 41 回日本基礎老化学会大会, (東京, 東京理科大学葛飾キャンパス), 5 月 31 日- 6 月 2 日(2018)
908. Shinichi MUROI, Hiromu HONMA, Misae HATA, Ichiro HORIE, Yoichiro ISOHAMA, Function of autoantibodies against aquaporin-5 detected in Sjögren's syndrome patient's sera. 第 41 回日本基礎老化学会大会, (東京, 東京理科大学葛飾キャンパス), 5 月 31 日- 6 月 2 日(2018)
909. 斎藤賢治, 小寺真央, 小塚友理, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 骨髄由来免疫抑制細胞に対する十全大補湯の抑制作用とその機序, 第 138 回日本薬理学会関東部会, 東京, 3 月 10 日(2018)
910. 町田 渉, 堀江 一郎, 磯濱洋一郎, チリダニ抽出物 (HDM) を抗原とする気管支喘息モデル動物における粘液産生の亢進, 第 138 回日本薬理学会関東部会, 東京, 3 月 10 日(2018)
911. 小塚友理, 斎藤賢治, 小寺真央, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 肺線維症病態における骨髄由来免疫抑制細胞の役割, 第 138 回日本薬理学会関東部会, 東京, 3 月 10 日(2018)
912. 村上一仁, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 血管内皮細胞の遊走に対する五苓散の作用, 第 138 回日本薬理学会関東部会, 東京, 3 月 10 日(2018)
913. 小森駿, 小川達郎, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 水チャネル aquaporin 類による刺激選択的な炎症応答調節作用, 第 138 回日本薬理学会関東部会, 東京, 3 月 10 日(2018)
914. 小森 駿, 堀江 一郎, 磯濱 洋一郎, 水チャネル aquaporin 類による刺激選択的な炎症応答調節機能, 第 53 回肺サーファクタント関連医学会, 新潟, 9 月 30 日(2017)
915. 室井慎一, 本間宙生, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, シェーグレン症候群患者の血清中に検出される抗 aquaporin 5 自己抗体, 第 53 回肺サーファクタント関連医学会, 新潟, 9 月 30 日(2017)
916. 宮下萌, 堀江一郎, 羽田紀康, 鈴木英雄, 松居裕史, 磯濱洋一郎, 青黛による炎症性遺伝子の発現抑制作用とその特性, 第 34 回和漢医薬学会, 福岡, 8 月 26 日(2017)
917. 室井慎一, 大川竜麻, 本間宙生, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, シェーグレン症候群患者の血清中に検出される抗 AQP5 自己抗体, 第 36 回気道分泌研究会, 東京, 4 月 8 日(2017)
918. 村上一仁, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 血管内皮細胞の遊走に対する五苓散の抑制作用, 日本薬学会第 137 年会, 宮城, 3 月(2017)
919. 菅澤真澄, 堀江一郎, 浅田善久, 磯濱洋一郎, 荊芥に含まれる創傷治癒促進物質の同定, 日本薬学会第 137 年会, 宮城, 3 月(2017)
920. 窪田佑紀, 堀田瑞希, 堀江一郎, 谷央子, 上園保仁, 磯濱洋一郎, 蜂蜜の鎮咳作用および活性成分に関する薬理学的研究, 日本薬学会第 137 年会, 宮城, 3 月(2017)
921. Yazawa K, Saito Y, Kozakai Y, Kodera M, Horie I, Isohama Y, Myeloid-derived suppressor cells attenuate inflammation in asthma model mice, 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月(2017)
922. Okawa R, Muroi S, Horie I, Isohama Y, Existence of the anti-AQP5 autoantibody in the Sjogren's syndrome patient's serum, 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月(2017)
923. Saito K, Konno M, Horie I, Isohama Y, Juzen-taiho-to represses myeloid-derived suppressor cells, 第 90 回日本薬理学会年会, 長崎, 3 月(2017)
924. 町田渉, 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 気管支喘息病態におけるステロイド抵抗性の粘液産生モデルの確立とその病態評価, 東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第 6 回シンポジウム, 東京, 1 月(2017)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

925. 堀田瑞希、堀江一郎、荒井哲也、磯濱洋一郎、マウス気道上皮線毛細胞の線毛運動に対する清肺湯の作用、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第 6 回シンポジウム、東京、1 月(2017)
926. 小森駿、堀江一郎、磯濱洋一郎、水チャネル aquaporin による炎症刺激応答性の調節、第 2 回東京理科大学 総合研究院 再生医療と DDS の融合研究部門シンポジウム、東京、12 月(2016)
927. 斎藤賢治、今野真理子、堀江一郎、磯濱洋一郎、十全大補湯によるがん免疫抑制に関わる骨髄由来免疫抑制細胞(MDSC)の分化および機能の薬理的調節、平成 28 年度生理学研究所研究会(天然薬物研究方法を考える若手の会)、名古屋、10 月(2016)
928. 村上一仁、堀江一郎、磯濱洋一郎、五苓散による血管内皮細胞の遊走抑制作用、平成 28 年度生理学研究所研究会(天然薬物研究方法を考える若手の会)、名古屋、10 月(2016)
929. 窪田佑紀、植竹沙織、堀田瑞希、堀江一郎、谷央子、上園保仁、磯濱洋一郎、蜂蜜の鎮咳作用およびオピオイド様活性に関する研究、第 135 回日本薬理学会関東部会、静岡、10 月(2016)
930. 堀江一郎、磯濱洋一郎、細胞標的型研究：骨髄由来免疫抑制細胞(MDSC)の分化調節を介した十全大補湯の免疫調節作用、第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京 8 月(2016)
931. 堀江一郎、村上一仁、上杉晴香、荒井哲也、磯濱洋一郎、アルコール性脳浮腫に対する五苓散の作用に関する研究、第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京 8 月(2016)
932. 村上一仁、堀江一郎、磯濱洋一郎、五苓散による血管内皮細胞の遊走抑制作用、第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京 8 月(2016)
933. 堀田瑞希、堀江一郎、蔣志侠、荒井哲也、磯濱洋一郎、マウス気道上皮線毛細胞の線毛運動に対する清肺湯の作用、第 33 回和漢医薬学会学術大会、東京 8 月(2016)
934. 堀江一郎、磯濱洋一郎、気管支ぜん息の病態形成における骨髄由来免疫抑制細胞(MDSC)の役割、生体機能と創薬シンポジウム 2016、宮城、8 月(2016)
935. 堀江一郎、矢澤佳奈、磯濱洋一郎、気管支喘息の病態形成に対する骨髄由来免疫抑制細胞の役割、第 35 回気道分泌研究会、三重、4 月(2016)
936. 大川竜麻、仲田帆名美、堀江一郎、磯濱洋一郎、シェーグレン症候群患者血清中における抗 aquaporin-5 抗体の存在とその意義、第 133 回日本薬理学会関東部会、千葉、10 月 10 日(2015)
937. 今野真理子、斎藤賢治、堀江一郎、磯濱洋一郎、骨髄由来免疫抑制細胞に対する十全大補湯の作用、日本薬学会第 136 年会、横浜、3 月 26 日(2016)
938. 堀江一郎、磯濱洋一郎、慢性気道炎症における骨髄由来免疫抑制細胞の役割、第 89 回日本薬理学会年会、横浜、3 月 9 日(2016)
939. 今野真理子、堀江一郎、磯濱洋一郎、骨髄由来免疫抑制細胞に対する十全大補湯および補中益気湯の作用、第 32 回和漢医薬学会学術大会、富山、8 月 22-23 日(2015)
940. 今野真理子、堀江一郎、磯濱洋一郎、十全大補湯と補中益気湯のもつ骨髄由来免疫抑制細胞への作用、第 18 回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8 月 8-9 日(2015)
941. 江川奈生、堀江一郎、磯濱洋一郎、清肺湯は細胞膜表面の aquaporin-5 を増加させ、水輸送を促進する、第 18 回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8 月 8-9 日(2015).
942. 菅澤真澄、藤川みか、堀江一郎、浅田善久、磯濱洋一郎、荊芥エキスによる AQP3 発現亢進およびケラチノサイト遊走に関わる活性成分に関する研究、第 18 回天然薬物研究方法論アカデミー、大子、8 月 8-9 日(2015)
943. 窪田佑紀、植竹沙織、堀江一郎、磯濱洋一郎、気道粘液線毛クリアランスの新規評価系の確立、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第 2 回シンポジウム、葛飾、8 月 29 日(2015).
944. 仲田帆名美、大川竜麻、堀江一郎、磯濱洋一郎、シェーグレン症候群患者血清中に抗 aquaporin-5 自己抗体が存在する、東京理科大学総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第 2 回シンポジウム、葛飾、8 月 29 日(2015).
945. 大川竜麻、仲田帆名美、堀江一郎、磯濱洋一郎、シェーグレン症候群患者血清中における抗 aquaporin-5 自己抗体の存在とその意義、第 133 回日本薬理学会関東部会、柏、10 月 10 日(2015).
946. 藤川みか、堀江一郎、磯濱洋一郎、水チャネル aquaporin-3 発現亢進作用をもつ荊芥は乾癬モデルの掻痒行動を抑制する、第 133 回日本薬理学会関東部会、柏、10 月 10 日(2015)
- 国際会議
947. Kazuhito Murakami, Ichuro Horie, Yoichiro Isohama, Inhibitory effect of Goreisan on vascular

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

endothelial cell migration. 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology,(京都, 京都国際会議場), July. 4 (2018)

948. Tatsuro Ogawa, Shun komori, Ichiro Horie, Yoichiro Isohama, Aquaporin-5 attenuates gene regulation by Th2 cytokines via inhibiting STAT6 phosphorylation, 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology,(京都, 京都国際会議場), July. 2(2018)
949. Shin-ichi Muroi, Hiromu Honma, Ichiro Horie, Yoichiro Isohama, Functional autoantibodies against aquaporin-5 detected in Sjögren's syndrome patient's sera. 18th World Congress of Basic and Clinical Pharmacology,(京都, 京都国際会議場), July. 2(2018)

招待講演

950. 磯濱洋一郎, 清肺湯の多面的な作用～気管支疾患治療薬としての合理性, 日本薬学会第 139 年会, 千葉, 3 月 23 日(2019)
951. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用の分子機序—五苓散・十全大補湯を中心に宮崎県薬剤師会, 平成 30 年度第 5 回生涯学習研修会, 宮崎, 2 月 24 日(2019)
952. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用の分子機序—五苓散・十全大補湯を中心に, 福岡大学東洋医学研究会総会, 福岡, 2 月 20 日(2019)
953. 磯濱洋一郎, 五苓散の薬理作用とアクアポリンの密接な関係, 第 46 回日本頭痛学会, 兵庫, 11 月 17 日(2018)
954. 磯濱洋一郎, 漢方薬の利尿作用とアクアポリン, 金沢区医師会学術研修会, 神奈川, 11 月 13 日(2018)
955. 磯濱洋一郎, 薬理学からみた漢方薬の作用—アクアポリンを中心に, Kampo Aqua Seminar in 三宮, 兵庫, 11 月 10 日(2018)
956. 磯濱洋一郎, 補剤による骨髄由来免疫抑制細胞(MDSC)の分化調節作用と腫瘍免疫活性化, 食と健康シンポジウム 2018, 鹿児島, 10 月 30 日(2018)
957. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用の分子機序—五苓散・十全大補湯を中心に—, 第 17 回弘前東洋医学研究会講演会, 青森, 10 月 29 日(2018)
958. 磯濱洋一郎, 髄液循環とアクアポリン:漢方薬による調節の可能性, 第 71 回日本自律神経学会, 埼玉, 10 月 26 日(2018)
959. 磯濱洋一郎, 呼吸器疾患の薬理:ステロイドと抗生剤は本当に炎症性呼吸器疾患のための最善策, 看護薬理カンファレンス in 東京, 東京, 10 月 20 日(2018)
960. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を担う薬理学的標的, 日本東洋医学会九州支部大会, 福岡, 9 月 15 日(2018)
961. 磯濱洋一郎, 五苓散の薬理学的特性—アクアポリン機能表的薬として, 第 17 回日本東洋医学会中四国支部大会, 島根, 9 月 9 日(2018)
962. 磯濱洋一郎, 五苓散の作用とアクアポリンの密接な関係, 第 20 回応用薬理シンポジウム, 東京, 8 月 4 日(2018)
963. 磯濱洋一郎, 漢方薬の臨床応用と薬理学的合理性—五苓散・十全大補湯を中心として—, 唐津東松浦薬剤師研修会漢方学術講演会, 佐賀, 7 月 19 日(2018)
964. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を支える分子機序—五苓散・十全大補湯を中心に—, 日本東洋医学会九州支部大分県部会学術講演会, 大分, 7 月 1 日(2018)
965. 磯濱洋一郎, 五苓散の作用とアクアポリンの密接な関係—基礎研究の成果から広がった五苓散による慢性硬膜下血腫治療, 医療薬学フォーラム 2018 第 26 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 東京, 6 月 24 日(2018)
966. 磯濱洋一郎, 五苓散と脳外科認知症疾患, 第 2 回日本脳神経外科認知症学会学術総会イブニング

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

セミナー, 東京, 6 月 23 日(2018)

967. 磯濱洋一郎, 炎症性皮膚疾患とアクアポリン—漢方薬の作用を支える標的分子, 第 154 回浦安皮膚臨床懇話会, 千葉, 6 月 21 日(2018)
968. 磯濱洋一郎, 五苓散の利尿作用とアクアポリン, 富山領域別漢方セミナー, 富山, 6 月 19 日(2018)
969. 松山真吾, 磯濱洋一郎, Jeng Dong Lee, Negative feedback mechanisms of bacteria-induced inflammatory/mucus responses and targeting strategies by drug-repositioning, 第 37 回気道分泌研究会(札幌, ホテルライフォート札幌), 4 月 7 日(2018)
970. 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 十全大補湯の免疫賦活作用と骨髄由来免疫抑制細胞, 第 67 回日本東洋医学会学術総会, 香川, 6 月(2016)
971. 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 十全大補湯の免疫賦活作用と骨髄由来免疫抑制細胞, 第 5 回サイエンス漢方処方研究会, 渋谷, 3 月 21 日(2016).
972. 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 慢性気道炎症における骨髄由来免疫抑制細胞の役割, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 2016 年 3 月 9-11 日(2016).
973. 磯濱洋一郎, 気道分泌の正常化を指向したドラッグリポジショニング, 第 89 回日本薬理学会年会, 横浜, 2016 年 3 月 9-11 日(2016).
974. Isohama Y., Increased Cytokine Expression by Aquaporin 5—Aquaporins: as a Target for Drug Development, iPOPs2016, Noda, 2 月 27 日(2016).
975. 磯濱洋一郎, 利尿作用とアクアポリン, Osaka Science-based Kampo 研究会, 堺, 1 月 30 日(2016).
976. 堀江一郎, 磯濱洋一郎, 骨髄由来免疫抑制細胞を標的とした新規免疫調節戦略, 東京理科大学総合研究院再生医療と DDS の融合研究部門発足記念シンポジウム, 新宿, 1 月 13 日(2016)
977. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を担う薬理的標的分子, 漢方調剤フォーラム in 岡山, 岡山, 1 月 17 日(2016).
978. 磯濱洋一郎, 漢方薬のユニークな作用を担う薬理的標的分子, 第 15 回小児漢方懇話会, 大阪, 7 月 19 日(2015).
979. 磯濱洋一郎, 利尿作用とアクアポリン, 第 9 回熊本婦人科漢方の集い, 熊本, 7 月 31 日(2015).
980. 磯濱洋一郎, 利尿作用とアクアポリン, 第 31 回おおさか漢方研究会, 大阪, 9 月 10 日(2015).
981. 磯濱洋一郎, 利尿作用とアクアポリン, 第 33 回杏林東洋医学研究会, 三鷹, 9 月 29 日(2015).
982. 磯濱洋一郎, 漢方薬の利尿作用を支える分子:アクアポリン, 第 33 回南部漢方学術講演会, 八戸, 10 月 3 日(2015).
983. 堀江一郎, 今野真理子, 磯濱洋一郎, 十全大補湯は骨髄由来免疫抑制細胞に対する抑制作用をもつ, 第 133 回日本薬理学会関東部会, 柏, 10 月 10 日(2015).
984. 磯濱洋一郎, 漢方薬の利尿作用を支える分子:アクアポリン, 第 31 回耳鼻科漢方研究会, 品川, 10 月 24 日(2015).
985. 磯濱洋一郎, 利尿作用とアクアポリン, 仙台漢方医学セミナー, 仙台, 10 月 31 日(2015).
986. 磯濱洋一郎, 漢方薬の利尿作用を支える分子:アクアポリン, 日本東洋医学会第 22 回茨城県部会, つくば, 11 月 15 日(2015).
987. 磯濱洋一郎, 漢方薬の利尿作用を支える分子:アクアポリン, 第 2 回浜松漢方 Bring Up セミナー, 浜松, 11 月 17 日(2015).

【臨床試験グループ】

小茂田昌代

国内学会

988. 小石 典子, 金谷 有紗, 山中 亜祐美, 佐藤 栄侍, 藤本 学, 石井 良征, 斉藤 彬, 井上 紗恵, 梅澤 雅和, 真野 泰成, 鈴木 立紀, 尾関 理恵, 小茂田 昌代, 日本におけるアタマジラミ症治療薬整備に向けた探索的臨床研究(本州トライアル・中間報告), 医療薬学フォーラム 2018 第 26 回クニニカルファーマシーシンポジウム, 東京, 6 月 24 日(2018)
989. 矢田目 麻衣, 阿久津 駿太, 山田 瑞稀, 倉科 亮太, 尾関 理恵, 河野 弥生, 花輪 剛久, 小茂田 昌代, イベルメクチン全身浴法におけるイベルメクチン内包マイクロエマルジョン製剤の調整と評価, 日本薬学会第 138 年会, 金沢, 3 月 28 日(2018)
990. 湯浅奈絵, 金永進, 吉増孝嗣, 小茂田 昌代, 簡易懸濁法におけるストロメクトール錠の有効性に関

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

する研究—懸濁器具の種類による影響について—, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会, 埼玉, 8 月 30 日(2014)

991. 大西優香里, 布施春奈, 大登 剛, 松井布美, 広田瑞季, 小茂田 昌代, CYP 酵素に着目した相互作用チェックから薬剤師の介入を支援するシステムの開発, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会, 埼玉, 8 月 30 日(2014)

992. * 金谷有紗, 小石典子, 山中亜祐美, 佐藤栄侍, 藤本学, 石井良征, 梅澤雅和, 尾関理恵, 真野泰成, 鈴木立紀, 小茂田昌代, 日本におけるアタマジラム症治療薬整備に向けた探索的臨床研究(本州トライアル), 日本病院薬剤師会関東ブロック第 47 回学術集会, 群馬, 8 月 26 日(2017).

993. 池田朱里, 石井杏奈, 河原菜, 斎藤舞, 西岡佐和子, 一條萌乃, 木村沙織, 宮本航, 尾関理恵, 宮村信輝, 大野逸子, 杉平直子, 真野泰成, 小茂田昌代, CYP 酵素に着目した新たなアルゴリズムによる相互作用リスクのカテゴリー化とその評価, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 47 回学術集会, 群馬, 8 月 26 日(2017).

994. 金谷有紗, 小石典子, 山中亜祐美, 佐藤栄侍, 藤本学, 石井良征, 真野泰成, 鈴木立紀, 尾関理恵, 小茂田昌代, 日本におけるアタマジラム症治療薬整備に向けた探索的臨床研究デザインの検討, 日本医療薬学会 第 1 回フレッシュャーズ・カンファランス, 東京, 6 月 25 日(2017)

995. * 赤木 圭太, 越野 万智, 阿久津 駿太, 山田 瑞稀, 矢田目 麻衣, 河野 弥生, 宮崎 篤志, 牧上 久仁子, 花輪 剛久, 小茂田 昌代, 新規治療法イベルメクチン全身浴法の探索的臨床研究—疥癬患者に対する有効性・安全性の検討—, 第 116 回日本皮膚科学会総会, 2017.6.3, 仙台

996. 鹿村恵明, 金子千紘, 根岸健一, 小茂田昌代, 佐藤嗣道, 渡邊和裕, 大澤光司, 薬局薬剤師に対する患者・顧客からの相談, 医師からの問い合わせ事例調査, 第 48 回日本薬剤師会学術大会, 鹿児島, 11 月 22 日・23 日(2015).

997. 柳原 千賀, 吉澤 一巳, 魚森 俊喬, 齊藤 光江, 小茂田 昌代, ラット唾液中アミラーゼ活性を指標とした抗がん剤誘発催吐作用の評価, 日本薬学会第 135 年会, 神戸, 3 月 26 日(2015)

998. 松岡 隆, 田畑 彰, 田畑 美津子, 小茂田昌代, 活性酸素消去作用を持つ健康食品の服用者アンケートによる生理活性作用・副作用の推定, 日本薬学会第 135 年会, 神戸, 3 月 26 日(2015)

999. 木暮 聖, 英 太一, 野口 航, 湯浅 奈絵, 吉増 孝嗣, 越野 万智, 白石 有美, 宮嶋 篤志, 牧上 久仁子, 小茂田 昌代, 廣田 孝司, 疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法の臨床試験(2)—ヒト角層および血漿中イベルメクチン濃度の測定—, 第 35 回日本臨床薬理学会学術総会, 愛媛(松山), 12 月 5 日(2014)

1000. 野口 航, 湯浅 奈絵, 吉増 孝嗣, 越野 万智, 白石 有美, 木暮 聖, 英 太一, 宮嶋 篤志, 牧上 久仁子, 廣田 孝司, 小茂田 昌代, 疥癬新規治療法イベルメクチン全身浴法の臨床試験(1)—プロトコル作成と忍容性評価—, 第 35 回日本臨床薬理学会学術総会, 愛媛(松山), 12 月 5 日(2014)

1001. 英 太一, 吉増 孝嗣, 木暮 聖, 杉岡 晃仁, 野口 航, 福沢 正男, 小茂田 昌代, 廣田 孝司, 疥癬治療薬ストロメクトール錠の用法に関する臨床試験【2】, 第 24 回日本医療薬学会年会, 愛知, 9 月 28 日(2014)

1002. 吉増 孝嗣, 英 太一, 木暮 聖, 杉岡 晃仁, 野口 航, 福沢 正男, 廣田 孝司, 小茂田 昌代, 疥癬治療薬ストロメクトール錠の用法に関する臨床試験【1】—食後投与が有効性および安全性に及ぼす影響—, 第 24 回日本医療薬学会年会, 愛知, 9 月 28 日(2014)

1003. 大西優香里, 布施春奈, 大登 剛, 松井布美, 広田瑞季, 小茂田 昌代, CYP 酵素に着目した相互作用チェックから薬剤師の介入を支援するシステムの開発, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会, 埼玉, 8 月 30 日(2014)

1004. 湯浅奈絵, 金永進, 吉増孝嗣, 小茂田 昌代, 簡易懸濁法におけるストロメクトール錠の有効性に関する研究—懸濁器具の種類による影響について—, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会, 埼玉, 8 月 30 日(2014)

国際会議

1005. Yuki Fukata, Tsuyoshi Oto, Nobuyo Suzuki, Mizuki Hirota, Masayo Komoda, Evaluation of the practice experience in pharmaceutical education of the tokyo university of science through comparison with APPE. the 3rd International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2014, Malaysia, August 12 (2014)

招待講演

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

1006. 小茂田昌代, ノーベル賞につながったイベルメクチンの最大活用に向けて, 星薬科大学同窓会千葉県支部 第 8 回学術講演会・総会, 千葉, 3 月 3 日(2019)
1007. 小茂田昌代, 薬物治療の課題解決に向けた臨床研究, 東京理科大学総合研究院 トランスレーショナルリサーチ(TR)センター 第 11 回シンポジウム/研究交流会, 東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎 1 月 26 日(2019)
1008. 小茂田 昌代, 尾関 理恵, 赤木 圭太, アタマジラミ・疥癬治療薬整備に向けた臨床研究, 第 4 回日本医薬品安全性学会学術大会, 倉敷 8 月 19 日(2018)
1009. 小茂田 昌代, 薬の問題解決に向けた臨床研究を実践しよう!, 第 27 回日本医療薬学会年会, 2017.11.4 千葉
1010. 小茂田 昌代, 未来の薬剤師育成セミナー～Road to PHARMACIST～, 山口, 2016
1011. 生城山 勝巳, 石井 敏浩, 生城山 勝巳, 荒野 泰, 三浦 剛, 小茂田 昌代, 岸 太一, シンポジウム 16: チーム医療を推進するための大学における取り組み, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 46 回学術大会, 千葉, 2016
1012. 小茂田 昌代, 木村 聡子, 頓宮 美樹, 出雲 貴文, 古野 喬志, 赤木 圭太, ワークショップ 1: 副作用マネージメント ～リスクの最小化と回復の最大化に向けて～, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 46 回学術大会, 千葉, 2016
1013. 小茂田昌代, 「疥癬の薬物療法～ガイドライン第3版 どこが変わった?～」, 東葛北部感染対策地域支援ネットワーク 研修会 第3シリーズ・第3回 疥癬感染対策～いつか来る…その“いつか”に備えて…, 千葉, 2016
1014. Clinical Researches To Solve Problems Related To Medications, Komoda, M, Akagi, K, Hirota, T, Makigami, K, Takahashi, K, Yamaguchi, S, Ishii, N, 6th International Postgraduate Conference ON Pharmaceutical Sciences, Japan, 2016
1015. 小茂田昌代, Open Clinica を使用した薬剤師主導の臨床試験を行って, 第 25 回日本医療薬学会年会, 横浜, 2015
1016. 小茂田昌代, 医療薬学研究の発展に向けて—薬学生への種蒔きから薬剤師での結実へ—「薬の問題解決に向けた臨床研究の倫理的ポイント」第 57 回医療薬学公開シンポジウム, 2015.9.19, 東京
1017. 小茂田昌代, サノフィ薬剤師セミナー～かかりつけ薬局からかかりつけ薬剤師へ～(e-MR ファルマシアン), 「エビデンスを作ろう! 薬剤部や薬局で始める臨床研究」, 2015.12.16, 東京.
1018. 小茂田昌代, 薬の問題解決に向けた臨床研究の倫理的ポイント, 第 57 回医療薬学公開シンポジウム, 東京, 2015
1019. Masayo Komoda. Development of academic detailing database to support clinical pharmacist. the 3rd International Postgraduate Conference on Pharmaceutical Sciences 2014. Malaysia. August 12 (2014.)
- 佐藤嗣道
国内学会
1020. 熊野光翼, 上島有加里, 久保田潔, 佐藤嗣道, 投与開始からイベント発生までの時間の分布を指標としたシグナル検出方法は既知の副作用検出につながるか. 日本薬剤疫学会第 23 回学術総会, 東京, 11 月 19 日(2017)
1021. 秋山元良, 久保田潔, 佐藤嗣道, スタチン治療のアドヒアランスと外傷のリスクとの関連に関する研究: healthy adherer bias の検討. 日本薬剤疫学会第 23 回学術総会, 東京, 11 月 19 日(2017).
1022. * 三枝好聖, 堀雄史, 川上純一, 木村通男, 佐藤嗣道. 病院情報システムを用いた入院患者を対象とする薬剤疫学研究の実施可能性: 腎障害をアウトカムとするコホート研究の対象薬剤の探索. 日本薬剤疫学会第 23 回学術総会, 東京, 11 月 18 日(2017).
1023. 田代大将, 堀雄史, 川上純一, 木村通男, 佐藤嗣道. 病院情報データベースを用いたコホート研究の実施可能性: 抗リウマチ薬使用患者における検討. 日本薬剤疫学会第 22 回学術総会, 京都, 11 月 18 日-19 日(2016).
1024. * 長谷川春菜, 荻野守弥, 秋山元良, 佐藤嗣道, 久保田潔. スタチン治療のアドヒアランスと予防的検査との関連に関する研究: healthy adherer bias の検討. 日本薬剤疫学会第 22 回学術総会,

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

京都, 11月18日-19日(2016).

1025. 木内希, 小林祥史, 伊集院一成, 上村直樹, 鹿村恵明, 高橋正夫, 田尻泰典, 鈴木洋史, 佐藤嗣道. SGLT2 阻害薬使用に伴う有害事象の検討: Drug Event Monitoring (DEM)で報告されたイベントの解析. 第 49 回日本薬剤師会学術大会, 名古屋, 10月9日-10日(2016).
1026. 山本健, 宮田滉平, 鈴木榛華, 黒澤光, 岡崎光洋, 浅田和弘, 須賀万智, 佐藤嗣道, 中村敏明, 古川綾, 折井孝男, 高橋英孝, 杉森裕樹, 中山健夫, 山本美智子. 一般消費者に対する医薬品情報の利活用に関する現状調査. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 町田, 6月5日(2016).
1027. 鈴木榛華, 宮田滉平, 黒澤光, 志村侑里江, 山本健, 佐藤嗣道, 土肥弘久, 山本美智子. ユーザーテストを用いた患者向医薬品ガイド(プラザキサ)の検討. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 町田, 6月4日-5日(2016).
1028. 川根梨奈, 岡野美菜実, 齋藤真由, 山本美智子, 佐藤嗣道. 患者向医薬品ガイドのユーザーテストの方法: 質問の作成方法に関する検討. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 町田, 6月4日-5日(2016).
1029. 山本健, 宮田滉平, 鈴木榛華, 黒澤光, 岡崎光洋, 浅田和弘, 須賀万智, 佐藤嗣道, 中村敏明, 古川綾, 折井孝男, 高橋英孝, 杉森裕樹, 中山健夫, 山本美智子. 患者向け医薬品情報及び患者向医薬品ガイドに関する実態調査. 日本薬学会第 136 年会, 横浜, 3月27日(2016).
1030. 市村太秀, 堀内正子, 串田一樹, 佐藤嗣道. サリドマイド被害者の補償の比較検討: 日本、カナダ、英国を事例に. 日本薬学会第 137 年会, 仙台, 3月26日(2016).
1031. 鹿村恵明, 金子千紘, 根岸健一, 小茂田昌代, 佐藤嗣道, 渡邊和裕, 大澤光司. 薬局薬剤師に対する患者・顧客からの相談、医師からの問い合わせ事例調査. 第 48 回日本薬剤師会学術大会, 鹿児島, 11月22日・23日(2015).
1032. 佐藤嗣道, 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 北條春輝, 後藤恵子, 松田勉, 山本美智子, 杉森裕樹. 患者向医薬品ガイド改善の試みと評価: フォサマック®錠の場合. 日本社会薬学会第 34 年会, 熊本, 7月25日・26日(2015).
1033. 佐藤嗣道, 松田勉, 山本美智子, 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 高橋悠一, 北條春輝, 後藤恵子, 杉森裕樹. 患者向医薬品ガイド改善の試みと評価: ジャヌビア®錠の場合. 第 18 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 岡山, 6月27日・28日(2015).
1034. 荒井花奈, 下村斉, 今中景子, 福田元, 馬島徹, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫. 結核患者におけるリファンピシンと糖尿病治療薬との薬物相互作用に関する後ろ向き調査研究. 日本薬学会第 135 年会, 神戸, 3月26日(2015).
1035. 荻野守弥, 川根梨奈, 木内希, 田代大将, 長谷川春菜, 高橋悠一, 北條春輝, 佐藤嗣道. 利用しやすい患者向け医薬品ガイド改訂版の検討と試作. 日本薬学会第 135 年会, 神戸, 3月26日(2015).
1036. 下村斉, 清水麻衣子, 高橋香緒理, 今中景子, 馬島徹, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫. 肺 MAC 症の多剤併用療法における薬物相互作用と副作用発現状況. 第 58 回日本薬学会関東支部大会, 町田, 10月4日(2014).
1037. 上島有加里, 佐藤嗣道, 久保田潔. サリドマイドの個人輸入の現状: サリドマイド使用登録システム(SMUD)に関する2014年3月までの登録データの集計結果. 第 20 回日本薬剤疫学会学術総会, 松山, 10月12日(2014).
1038. 小野愛莉, 下村斉, 馬島徹, 今中景子, 増山英則, 佐藤嗣道, 青山隆夫. 肺 MAC 症治療薬におけるクラリスロマイシンとフルオロキノロンの相互作用に関する研究. 日本病院薬剤師会関東ブロック第 44 回学術大会, 大宮, 8月30日(2014).

国際会議

1039. Tsugumichi Sato, Motoyoshi Akiyama, Kiyoshi Kubota. Adherence to statin therapy and the traumatic injury: an investigation using claims database in Japan. 34th International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, プラハ, August. 24(2018)
1040. Tsugumichi Sato, Guidance of ICH E2E "Pharmacovigilance Planning", 14th DIA Japan Annual Meeting 2017, Tokyo, 11月14日(2017)
1041. * Tsugumichi Sato, Motoyoshi Akiyama, Haruna Hasegawa, Moriya Ogino, Kiyoshi Kubota. Adherence to statin therapy and the use of preventive clinical examinations: an investigation using

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

claims database in Japan. 33rd International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Montreal, Canada, August 30 (2017).

1042. Katsuhito Hori, Michio Kimura, Kazuhiko Ohe, Naoki Nakajima, Hideto Yokoi, Masahiro Tohkin, Kimie Sai, Takuya Imatoh, Tsugumichi Sato, Syunya Ikeda, Yoshiro Saito, Junichi Kawakami. Review of the Pharmacoepidemiological Studies Using the Medical Information Databases in Japanese Hospitals. 32nd International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Dublin, Ireland, August 27 (2016)
1043. Yukari Kamijima, Nobuhiro Ooba, Tsugumichi Sato, Kiyoshi Kubota. Epidemiology of Psoriasis in Japan: Results from a Descriptive Study Using National Database. 30th International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Taipei, Taiwan, October 27 (2014).
1044. Nobuhiro Ooba, Soko Setoguchi, Tsugumichi Sato, Kiyoshi Kubota. Risk of New-Onset Diabetes in Users of Lipid Lowering Drugs (LLDs). 30th International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management, Taipei, Taiwan, October 27 (2014).

招待講演

1045. 佐藤嗣道. 患者のニーズと医薬品情報のあり方. シンポジウム 2「リスク最小化に向けた患者への医薬品情報」. 第 19 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 町田, 6 月 4 日(2016).
1046. 佐藤嗣道. サリドマイドの催奇形性の特徴とリスク管理における留意点. イブニングセミナー1, 日本産科婦人科学会第 68 回学術講演会, 東京, 4 月 22 日(2016).
1047. 佐藤嗣道. サリドマイド薬害の教訓と再発防止のための TERMS の課題. 第 2 回日本医療安全学会学術総会, 東京都文京区, 3 月 6 日(2016)
1048. 佐藤嗣道. サリドマイド等のリスク最小化策改訂の評価ポイント. 日本薬剤疫学会第 21 回学術総会, 埼玉県北足立郡伊奈町, 11 月 7 日(2015).
1049. 佐藤嗣道. コホート研究の実施可能性と留意点. 医療薬学フォーラム 2015・第 23 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 名古屋, 7 月 4 日(2015).
1050. 佐藤嗣道. 薬害と共通する医療事故の構造的側面. 日本薬剤学会第 30 年会, 長崎, 5 月 23 日(2015).
1051. 佐藤嗣道. バイアスの例と対処法. 医療薬学フォーラム 2014・第 22 回クリニカルファーマシーシンポジウム, 東京都江東区, 6 月 29 日(2014).

真野泰成

国内学会

1052. 藤田梨央, 佐藤雅貴, 真野泰成, 高齢者における不適切処方と骨折の関連性の検討, TR センター第 11 回シンポジウム, 東京理科大学神楽坂キャンパス 富士見校舎 2019 年 1 月 26 日(2019)
1053. 小川月紀野, 吉澤一巳, 真野泰成, レセプトデータを用いたカルシウム拮抗薬の精神疾患発症予防効果の検討, TR センター第 11 回シンポジウム, 東京理科大学神楽坂キャンパス 富士見校舎, 1 月 26 日(2019)
1054. 細川摩衣子, 小野田淳人, 井原智美, 菅又昌雄, 武田健, 真野泰成, 気管支喘息患者を対象としたロイコトリエン受容体拮抗薬のがん予防効果の検証, 口頭発表, 第 24 回 日本薬剤疫学会学術総会, 仙台, 10 月 13 日-14 日(2018)
1055. 細川摩衣子, 小野田淳人, 井原智美, 菅又昌雄, 武田健, 真野泰成, 気管支喘息患者を対象としたロイコトリエン受容体拮抗薬のがん予防効果の検証, 口頭発表, 第 24 回 日本薬剤疫学会学術総会, 仙台, 10 月 13 日-14 日(2018)
1056. 星子舞, 河野洋平, 赤木祐貴, 鈴木立紀, 青山隆夫, 真野泰成, アスピリンの抗血小板作用に及ぼす非ステロイド性抗炎症薬の影響に関する研究, 第 21 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 三重, 6 月 30 日-7 月 1 日(2018)
1057. 石倉裕美, 細川摩衣子, 井原智美, 菅又昌雄, 武田 健, 真野泰成, 気管支喘息患者を対象としたロイコトリエン受容体拮抗薬の認知症予防効果の検証, 第 21 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 三重, 6 月 30 日-7 月 1 日(2018)
1058. 佐藤 雅貴, 西川 寛来, 藤田 梨央, 真野 泰成, レセプトデータを用いた高齢入院患者における薬剤負荷の実態調査, 第 21 回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 三重, 6 月 30 日-7 月 1 日(2018)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

1059.	野口耀佑, 鈴木洋平, 真野泰成, 鈴木立紀, 第 30 回いびがわマラソンにおける市民ランナーに対する喫煙実態調査, 第 30 回ランニング学会大会, つくば, 3 月 31 日(2018)
1060.	鈴木洋平, 野口耀佑, 真野泰成, 鈴木立紀, 第 37 回つくばマラソンにおける市民ランナーに対する喫煙実態調査, 第 30 回ランニング学会大会, つくば, 3 月 31 日(2018).
1061.	山中亜祐美, 金谷有紗, 小石典子, 佐藤栄侍, 真野泰成, 佐藤嗣道, 尾関理恵, 小茂田昌代, インターネットアンケートによるアタマジラミ症治療の実態調査, 日本薬学会第 138 回年会, 金沢, 3 月 26 日(2018 年)
1062.	* 高木将行, 石川秀樹, 武藤倫弘, 真野泰成, スタチン系薬剤によるがん発症予防効果の検証, 総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター第 7 回シンポジウム, 東京, 9 月 2 日(2017 年).
1063.	池田朱里, 石井杏奈, 河原菜, 斎藤舞, 西岡佐和子, 一條萌乃, 木村沙織, 宮本航, 尾関理恵, 宮村信輝, 大野逸子, 杉平直子, 真野泰成, 小茂田昌代, CYP 酵素に着目した新たなアルゴリズムによる相互作用リスクのカテゴリー化とその評価, 日本病院薬剤師会関東ブロック第 47 回学術集会, 群馬, 8 月 26 日(2017).
1064.	金谷有紗, 小石典子, 山中亜祐美, 佐藤栄侍, 藤本学, 石井良征, 真野泰成, 鈴木立紀, 尾関理恵, 小茂田昌代, 日本におけるアタマジラミ症治療薬整備に向けた探索的臨床研究デザインの検討, 日本医療薬学会 第 1 回フレッシュャーズ・カンファランス, 東京, 6 月 25 日(2017).
1065.	菅又昌雄, 井原智美, 穴倉有里, 菅又美穂, 真野泰成, 武田健, 良性・悪性における共通病理所見について(2)～共通病理所見に基づく予防・治療法～, がん予防学術大会 2010 大阪, 6 月 16 日(2017).
1066.	菅又昌雄, 井原智美, 穴倉有里, 菅又美穂, 真野泰成, 武田健, 良性・悪性における共通病理所見について(1)～共通病理所見に基づく予防・治療法～, がん予防学術大会 2010 大阪, 6 月 16 日(2017)
1067.	金澤幸江, 真野泰成, 水上 勝義, 新指導要領による中学校・高等学校のくすり教育の現状についての調査報告, 日本薬学会第 137 回年会, 仙台, 3 月 26 日、(2017).
1068.	金澤幸江, 真野泰成, 水上 勝義, 新指導要領による中学校・高等学校のくすり教育の現状についての調査報告, 日本薬学会第 137 回年会, 仙台, 3 月 26 日、(2017).
国際会議	
1069.	Kaori Nomura, Yasunari Mano, Mariko Asahi and Shunya Ikeda, Hypnotic drug use and cardiovascular events in treated hypertensive patients, 32nd International Conference on Pharmacoepidemiology & Therapeutic Risk Management (ICPE), August 25–28, 2016, Dublin, Ireland.
招待講演	
1070.	真野泰成、エビデンスを発信しよう！－薬剤師が行う臨床研究の実例－, 関信地区国立病院薬剤師会, 第 29 年度第 5 回臨床研究推進研究会、東京、1 月 27 日(2018).
1071.	真野泰成、JJDI と私の考える JASDI, 日本医薬品情報学会 20 周年記念フォーラム「これからの医薬品情報学と JASDI」、東京、12 月 23 日(2017).
1072.	真野泰成、レセプトデータを用いたアトルバスタチンのアドヒアランス評価に関する研究、第 23 回臨床薬剤師のための講習会、金沢、7 月 19 日(2015).

<研究成果の公開状況>(上記以外)

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

<すでに実施しているもの>

- 2019年1月26日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第10回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎)
- 2018年10月20日(土)、The Second International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center(東京理科大学神楽坂キャンパス1号館101教室)
- 2018年5月31日(木)~6月2日(土)、第41回日本基礎老化学会大会、日韓老化学会合同シンポジウムおよびトランスレーショナルリサーチ(TR)センター第9回シンポジウム(東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール)
- 2018年1月20日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第8回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎)
- 2017年9月2日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第7回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎)
- 2017年1月21日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第6回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎)
- 2016年8月27日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第5回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学神楽坂キャンパス富士見校舎)
- 2016年6月25日(土)The First International Symposium of Tokyo University of Science, Translational Research (TR) Center –Frontiers in Developmental Strategy for Cancer Therapeutics–(東京理科大学葛飾キャンパス101室)
- 2016年1月23日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第3回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール)
- 2015年8月29日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第2回シンポジウム/研究交流会(東京理科大学葛飾キャンパス図書館ホール)
- 2015年3月7日(土)、第1回東京慈恵会医科大学・東京理科大学合同シンポジウム(東京慈恵会医科大学 臨床医学研究所 多目的会議室(慈恵医大柏キャンパス内))
- 2015年1月10日(土)、トランスレーショナルリサーチ(TR)センター第1回公開セミナー/研究交流会(東京理科大学薬学部キャンパス14号館1411教室)
- 2014年9月20日(土)トランスレーショナルリサーチセンターキックオフミーティング(東京理科大学薬学部キャンパス14号館1411教室)

上記情報はインターネット(<http://www.rs.tus.ac.jp/tr/>)を通じて、公開している。

<これから実施する予定のもの>

特に計画していない。しかし、トランスレーショナルリサーチ(TR)センターの後継組織として、2019年度から核酸創薬部門の設置が認められ、TRセンター所属の多くの研究者が同部門で活動することとなったため、同部門を通じて、TRセンターの研究成果を引き続き後悔していく予定である。

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

14 その他の研究成果等

【特許について】

深井文雄

1. 深井文雄、伊豫田拓也、細胞の転移または浸潤抑制剤、出願番号 JP2014-057592
2. * 深井文雄、兒玉浩明(佐賀大学)、抗がん剤の活性増強剤、特許第 5924593
3. * 深井文雄、山本哲哉(筑波大学)、兒玉浩明(佐賀大学)、PDGF 依存性細胞増殖抑制剤、PDGF 依存性細胞増殖の抑制法、細胞分散抑制剤、細胞分散の抑制法、テモゾロミド活性増強及び抗腫瘍剤、出願番号 PCT/JP2015/067651

和田 猛

4. 和田猛, 原倫太郎, 佐藤一樹, 芝崎太, 入江敦, 国内優先出願, カチオン性人工オリゴ糖による二重鎖RNAの安定化, No.2018-204172,2018
5. * 和田 猛、新井浩一郎、2'-O-修飾 RNA、特許第 6093924 号(2017.2.24 登録)
6. * 和田 猛、齋藤竜也、石井友香、額賀陽平、重合性化合物、化合物、及び、ボラノホスフェートオリゴマーの製造方法、特願 2016-221656(2016.11.14 出願)
7. 和田 猛、吉野怜次郎、原倫太郎、RNA ハイブリッド形成用核酸オリゴマー、特願 2016-046181 (2016.3.9 出願)

鳥越秀峰

8. 鳥越秀峰、立澤桜子、標的タンパク質の量の低減のためのポリペプチド、単離された核酸、組み換えベクター、及び形質転換体、特願 2014-045698 (2014.3.7).PCT 出願(2015.3.7).

大塚英典(他 5 件、計 10 件)

9. 大塚英典、松隈大輔、松田範昭、生分解性インジェクタブルゲル、特願 2015-165204 (2015.8.24).
10. 大塚英典、松隈大輔、自己組織化ペプチド修飾キトサンノ会合体の合成とプロテインデリバリーへの応用、PCT/JP2015/73745(2015.8.24).
11. 大塚英典、松隈大輔、村松佑紀、細胞内送達用高分子担体、PCT/JP2015/056364(2015.3.4).
12. 大塚英典、松隈大輔、金属ナノ粒子の調製方法及び金属ナノ粒子、WO2015/079788 (2015.6.4).
13. 大塚英典、松隈大輔、自己組織化ペプチド修飾キトサン会合体の合成とプロテインデリバリーへの応用、特願 2014-231447(出願:2014.11.14).

岡淳一郎

14. * Chikamasa Yamashita, Jun-Ichiro Oka, Michiko Horiguchi, Sachie Hamada. Centrally-acting peptide derivative, and pharmaceutical composition. 15/507, 403 (2017.2.28)
15. * 山下親正、岡淳一郎、堀口道子、濱田幸恵.中枢作用性ペプチド誘導体及び医薬組成物.特願 2014-184436 (2014.9.10)、PCT/JP2015/074962(2015.9.2)、WO 2016/035820 (2016.3.10).

樋上賀一

16. * 樋上賀一、小林正樹、成田 匠、瀧 加菜里、抗肥満物質のスクリーニング方法及び抗肥満物質のスクリーニング用キット、特願 2018-133627 (2018.7.13).

法人番号	131065A01
プロジェクト番号	S1411013

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

なし

<「中間評価時」に付された留意事項>

なし

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

なし

法人番号

131065A01

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

m²

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
蛍光・発光イメージングシステム	26		1	345	34,791	21,466	私学助成
生体-マテリアル相互作用解析システム	27	E1/J13	1	663	24,000	14,846	私学助成
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況

(千円)

年度	平成 26 年度	積算内訳		
小科目	支出額	主な用途	金額	主な内容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消耗品費	15,980	実験材料	15,980	試薬、実験器具
光熱水費	0		0	
通信運搬費	0		0	
印刷製本費	0		0	
旅費交通費	727	出張旅費	727	学会参加費、研究打ち合わせ旅費
報酬・委託料	1,462	委託料	1,462	臨床試験サポート一式、機器修繕費、講演会謝金等
(その他)	1,227	システム料、学会参加費	1,227	システム料、学会参加費
計	19,396		19,396	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)	0		0	
教育研究経費支出				
計	0		0	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	13,786	機器購入費	2,287	In Vitro&In Vivo遺伝子導入システム
			2,730	島津示差走査熱量計DSC-60 Plus
			3,096	テールサスペンション実験システム
			2,100	吸光微量サンプル測定プレートリーダー
			302	超音波破碎装置(TOMY UR-21P)
			379	超高速万能ホモジナイザー「ヒスコロン」JNS-52
			300	マウス用高架十字迷路
			2,592	リアルタイムPCR解析システム一式
計	13,786		13,786	
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	0		0	
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0		0	

年 度		平成 27 年度		法人番号	131065A01
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳			
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容	
教 育 研 究 経 費 支 出					
消 耗 品 費	14,593	実験材料	14,593	試薬、実験器具	
光 熱 水 費					
通 信 運 搬 費					
印 刷 製 本 費	82	製本費	82	研究成果報告書印刷費	
旅 費 交 通 費	487	出張旅費	487	学会参加費、研究打ち合わせ旅費 他	
報 酬・委 託 料	858	委託料	858	講演会謝金、論文校正費 他	
(資 料 費)	480	システム使用料	480	システム使用料	
(諸 会 費)	17	学会参加費	17	学会参加費	
計	16,517		16,517		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人件費支出 (兼務職員)	0		0		
教育研究経費支出					
計	0		0		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	3,370	機器購入費	2,800	固定波長式上下法傾向マイクロプレートリーダー	
			570	多本架冷却遠心機 1式	
計	3,370		3,370		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	1,921	給与	1,921	学内2人	
ポスト・ドクター					
研究支援推進経費					
計	1,921		1,921	学内2人	
年 度 平成 28 年度					
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳			
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容	
教 育 研 究 経 費 支 出					
消 耗 品 費	16,293	実験材料	16,293	試薬、実験器具	
光 熱 水 費					
通 信 運 搬 費	27	運搬費	27	配送料 他	
印 刷 製 本 費	255	印刷費	255	研究成果報告書印刷費	
旅 費 交 通 費	1,134	出張旅費	1,134	学会参加費、研究打ち合わせ旅費 他	
報 酬・委 託 料	1,158	委託料	1,158	講演会謝金、論文校正費	
(諸 会 費)	84	学会参加費	84	学会参加費	
計	18,951		18,951		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人件費支出 (兼務職員)	1,000	給与・交通費	1,000	時給 1,500円、年間時間数 653時間、実人数 1人	
教育研究経費支出					
計	1,000		1,000		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	2,980	機器購入費	2,980	高感度ケミルミ撮影システム	
図 書					
計	2,980		2,980		
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	2,620	給与	2,620	学内3人	
ポスト・ドクター					
研究支援推進経費					
計	2,620		2,620	学内3人	
年 度 平成 29 年度					
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳			
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容	
教 育 研 究 経 費 支 出					
消 耗 品 費	16,502	実験材料	16,502	試薬、実験器具	
光 熱 水 費					

		法人番号		131065A01	
通信運搬費					
印刷製本費	79	印刷費	79	研究成果報告書印刷費	
旅費交通費	643	出張旅費	643	学会参加費、研究打ち合わせ旅費 他	
報酬・委託料	2,419	委託料	2,419	講演会謝金、論文校正費	
(諸会費)	45	学会参加費	45	学会参加費	
計	19,688		19,688		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人件費支出 (兼務職員)	1,000	給与	1,000	時給 1,500円, 年間時間数 640時間, 実人数 1人	
教育研究経費支出					
計	1,000		1,000		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品	0		0		
図 書					
計	0		0		
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	2,962	給与	2,962	学内6名	
ポスト・ドクター					
研究支援推進経費					
計	2,962		2,962	学内6名	

年 度	平成 30 年度		積 算 内 訳		
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途		主 な 内 容	
			金 額		
教 育 研 究 経 費 支 出					
消耗品費	18,316	実験材料	18,316	試薬、実験器具	
光熱水費					
通信運搬費	3	運搬費	3	配送料 他	
印刷製本費	111	印刷費	111	研究成果報告書印刷費	
旅費交通費	159	出張旅費	159	学会参加費、研究打ち合わせ旅費 他	
報酬・委託料	2,800	委託料	2,800	講演会謝金、論文校正費、修繕費	
(諸会費)	100	学会参加費	100	学会参加費	
(雑費)	187	論文投稿費	187	論文投稿費	
(修繕費)	50	機器修繕費	50	機器修繕費	
計	21,726		21,726		
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人件費支出 (兼務職員)	990	給与	990	時給 1,500円, 年間時間数 660時間, 実人数 1人	
教育研究経費支出					
計	990		990		
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品					
図 書					
計					
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント	2,765	給与	2,765	学内9名	
ポスト・ドクター					
研究支援推進経費					
計	2,765		2,765		